

# 秩序の騎空団でクラブ る

秩序派

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

グランブルーファンタジー——空に多くの島々が浮かぶ世界。

そこには『空の民』と呼ばれる4つの種族が暮らしている。

グラブル脳の主人公は治安維持組織『秩序の騎空団』でハーレムを目指す。

主人公「一緒に来るんだヤイア。お父さんの薬を探したいんだろう？」

リーシャ「秩序の騎空団の権限において秩序を執行します」

主人公「うわなにをするやめろ待て痛い痛い痛い」

主人公「一緒に来るんだジオラ。美味しいピクルスを食べさせてあげるよ」

リーシャ「秩序の騎空団の権限において秩序を執行します」

主人公「くあwせd r f t g yふじこーp」  
それでも、くじけずに目指す。

完結しました。

誤字報告してくださって、ありがとうございます。

# 目次

プロローグ	爆死	1
第1話	ふたりの秩序道	7
第2話	2次試験	16
第3話	入団試験終了	26
第4話	入団1年目 戦力を強化しよう	36
!		
第5話	入団1年目 フラグと警衛任務	45
第6話	入団1年目 攻撃隊長のつとめ	57
第7話	入団1年目 繰り返されて結成	74
第8話	秩序執行巡空独立強襲隊、始動	87
第9話	調停の翼	100
Extra	ある日のリーシャ	114
第10話	俺の転生ハーレム計画はどこか間違っている	125
第11話	隊長がリーシャ陵辱ものの絵物語隠し持ってた	140
第12話	俺の船団長補佐はこんなに可愛いモニカ14才	155
第13話	そして彼は運命を変え、ゆえに報いを受ける	165

第14話	つまり、あのロボミイイベント	—	290
は	何だったのか	—	—
182			
第15話	俺はヒヒイロカネを捧げてニ	—	321
オ	オを召喚するぜ	—	—
196			
第16話	深遠なるパンデモニウムの檻	—	347
に	に封じこめられて	—	—
211			
第17話	だから俺はハーレムができな	—	365
い	い(略してDO)	—	—
226			
第18話	俺とリーシャとモニカと船団	—	390
長	長をめぐる戦い	—	—
241			
Extra2	秩序学園の日々	—	407
Extra3	ちっじよるっ!	—	—
264			
第19話	蒼の少女編	—	416
272			
第20話	マナリア魔法学院	—	437
第21話	蒼紅之華	—	—
305			
第21.5話	フラグメント	—	446
第22話	ベネーラビーチ	—	—
322			
第23話	九尾	—	332
第24話	最終上限解放	—	—
365			
第25話	胎動する世界	—	372
現実	—	—	—
407			
最終話	秩序の騎空団	—	437
エ	エピローグ 未来	—	—
437			
Extra4	もう一人の主人公	—	446
446			
Extra5	それいけ! ハーゼリ	—	—
—			

T  
I  
N  
E  
!

477

E  
x  
t  
r  
a  
6

H  
A  
P  
P  
Y

V  
A  
L  
E

N

ラ  
ち  
ゃ  
ん

463

## プロローグ 爆死

——貴方は死にました。

いきなりそんなこと言われても、どうしていいか分からないんだが。

「えっと、全く身に覚えとか無いんですが、一体どういうことでしょうか」

とりあえず下手に出てみる。この状況で相手の機嫌を損ねるのはよろしくない。

——爆死です。食費や光熱費をガチャに注ぎ込んでレジエンドフェスに300連した結果、SSRが9つしか出ませんでした。拳句に蒼光の御印での交換でミュルグレスを選択しようとしたところ手が滑ってリミテッドラカムが加入、そのショックで心臓が停止しました。

ラカムウウウウ!!

——話を続けます。最近、グランブルーファンタジーの世界に対して悪感情を抱くものが多く、その影響であの世界にマイナスエネルギーが溜まりやすくなっています。現時点では地震や異常気象などですが、このままだと世界が滅亡してしまいかねません。そこで貴方にはあの世界に転生してもらい、プラスエネルギーを生み出してほしいのです。と言っても具体的には、それなりに幸せに過ごしていただくだけで構いません。現

地の方が変換効率がいいため、それで十分なのです。

「それってCygamesやプロデューサーを何とかするべきなんじゃ……」

——その権限があればそうしていました。さて、転生の際の特典ですが何か希望はあるでしょうか。

チート転生来た！ これで勝つる！ ハーレム王に俺はなる！ ありがとう爆死ラカム！ さらに現実！

とりあえず無敵チートか？ いや、下手に逸脱した存在になると敵によつては詰む可能性があるな。単に弱体無効にするにしても酒で酔えないのは嫌だし。ここは単純な全空一の強者になっておけば十分だろう。星晶獣関係は原作知識でどうにかするさ。

「解放十天衆程度の強さにしていただけるとありがたいのですが……」

——問題ありません。それでは、アビリティについての希望はあるでしょうか。

確かに某闇属性エルーンみたいな残念性能になっても困る。とりあえずミストは必須として。あと欲しいのはフアランクストと、クリアかマウントか……ああ、ブローディアの2アビで両方いけるな。ダメアビもあつた方がいいからアロレ……いやアニラの2アビが全体スロウだからそっちにしてもらつて。駄目元で4つ目も頼んでみようかな……ドラランクの3アビでいいや。

「こんな感じでお願ひします。」



1 アビ：全体ダメージ＋スロウ

2 アビ：全体攻防ダウン

3 アビ：味方全体のダメージと弱体を1回無効

4 アビ：攻ダウン＋防ダウン＋デイスペル

——問題ありません。その他のデータについての希望はあるでしょうか。

「ヒューマンで！ 剣得意で!!」

条件反射だった。これが無いと生きていくのが厳しい。あとはダークフェンサーっぽいアビリティ構成だし短剣も得意にしておいてもらおう。それと……。

「得意武器2つ目は短剣で、サポートアビリティにドロップ10%アップがあればいいな、なんて思ったり」

——問題ありません。初期配置などについての希望はあるでしょうか。

初期配置……ザンクティンゼルで主人公ルートだと、最初はルリアとカタリナがいるのか（ウエルダーもいるけど）。別に嬉しくはないな。帝国から逃げたり打倒したり空域から追い出されるのも大変そうだし、そういうのは原作主人公様にお任せしよう。

バルツで攻略できそうなのはイオとアリーザとクムユ姉妹ぐらいか。さすがにメイン加入キャラに手を出すのは未来に不安が残る。とりあえず候補には入れておこう。

アウギユステ……アポロ幼馴染ルートはハードすぎる。

そもそも全体的に出身地とか所在とか曖昧すぎるだろう。「依頼のために訪れた村」とか「森の中で遭遇」とか。

まあいい、次はシナリオイベントに目を向けていこう。

アステールちゃん村は、アステールちゃんとスーテラとメーテラ、それとマライアが来るな。悪くはないけどいまいち。

シヨチトル島で巫女ハーレムをプロデュース……別ゲーじゃねえか。

妄想アルビオンはどう考えても無理だよな。精々トツポブ送りだ。

ヴァンパイアちゃんの島は暗くて居心地が悪そうだし。

クリスタリアは普通に寒そうだから嫌だし。

組織はブラックだし。

アリーザ&クムユを上回りそうな場所は、なかなか思いつかないな。やつぱりバルツか……デیفエンドオーダーで壊滅しそうで怖いけど。ん、オーダー？ そうだ、秩序の騎空団ルートだ！ 上半身のモニカ&下半身のリーシャで死角無し！ それに秩序の騎空団なら騎空艇も権力もあるだろう。騎空艇があれば島を回ってハーレム要員を集めるのも簡単になるだろうし、権力があれば例えば――

『ゼエン教に対する数々の違法行為、その身体で償ってもらおうぞ』

『くっ、殺せ！』【作者注：この作品における彼女の唯一の出番です】

『殺しはしない。ちゃんと更生させてやるよ。さあ俺の秩序棒をくらうがいい』

みたいなことも簡単にできそうだ（もちろん棒叩きの刑のことだ）。参考人としてソフィアを呼んで3人で楽しむのもいいな。秩序の騎空団最高。なんとなく秩序って単語だけで興奮してきた。

「秩序ルート、いや、えつとあの島の名前は……アマルティア島で秩序の騎空団の入団試験を受けるところからお願います」

もちろんお約束の『お前みたいな坊やが秩序の騎空団に入るだつてハハツ↓ば、馬鹿な』も忘れてはならない。

——問題ありません。それでは転生を開始するので10秒ほどお待ちください。

「ま、待つてくださいい！ まだ美形と絶倫とニコポとナデポとアイテム99個と——」

——申し訳ありません。転生特典ポイントを使い切ってしまったので、これ以上は不可能です。それではよい転生を。

「せめてヒヒイロをおおおお——」

——なにとぞご理解くださいますと幸いです。

主人公のステータス

Lvl / 攻撃力 2500 / HP 500

ヒューマン／特殊

剣／短剣

アビリティ1：全体ダメージ＋スロウ

アビリティ2：全体攻防ダウン

アビリティ3：味方全体のダメージと弱体を1回無効

アビリティ4：攻ダウン＋防ダウン＋デイスペル

トレハン信者：アイテムドロップ率アップ

## 第1話 ふたりの秩序道

エピソード1

ここが、グラブルの世界か。

目の前には巨大な門が、そして少し前方には超巨大な建物がそびえている。あれが、何と呼ぶのか忘れたけど秩序の騎空団の本部だな。今日この時から、俺のハーレム王への道は始まるのだ。

さて、ひとまず現状確認といこうか。服装はその辺の市民が着ているような普通のもので、右手には身分証明書を持っていた。天涯孤独の15才でサイタマの村出身と書いてある。おそらく入団試験のときに必要なだろう。そして、どうやら身体が15才まで若返っているようだ。一般的に入団試験を受けるような年齢にしてくれたってことだろうか。若い方が1日の回数制限が多いし助かったぜ。

他には何も所持していなかった。武器も、ルピ（財布）も、日用品も、替えの下着さえも……。これって入団できなかつたら色々と詰むやつだ。ま、まあ解放十天衆の実力があれば余裕に決まってるけどな。

ふと隣で1人の少女が門を見上げているのに気づく。さっきまでは居なかつたから、

俺がポケットを漁っている間にやってきたのだろう。年齢は今の俺と同じぐらいで14, 5才だろうか。長い髪をそよ風で揺らしつつ、決意に満ちた顔で独言を呟いている。

「父さん……私も……一人前の騎空士に……秩序を……」

少女がこちらを向き、意志の強そうな目が俺を捉える。顔に見覚えは無いし、おそらく一緒に試験を受けるモブだろう。

「おはようございます。貴方も入団試験を受けに来たんですか？」

「!! 流石は圧倒的なビジュアルクオリティの本格スマホRPGだ。モブでもなかなか可愛いな」

や、やっちゃまった! つい思っていることを口に出してしまった。でも可愛い娘が急に話しかけてきたら、誰だっけこうなるに決まってる。つまり俺の所為じゃない、可愛いのがいけない。

「初対面の女性に向かって失礼な人ですね。ここにいるということは貴方も秩序の騎空団の入団試験を受けるのでしょうか。そのような秩序に欠ける態度では、秩序の守護者たる秩序の騎空団に相応しいとは思えません。今すぐにその乱れた秩序を改めるべきです」

「えっ、あ、す、すみません」

なにこいつ、意識高い。受験生でもこれって秩序の騎空団すげえな。ただこの後の展

開は読めた。この優等生少女が何かやらかして、俺が圧倒的実力で解決して上層部に認められるやつに違いない。ふっ、調子に乗っていられるのも今のうちだぜ。

不機嫌な顔で巨大な建物に向かう少女に続いて、俺は悠々と歩き出した。

エピソード2

受付を済ませ、受験票を貰う。どうやら1次試験は集団面接らしい。

……うわあああ、自己PRとか志望動機とか何も考えてない。『ハーレム王に俺はなる』って言っても大丈夫なやつか、いや絶対に駄目だろ。どうしようどうしよう。

「ようこそ諸君、私が団長のヴァルフリートだ」

気づいたら面接が始まっていた。よし、ここからは落ち着いて冷静に状況を判断——  
——って今、目の前のオッサン何て言った!?! ヴァルフリートってリーシャの父親で七曜の騎士だろ。もしうっかり『リーシャをハーレム要員にしたいです』なんて言ったら俺が死ぬ。社会的にも物理的にも抹殺される。なんと言っても、あの黒騎士と同格の七曜の騎士だ。何色か忘れたけど。ん? 黒騎士と同格? ……なんだ大したこと無いな。  
解放十天衆の俺の方が、少なくとも物理的には強い。

「オレ様は船団長のガンダルヴァアだ」

どうして船団長がリーシャじゃないんだ! いや、まだ焦るときじゃない。ガンダル

ヴァが船団長つてことは、まだヴァルフリートと戦つてないつてことか？ 2人の間に  
険悪な空気も無さそうだし……つまり、今は原作開始前つてわけだ。

「船団長補佐の——」

モニカでないやつのはどうでもいいとして。たしか原作だと、ガンダルヴァ追放  
↓モニカが船団長になる↓リーシャが船団長になる、の順番で起こるはずだが……話は  
読めたぞ。次の船団長は俺だ！ ガンダルヴァ追放までに実力を示して実績を積みば  
いける！

「では、そちらの方から順番に自己紹介と志望動機をお願いします」

おっと、最初はあの可愛い優等生ちゃんか。色々と俺が話すときの参考にさせてもら  
おう。お礼に、俺が船団長になったら秘書にしてあげてもいい。たまにセクハラするけ  
ど。

「リーシャ、15才です」

……………は？

いやいや、リーシャなんてよく聞く名前だし、あの帽子をかぶつてないし、へそ出し  
フアッションですらないこの娘が俺のリーシャなわけ——

「私の父は秩序の騎空団を率いて、全空の秩序を守つてきました。そんな父の背中を見  
て育つた私は——」



俺のリーシャだった。きつと初対面の俺の印象は最悪だったろう。死にたい。つてかヴァルフリート、嬉しそうに聞いてんじゃねえ！ 娘の面接するってどうなんだよ。肉親の情程度で秩序は決して流されないから問題ないのか？

「——我らが秩序の光を、あまねく世界に！」

気づいたら、可愛いリーシャちゃんのスピーチは終わった。次は俺の番だ。さあ行く秩序の果て、リーシャとモニカのハーレム。

### エピソード3

面接は散々だった。自分でも何を喋ったか覚えていない。とりあえず意識高く秩序を連呼しておけばいいだろうと『秩序の秩序による秩序のための秩序』とか『俺の秩序が光って唸る！ 悪を倒せと輝き叫ぶ！』とか言ったような気もするが……。はあ、せめて一目でいいからモニカに会いたかった。

「やはり真面目に試験に取り組む気は無かったようですね」

リーシャが話しかけてきた。オリ主なのにSEKKYOUされちまうのかよ、俺。

「ここに在る皆は今日の試験のために努力を重ねてきました。試験官の方々も、そんな私達を正當に評価すべく全力で取り組んでくれてます。貴方の態度はその全員への侮辱であり——」

ヴァルフリートは娘に目標にされて喜んでたけどな！ ああモニカ、どこにいるんだモニカ。いや、今が原作開始の5年前だとすると、モニカは12才か。いるわけなかったぜ！ それにしても12才のモニカ……アリだな！ 今のうちに探して誘拐して監禁して……へへへっ、俺が育ててやるぜ。

「ちゃんと聞いていませんねー！」

「ごめんなさい、反省してます」

そうこうしている間に結果発表の時間だ。次の試験に進める者の番号が呼ばれていく。リーシャも無駄に緊張しつつ聞いているようだが、ここで落ちるなんてありえないだろうリーシャだし。

「110番」

リーシャの番号だ。2秒ほど嬉しそうな顔をしていたが、すぐにキリツとした顔で振り返りもせず待機室の出口に歩いていく。リーシャともここでお別れか。色々と話してくれて嬉しかったよ（説教だけど）、ありがとう。

「111番」

リーシャの次に試験の受付をしたのは俺だ。リーシャの次に集団面接で話したのも俺だ。手元の受験票にも『111番』と書いてある。つまり……次の船団長は俺だ！

思わずガッツポーズが出る。リーシャは振り返って信じられないような顔で俺を見て

いる。驚いた顔も可愛いな。

「いったいどんな不正をしたんですか!」

次の試験場所に向かう途中の廊下で、リーシャに睨まれた。

「いや、これが真正正銘の俺の実力だ」

心当たりがあるとしたら転生特典による補正ぐらいだけと言えるわけがない。

「そんなはずはありません。だって、あんな不真面目な」

「つまり、あのヴァルフリート団長が不正に関与したと言いたいわけだ」

「そんなことは、無い……ですけど……」

「物事の表面だけしか見てないから、正しい判断ができないんじゃないか?」

「ううっ」

実際に合格という結果が出ている以上、反論は難しいようだ。

「納得してくれたようで良かった。それにしても、さつきは傷ついたな」

「!!」

「俺なりに一生懸命試験に取り組んだのに不真面目とか言われたな」

「そ、それは……」

「自分の非を認めないのが『秩序の騎空団に相応しい』態度ってやつなのかな」

「私が……」

「わーたーしーがー？」

「私が、が、わ、わる、悪かつ」

「うんうん」

「私はっ！ 貴方なんて絶対に認めないからっ!!」

そう怒鳴るとリーシャは走り去っていった。あつ、やりすぎた。

#### エピソード4

結果発表の少し前。

「次。111番は不合格ですね。あんなのを団に入れるなんてありえないですよ」

「まあ待てや。なあ団長さんよ、かなりのもんだろ、アイツの強さ。オレ様の見立てだと、将来的にはお前にも匹敵するぜ」

「まさか、あんなひどい奴が……」

「私も同じ意見だ。だが秩序の守護者として、力ある者を無条件に入団させるわけにはいかないな」

「けっ、力こそが秩序だろうが。船団長の権限で1次試験は免除だ」

「ガンダルヴァアっ！」

「だったら、次の試験ではオレ様にアイツの担当をさせろ」

「それは、構わないが……」

「それでアイツに『秩序道精神』が宿っているかどうか見極めてやるよ」

## 第2話 2次試験

エピソード1

2次試験は、クルヴィ山脈の麓の森での実戦演習だ。秩序の騎空団1人と受験生数人からなる班単位で行動しながら走ったり魔物と戦闘したり走ったり素振りしたり走ったり探索したりするらしい。走るの多いな……やはり騎空士に必要なのは17時間走り続けられるスタミナだったか。とまあ、そんなわけで今は森の中を歩いている。

さて、ここで俺の班の愉快なメンバーを紹介するぜ。

「貴方もちゃんと周囲を警戒してください。不意討ちされたら班全員が危険に晒されるんですよ」

1人目は当然ながらリーシャだ。やらかす優等生イベントの目は消えてないようだ。警戒しろと言われても索敵技能とか持っていないので、なんとなく目つきを鋭くしてそれっぽい動作をしておいた。

「この辺の魔物なんぞ何十匹かかってこようが、オレ様には傷一つ付けられないがな」

2人目は班長のガンダルヴァだ。メンバー紹介は以上だ。つまり解放十天衆の実力を持つ俺にも危険は無いということで、さっきのリーシャの発言は『不意討ちされたら

「私だけがピンチなので警戒してください」という意味も同然であり、『怖いから私を助けて』と言われたようなものだ可愛い。

それにしても、どうしてこの班だけ3人なんだろうな。他の班は5く6人だったりするのにな、ついでに森の奥深くまで入り込んでるのも俺達の班だけみたいだし。とりあえず班長に聞いてみた。隠し事をするような性格でもないだろう。

「小娘の方は知つての通り、あの野郎の子供だからだ。他の奴らは無意識に手心を加えちまうかもしれないねえって、やりたがらなくてよ。良かったな、これで七光りって言わずに済むぜ」

「望むところですよ」

「小僧の方は、てめえみたいな問題児を扱えるのが、オレ様しかいないからだ。他の受験生に影響が出ねえようにする必要もあった。何かしでかしたら牢屋にぶち込んでやるから覚悟しろよ」

「の、望むところだよ」

リーシャの冷たい視線が痛い。おい周囲の警戒しろよ。

エピソード2

森の中の広場のような場所で小休止する。リーシャは少し疲れたのか、手頃な石に

座って水分補給をしている。対して俺の方はチートのおかげか、ほとんど疲れていない。近所のコンビニにモバコインを買いに行ったようなものだ。

せつかくなので武器の確認をことにした。2次試験の開始時に貸与された剣、スチールスパタ(ボーナスなし)だ。所詮は試験用の武器なんて、こんなものだろう。もつとも、この俺が使えば弱い魔物ぐらいは一撃で倒せるに違いないのだが。一応、念のため軽く素振りをして手に馴染ませておく。

「ぜんぜん魔物が出ねえな。こんなんじゃ試験にならねえからよ、お前ら2人でかかって来い」

広場の中央でガンダルヴァが拳を握り身構える。ハンデのつもりか刀を使う気は無さそうだ。なるほど、この展開にするため威圧感で魔物を寄せ付けなかったってわけだ。ここでなら邪魔も入らないし、試験の範囲を超えて戦えるだろう。

一方でリーシャも、これを想定していたのだろう。持ち込んだ愛用の剣を構えてガンダルヴァと対峙する。

「おそらく私たちに連携は無理でしょう。前衛は引き受けますから、貴方は援護をお願いします」

確かに連携の訓練もしていない信頼感も無い俺たちでは、その戦術が無難だな。俺が投擲用にブロンズダガー(ボーナスなし)を借りたのも確認していたっけ。俺はホルダー



からダガーを3本取り出して左手に持つ。

「ようやく明かされるその実力に彼らが驚愕するのは、それからすぐのことだった……」  
「真面目に！ やってくださいい！」

言いつつリーシャがガンダルヴァに切りかかった。そのまっすぐな性格を体現したような鋭い一撃は、ガンダルヴァを両断した……ように思えたが、それは残像にすぎない。そういえば使ってきたな、幻影効果。ここはセオリー通り全体攻撃による対応でいこう。

1アビ使用！

……別に動作アシストとかされないらしい。仕方ないので足止めすることを強く意識しながら投げた3本のダガーは、狙い通りにガンダルヴァの動きを一時的に止め、残像を消すことに成功した。続けてリーシャが手数重視で攻めたてる。フェイントを交えつつの2段攻撃や3段攻撃に対して、防御に専念しているとはいえ徒手空拳で全てを捌ききるガンダルヴァ。俺はとりあえず、これ見よがしに新たなダガーを構えつつガンダルヴァの死角に回りこむ素振りです、その意識を散らしにかかる。

そして数ターンの後に、無理にダガーを避けたガンダルヴァの体勢が大きく崩れた。すかさずリーシャは奥義を放つ——

「負けるわけにはいかないの！ サンライズ・ブレード！」

——が、あっさり避けられて逆に体当たりでふつとばされてしまった。受身はとれたようだが、衝撃でしばらくは動けないようだ。

「少しは楽しみにしていたんだが、まだまだだな。さあ、次はお前だ小僧」  
オーケー、前衛交代だ。やつの動きはだいたい分かった。

### エピソード3

実際のところ、今の俺には致命的な問題がある。いくら何でもスチールスパター本で勝てるわけが無いということだ。せめてミウルグレスが20本は欲しい……さすがに贅沢か。だが完成ミウルグレス1本は俺のデータに存在したのだ。目を閉じてミウルグレスの姿を想像する。自分の体内にある『それ』を取り出すイメージだ。ゆつくりと目を開けると、右手には相変わらずスチールスパタがあった。

「……行くぞー！」

精神を統一していた振りをして誤魔化しつつ、ガンダルヴァに攻撃をしかける。リーシャも麻痺から回復したようなので有効な時間稼ぎだったと言えるだろう。最初から全力で繰り出した斬撃は、服1枚を裂いたところで止まる。予想はしていたが攻撃力が低いにも程があった。

仕方ないので攻撃パターンを変更する。防御力の低そうな手首への攻撃、脳震盪狙い

の顎への攻撃、頰動脈狙いの首筋への攻撃を中心とした部位狙いだ。殺す気でやらないと、そもそも勝負にならない。それに現船団長を殺すことは次期船団長への第一歩だからな。今から起こるのは試験中の不幸な事故つてやつだ。

「くくつ……上出来だ……楽しいなあ！ さて、こっちからも行かせてもらおうぜ！」

そして、そんな状況なのにガンダルヴァは楽しそうだ。巧みな足捌きで打点をずらしてダメージを無視できるレベルにまで軽減しつつ、隙を見て拳による攻撃をしかけてきた。それを受ける度に安物の剣が軋む。ちよつと厳しくなってきたから、早くバフをよこせリーシャ。うろ覚えだけど、リミテッドの号令の元になったレイジ系アピリテイがあつただろう。攻撃の合間に一瞬だけリーシャの方を伺うと、風を纏わせた剣を構えていた。なるほど、バフはエピソードクリアで覚えるやつか。部下を鼓舞する方向のアピリテイなら、まだ習得してないのも納得だ。

再度、方針を変更する。どうにかガンダルヴァの隙を作つて、リーシャのダメアビを叩き込む。そして怯んだところに俺がトドメを刺すというやつだ。手始めに立ち位置を調整しつつ、パターンを変えて全力で攻撃する。

ダブルスラッシュ！（スチールスパタの奥義）

これまで同様にダメージはほとんど無かったが、動きを止めて右手を使わせることに成功した。

「今だ！」

「覚悟はよろしいですか？」

リーシャの剣から出た無数の風が高速でガンダルヴァに向かつていく！（ソニックブレード）

まともに直撃すれば有効打ぐらいにはなったであろうそれは、だがしかしガンダルヴァが左手で振った鞘によつてかき消されてしまった。そういえば戦艦の攻撃すら受け止められる特別製だとかいう設定があったな。

「楽ませて貰った礼だ。死ねえ！」

そう言いつつ、右手で刀を抜くと俺に向かつて振り下ろしてきた。このままだと確実に死ぬとしか思えなかったので『切り札』の1つを使う。イメージするのは左手から噴き出す霧！ それはガンダルヴァに絡みつき動きを鈍らせる。そのおかげで、どうにか防御が間に合っ――

バキン！

――たのだが、スチールスパタは即死した。ああ、試験中の不幸な事故つてやつか。

エピソード4

帰り道は魔物を倒しながらの移動となった。

目的が達成できたからかガンダルヴァは周囲を威圧することなく、まさに「話は魔物を片付けてからだ」状態だ。俺は予備武器のブロードソード（ボーナスなし）でサクサクと魔物を倒していく。ガンダルヴァを油断させて一気に致命傷を与えるために敢えて温存しておいた武器（ちなみにミスとも同様）なのだが、スチールスパタが使えない以上は仕方ない。

そういえばリーシャがちらちらと俺の方を見てくる。これは間違いない、俺の強さを目の当たりにして惚れたな。だが安心してほしい、俺も同じ気持ちだから両思いだ。モニカ共々幸せにしてやるよ。善は急げと言うし、試験が終わってから上手く2人きりになつて告白しようそうしよう。おお、テンション上がってきた（ダメージ10%アップ）！

魔物を倒す。魔物を倒す。魔物を倒す。オルディネシユタインを拾う。魔物を倒す。魔物を倒す。予見の双葉を拾う。魔物を倒す。魔物を倒す。魔物を倒す。魔物を倒す。オルディネシユタインを拾う。だんだんと面倒になってきたな。オート戦闘機能の実装が待たれる。

「はあはあ、貴方は先ほどから何を拾っているのですか」

戦闘の間、息を整えながらリーシャが聞いてきた。

「オルディネシユタインって石で、属性の力の純度を高めるだかの効果があるらしい」

必要な数を揃えるために、お前とモニカに300発はグラゼロ打ってやったぜ、とは言えなかった。

「進行に影響ない範囲で集めるなら問題ないだろう？」

なにせ、ここではリーシャを何回倒しても入手できないのだ。見過ごすなんてできるわけがない。

「まあ、それぐらいだったら」

あっさり引き下がるリーシャ。どうやら少しは信用されつつあるようだ。

そして100オルディネ（時間単位）ほど進んだところで森の出口が見えてきた。他の班も集まってきているのか、少しぎわわっている。

「そーいやヴァルフリート野郎だが、近々別の空域に行くそうだ」

「父さんが……」

「あの野郎とは前々から本気で戦ってみてえと思ってたんだが」

なるほどな、ガンダルヴァ追放間近ってことか。今からだと流星に俺が次期船団長になるのは無理だな。となると、モニカか別のモブが船団長になるのだろう。自分の実力も十分に実感できたし、ハーレム王になるためにも、ここから最短で行ってやる。

「だからお前ら……悪く思うなよ！」

突然、背後から攻撃を受ける。薄れていく意識の中で、俺はどこか納得していた。

やらかすのお前かよ。

### 第3話 入団試験終了

エピソードー

「APが溢れるー」

意識が戻った俺の口から最初に出たのはその言葉だった。色々手遅れかもしれない。ガンダルヴァに殴られた頭がズキズキと痛むので、それが原因だということにしておく。手で触れてみると、べつとりと血が付いていた。痛みに耐性が無いはずの俺がのたうちまわったりしないのも、やはりチートのおかげだろう。

激しい剣戟の音が聞こえたので姿勢を低くしつつ向かってみると、森を抜けたところでガンダルヴァが大暴れしていた。状況から推測すると、俺が殴られてからあまり時間は経っていないようだ。

「ヴァルフリート野郎はまだ来ねえのか？ 大事な娘がどうなつても知らねえぞ」

左腕でリーシャの首をホルルドしながら、右手の刀で秩序の騎空団員を次々と倒している。

「こんなことしてタダで済むとぬわー」「船団長、おやめくださぬわー」「前から気に入らなぬわー」「こんな聞いてなぬわー」「ここは抜かせなぬわー」「我が剣技のぬわー」



「ぬわー」「ぬわー」「ぬわー」「ぬわー」

「まったく、準備運動にもなりやしねえ。そんなんでお前らの秩序は守れるのか？」

「秩序は……決して……負け……ない」

どうやらリーシャは無事のように。慌てて飛び出したい気持ちを抑えて、慎重に対抗策を考えることにする。無策で突っ込むなんて、デイスペル無しでシユバマグを自発するようなものだ。くっ、ここにシユバ剣が32本あれば余裕で耐久勝ちできるだろうに。そして今の俺が使えるアビリティは2つ、全体攻撃スロウとミストだけだ。魔物と戦闘したときにこっそり試してみたが、どうやら俺もエピソードクリアしないとアビリティを習得できないようだ。

打つ手が無いと途方に暮れる俺の目に、倒れている秩序の騎空団員達が映った。……『この手段』なら届くか？ いや、迷っている余裕は無い。このままだとガンダルヴァが挑発のために人質リーシャの服を破ったりする可能性があるってあるのだ。………ぐっ、俺は惑わされたくないぞ、なかなかやるなガンダルヴァ。幸いにして戦闘場所は少しずつ本部の方へ移行していて、今なら邪魔されずに実行できるだろう。俺は目の前の『それ』を手に取った。

5分ほどで準備を終えた俺は、ゆっくりガンダルヴァに近づいていく。まだリーシャの着衣が無事で複雑な気分だ。

「やっぱり来たか、次は本当に死ぬぜ」

「その台詞、そのまま返してやるよガンダルヴァ」

「これが次期船団長になるラストチャンスだからな！」

「それにしても『その格好』で本当にやるつてのかわ？」

「ああ、気付いたんだ、これが俺の本来の強さだ、つてな」

倒れている団員の剣を借りて右手に持つ。霧をイメージしつつ左手を前に向ける。そのまま距離を詰めて、奴の間合いの1歩前で霧を噴射、直後に一気に切りかかった。ガンダルヴァは刀で俺の剣を弾くか、あるいは破壊かを狙っていたようだが、受け止めるのが精一杯のようだ。

「くっ……くっ、こいつ!？」

さて、ここで今朝のことについて思い出してみよう。この世界に来たばかりの俺は武器を何も持っていなかった。解放十天衆といえど覚醒天星器を装備しているにも関わらず、だ。武器に依存しない強さに達しているのかと思っただが、それも違った。ならば、この世界がグラブルである以上、残された可能性は1つしかない。

今の俺の格好を説明すると、腰や肩に剣帯を9つ巻きつけ、そこにそれぞれアイス

ソード（ボーナスなし）を吊るした状態だ。右手のアイスソードと合わせて水の攻刃×10、前代未聞のアイスソード染め編成だ！

「くくく……ははははははははっ！ その出鱈目なのがお前本来の強さか！」

「生憎と、俺にはこれが普通だったんだよ！」

戦いは互角だった。さつきと違って、俺の攻撃を身体で受けるわけにはいかないからだ。これだけ有利な状態なのに互角にしか戦えないのが腹立たしい。だが、この膠着状態は戦術的に悪くない。ヴァルフリード団長が来たら一気に形勢が傾くからだ。

「こいつがいると動きづれえし、お前にくれてやるよ」

ガンダルヴァはリーシャを俺の方に投げつけてくる。一気に勝負を決めたいのなら、確かに一番有効な方法だ。左腕を使って彼女を受け止め、そのまま庇うように立ち回る。その頃にはガンダルヴァの「溜め」も終わっており、必殺の横一閃が放たれようとしていた。

全力で防ぐことは、おそらく可能だろう。だがその後はどうする？ リーシャを狙って俺の動きを縛ったりはしないだろう。だが、認めたくは無いが動きやすくなったガンダルヴァに負けるのは時間の問題だ。そうなれば、やつは再びリーシャを人質にして好き放題するだろう。それだけはハーレム王として許すわけにはいかない。ならばいっそ相打ち覚悟でっ！

「くはっ、そうだ、そうこなくつちやな！」

ブルブレイズバッター！

ワイドブレード！（アイスソードの奥義）

互いが互いへの決定打を放つ。言葉の上では引き分けだが、実際は耐久力の違いでそうはならない。こっちは行動不能にするのが精一杯だが、やつの攻撃は良くて致命傷だ。やはり少しは守護（スキル）が必要だったか。ここは秩序の騎空団の医療技術を信じつつ、モブプリーストの可愛さに期待しよう。

「これ以上はさせません！」

その時、ガンダルヴァの刀を遮るように後方から剣が振るわれ、それにより発生した風の盾で攻撃の威力は半減する。ナイスだリーシャ！

「ぐ……が……ふっ……」

俺の攻撃と、風の盾による迎撃によって大ダメージを受けて倒れるガンダルヴァ。ここでどめを刺せば、俺が次の船団長だ。そう思つて至近距離まで近付こうとするが、俺の方も半減したとはいえかなりのダメージを受けている。それに、なんだか頭がぼーつと……ああ……頭の傷か……血を流しすぎ……。

「勝利を信じて！」

よし、ちゃんと言えたぞ。

## エピソード3

数時間後、秩序の騎空団の団長室に2人。

「取調べに対して、ガンダルヴァは次の3つを主張しました。」

『今回のことは限りなく実戦に近い、抜き打ちの演習および入団試験だった』

『エルステ帝国から少将待遇で勧誘を受けている』

『あの小僧を入団させろ。小僧で好きに遊んでいいなら5〜6年は大人しくしておいてやる』

そして『秩序道？ そんなこと言ったか？』とも

「脅し、だな。最近の帝国は軍備や支配圏を拡大している。行かせれば空域の秩序が大きく乱れるだろう」

「しかし、永遠に幽閉しておくわけにもいきません。今回の騒動で死者、重傷者は出ておらず『演習』を否定する証拠は出ていないので」

「ひとまずは過剰であったことを理由に『1年間の減俸と武器の封印』とする。後ほど私が入団試験について話をつけよう」

「では、そのように致します。次に『彼』についてはいかがしましょう」

「こうなつては入団させるしかないな。ガンダルヴァへの抑止力になりうると、実証し

てみせたのだ。それに、もし帝国に所属するようなことになれば何をしでかすか見当もつかない」

「大事な理由を言い忘れていませんか？」

「……何のことだか分からないな」

「娘さんって少し融通が利かないとところがあるみたいだから、彼の存在でいい方向に変わってくれば、とか考えているのでしょうか？」

「……」

「やっぱり騎士サマも人の親なのね。そんなに大切なら、もう少し優しくしてあげてもいいのに」

そう言い残して彼女は団長室を後にした。その手にリラを携えて。

#### エピソード4

ここがグラブルの世界か。いや、それはもうやった。はつきりとしつつある意識で記憶を辿る。確か2次試験の途中でガンダルヴァと戦って……。

「そうだ、入団試験！」

「とつくに最終学力試験まで終わりました。試験中に寝ているなんて、貴方は本当に不真面目ですね」

横からリーシャの返事があった。俺が寝ているベッドの隣に座って、心配そうな顔でこちらを見ている。その姿は完全にヒロインだった。まったく、誰だ可愛いモブ優等生扱いしたやつは。あと、真の仲間扱いしない運営を俺は決して許さない。

「そうか、終わったか……。色々あったけど、とりあえず合格おめでとう」

「!! 当然です。貴方みたいな無秩序者と違って主席合格ですから」

そう言つて彼女は少し得意気な顔をする。主席合格には納得しかないので大して驚かない。

「それに、私が合格できたのは、あるとき貴方が助けてくれたからです」

「あるとき……ガンダルヴァア！ やつはどうなったんだ？」

リーシャの説明を簡単にまとめると、あれは全団員と受験生へのドッキリだったようだ。いや、あれで追放されない理由が分からない。

「あの殺意でそれはありえないだろうが……一歩間違えば死んでいたぞ」

「そうですね……あの時は私も船団長への恐怖で何もできませんでした。私が入団したから団員の皆さんも銃撃を躊躇してしまって。いくら主席合格でも、こんなんじや父さんに追い付けない……」

「それは違う。リーシャはずっと諦めなかったし、最後は俺のことを助けてくれた！」

「でも、それは……。教えてください、貴方はどうして船団長と戦えたんですか？ 何を

考えていたんですか？」

ここで、父は父、リーシャはリーシャ、つて気付かせるように話を進めると好感度が上がるはずだ。つまり秩序とか中身の無きそうなものではなく、なんか等身大っぽい答えを返せばいいのか？

「そうだな……それ（船団長の地位）は俺のものだ殺してでも奪ってやる、つて。これっぽっちも綺麗な理由じゃないだろ」

「えっ、えええええっ!! それ（人質のリーシャ）は俺のものだつて、どういうことですか! 一体いつからそんな風に!」

うわっ、突然リーシャが立ち上がつて、真つ赤な顔で怒り出した。当然だよな、原作では自分が船団長だったわけだし今のうちから目標にしてるんだらう。

「（集団面接のときにガンダルヴァと）初めて会ったときかな。もちろん今は（ガンダルヴァ殺せなかったし）無理だつて分かつてる。でも将来的には（リーシャよりも俺の方が船団長に）相応しい男になってみせるさ」

「初めて会ったとき（可愛いって言われた）!?!……永遠に無理に決まっています! 相応しいなんてありえないです! 止めてください!」

とりあえず、いつものリーシャに戻つたみたいでなによりだ。彼女は真つ赤な顔のまま去つていこうとするが、出口のところで振り返る。



「同僚としてだけなら貴方のことは認めていますからつ。……ええと、助けに来てくれて、ありがとうございます」

つまりこういうことか。俺はハーレム王への道を一步踏み出したのだ！

## 第4話 入団1年目 戦力を強化しよう！

エピソード1

「ガチャを回そうー」

入団してから数日後、俺はそう決意した。周囲の団員達が不思議そうな顔で見ているので、急いで人気の無い場所に移動する。

グラブルで最初に一定の強さを得ようと思ったら、手っ取り早いのはガチャを回すことである。ある程度の戦力が整ってきて、それでも更に強くなるうと思つたらガチャを回すのが有効だ。全てが極まった強さに到達しても、新要素が実装されればガチャを回すしかない。そして基本は9万円分だ。

色々と悲しくなったが、とりあえずは頭の中で『ガチャ！』と念じてみる。何も起らない。

「ガチャ!!」と大声で叫んでみたが、何も起こらない。

脳内でメニューを開き右上のガチャボタンを押すことをイメージしたが、何も起こらない。

マイページでは右膝の横あたりにボタンがあるので剣を使って押してみたが、何も起

こらない。

同じく足元にはバナナがあることが多いので掘ってみたが、何も起こらない。

ああ、こんなときにスマホがあれば、都合よく引けたかもしれないのに！ やっぱり異世界転生にスマホは必須だな。とりあえずナル・グランデのある北に向かって、カインに謝っておいた。

次に有名な修行を試してみることにした。ガチャボタンを何百枚かスケッチしてみた。任務中も四六時中ガチャボタンをイメージしていた。数日で夢にガチャボタンが出てきた。そしてとうとう幻覚のガチャボタンが出てきたので押してみたが、何も起こらない。どうしようもないので幻覚のガチャボタンを連打する。

「あの、大丈夫ですか。慣れない仕事で疲れたんですね。一緒に医務室に行きましょう」  
何故かリーシャが優しくかったが、そんなことよりガチャだ。ナルメアお姉ちゃんを引きたい。

エピソード2

「召喚石が欲しいー！」

さらに数日後、俺は次の目標を設定した。ガチャから引けないのなら、それ以外の手段で入手するしかないからだ。周囲の団員達は「またか」といった顔をしている。

様々な検証の結果、召喚石は5つ装備できて、メイン召喚石の加護が効果を發揮すると分かった。もちろんルリアは居ないので召喚はできないが、サブ召喚石も能力値上昇に役立つので強い方がいい。

メインとサブ、装備と所持の違いを明確にするため、俺は専用のベルトを作った。網袋を5つ取り付けただけのそのベルトを、俺はサモンズドライバーと名づけた。

さて、俺はガチャを引けない状況で召喚石を揃えなくてはならないのだ。様々な島を回って適当に星晶獣と戦えば各属性の分を入手できると思うが、入団したばかりの新人なので長期間アマルティア島から離れることはできない。せつかくなので、アマルティアで拾える召喚石を最初の獲物と定める。

さあ兎狩りだ!!

事前に調査したホワイトラビット出現場所を探索する。鋭敏な聴覚？ 関係ないな、兎さえ出ればそれでいいのだ。俺は森の中を走り回った。モグラに用は無い（一応倒す）。ノーマル装備なんて邪魔だ（一応拾う）。しかしその日は結局、1回も遭遇できなかった。

それから俺は騎空団の任務が無い日に一日中、台車を引いて探索するようになった。焦ってはならない、嘆いてはならない、心を殺してひたすら回すのだ。騎空士ならば、それができて当然なのだ。その甲斐あって俺はついに、10個目のホーリー・ジーンを

拾った!!

「ちくしよおおおおお!!」

「伸び悩んでんのか? 『魔物を倒して修行』なんて普通のこともあるんだな」

突然現れたガンダルヴァは、そう言つて10本のアイスソードを投げ渡してきた。

「心配すんな、今日のお前はあの時のお前より……建前とか面倒くせえな。暇だから闘ろうぜ」

ああ、あの時の俺の馬鹿! きつちり殺しておけよ!

ちなみに、ホワイトラビットは後日無事に入手できた。

エピソード3

「武器が欲しい!」

また数日後、怪我が治った俺は次の目標を設定した。周囲の団員達は慣れたもので完全スルーだった。ふと気付いたが、俺はすっかり「ぼっち」になっていた。まあ慣れたものだ、ハーレム王に友など不要!

そう、重要なのは武器だ。俺は10個の武器を装備できるので、バランスがいい編成を考える必要があるのだ。細かい計算式は省略するとして、攻刃を4:3:3とか6:2:2とか5:5:0とかにしなくてはならない。守護? 別に無くてもいいだろう。

ここで大事なのは『方陣攻刃』スキルの武器だ。『通常攻刃』は各所で簡単に入手できそうだし、『E X攻刃』は下手をすると入手の機会が無いからな。まずは色々と便利なティア銃から検討してみよう。ティア銃のためにはティアマグと戦闘する必要がある。ティアマグと戦闘するにはティアマグのアニマが必要だ。ティアマグのアニマはティアマトH A R Dが落とす。

結論：ティアマトH A R Dをやれ。

なんだ、ただの義務ブルに帰結するのさ。なんて分かりやすい。ティアマトH A R DはS Rの方陣攻刃武器も落とすから何個か繋ぎ用の武器を作るのも悪くないしな。よし、将来的に日程に余裕ができればポート・ブリーズでティアマトマラソンだ！ ふう、なかなか有意義な思索だった。ただ、問題は……。

「ああ、リーシャ。いいところに通りがかってくれた。秩序の騎空団ってエルステ帝国に伝手があったりしないかな？」

「少し前に帝国の研究所から実験用の魔物が逃げたとかで、共同で対応していたと思います。そんなことに興味を持つなんて、一体どうしたんですか」

「研究所！ ちようどいい。ポート・ブリーズの星晶獣ティアマトを魔晶で暴走させたくてさー！」

即座に地下の独房送りになった。

## エピソード4

「仲間が欲しい!」

やはり数日後、独房から出た俺は次の目標を設定した。周囲の団員達は速やかに避難を開始した。違うお前らのことじゃない。それにしても慌てず落ちついて避難できているな。ああ、2次試験の所為か。

さておき、俺が言いたかったのは仲間キャラのことだ。ガチャ加入が無いのなら、それ以外の手段を考えなくてはならない。イベント加入キャラは時期と場所が重要だ。事件が起こる直前ぐらいに出会って、共同で何かを解決しなくてはならない。しかし、俺は入団したばかりの新人なので今は難しいだろう。

そこで武器の入手による加入である。例えば、宝剣アンダリスを所持していると、「やっ、それはアンダリス」とか言いつつアレーティアが仲間になったりするのだ。別に嬉しくはないが。

そんなわけで、休日にデイケオスイニ通りへやってきた俺は、商店や露店を回ってキャラ加入武器を探している。問題はどの武器で誰が加入するか、ほとんど覚えていないことだ。ナルメアは……さすがに闇属性の刀でいいよな。ユーステスのバンカーは有名すぎるが、他のキャラは……うむ、自信がない。こんなにwikiが見たいと

思ったのは、転生してから初めてだ。

「よお兄ちゃん、そんな顔してどうしたんだい。よかつたら見てつてくれよ」

露店の男性から声がかかる。どうやら女性用の装飾品を取り揃えているようだ。

「どうせ女絡みだろ？ 珍しいのが色々あるからプレゼントしてあげたら喜ぶよ」

ええい、俺は女そのものが欲しいんだ。そのためにも武器を……と思ったところで、ある商品に目が留まる。それは、赤い扇と簪だった。そこからエルーンの少女を連想する……まさかソシエ、なのか？

「なあ、その扇と簪……」

「おつ、いいところに目を付けたね。綺麗な細工だろ？ こんな高級品は滅多に見つからないよ」

問題はそこではない。それがSSRの格闘武器かどうかということだ。グラブル世界ではリボンも団扇も格闘武器なのだから、この疑問は妥当でしかないな。

「ちよつと見せてもらえないか？」

「うんよ」

持ったところで何も分からない。俺が格闘得意なら攻撃力の上昇を実感できたかもしれないが。

「ちよつとーつずつ背負った状態で剣を振り回していいか？」



「いいわけないよ、いったい何がしたいんだ。あんまり変なこと言う秩序の騎空団を呼ぶよ」

サブに装備して剣を振ったら、スキルの有無は分かるんだよ！ とは言えない。独房は嫌だ。

「悪い悪い。それで、いったい何ルピなんだ？」

「それぞれ5万ルピだけど、セットで買ってくれたら9万5000ルピにしてあげるよ」

9万5000ルピ！ たまたま見た露店にあった赤い扇と簪が、たまたまSSR格闘武器で、たまたまソシエ加入武器だつて偶然があると思うか？ ありえない。まだ空からヒヒイロが落ちてきた方が信じられるくらいだ。そもそもソシエは扇を見て加入するタイプではないというのに。

「だが買おう」

「まいどありー！」

なぜならソシエは生娘（公式設定）だからだ。

数分後、俺は裏路地で扇と簪にスキルが無く装飾品でしかないことを知った。だが俺の心には一片の悔いも無かった。なぜなら、もう一度言うがソシエは生娘（公式設定）だからだ。

その後、自室に戻ろうと歩いているとリーシャとすれ違った。

「この前は迷惑かけて悪かったな。お詫びの品つてことで、良かったら受け取ってくれよ」

「ええつ、こんな高そうなもの貰えませんか」

「じゃあこれからかける迷惑の分も合わせてつてことで」

「そもそも貴方は誰にも迷惑をかけないように、秩序の騎空団員であるという自覚を持って——」

「それに、リーシャは着物が似合うと思うから」

「!？」

リーシャが混乱した隙に、速やかに避難を開始した。秩序の騎空団員は避難が得意だからな！

## 第5話 入団1年目 フラグと警衛任務

エピソード1

「ハーレムを作ろう！」

俺は自室で初心を再確認した。様々な不運が重なったただけだとは思うが、俺はまだ誰とも恋人以上にはなっていない。だが、今のうちからハーレムに備えておくのは間違っていないはずだ。そこで、前世の豊富な恋愛経験から、俺は現時点における最適な行動を導き出した。ハーレムルートに突入するためのフローチャートを書こう！

まずはハーレム要員その1の恋愛観の確認からだ。なお、その2以降とは出会えていない。

「リーシャ、大事な相談があるんだ」

「何ですか。またテロ行為を企んでいるのではないでしょうね」

「だからあれは誤解だつて。実は、俺の友達の友達の話なんだが」

俺に友達がいらないことを除けば完璧な偽装だ。

「どうやら、そいつの彼氏が浮気したみたいなんだ。それで、どうしたらいいのか悩んでるらしくて。俺は男だし、女の子の意見も聞きたいかなつて」

「浮気ですか、有罪ですね。私なら秩序の何たるかを、その人の身に刻みつけます」

具体的に何をどうするのかとは聞かなかつた。だが、それをされてしまったとき俺は俺でいられなくなるのだろうという確かな予感があつた。

「だ、だよなー。とても参考になつたよありがとう。友達にも言っておくよ」  
「いえ、これぐらいでしたら」

あとは数日後に、浮気は誤解だつたらしいと言っておけば問題は無いだろう。リーシャと別れた後、自室に帰つた俺は真つ白なフローチャートにこう書いた。

『リーシャの攻略は後回し』

ハーレム王への道は順調に一步前進した。……早くモニカが来ないかな。

## エピソード2

入団から数カ月後。新人教育期間が終わつて、俺たち新団員も通常任務に振り分けられるようになった。今回は、カジノ艇「ジュエルリゾート」の警衛任務だ。なんでもデュエル関係の事故で多くの欠員が出たらしく、補充までの1ヶ月に穴埋めが必要だとか。実際のところ俺たち外部の人間が担当するのは、外から来る魔物の退治だけなので何も難しいことはない。

俺は新装備のレージングを試しがてら、多くの魔物を一撃で倒していた。このレージ

ングはアマルティアの武器屋に売っていた短剣で、素振りの結果SR武器っぽい武器スキルだと判明したので購入したのだ。いったい誰の加入武器なのか、今から楽しみで仕方ない。

そんなことを考えつつ雑に魔物を30体ほど倒したところで、今日のシフトは終了。他の団員たちが疲れた顔で居住区に向かうのを横目に、俺はホールへと向かった！

「えっ、リーシャもカジノに興味あるのか？」

「いえ、その……貴方が何かしないか心配で」

「心外だな、ここのカジノなんて慣れたものだ。……慣れたくなんて、なかった」

俺たちはホールに到着した。物珍しそうに周囲を眺めるリーシャを横目に、俺はホールを歩いていく。そして1つのテーブルの前で足を止めてしゃがむ……メダルを17枚ゲット！

「これじゃ心許ないな。次に行くか」

「ちよっ、ちよっと！ 今ごく自然に拾得物横領しましたね！」

「落ち着くんだ、リーシャ。ここではこれがルールなんだ」

「ルール」

何故か一瞬で落ち着いた。少し怖い。

「信じられないなら従業員にでも聞いてみればいい」

「なるほど、ルールなのですね。それなら——」

「あつちでゴロツキも、酔っ払いも、ならず者だつて拾つてるのが見えるだろう」

「やっぱり駄目です。私たちは秩序の騎空団員として、秩序と品格のある行動を心がけるべきであり、メダルを拾う行為は団員の心得に反します」

「そんな……」

「入り口のところまでメダルを購入できるようです。さあ、行きましょう」

なるほど、長年カジノに通っていたが、そんなシステムがあつたとは盲点だった。だが、俺にとってその選択肢は無いも同然なのだ。

「その、武器の新調で……お金、無くて」

「あつ……えつと……わ、私が出しますから」

そこには、ギャンブルのために少女の金を消費する、人でなしがいた。

絢爛豪華なカジノ艇ジュエルリゾート。そこに集う光が強いほど、闇もまた深くなる。

その後、メダルと交換した月光晶3つで、召喚石ホワイトラビットは上限解放された。

### エピソード3

カジノ艇の次はシヨチトル島の警衛任務だ。巫女たちの巡業中は人手不足になりや

すいとか。

最初にはつきりさせておくべきことがある。俺はジオラ派だ。こればかりは覆らない。もちろん全員派があるのなら迷わず選ぶのだが、誰か1人ならジオラを選ぶ。それが俺の意志であり選択だ。この表明で俺から離れていく人がいるかもしれないが、それは仕方ないことだ。誰かを選ぶということは選ばれない誰かもいるということだから。だが、それでも俺は自分を偽らず誇りとともに宣言したい。

「俺は、ジオラ派だ」

ジオラ派の理由？ 大きいからだ。

「任務中です。真面目にやってください」

「はいはい」

そこまで大きくはないリーシャに注意されたので、魔物退治に専念する。どうせ余所見をしていても一撃で倒せるのだが。そういえばメイン召喚石であるホワイトラビッツトは、上限解放によって獲得経験値10%アップから15%アップへと強化された。たった5%の違いとはいえ積み重ねは大きいだろう。

(女に貢がせて増えた経験値は美味いぴよん?)

……たまに頭の中で響く声だけは気になるところだ。

さて、俺たちが担当するのは、今回も外から来る魔物の退治だけだ。しかも俺の担当

区域は巫女たちの巡業ルートにかすりもししていない。その上、巫女の資料を見ることから禁止されていた。この俺を要人警護にしないなんて、まったく上の連中は何を考えているのだろうか。

だが今回の俺の目的には、むしろ都合のいい話だ。俺の目的は、あわよくばジオラと知り合って信頼度を少しでも上げることなのだから。そうやって毎年少しずつ信頼度を上げていけば、卒業と同時に俺のハーレムメンバーになるだろうという遠大な計画だ。手始めに今回は給料の大半を使って高級ピクルスを準備した。運悪くジオラと出会えなかったら、例によってリーシャにプレゼントすればいいしな。

そんなわけで宿泊している村の周辺を適当に歩いていると、1人の少女が目にと留まった。年齢は10才に満たないぐらいだろうか、木の棒をマイクに見立てて巫女ごっこをしているようだ。髪の色が違うし、ぼーっとしてないからジオラではないな。久しぶりに聞くその歌が何だか懐かしくなって、その場に腰を下ろしピクルスを傍らに置いて、しばらく聞くことにした。

そして、すっかり油断していたのだろう。曲がサビに入って少ししたところで、いつものように合いの手を入れてしまったのだ。

「（「ふ」で始まって「ふ」で終わる7文字のやつだ）」

歌詞の転載になってしまうから仕方なかったし、分かってくれろと信じている。そし



て、少女は驚いてこっちを見ると、笑顔で駆け寄ってきた。

「お兄さん、島の外の人だよな？ あたしの歌、聞いてくれたんだ。うっれしいなー」

「ああ、良かったよ」

「やったあーっ！ あたしね、巫女さまに選ばれるために、うーんと練習してるの。お兄さんも、この歌のこと知ってるんだよね？ どうしたらもっと上手に歌えるかな？」

音楽のことはよく分からないし、技術的なことを聞かれても困るんだが……前にアニメで誰かが言っていたことを適当に答えておこう。

「歌を作った人のことを考えてみる……とか」

「作った人……わかんない。じゃ、あたしの事どう思う？ 巫女さまに選ばれるぐらい、

かあ〜いいかな？」

「それなりにいけるんじゃないか」

そう、答えるとき、何か取り返しのつかない間違いを犯してしまった気がした。例えるならプロバハのHPが30%の時点で攻撃ボタンを押そうとして、寸前に26%までぐっと減ってしまった時のような感覚だ。だが、急にクリックを中断できないように、俺の言葉も中断できなかつた。そして、言うまでもなく訪れたのは破局だ。

「それなり、ってなに？ 巫女さまに選ばれないかもしれないってこと？ ねえ、ねえ、あたしってかあ〜いいよね。だって、みんなあたしの事かあ〜いいって言ってるよ。あ

たしが一番だもん。ぜーったい他の子よりかあ〜いいもん。あつ、もしかして、お兄さんって他の巫女さまのイクニアさんなのかな？ あたしだつて将来はその人よりかあ〜いいもん。それで、お兄さんにとってかあ〜いいのは誰かな？ 教えてくれるよね。ね？ ね？」

間違いない、この問い詰めはリナリアだ。どうか髪の色も同じような気がするし、こんな子が2人も3人もいるわけがない。さて、どうしたものか……ここでジオラの名前を出すと彼女に迷惑をかけるかもしれない。けど、今の巫女の名前なんて知らないし、巫女……そうだ巫女と言えば！

「アニラかな。別の島で巫女をやつてる」

アニラは大きいからだ。それに可愛くて強い3拍子揃った完璧なキャラだ。

「アニラ……アニラ……あたしも、アニラって、巫女さまみたいに、なるもん、ひつく、ひつく、ぐすん」

リナリアは、ついに泣きはじめてしまった。どうしよう、流石に『種族が違うから無理だよ』とは言えないし。アニラみたいになりたいってことなら……。

「ミ、ミルクとか飲んだらなれるかもしれないから」

そう言いつつリナリアをなだめていると、俺を探していたであろうリーシャが、限界を超えた速度でやってきた。

「事案ですか。こんな小さな子を泣かせるなんて」

「あ、あたし、ちゃんと、ミルク飲むから、ううっ、ぐすっ」

「事案ですね。話は本部で聞きます」

そして俺はシヨチトル島から強制退去させられ、二度とその地を踏むことは許されなかった。

数分後、誰もいなくなったその場所に一人の少女が通りがかった。

「おなかすいた……あつ。……………ピクルスおいしい」

#### エピソード4

そう、これはね未来話。

「今日から秩序の騎空団広報部でお世話になるリナリア、16才です！ここに来る前はシヨチトル島で巫女をやっていました！全空一かあ〜いい女の子になるのが夢です！」

入団式の日、全団員の前で挨拶したのは、あの時の少女だった。なるほど、リナリアはディアンサと別の道を進むことにしたのか。全空に名前を響かせるのに秩序の騎空団の組織力を利用するのはいい考えだな。

「あーっ、お兄さんだ！ ねえねえ、あたしってかあくいいよね」

団員の中に知り合いでもいたのか、こっちの方を見て話しかけている。

「どうして答えてくれないのかな。もしかして、あたしのこと忘れちゃった？ 8年前、

あーんなに酷いこと言ったのに」

そう言いながらリナリアは駆け寄ってきて……俺の前で止まった。嘘だろおい。

「あたしね、あれから巫女に選ばれたんだよ。それで、2年間ずーっと1番人気だったんだから。他の巫女のイクニアさんも、あたしの事かあくいいって言ってくれたよ。それにシヨロトル様だって、あたしのこと一番かあくいいって言ってくれたもん（翻訳したのはジオラ）。それで、どうかな？ ねえ、ねえ、ねえ！」

この状況では俺に選択肢なんて無かった。あと、シヨロトル様が元気そうで良かった。

「か、可愛いよ」

「どれぐらい？ アニラって巫女よりかあくいい？」

正直なところ、やっぱりアニラの方が好みなんだが。大きくて。

「ぜ、全空で一番だよ」

「……嘘。どうしてそんな嘘つくの？ あっ、もしかしてあたしが傷つくと思つて気を

使ってくれたのかな。だったらちよつと嬉しいな。でも大丈夫、ちよつとはそうかもつ

て思ってたから。だけど、これからは同じ団だもんね。あたしのかあくいいところ、いっぱい見てもらうんだ。そしたらお兄さんも、あたしのこと一番かあくいいって思うようになるよね。ね？ ね？ 実はあれから、歌を作った人のこと調べてみたの。それで、みんなでシヨロトル様の友達だよって歌ったら、すつごく盛り上がりつつ……。だから偶然だと思うけど、お兄さんと会わなかったら一番になれなかつたかもしれないんだよ。ねえ、今以上のあたしになるために、もつとお兄さんの意見を聞かせてよ。いいよね？ いいよね？ ん？ ん？」

流石に『そういうところが怖い』とは言えないし……大きくて可愛くて強いアニラに勝つ方法か。まず大きさは無理だな。次に可愛さは比べられるものじゃないし、ここまですでに1敗1分。つまり強さで勝つしかないってことだが、それも難しいだろう。アニラの性能は高いレベルでまとまっていって隙が無いし、回避もしない。個人的にはスロウの成功率が少し低いからLBで補強できれば良かったんだが。いや、問題はリナリアのことだ。水着ディアンサと似たような性能があれば、テンションがあるから超短期戦で勝てそうか……。

「たしか水着を持つてるよな？」

「えっ……お兄さんが求めているのって、そういう……」

「いや、確かに水着姿を見たいか見たくないかって聞かれたら、もちろん見たいに決まっ

てるけど大事なものはそこじゃないし。別にスキンは使ってもいいからさ」

「……」

「大事なものは水着じゃなくて、スキンを使っている、って」「ああ、そういうことだよな」「あんな可愛い子になんて酷いことを」「リナリア派のイクニアだった者として許せねえ」「あいつ最低だな」「有罪だ」「有罪」「有罪」「有罪」「有罪」

何故か周りの目が物騒だ。ああ、リーシャ。お前なら分かってくれるよな。水着バージョンに通常バージョンのスキンを被せれば性能は変わらずに運用できるって。

「有罪です」

その日、彼はその短い生涯を終えた。完。

## 第6話 入団1年目 攻撃隊長のつとめ

エピソード1

「ここは……独房……？」

「ようこそ……ラビットルームへびよん……」。

申し遅れたびよん。ラビットの名前はホワイトラビットびよん。

この部屋……夢と現実……精神と物質の狭間の場所……

ラビットルームの主をしているびよん

目の前で巨大な白兔が喋っていた。突っ込みどころが10個ぐらいあったが、前にコラボやってたしな、と無理矢理に納得する。ひとまず俺はここに来る前のことを思い出そうとした。

「違う、違うんだ」

「事案なんてとんでもない」

「俺にそんなつもりは無かった!」

「ミルクだって隠喩でも何でもない!」

「不純な気持ちなんて全然無かったんだよ!」

「あんな小さな子に邪な感情を抱いたりしない！」

「俺はただ、胸を大きくするために……あついや……」

……そうか俺は冤罪で独房に入れられたんだ。

「話を進めるびよん。ここでは現実でできないゲーム操作などを行うことができるびよん」

ああ、確かに色々と不便を感じていた。メニュー画面を開ければ楽なものと思いがら、今まで我慢していたのだ。

「だが『力』を使うため今回は3つしか選べないびよん。決まったら言うといいびよん」  
それを聞いた俺は姿勢を正し、白兔に対して深く頭を下げた。

「何卒、カグヤ様に会わせてください」

「調子に乗るなびよん、囚人！」

「うるせえ、ロリに言わせろ！ 獣に罵られても嬉しくないんだよ！」

色々と限界だった。俺は最強ハーレムファンタジーがしたのであって、独房で兎と話したくなんてないのだ。せめて隠しヒロインの1人も見つけずには引き下がれない。

「カグヤ様は、たかが一信者に謁見がかなうような御方ではないびよん」

「つまり信仰心を高めればいいんだな。オリバー10本砕けばいいか？ それとも浄瑠

璃2本か？」



「それは時が来れば明らかになるびよん。さあ、2つ目を選ぶびよん」

今ので1つ消費かよ。だが、カグヤ様と会える可能性ができたのは良かった。さて2つ目か……次は慎重に選ばないと。ガチャを引きたいところだが、宝晶石が無い現状ではどうにもできないだろう。プレゼントボックスや称号報酬があるとしても少量だろうし、受け取るために3つ目を消費する可能性もある。

「キャラの上限解放がしたい」

そう言うとも目の前に『キャラ上限解放画面』が現れた。選択できるのは自分のみで、状態は『Lv40 ☆☆☆☆☆』となっている。まだまだ伸びしろがあるようで安心した。人事部に「キャラの上限解放をさせろ」と乗り込んで叩き出されたときは途方に暮れたものだが、今となってはいい思い出だ。

「えっと、紅蓮、霧氷、大地、烈空、煌光、奈落の宝珠が3つずつと、星晶の欠片が1つか」

これは上位宝珠というやつだな。今まで多くの魔物を倒してきたからか、どのトレジャーも十分に所持している。ボタンを押して数秒後、問題なく上限解放できたように、目の前の画面で『Lv40 ★☆☆☆☆』となった。続けてもう1度解放しようとな必要トレジャーを確認する。

「各属性のジーンと星晶塊が1つずつ……無い！」

そうか、いくら雑魚魔物を倒してもジーンはほとんど落ちないのか。ところでホーリー・ジーンだけ10個あるのはどうしてだろうな、この兎野郎め。だが、足りないものはどうしようもない。3つ目も有意義な処理をしたいところだ。

「凶鑑が見たい」

色々確認したくて選んだのだが、ルリアはいなくても無事に記録されているようでも良かった。まずは『人物』を開くと、ガンダルヴァとリーシャの名前だけが書かれている。恋愛ゲームの回想のように攻略対象ヒロインの名前が書かれていれば分かりやすかったのだが、あまり期待はしていなかったので次を開く。『召喚石』のページには今までに入手した動物や虫が並んでいる。特に変わった点も無い。

「ここからが重要だ。この中にキャラ武器があるかどうか……」

『武器』のページには、レージングを初めとして俺が今までに買い漁った100本あまりの武器が載っていた。露店で購入した武器の中には名称不明のものもあったが、それらも名前とともに記載されている。1つ問題があるとすれば、キャラ加入武器かどうか明記されていないことだが、解説にキャラ名が書かれていれば『キャラ加入武器』である可能性が高いのだ。

「フラガラツハは……よく分からないな。名前は強そうだし、売却価格は10000だからガチャ武器の可能性は高いが、キャラ加入するとは限らない。とりあえず保留として

おこう」

「バビロンの刀剣……売却価格が500だからイベント武器か？ いや、キャラ加入の可能性が無いわけじゃない。これも保留だ」

「マナリアンナイフ！ EX攻刃じゃないか！ イベントSR武器なんてゲームではスキル餌でしかなかったけど、こんなところにEX攻刃があったなんて。あと19本ほど買えないものか……いや、これは露店で買った横流し品だったか。SSR武器ならともかく、余計なことはしない方が無難だな」

それにしてもマナリア学院か。もしそっちのルートだったたら簡単にハーレム王になれたかもしれないな。少なくとも独房に入れられることは無かっただろう。グレアを引いていれば、転生の時に気付けたかもしれないが……いや、今は目の前のキャラ武器に集中だ。

だが、そんな俺の希望も虚しく、キャラ加入武器だと確信できるものは無かった。

「まあ、この程度で傷ついてたら課金なんてやってられるかよ、って話だが。ところで『これ』に時間制限とかリソース消費とかあるのか？」

「無いぴよん。『力』は凶鑑の起動に必要なだけぴよん」

「そうか、ありがとな」

そして、俺はメモを取りはじめた。武器名、外見特徴、スキル、備考など1つ1つ図鑑から写していく。このメモが現実を持ち込めるかどうかは分からないが、あれば武器を整理しやすくなるのだ。何なら次の機会に『力』を使ってもいいぐらいだ。

さて、一通り終わったところで俺は再びリーシャのページのページを開く。せつかくなので目覚める時間まで眺めていることにしよう。ああ、じっくり見ると改めて可愛いな。そしてやっぱりスカートが短いな。そういうえばこのボタンは――

『任務中です。真面目にやってください』

やっぱり音声確認だ！ とりあえず押しまくる。

『任務中です。真面目にやってください』

『任務中です。真面目にやってください』

『任務中です。真面目にやってください』

『任務中です。真面目にやってください』

『任務中です。真面目にやってください』

『任務中です。真面目にやってください』

『任務中です。真面目にやってください』

『任務中です。真面目にやってください』

『任務中です。真面目にやってください』

『任務中です。真面目にやってください』

その後、俺は心ゆくまでリーシャイラストとリーシャボイスを堪能した。

数時間後。

「なあ、オイラが悪かったよお。もう2度と悪いことしないから、ここから早く出してくれえ。隣の奴が1人でブツブツ喋ってて頭がおかしくなりそうなんだあ。終いには『フヒヒ』だとか不気味な笑い声まで……」

狭間の場所じゃなかったのかよ。兎死ね。

エピソード2

独房から出た俺に辞令が下った。聞いたこともないような島に、駐在員として何年か配属されるらしい。主な業務は『島内を見回り変わったことがあれば本部に伝える』だとか。これはおそらく『ご栄転(笑)』というやつだろう。当然、盛大に文句を言おうとしたが、『それに伴い貴殿を攻撃隊長に任命する』『昇進おめでとう』『おめでとう』『おめでとう』と勢いで押し切られてしまったのだ。攻撃隊長と言っても部下がいたりはないようだが、当たり前なのでそれについての異論は無い。

それでもリーシャには一言ぐらい文句を言わないと気が済まない。リーシャが過剰

に騒ぎ立てた所為で、俺は独房に入れられ、島流しにされ、ジオラと会うチャンスが皆無になり、そして将来的に大きな爆弾を抱えてしまうような気さえるのだ。そんなわけを探し回っていると、団員食堂で遅めの昼食中の彼女を発見した。

「いた。おい、リーシャ——」

だが、俺は近くでリーシャを見た瞬間、その全てを許す気になつた。彼女の前にはサンドイッチの皿が置かれている。栄養バランスを考えられた、団員食堂の定番メニュー『秩序サンドイッチ』だ。そして、おお神よ、セットのドリンクは『牛乳』だったのだ！

この想いを、何に喩えようか。

言うまでもなく俺は大きい方が好きだ。モニカも、ナルメアお姉ちゃんも、ジオラも、アニラも、大きくなければ今ほど好きであつたかどうか自信は無い。だが俺は、結果のみを重視したりは決してしない。大きくしようと呼び努力するのなら、例えば結果に繋がらなかつたとしても同じぐらいの価値があると思うのだ。

要するに、いつも父親に倣つてブラックコーヒーを飲んでいるリーシャが、大きくしようと呼んで飲んでいるのは最高に可愛いつてことだ。Q. E. D.

「ああ、貴方ですか。今日はどうしたんですか？」

「しばらく会えなくなるし、挨拶でもしておこうと思つてさ」

「たしか駐在員でしたね。私がいなくても大丈夫なのか心配です」

「問題ない。これでも攻撃隊長に昇進したんだぜ」

「いえ、私が心配なのは貴方以外の駐在員のことです。それに島の方々も……」

ぎゃふん。どうやらよほど信用が無いらしい。そして少しだけ腹が立ったので、ささやかな反撃を試みよう。牛乳に口を付けたタイミングで聞いてみた。

「ところで前から牛乳飲んでたっけ？」

リーシャは激しくむせこんだ。単なる偶然という可能性もあったが、この反応は確定だな。

「え、ええ、まあ」

「心配しなくても、すぐに本部に戻ってくるつもりだ。だから次に機会があったらデートしよう」

「えっ、それは……」

リーシャが冷静であれば即座に断られただろうが、今の状態なら数秒の時間を要するだろう。だから俺がするべきことは返事を聞かずに逃げることだ。

「おっと、そろそろ騎空艇が出る時間だ。またな、リーシャ」

俺は食堂から撤退した……。これで、せめて2人で買物に行くぐらいはできるだろう。それでゴロツキにでも絡まれたら、おそらくアビリティ習得ができるはずだ。基本的な習得の傾向から考えて間違いない。もし駄目だったら2人で森にでも行って魔物

退治だな。

アビリティ習得の目処が立った俺は、騎空挺発着所に向かって鼻歌交じりに台車を引く。それには武器が50本ほど積まれていて、かなり重いのだが仕方ない。一人前の騎空士として、全属性の敵に対応できなければならぬのだ。

「しばらく会えねえし、『挨拶』でもしておこうと思つてな」

ほら出た、火属性の敵だ。だが、今ならまだ問題ない。その左手の刀は封印されていて抜けないようになっていいるからだ。一方、これを予想していた俺は、すでに水属性装備を背負っていた。

「見せてやる、新調したSRヴァルナ編成の力を！（ただしヴァルナは無い）」

ギリギリ辛勝だったが、今のところは良しとしておく。

エピソード3

城塞都市ヴェローナのヴェローナ大聖堂。歴史と由緒のあるその建物の入口扉は、突然に蹴破られた。他ならぬ、この俺の足によって。

「神父よ、貴様の企みはここまでだ！」

建物の奥にいた男は、何のこともかさっぱりパリスな顔をしているが、この俺は騙され



ない。

「貴様がロミオとジュリエットを利用して、星晶獣オ、オモ……」

あれっ、ここの星晶獣の正しい名前って何だっけ。6文字以上のカタカナは苦手なんだ。

「星晶獣をもつ、その悪しき欲望のためにっ！」

誤魔化せたか。誤魔化せたよな。

「故に……愛と秩序の下、秩序の騎空団が裁きを与える」

「おのれ、秩序の騎空団。よもや私の計画を見破るとは……」

よし、自白した。ヴェローナの王であるモンタギューとキャピュレットの名前を聞いて、ここの神父が黒幕だったことは思い出したんだが、それ以外は微妙に曖昧だったので上手くいつて助かった。

しかし安心したのも束の間、神父は素早く身を翻して階段を駆け降りていった。普段の俺なら決して追いつけない速さでは無かったのだが、今は両手で大きな木箱を抱えていたため困難だった。もちろん扉を蹴破ったのも、これが理由だ。ともかく木箱を置いていくわけにはいかなので慎重に神父の後を追う。

「——永遠なる一瞬を生きる……愛する憎しみを知る……」

汝……相反する二つの理……星晶獣オクシモロンよ……

「私の肉体を憑代とし……今……ここにその姿を現せ!!」

神父は地下の霊安室にて呪文の詠唱をしていた。そして現れる巨大な異形の門。炎と氷、相反する力を調和させる星晶獣だ。

「ふはは、憑代が王位継承者でないとはいえ流星は星晶獣。どうだ、この圧倒的な力は」「あまり秩序の騎空団を見くびるなよ、神父」

「神父ではない……私の名はイアゴ……この神聖ヴェローナ王国の正統なる王位継承者だ!」

そう言った神父の体を、黒い霧が包み込んでいる。つまり、どういふことだ?

「私はモンタギューの謀略で殺された無念の恨みから亡霊となり、この世に舞い戻った……。不完全な星晶獣だが、モンタギューを滅ぼすぐらいはできようぞ。手始めに秩序の騎空団、お前から殺してやろう」

親切に説明してくれたイアゴの指示を受け、星晶獣オクシモロンは両脇の一角獣の飾りから炎の渦と氷の渦を放つ。十分な距離があつたので、俺は両方を軽く回避して、物陰に木箱を置いた。さあ、戦闘開始だ。

数ターン後、戦況は比較的俺が有利だった。攻撃の前兆を読めば、直撃を避けることぐらいはできるからだ。そして、俺から見て右側の炎部分を集中的に攻撃する。この

ままヒット&アウェイに徹すれば勝利できると確信した。ロミオが水属性だから星晶獣は火属性だ、と決め打ちして正解だったな。

だが、そう順調にはいかないようだ。星晶獣は両脇の一角獣の飾りで錬成した魔力を中央に集め、相反する魔力として放出してきた。避けることはできず、武器で受けて軽減もできそうにない……これは無属性攻撃だ。

コントラディクション！

「ぐうっ！ リリイに謝れよ」

「いいぞ、オクシモロンよ。所詮は人の身で星晶獣に敵うはずがないのだ」

俺は懐のポジションを、敢えて『飲まない』ことを選択した。同じような攻撃なら、あと一回だけ耐えることができる。ポジションにも限りはあるのだから、使いどころを間違えてはならない。そして、炎の渦と氷の渦を必要以上に受けるのも良くない。仕方ないので防御重視でチクチク削っていくことにした。そして程なく――

コントラディクション！

2回目を受けたが、1回目よりもダメージは大幅に減少している。なるほど、これは残HPの割合に依存したダメージだな。つまり、この相反する魔力で死ぬことは決して無いということだ。そして、これは『悲劇』だったな……ならば。

「(´▽｀)からは、俺の独壇場だ」

そして、近距離から離れず星晶獣オクシモロンを攻めたてる。炎の渦は多少のダメージを覚悟で切り払い、氷の渦は死角に回って直撃させない。そして相反する魔力——コントラディクション——は低HPを保っていれば隙でしかない。

「馬鹿な……星晶獣オクシモロンが……」

もしジュリエットが憑代だったら、この戦法は通じなかつただろうな。加入キャラとして登場して長らく1軍にいて、今でも一部の人のオメガ槍パーティではアタッカーとして活躍しているほどだ。神父や亡霊程度で代替できるはずがない。さて、そろそろ力も弱まっているようだし、舞台つぼく華々しい最後にしたいところだ。

「蒼の剣を受けよ、アイオライト・ブルー！」

星晶獣オクシモロンは、その一撃で倒れ伏した。

これが、蒼の剣だ。

#### エピソード4

星晶獣オクシモロンとの戦闘終了後、俺は2本目のポーションを飲んで傷を癒す。出血は放置すると危険だということを学んだからだ。そして、木箱の中からポーションを出して懐に入れる。さてと。

「イアゴよ、貴様の恨みはその程度か。俺1人も殺せずに満足か」

失意のイアゴに話しかけると、項垂れていた彼は顔を上げて俺を睨みつけてきた。

「私の恨み、野望は決して消えぬ。」

汝……相反する二つの理……星晶獣オクシモロンよ……。

私の憎悪を糧とし……今……再び立ち上がれ!!」

「いいぜ。何度でも倒してやるよ、オクシモロン!」

再び戦闘が始まった。そして同じように終わった。木箱からポジション2本を懐に移す。

「どうしたイアゴよ。モンタギューへの復讐は諦めたのか」

「モンタギューに復讐するためなら、我は何度でも。」

汝……相反する二つの理……星晶獣オクシモロンよ……。

私の執念を糧とし……今……再び立ち上がれ!!」

三度戦闘が始まり、同様に終わった。木箱からポジション2本を補充する。

「お前にはがっかりだイアゴ。やはり役者不足だったな」

「我は、まだやれる。」

汝……相反する二つの理……星晶獣オクシモロンよ……。

「私の野望を糧とし……今……再び立ち上がれ!!」

更なる戦闘も同様に終わった。ポーションを補充する。疲れたのでエリクシルハーフを飲む。

「がんばれイアゴ。亡霊の力を見せてみる」

「……?」

汝……相反する二つの理……星晶獣オクシモロンよ……。

私の魔力を糧とし……今……再び立ち上がれ!!」

手順が確立されてきた戦闘が順調に終わった。ポーション補充。

「全く伝わってこない。イアゴの恨みが全く伝わってこない」

「私の恨みを糧とし……今……再び立ち上がれ!」

戦闘終了。ポーション補充。疲れたのでエリクシルハーフを飲む。

「もう一回!」

「私の魂を糧とし……今……再び立ち上がれ!」

戦闘終了。ポーション補充。

「もつとー！」

「私の存在を糧とし……今……再び立ち上がれ……」

戦闘終了。ポーシヨン補充。エリクシールハーフを飲む。黒い靄は霧散した。

「イアゴ……嘘だろ、まだたったの8回だぞ。イアゴ！ イアゴ!!」

呼びかけに答える者はいなかった。

木箱の中には、まだ数十本の瓶が詰まっていた。

その後、俺を捜索中の秩序の騎空団が、破壊された扉を見て大聖堂に踏み込み俺は取り押さえられた。しかし途中から意識を取り戻していたロレンス神父の証言により、イアゴの計画や俺の無実が明らかになった。ただし独断専行は秩序的にアウトらしく、3割の減俸処分だとか。

攻撃隊長が攻撃して何が悪い！

## 第7話 入団1年目 繰り返されて結成

エピソード1

更なる左遷によつて、俺は極寒の地ノース・ヴァストの駐在員となつていた。そして、不本意ながら無法者集団オダヅモツキー・ギャングスタのアジトにいた。周囲には20人ほどの荒くれ者たちがいる。

「なんだあ、ソイツはよお！」

「オイ達のシマで、怪しい動きしてやがったからなあ！」

「おう、引っぱつてきたんだ！」

そういうわけだ。下手に戦闘してロツク鳥に気づかれる展開だけは避けなければならなかつた。そもそも俺は普通に歩いていただけだつたんだが……。

「他の奴らみてえに、薪にしてやりやあよかつたのによお！」

「それがよく、武器をたくさん持つてやがるんだ！」

「カバンには薬がたくさん入つてるんだぜえ！」

「分かつたぜ！ よろず屋つてことだな！」

いやいや、滅相も無い。俺みたいなのが『よろず屋』を名乗るなんて恐れ多いです。



「だから、ここまでコイツに運ばせると楽なことだあ！」

「す、すげえ、おめえ天才か！」

「武器はオイ達が使つてやるからよお、全部置いていくんだな！」

「オイ達の自由のためにい〜！」

「自由のためにい〜！」

荒くれ者たちは声をそろえてそう叫ぶ。えっと、そろそろ喋つていいよな。

「俺は秩序の騎空団の駐在員で、さっきは見回つていただけなんだ。今ならお互いにとつて幸せな和解ができると思う。えーと……あつ、その釘バットを一つくれたら大人しく帰つてもいい。もちろん余計な報告もしないから安心してほしい」

「テメエ、ふざけんなよ！」

「秩序だか何だか知らねえが、オイ達の自由を脅かされてたまるか！」

「そうだそうだ！」

「ヒイヒイヤアアアアアアッ！」

こちらが最大限の譲歩をしたにも関わらず、荒くれ者たちは怒り狂つて武器を構える。仕方がないので俺はカバンを地面に置き、武器を一つ一つ外していった。

「自由……か……。ある男の話をしよう。そいつの同僚の女の子は、やたらと露出が高くてな。だから、そいつは胸元とか脇腹とか遠慮なく見ていたそうなんだ。ある日、つ

「我慢できなくなつて胸を掴もうとして、ぶん殴られたときの痕がこれだ。それ以来、ちらつと見るだけにして抑えている」

「俺はシャツをずらして腹部を晒しつつ、9本目の武器をカバンの隣に置いた。」

「ああ？　なにが言いてえんだ？」

「いつかあの胸を自由にしたいってことだ、美乳をこの手に。と心の中で答えつつ、10本目の武器を外す。その時、奥の方から上等な武具を装備した男がやってきた。」

「騒がしいな……一体どうした？」

「オヤジ、このよろず屋の身ぐるみ剥いでるんだあ！」

「バカ、秩序だつて言つてたろ！」

「ほう、その小僧が秩序の騎空団だと言うのか」

「俺は10本目の火属性武器を同じくカバンの隣に置いて、腰の『バビロンの刀剣』に手をかけた。」

「!!　貴様っ！　すぐに全員でかかれ！」

「どうやら気付かれましたよ。身に着けている武器が残り土属性10本になり『装備中』と認識した途端のことだ。こいつ、ガンダルヴァほどでは無いが、中々の使い手らしい。とりあえず近くのやつから倒していくことにしたが……強さは普通の魔物と同じぐらいだった。」

「びひいゝゝ!!」「イギイヒイイツ!」「ぐえあつ!!」「ぎやぴいつ!」「アヒエユツ!」

「息子達よ!! 全員出て来い!! 俺達の自由を脅かす者が現れたぞ!!」

男が叫ぶと、アジトの奥から百人以上の荒くれ者たちがやってきた。更に、妖しい輝きを放つ結晶体を取り出して命令する。

「そして星晶獣よ、来たれ」

巨大な二体の星晶獣もやってきた。たしか『星晶獣阿吽』で……情報は全く思い出せないが勝てると思う。荒くれ者たちと同時に相手をするのでなければ、だが。

「出たゝオイ達の最終兵げひいゝゝ!!」

「いつ見てもイカしいギイヒイイツ!」

「大人しく降ぐえあつ!!」

「よくも仲ぎやぴいつ!」

「デメエアヒエユツ!」

数が多い! このままだと阿吽とともに戦えない。こうなったら一か八かだ。俺は吽形像に駆け寄り攻撃をしかける。

「吽ツ!!」

だが、吽形像の拳は剣を受け止めて、そのまま俺の体を大きく吹き飛ばす。痛つ、こいつ光属性かよ。普通に水属性にしておけばいいのに必然性が……ああ、ベアが闇だか

らか。もし会ったら絶対に泣かせてやる。

「フン、焦って攻撃が雑になったか。どうやら俺の見立て違いだったようだ……何!」  
「わざと攻撃を受けたんだよ。一か八か、それを奪うためにな!」

吹き飛ばされた俺は男の側に着地すると、驚いている隙に結晶体を奪って阿吽に命令した。

「立ってるやつが敵だ! 程々に暴れろ!」

そして3つの暴力による蹂躪が始まった。

後に、オダツモツキーの一員であったスカルは当時のことを語る。

倒されていく仲間を見ながら……自由とは、秩序とは何かを考える事しかできなかつた、と。

最終的に星晶獣阿吽は暴走して自爆。頭目のグルザレッザは巻き込まれて死亡し、オダツモツキーは壊滅した。そして、俺は過剰防衛ということで3割の減俸処分となった。

秩序の騎空団第四庁舎、大会議室にて。

「それでは『エビス駐在員行方不明事件』についての会議を始めます」

「現在のところ、エビスに派遣した捜索班から進展の報告はありません」

「彼にも困ったものだ。ヴェローナとノース・ヴァストに続いてエビスでも、か」

「この件、船団長は何と？」

「それが、

『けつ、捜索なんざ必要ねえ。アイツが簡単に死ぬような奴かよ。』

「この前もオレ様が気を遣って寸止めしてやったつてのに、全力で振りぬいてきやがった」

と嬉しそうに素振りしながら……」

しばし訪れる沈黙。

「いっそ捜索を打ち切りますか。船団長の意向を汲む方向で」

「馬鹿を言うな。彼が秩序の騎空団員として問題を起ささないかどうかが重要なのだ」

「そうとも。エビスは商業国家、もし睨まれば秩序の騎空団の活動に支障が出る」

「それでは捜索班の人員を増やす方向で話を進めましょう」

「だが、あまり増やすぎると本部の運営にも影響が——」

「し、失礼します！ 捜索中のリーシャ班から連絡が！ シデロス島にて発見したと！」

広がる安堵の空気。

「なるほど別の島に移動していたのか。道理で今まで見つからなかったわけだ」

「それで、また星晶獣と戦闘していたとか？」

「まさか！ 先々月、先月で既に2体も討伐しているのですよ」

「違うな。ノース・ヴァストの星晶獣ア・ウンは一对。故に合わせて3体である」

「……今回で4体になったようです」

報告に来た男の言葉で大会議室に長い沈黙が訪れた。

エピソード3

話は数日前のシテロス島までさかのぼる。

「こんなところで何をしているんですか！」

「リーシャ！ わざわざ会いにきてくれて嬉しいよ。ゆっくり話でもしたいところだけど、今はちよつと手が離せなくてさ」

前方から飛んできた音波を避ける。そこには巨大な牛と、それに乗った巨大な女性があった。

「彼女はアワリティア。音楽と呪いが趣味の寝ぼすけ星晶獣で、名前の通り欲望を強めるらしい。白く光ってる部分と赤い目に注意すれば、ダメージを抑えられると思う」

「いいから話してください。どちらを攻撃するべきか、それを聞いてから決めます」

再び音波を避ける。光ってから回避余裕だった。リーシャに話すため、瓦礫の陰に身を隠す。

「簡単に説明しよう。騙されて連れて来られた俺は、採掘場から（力づくで）逃げ出した後に島から脱出する手段を探していたんだ。それでマフィアの下つ端のレアスってやつを（暴力で）懐柔して、色々と情報を聞き出すことに成功した。でも、話の流れで彼に星晶獣のことを少し教えたら急に姿を消して、気づいた時にはアワリティアが目覚めてたってわけだ。たぶん、レアスには何らかの心当たりがあつたんだと思う」

銀髪でバイオリンが上手な14才の巨乳美少女の紹介と引き換えに、アワリティアの宝石と宝玉についても話してしまったことは黙っておこう。よく考えたら、そんな美少女がこんな島にいるはずも無いのだ。

「色々と言いたいのですが、貴方が直接の原因でなくて良かったです。私が援護しましょう」

「助かるよ。不安定な目覚めらしくてそこまで強くはないけど、人手は多い方がいい」  
リーシャは剣を構えた。俺はメイン召喚石をホワイトラビットに変更した。

「頼むぞ、ホワイトラビット」

そう小声で呟くと、俺はアワリティアに向かつていった。……いや、ホーンバードと

か装備するぐらいなら、リーシャもいるしホワイトラビットでいいだろう。

そして予想通り、それから数分後にアワリティアはダメージによつて実体を保てなくなったのか、その姿が徐々に薄れていく。さあ、土エレ落ちろ、槍エレ落ちろ。

「油断するなよ、リーシャ。さつきから何度も『あの状態』から元通りに復元されてるんだ」

視線をアワリティアに向けたままで警告する。それと土エレ落ちろ、槍エレ落ちろ。

「そんなつ、一体どうしたら……」

「分らない。復元にも限りはあると思うから、倒し続けなければいつかは終わるはずだ」

とりあえず200体討伐してから考えればいいんだ。ともかく土エレ落ちろ、槍エレ落ちろ。

「……あの星晶獣が目覚めたきっかけは何だと思えますか？」

「きっかけ、か。完全な目覚めに必要な要素が何か足りなくて、それでもレアスの強すぎる欲望に反応したんじゃないかな」

「アワリティア……欲望を強める星晶獣……欲望に反応……」

そろそろアイテムドロップするぞ！ 兎様出番です！ 土エレ来い！ 槍エレ来い！



「どちらを攻撃するべきだったか、私が間違えていたみたいです」

突然、後方から首に手刀を受けて俺は倒れた。意識を失う前に、アワリティアの気配が完全に消えたことが分かった。

#### エピソード4

秩序の騎空団第四庁舎、大会議室にて。

「それでは『エビス駐在員行方不明事件』についての会議を始めます」

「エビスから、住人の避難や怪我人の治療など、星晶獣の被害拡大を防いだリーシャ班に感謝の言葉が届いています。それから、今回の件で明るみに出たシデロス島の管理体制を見直すとのこと。加えて、拉致被害に遭った駐在員への謝罪と、少なくとも慰謝料もありました」

「関係者や目撃者の証言から、犯人はクレアス——レアスは偽名——であると明らかになりました。彼は日頃から『力が欲しい』『強大な力で全員ぶつ殺す』などと話しており、当日も『宝石』に向かって『あの男を切り刻んでやる』と語りかけていたようです。ただ、星晶獣の影響で精神が不安定になっており、直接は話を聞けなかったようです」

「そのクレアスにしても、星晶獣が完全に目覚めるため操られていたのかもしれないな」「人の心を操る星晶獣……我々、秩序の騎空団としても十分に警戒せねばなるまい」

「続いて『彼』の処遇です」

「騙されてシデロス島に拉致され、誤ってクレアスに星晶獣の存在を伝えてしまい、目覚めた星晶獣を倒そうとするも、その欲望を実体維持のために利用された。事実を並べると、まるで被害者のようでもありますが……」

「そんなわけがない」

「だが彼が主犯だったとして、狙って星晶獣アワリティアを目覚めさせられるとも思えないな。シデロス島の過去の入島者リストを確認したが彼の名前は無く、そもそもエビスの駐在員になったのも偶然だったはずだ」

「彼への慰謝料は、事件関係者のあの老人へ見舞金として渡すのはどうだろう。孤児の世話などで色々と苦勞しているという話じゃないか。どうにも彼に渡してしまうのは抵抗がある」

「むしろ間接的にきっかけを作ったという名目で、3割の減俸処分にしておきましょう」  
「うむ」「賛成」「妥当だ」「いいね」「問題ない」

「では『エビス駐在員行方不明事件』については、これで終了とします。詳細は各部署で調整しておいてください」

「さて『彼』の今後についてです」

「まず駐在員としての適性が低いことは言うまでもありません」

「警衛任務も、欠伸しながら魔物を倒す様子が士気の低下を招くと苦情が出ている」

「要人警護は論外だな」

「それなら、いつそエルステ帝国に送り込むというのはどうかな？」

「とても魅力的な提案だが、秩序の騎空団としては賛成できない」

「皆さん、この件について人事部から1つの計画案があります」

人事部の男は次のように語った。

彼は戦力としてだけ見るなら非常に優れている。星晶獣とも臆せず戦えるだけの闘志もある。それを最大限に活かすためには、彼自身の裁量で行動させるのが一番だ。これまでの問題は、彼が我々と十分な連携を取れなかったことが原因でもあった。よって、行動を起こす前や問題が発生したときに、適切で迅速な対処ができるように専門の人員を彼の周囲に常に配置しておけばいい。

具体的には、船団長直属の戦闘部隊を新設する。部隊の隊長は彼自身に務めてもらい、囑託団員として必要な人員を雇う権限も与える。必要な諸経費は上限無しで認める。最新鋭の騎空艇を部隊専用準備し、3人の専属操舵士を交代させて昼夜を問わず移動できるようにする。本部に部隊専用の部屋と倉庫を用意する。給与は基本給に加えて、功績に応じた出来高払い。

「それは、いささか過剰ではないかね」

「いえ、これぐらいでないと十分とは言えない、というのが私達の見解です」

「確かにまともに運用されれば問題は無いだろうが……」

「癒着や横領、怠慢の不安もある。それに暴走の危険性も」

「ああ、言い忘れていましたが、副隊長にはリーシャ殿を任命します。今回の事件でも適

切——」

「異議なし」「異議なし」「異議なし」「異議なし」

こうして、秩序執行巡空独立強襲隊が結成された。

## 第8話 秩序執行巡空独立強襲隊、始動

エピソード1

俺が秩序の騎空団に入団してから1年が経った。そして、駐在員としての活躍が認められたからか、俺は新設された『秩序執行巡空独立強襲隊』の隊長となった。上の連中も、ようやくこの俺の真価を理解したようだ。しかも船団長直属ということ、これは次期船団長に内定したと解釈してもいいだろう。色々あったが、これで当初の予定通りだ。

「だから言ったら、リーシャ。すぐに本部に戻ってくるつもりだって」

「まさか『適性の低さを主張する』なんてやり方で……」

「いやいや、単純に俺が優秀だからだ」

リーシャは同隊の副隊長ということで、俺に一步差をつけられたからか負け惜しみを言ってくる。これぐらいは可愛いものだ。それよりも、これからはリーシャと一緒にいる時間が増えるのが嬉しい。さらに囑託団員として女性キャラを何人か雇えば、それだけでハーレム状態だ。

「これから隊員との顔合わせです。せめて隊長らしい態度で臨んでください」

そういえば、部下に10人の男性隊員がいるという話だった。いずれは隊長権限で女の子と入れ替えていきたいものだ。

「隊長！」

おっと、少しばかり調子に乗っていたようだ。確かに隊員に侮られたりするのは良くないだろう。最初ぐらいいは真面目にいこう。でも、リーシャの隊長呼びは可愛くて良かった。

そんなことを考えつつ隊室に入ると、そこには既に隊員達が整列して待っていた。秩序の騎空団員らしい誠実な雰囲気の本格隊だ。リーシャの指示で1人ずつ自己紹介しているが……別に名前とか覚えなくてもいいだろう。そういう細かいのは中間管理職リーシャに任せておけばいいのだ。

「次に、隊長から着任の挨拶をお願いします」

挨拶だと？ そんな話は聞いてないぞ。『団サポ完備』とか『HLを活発にやっています』とか『本戦勝利が目標です』とか言えがいいのか……最後のは違うな。ここは様子見の待ちベレー戦法でいこう。

「いや、挨拶はリーシャからやってほしい」

「？ 分かりました。……副隊長のリーシャです。秩序執行巡空独立強襲隊は新設です  
が——」

よし、今のうちに何を言うか考えよう。とりあえず名前と得意属性あたりが無難なところか。いや、こういうのは最初が肝心だ。この超秩序的なリーシャの挨拶に負けないようなインパクトを出したい。今までに聞いた何か印象的な挨拶は……うーん……。

「——全空に鋼鉄の秩序を！」

考えがまとまってきたところでリーシャの挨拶が終わった。よし、次は俺の番だな。

「みんな、秩序してるー？」

「……」「……」「……」「……」「……」「……」「……」「……」「……」  
盛大に外した。リーシャに目を逸らされた。今すぐ帰りたい。

エピソード2

一通り終わって、隊長および副隊長の退室後。

「俺たち本当にリーシャ様の部下になれたんだな……」

「ああ、最高だった」

「今日ほど秩序の騎空団に入って良かったと思ったことは無いぜ」

「でも、これからが本番だ。俺、ずっとリーシャ様と共に秩序の道を歩いていくんだ」

「先ほどの挨拶ですが、文字起こしが終わりました」

「相変わらず仕事が速いな……うん、特に誤字脱字も無いようだ」

「では早速『臨時号』の作製に取りかかります。本日中に本部の会員には配れるでしょう」

「特別会員殿へも届くよう手配を忘れるなよ。あの方もお喜びになるはずだ」

「もちろんです。いつもの会誌と同様に高速便を使いましょう」

「それがいい。下手をすると団長業すら放り出しかねないからな」

H A H A H A

「……それにしても、どうしてあんなやつが隊長なんだ」

「まったくだ。リーシャ様が部隊長で、あいつが攻撃隊長でも問題は無いだろうに」

「前の上司に聞いてみたところ、新設部隊だから何か問題が発生したときに備えてどうか」

「なるほど、あいつに責任を取らせるためつてことか。船団長直属なものも、その辺が理由だな」

「だとしても、俺たちのやるべきことは変わらない」

「ああ、リーシャ副隊長の負担を軽減し、最高のパフォーマンスを發揮してもらおう」

「そのために万事において全力で取り組む！」

「すべては——」



『リーシャ様と秩序のために!』

全員の声が揃った。なお、隊員は10人ともリーシャ非公式ファンクラブの会員である。

エピソード3

今日はいよいよ、待ちに待ったアビリティ習得の日だ。

「いや、違うだろ。これはデートなんだ」

「いいえ、違います。休日の自主パトロールです」

即座にリーシャから反論があるが、これは『か、勘違いしないでくださいね。ただのパトロールなんだからっ』というやつに違いない。前世で俺が攻略したキャラも、よくそんな感じのことを言いつつも別れ際にはキスしてきたりしたものだ。だが、リーシャはそこまでチョロクもないだろう。とりあえず今日の流れを想定しておく。

ゴロツキに絡まれて撃退↓仲間を連れてきたゴロツキを再度撃退↓アビリティ習得

だいたいこんなところか。何故これでアビリティ習得できるのかなんて疑問は、仲間400人分も習得させてきた俺には今更なことだ。

それはそれとして――

「この店のわらびもちがオススメです。自重で変形することを考慮して作られているの

で、こうしてお皿に乗せると秩序的立方体フォルムになるんですよ！ 今日……誤差1%未満なのでラッキーですね」

「お、おう」

「この剣帯はいかがですか。何故か剣を3つも装着できるようですし、着脱も簡単そうです」

「案外、三刀流の使い手が多いのかもな。とりあえず6個買おう」

——リーシャとのデートはかなり楽しかった。長年アマルティアで過ごしてきたからか、俺が知らない店や隠れた名店、秘密の秩序スポット（どうでもいい！）などをいくつかも紹介してくれた。

「隊長は、どの服が似合うと思いますか？」

そして次は服選びイベントだ。

A：白のがいい。やっぱり秩序の白だ

B：もちろん青だよ。碧の騎士の娘なんだから

C：そんなのより君の水着が見たいな

まず最初に除外するのはCだな。水着リーシャは通常リーシャより優秀だが、同じ風属性なので火属性が苦手という弱点も変わらない。様々な敵に対応するためには、やは

り別属性の方がいい。服を変えたぐらいで属性が変わるのかという疑問も、やはり今更だ。

さて次は白か青か、すなわち光属性か水属性かという問題だ。実際のところ、リーシャがいきなり水流を出すのは難しいだろうが、閃光ぐらいなら何となく出せても不思議じゃない。ここは可能性の高いAを選んでおくれ。

「白のがいい。やつぱり秩序の白だ」

「そうですか。実は私もこつちがいいかもと思っていました。買ってくるので、少し待っててもらえますか」

「せっかく似合ってるんだし、今日はそれを着てほしいな」

「まったく、仕方ないですね」

しぶしぶといった様子だが了承してくれた。この後のゴロツキとの戦闘で光属性攻撃してくれることを期待する。……いや、正直なところ初めてのリアルデートは、想像以上に俺の心に効いていた。さつきから性能重視の思考で自分を誤魔化そうとしているが、気を抜けばリーシャのこと以外は考えられなくなってしまうようだ。くつ、まさかこんなことでハーレム王への道が阻まれようとするなんて。

湧き上がる気持ちを振り切るように、俺はリーシャを路地裏に連れ込んだ。

## エピソード4

路地裏。暗くて狭いゴロツキの生息場所の一つ。俺はさり気ない演技でリーシャを奥へと誘う。

「あれれー、こつちの方から不審な声が聞こえたような、そうでもないようなー」

「まさか、なにか事件が……!」

「い、いや、その、見落としがあつてもいけないし、注意深く進んでいこう」

慌てて駆け出そうとするリーシャを止めて、路地裏を慎重に進んでいく。さあ出ろ、ゴロツキ!

「オウオウ兄ちゃん。ずいぶんと可愛い彼女を連れてるじゃねえか」

「へっへっへっ」

「ひやつひやつひやつ」

おなじみゴロツキたちの登場だ。戦闘に突入するためには、少し挑発した方がいいか？

「お前ら、いったいどういふつもりだ!」

腰の釘バット（武器種は剣）を右手に構える。さあ、かかって来い!

「ずいぶんと威勢が——」

「ちよつ、兄貴! 待って! 待って!」

ゴロツキたちは弟分？に引つ張られて、少し離れたところで話しはじめた。断片的に聞こえた単語は「秩序」「武器が」「頭おかしい」「独房」「バケモノ」などで、時々こちらの方を見ては何かを確かめているようだった。やがて、話がまとまったのか全員でやってくる。

「オウオウ兄ちゃん。ずいぶんと可愛い彼女を連れてるじゃねえか。せいぜい大事にしるよ」

「へっへっへっ。幸せにな」

「ひゃっひゃっひゃっ。グッドラック」

ゴロツキたちは笑顔で通り過ぎていった。

「……は？」

「ひいっ!! おっと、こうしちやいらねえ。そろそろ街の清掃ボランティアの時間だ。お前ら急ぐぞ！」

ゴロツキたちは何かに怯えるように去っていった。

「いったい、何だったんですようか」

「さあな」

とは答えたものの、俺には見当がついていた。その原因はリーシャだ。おそらく『あの女、秩序の騎空団員だ。使いこまれた武器が何よりの証拠。たぶん、頭おかしい秩序

狂のリーシャだ。あの女に敵対したら全員独房送りにされちまう。父親は七曜の騎士ってバケモノだから、もうどうしようもねえ』などといった会話があつたのだろう。……今日はアビリティ習得を諦めよう。

「そういえば、不審な声はあの清掃ボランティアの方々によるものだったのでしょうか」「あつ、ああ、特に異常も無いみたいだし、きっとそうだろう」

俺たちは路地裏を抜けた。さて、お洒落なレストランでの夕食後に夜景を見ながら告白するか、それともこのままホテル街に向かうか。そんな手遅れ気味な迷いをぶち抜くような、衝撃の光景が突然に俺を襲った。目の前の雑貨屋のショーウィンドウの向こうにあるそれは、紛れもなく『グラシーザー』だった。

「あの、グラシーザーを、買いたい!」

店に駆け込んだ俺は、ショーウィンドウの方を指差しつつ店員に話しかけた。

「うわっ! ああ、あれだね。まさかこんなに早く売れるなんて。えーと、5万ルピだよ」

5万ルピ! なんて安いんだ。これなら20本買ったとしても、たったの100万ルピじゃないか! だが焦りは禁物だ。コンジャクシオンだって、敵が無属性攻撃してこないことを確認してから使用しないと、パーティが全滅してしまうのだから。

「一応、いくつか確認させてほしい。あれって正規品？ レプリカでも中古でもない？ 在庫はどれだけある？」

「ちゃんと組合の証明がある、正真正銘の新品だね。在庫は1つだけけど、注文したら取り寄せられるはずだよ」

「おお、閻属性の時代が来たようだ！ グラシ染めさえできれば、しばらくは閻属性装備だけで全属性に対応できる。手始めに最終上限解放のためのトレジャー集めに動くでしょう。強化のための武器も大量に必要ななるな。」

「とりあえず店にあるのを買おう。……ほら、5万ルピだ」

「まいどあり！」

「よく分かりませんが、良かったですね、隊長」

「ああ、ありがとう」

「そんなわけで、リーシャに祝福されつつ購入を終えたのだが……。」

「それで、武器はどこにあるんだ？」

「えっ？」

「えっ、じゃないだろう。早く持ってきてもらわないと。後日郵送されるなら住所を書くし、シリアルコード入力が必要なら番号を教えてほしい」

もしシリアルコードの場合、1つまでしか入手できないのが非常に残念だ。

「あの……お客さんが購入したのは、その『抱き枕』だよね」

「ああ、この『グラシーザー抱き枕』だ。正規品なら当然『グラシーザー』が付くだろぅ?」

「いや、その……」

「隊長……」

2人とも俺の言ったことが理解できないような顔をしている。

「それは『抱き枕のみ』の販売となっているので……」

「なに? 抱き枕を買ったら武器が付くのではないのか!」

「もう止めてください、隊長!」

「いや、止められるものか。こんなふざけた商売を、俺は決して認めない。秩序の——」

騎空団員として。と言おうとしたところで、即座にリーシャに制圧された。くそつ、釘バットに手が届けば、こんな拘束なんて力づくで抜けられるのに!

「お騒がせしました。この人は私が連行するので、もう大丈夫です」

「モガモガ」

……床とのキスは木の味がした。あと、リーシャの攻撃は風属性のままだった。



その後、セット販売を『故郷の風習』だと説明して、どうにか情状酌量を認めてもらった。

『抱き枕』代の5万ルピは隊の必要経費にならないかな？』

「無理に決まっています」

## 第9話 調停の翼

エピソード1

俺は深刻で厄介な問題に直面していた。これを放置すると、隊の存続にも関わる悲惨なものだ。

「ルピが無い……」

そう、圧倒的な経済問題である。元々、キャラ加入を狙って武器を買い込んでいて財布に余裕は無いのだ。そこに、3ヶ月前の『3割の減俸（3ヶ月）』、2ヶ月前の『3割の減俸（3ヶ月）』、1ヶ月前の『3割の減俸（3ヶ月）』のトリプルアタックである。そして残り1割の給料に致命的なダメージを与えた、昨日の『グラシーザー事件』。このままでは、まともな食事すらできなくなるだろう。

「くっ、これが秩序の騎空団のやり方かよー」

だが、俺には起死回生の一手が残されている。秩序執行巡空独立強襲隊として適当に活動して、出来高払いを貰うのだ。リーシャに申請を頼めば即日支給も可能だろう。その場合、何をすれば分かりやすく功績として認められるのか。

「……とりあえず帝国の要人でも暗殺する、か？」

暴走ティアマトが駄目なら、それぐらいしか心当たりは無い。ポンメルンを殺して給料が貰えるなら、こんなに楽な仕事も無いな。……いや、あいつには『原作主人公を殺す』という重要な役割があるのだ。ここで死なせるわけにはいかない。同様に、あの少将のハーヴィンも駄目だ。じゃあ中将の……！

「そう、ガンダルヴァを殺そう！」

あまり重要な役割がなかった気がするし、そもそも最初から殺すつもりだったし、何より同じ建物にいるから手軽に取りかかれる。そうと決まれば、すぐに部隊を集めて――

「はあ、隊長もですか。先程、船団長も同じことを言っていました、個人的には冗談でもそういうことを言っただけで済みますね」

いつの間にかリーシャに聞かれていたようだ。それにしても冗談とは心外な。

「冗談なものか。これは――」

「まさか、本気で反逆を企てていた、と」

「いや、その……船団長が忙殺されるぐらい多くの実績を積んでやろうという決意みたいな」

俺が殺すのは船団長ではなく将来の帝国中将なのだ、と言っても独房送りにされるのが関の山だろう。ただ、独房ならちゃんとした食事が出るのだが……いやいや。

「それはそうと、何か用があつて来たんじゃないのか？」

「そうでした。ガロンゾ島の工房から『部隊専用の騎空艇』について問い合わせがきます」

「おお、騎空艇！ それで何だつて？」

「まず、初期のパーツを、このリストから3つまで選べるようです」

騎空艇パーツだな。そんなのは見るまでもなく決まっているのだが、正式名称を忘れたので渡されたリストを見ながら答える。

「金眼の風見鶏、ポーシヨンメーカー、出陣の銅鑼がね、以上の3つだな」

「他の2つは分かりますが、金眼の風見鶏ですか？ 私としては訓練用具の方が——」

「リーシャ」

うーん、ドロップ率アップの重要性をどう説明したものか。手始めにスレイヤーズかテイルズの話でもすれば分かってくれるだろうか。当時の絶望的な日々のことを。

「し、失礼しました、隊長。その3つですね」

なぜか突然に意見を取り下げるリーシャ。声が少し震えているが、調子でも悪いのだろうか。

「次に、騎空艇の名称を決めてほしい、とのことです」

騎空艇の名前なんて、よっぽど突飛でポップなものじゃなければ何でもいいだろう。

「リーシャはどんなのがいいと思う？」

「そうですね……秩序執行巡空独立強襲隊として、ファータ・グランデ空域やナル・グランデ空域の秩序を守っていきたいという意味を込めて……」

「意味を込めて？」

『『ジ・オーダー・グランデ』というのはどうでしょうか』

そういう露骨に被ってるのは一番駄目だろ。

エピソード2

同日午後。俺は、かつてないほどの緊張と覚悟で、その建物に足を踏み入れた。

「いらっしやうい！ ご用件はなんですか？」

そう、シエロカルテ殿のよろず屋だ。どうやら俺がアマルティアを離れている間に開店したらしい。店に気づいたのは昨日のデートの時なのだが、リーシャに聞かれたくない話になる可能性があったので入るのは止めたのだ。

「——ご入用の際は、よろず屋によろしくず！ うふふふふ……」

一通りシヨップでできることを説明しつつ、得意のダジャレを披露するシエロカルテ

殿。愛想笑いの一つでもしておいた方がいいのかもしれないが、逆に不快にさせるかもしれないので軽く流しておこう。

「ああ、そうだな。まずはトレジャー交換を頼む」

「トレジャー交換ですか。それでしたら、こちらのテーブルへどうぞ」

案内されたテーブルの上に、俺はこの3ヶ月で入手したメダリオンなどのイベントトレジャーを並べていく。任務中の拾得物ということとで回収されそうになったりもしたのだが、功績による特別ボーナスの一部または全部と相殺する形で手元に残してもらったのだ。

「ふむふむなるほど」

トレジャーを手にとって軽く確認したシエロカルテ殿は、3枚の紙を持ってきた。

「交換レートは書いてあるとおりです。決まったらお呼びください」

「ああ。それから騎空士の斡旋も頼みたいんだ。有望な人がいたら紹介してほしい」

「はいはい、お任せください」

シエロカルテ殿が資料を取りに行ったので、トレジャー交換を考えることにする。交換レートは馴染み深いものだったが、ガチャチケットが無いのが気になった。もっとも、普通の手段でガチャは回せないのも仕方ないのかもしれない。

「最優先はダマスカス骸晶だろ。あとは栄光の証の1段階目を取って……」

数分後、だいたい決まったので、シエロカルテ殿に交換してもらおう。案の定、メダリオン以外は多く余ってしまったのだがどうしようか。

「残りのトレジャーは1個5ルピでお引取りしますよ〜」

「おお、助かるよ。さすがはシエロカルテ殿だ」

「いえいえ〜。そしてこちらが有望な方たちの資料です〜」

渡された資料を1枚ずつ見ていったが、記憶にある女の子の名前は無かった。実際のところ、この手段もあまり期待していなかったのでショックは無い。

「やはり隊長さんのお眼鏡にかなう方はいませんでしたか〜」

「そうだな、だが今後も有望な人がいたら……っ！ どうして俺が隊長だと!?!」

「ちつちつち〜、商人にとつては情報が命ですから〜。先程のトレジャーを見れば、ヴェローナ、ノース・ヴァスト、それにシデロスで大活躍をされた、話題の隊長さんだって分かりますよ〜」

なるほど、騎空士幹旋の話がスムーズに進んだのは、そういう理由だったのか。だが、そういうことなら次の話もしやすくなるだろう。アビリティ習得計画その2だ。

「だったら、その情報力で仕事の仲介も頼む。部隊の騎空艇が到着するまでは待機状態で、暇を持て余しているんだ」

依頼でリーシャと森に入って魔物を倒す↓さらに魔物を倒す↓アビリティ習得、という流れだ。

「おお、それはありがとうございます。ここ最近、騎空士さんへの依頼が多いんですよ。どのような仕事をお探しでしょうか」

「とりあえず必要戦力が高そうなものを上から10件ほど見せてほしい。できれば報酬として宝晶石が貰えるものがあればいいんだが」

「宝晶石ですか。欲しがる方は珍しいですね」

シエロカルテ殿は、じつとこちらを見つめる。まるで何かを見透かそうとするかのうに。だが、俺がガチャを回せるということは、可能な限り伏せておきたい。そこで、あらかじめ考えておいた『理由』をこっそりと教えておく。

「あまり知られたくないんだが、実は『天星器』を覚醒させようと思っているんだ。俺に合う武器がなかなか見つからなくてな。できれば、このことは他言無用で頼む」

「おやおやくそれは楽しみですね。ではでは、覚醒を隠せ〜ということで。うぷぷぷ」

いいから早く仕事を紹介しろよ！



翌朝、俺達は依頼で指定された森に来ていた。

「悪いな、俺の個人的な依頼に付き合ってもらって」

「いえ、これも人助けですから。それに騎空艇の到着までにやるべきことは終わりましたし」

「そうですよ隊長!」「部隊の実戦演習にちょうどいいですよ!」「実力を(リーシャ様に)見せるいい機会です!」「俺達で良ければいつでも言ってくださいよ!」「副隊長と2人だけで、なんて遠慮は決してしないでください!」

なぜか隊員10人も一緒だ。どうしてこんなに意識が高いのだろう……やはり秩序だからか?

「おっと、魔物だ。前方の3体は俺がやる。残りは後方の1体を!」

そう指示を出して、3体の魔物を秒殺する。後ろはどうなったかと振り返ると、魔物は前衛隊員達に牽制され、後衛隊員達の一斉射撃で倒されていた。どうやら連携など問題ないようだ。俺は安心して魔物が落としたオルディネシユタイン等をリュックに放り込んだ。

その後、無事に依頼の魔物を倒した俺達は、森の中で昼休憩を取っていた。俺は隊員達のまともな食事を羨ましく思いつつ、さつき拾ったばかりの『青い果実』を口に運ぶ。

これはエリクシールハーフと交換可能なトレジャーであり、つまりは原料でもあるのだらう。だから騎空士の食事としては、それなりに普通であると言えるのだ。

「隊長の食事はそれだけですか？」

「ああ、リーシャ。……グラシーザー（抱き枕）を買ったから、しばらくは節約しないとな。それに、こう見えて意外と美味しいんだ」

「しかし、それでは栄養が偏ってしまいます。その、良ければ、私の手作りですが半分――」

「隊長、俺の唐揚げを1つ受け取ってください！」「俺のメンチカツも食べてください！」「このパンを！」「卵焼きも！」「タコ！」「隊長！」「隊長！」「隊長！」「隊長！」「隊長――」

あつという間に、1人分の食事と言えるぐらいの量が集まった。どうやら俺は素晴らしい隊員達に恵まれたようだ。いずれ女の子と入れ替えたいか思っただけが悪かったな。

「ふふつ、皆さん献身的ですね。私からも1つどうぞぞ」

リーシャの手作りサイコロステーキ！ ああ、生きてて良かった。神様カグヤ様シエロカルテ様ありがとうございます。これであと10年は戦える。

「よし！ 午後の依頼も頑張るぞ！」

そんなわけで急いで食事を終わらせて力強く宣言したのだが、隊員達の反応は芳しく

ない。

「えつと、隊長。今から俺達、森を出るんじや……」

「いや、これから東に進んで泉の近くにいたる魔物を倒すだろ。それから更に東に行くトロールの変異種が目撃された地点だから調査して、場合によっては倒すだろ。それで時間に余裕があつたら、もつと東に行った川でカニを倒して、森を抜けるのはそれからだ。これで合つてるよな、リーシャ」

「ええ、そのルートが最も無駄なく残りの依頼を片付けられます」

「というわけだ。ただ、戦力としては俺とリーシャで十分だし、消耗が大きいなら引き返——」

「いいえ、俺達まだまだやれますー」「余裕つすよー」「ここで帰るは秩序の名折れー」  
そんなわけで引き続き全員で依頼続行となった。

その後、途中で脱落者が出そうになったりもしたのだが——

「お前、こんなところで立ち止まっていいのか！ 秩序の道を歩いていくんじやなかったのか！ 将来、あいつが墓穴を掘ったとき『有罪』って言つてやると誓つただろうー！」

「そうだな……こんなことじゃ、あの人に笑われちゃう」

——隊員同士で励まし合ったりして進行は続いた。とりあえず俺は青い果実を勧めておいた。

そして夕暮れ時、とうとう俺はアビリティ習得を実感した。

「我が剣に勝利を！」（エアリーフェザーが発動！）

「よし、やるぜ！」「いくぞ！」「うおおおお！」「やってやる！」「イエー！」

それは間違いなく『味方全体の攻撃力をアップする』というリーシャの3アビだった。どうやら今回は俺の習得イベントではなかったようだ、残念。

ただ、依頼の報酬でルピに余裕ができたので、とりあえずは良しとしておく。

#### エピソード4

騎空艇『ピースメーカー』——調停者を意味する、秩序執行巡空独立強襲隊の専用艇だ。

リーシャの案を蹴るために似たような名前を考えることにしたのだが、面倒だったの下ドラゴンから流用させてもらったのだ。これぐらいなら偶然で済む範囲だろう。

「良い艇ですね、隊長」

「ああ、そうだな」

係留中の甲板にてリーシャに同意する。騎空艇なんて、この世界に来るまで見たことは無いし、速そうな外見をしているとしか思わなかったのだが、リーシャが言うなら良い艇に違いない。そして、俺は以前から考えていたことを提案する。

「この騎空艇の艇長はリーシャに任せようと思ってるんだが、どうだろう」

「えっ……私に、ですか？　しかし隊長が艇長を兼ねるのが一般的だと思うのですが」

これ以上、仕事が増えるのは面倒なんだ、とは言えるわけがない。

「例えば、天空の大星晶獣に騎空艇で突撃する状況を想定してほしい」

「なにそれこわい」

近くにいた隊員の眩きが聞こえたが無視して話を続ける。

「その時、俺は舳先に立って剣を構えてるだろう。そして、そんな中で隊員や乗員を気にする余裕は無いと思う。だから『総員、衝撃に備えろ！』みたいな指示はリーシャに頼みたくて、そのために普段から慣れておいてほしいんだ」

「なるほど……いえ、星晶獣に突撃する想定はどうかと思いますが、備えておくという考えは理解できました。それでも私には——」

「副隊長ならできません！」「俺もそう思います！」「艇長になってください！」「俺たち付いていきます！」「リーシャ副隊長、いやキャプテン・リーシャ！」「キャプテン・リーシャ！」「キャプテン・リーシャ！」「キャプテン・リーシャ！」「キャプテン・リーシャ！」「キャプテン・リーシャ！」「キャプテン・リーシャ」

！」「キャプテン・リーシャ！」

急に集まってきた隊員達に励まされ、自信の無い様子だったリーシャは力強く頷く。

「ありがとうございます。私が皆さんを守ります！」

「頼んだぞ、キャプテン・リーシャ」

よし、これで移動中は囑託団員の女の子と存分にいちやいちゃできる!!

そして、リーシャは各所の点検や受領書へのサインなど艇長として駆け回り、今も発着所で係員と話している。この後は、各種の確認のためアマルティアの周りを飛ぶという話だったか。それが終わったらどの島に行こうかな……。などと考えていると、1人の男がリーシャに駆け寄り何かを話して、そのまま本部の方に走っていくのが見えた。

「緊急事態です、隊長！ バルツ公国で魔物が大量発生したと報告がありました！」

やってきたリーシャの言葉に嫌な予感を覚える。それってデイフエンドオーダーじゃないのか。だとしたら絶対に行きたくないし聞かなかったことにしたいんだが。

「魔物を見たことのない姿で、『ウンモゲエエーツ!!』と叫んでいるとか」

ああ壊獣か。ロボミイベントだ、良かった。でも、参加する意味もあんまり無いし、今回は戦力増強の方を優先したい。

「でも、とりあえずシヨチトル島に行こうぜ」

「この状況で何を馬鹿なことを言ってるんですか！　そもそも、隊長は入島が禁止されて……はっ！　こんな状況だからこそ、冷静な対応が求められます。それを私に気付かせるために……」

えっ、まあそういうことでもいいだろう。リーシャがこの調子だと強制参加だろうしな。

「ああ。未知の魔物ということなら防衛を重視したい。発着所の騎空団倉庫から大盾を積み込むよう指示を。上には事後報告で構わない」

「了解しました、隊長」

壊獣が相手なら普通の攻撃は通じない。倒すのはロボミに任せて、部隊には街の防衛を。そして俺はアリーザを口説くことにしよう。アリーザは大きいからな。

数分後、俺が強さアピールの方法を考えている間に、発進準備が終わったようだ。

「リーシャ、号令を」

「はい、隊長。……ピースメーカー、抜錨！」

リーシャの秩序がバルツを救うと信じて……！　第1部完！

## Extra ある日のリーシャ

## プロローグ

その日、リーシャは久しぶりの休日をアマルティア島の自室で迎えた。秩序執行巡空独立強襲隊は、基本的に隊長の気まぐれで運用されるため不定休なのだが、古戦場で戦った後だけは数日の休みが取られることが多い。なにしろ一週間もの連日連戦である。隊員達は普通の人間なので、十分に疲労を回復させる必要があるのだ。

さて、そんなブラック部隊の副隊長リーシャだが、日課の早朝鍛錬、掃除や洗濯、そして少し早めの昼食を終えて、ある問題に悩まされていた。

「午後からは何をしようかな……」

何かしていいないと落ち着かない彼女にとっては重要な問題である。こんなことなら手間のかかる料理にでも挑戦すれば良かったと、少し後悔するがもう遅い。

「本部に顔を出して、各国の情勢の確認、それと隊室の掃除をして……武器倉庫も整理したいけど、隊長に文句を言われるし……」

それでもどうにか予定を立てると、手早く身支度を整える。隊室は隊員達が全力で清潔を保っているため掃除しがいには無いが、しばらく使っていないので換気やはたき掃除



ぐらいはできる。そう意気込んで外に出たリーシャの目の前で、一人の少女がふらふらと倒れた。

「バーギューー」

はたして少女の正体とは……！

エピソード1

空腹で倒れた着物の少女ミリンを、リーシャは自宅に招き入れると、簡易ではあるが食事を提供した。ここで注意するべきは少女の名前である。ミリンは調味料の「みりん」と同じように発音するのだ。

「助かりました。拙者、この島には秩序の騎空団や裁きの門を見にきたのですが、旅費を節約しようと……」

「もしかして食事を抜いたのですか！」

「いやー……」

「いいですか、規則正しい食事とは秩序的な生活を送る上で不可欠なものであり——」

急な大声に驚くミリンに対して、食事の重要性を説くリーシャ。それはミリンを心から心配してのことだったが、秩序を布教したいという気持ちも2割ほどあった。そして、まだ旅慣れてないミリンとしても、これを機に食事は欠かさないようになる。

「ありがとうございます、リーシャさん。食事ばかりでなく、拙者のために話まで……このご恩は決して忘れません。いつか必ずお返しします！」

「いえ、私は当たり前のことをしただけですから」

「でも……」

「それでしたらミリンさんの話を聞かせてください。遠くの国から来られたんですよ」

「ござる。拙者の故郷は遙か東の島で、そこには侍文化というものが——」

そしてミリンは食後の牛乳を飲みつつ様々な話をした。故郷のこと、侍文化のこと、両親のこと、異国浪漫への憧れ、などなど。守畏禍割りの儀式の話や、振袖の際は下着を着けないという話も出たほどだ。

「ところで、さつきから気になっていたのですが、あの棚にある簪は……」

「ああ、あれですか。えっと、その、2本とも貰い物なのですが着ける機会が無いので、ああやって飾ってあるんですよ」

「なんと！もしかして男の人からですか？」

「ええ、そうですが……」

途端にミリンは目を輝かせて身を乗り出す。そう、彼女は恋に興味津津なのだ。

「リーシャさんほどの素敵な女性なら納得です！きつと素晴らしい恋人なのでしょう」

ね」

「いえつ、彼とはそんな関係じゃありません。ただの同僚というだけですから」

「でも、簪を贈るほどですから、もしかすると真剣に将来のことまで考えているのかも

……」

「一体どういうことですか？」

ミリンは適当な紙に何かを書いた。

「父上から教わったのですが、故郷には『女性が簪を3本挿している姿』からできた字があります」

「もしかして、その字がそうなのですか？」

「はい、これは——」

リーシャの方に向けられたその紙には『妻』という漢字が書かれていた。そして、そのことから由来して3本目の簪を贈るときにプロポーズする風習があるというのだ。

エピソード2

「えつ、あつ、プロ、結婚なんて、そんなつ」

リーシャは混乱した。何気なく受け取った簪に、そんな重大な意味があった（仮）のだから。

「落ち着いてください、リーシャさん」

「え、ええ。おそらくこれは偶然でしょうし」

そう、これは偶然なのだ。食費を削つてまで武器を購入するような武器蒐集家の男が、敢えて高級な簪を自分に贈つたからといって、そこに特別な意味など無いに決まっている。リーシャは必死で自分に言い聞かせるが、あまり効果は無い。

「えつと、その同僚さんは簪を渡すときに何か言つてましたか？」

「そうですね……確か、わ、私には着物が似合う、と」

「なるほど。故郷では花嫁衣装は着物なので、やっぱりそういうことです！ 神前式つて言つて神社で行うんですよ」

「着物で神社に!？」

神社と言われてリーシャが思い出すのは、3回ほど行つたことのある羊神宮のことだ。開帳されていない神社にも関わらず隊長はあちこちを見回つていて、そのときは何をしに来たのか疑問に思つただけだった。

「それは間違いなく結婚式の下見ですね」

そのことを聞いたミリンは迷わず断言した。

「それに羊神宮を選んだのも、リーシャさんに気を使つてのことだと思つてます」

「えっ」

「だってほら羊神宮って羊ですよね? 『ひつじ』と『ちつじよ』って響きが似てますし」  
「……やはり偶然です。ただ、そんなふざけた理由で羊神宮を選んだとすれば彼らしいですが」

その言葉にミリンは疑問を覚える。仮にも秩序の騎空団員なのだから真面目で誠実な人だと想像していたのに、ふざけた理由が『らしい』とはどういうことか、と。

「そういえば、その同僚さんってどのような方なのでしょうか」

「不真面目な無秩序者です」

「!!」

リーシャは存分に語った。入団試験の際の無礼な態度、女の子を泣かせた事案、星晶獣に利用されるほどの欲望、公爵邸への不法侵入、部隊経費の横領未遂、など3年間溜めこんだものを吐き出すかのように盛大に愚痴った。秩序の騎空団と無関係な知り合ったばかりの相手だからこそ、気を使わず話せることもあるのだ。一方、ミリンは少し引いていた。

「そんなに卑怯で無礼な浮気者がいるなんて……」

「いえ、その、少し言い過ぎてしまった部分もあるかもしれませんが」

リーシャは慌ててフオローする。愚痴の内容は全て事実であるが、それだけが彼ではないのだ。

「ともかく、その簪を持つていることで、その同僚に勘違いされても困りますよね。拙者の奥義、十文字スラツシユで2本とも木っ端微塵に——」

「大丈夫、大丈夫ですから。……彼は、私のために命がけで戦ってくれたんです。あの時は彼の強さに勇気を貰いました」

「……」

「それに彼は、私を普通の女の子として見てくれるんです。皆は私の後ろに偉大な父を見て、それで『父の娘』として扱われてきました。でも、彼の前でだけは『ただのリーシャ』でいられる気がするんです。彼にとっては碧の騎士すら『リーシャの父親』ではないのかも……いえ、そんなはずは無いのですが」

「……」

「それから、意外と部下に慕われているんです。先日も重要な書類を紛失していたのですが、彼らは指示されなくても探すのを手伝っていました。きっと私が気づけない魅力があるのでしょうかね」

「……何となく分かりました」

ミリンは故郷の母親を思い出していた。民俗学に熱中するあまり他のことが疎かになつてしまう父親への文句ばかり言っていたが、そこには確かな愛情があつたのだ。だから、もし『同僚さん』がプロポーズしようとしているのなら、恩人のリーシャには目

を逸らさず受け止めてもらって、できれば両親のようになってほしい。それこそが自分でできる恩返しであり、隠し味『みりん』の名に相応しい役割なのだ。

### エピソード3

「では、簪を贈られた日はいつですか？　もしかすると、そこにも意味があるかもしれない」

「えっと、たしか3年前と1年半前だったと思います。日付は——」

「ミリンは、一瞬で日付が出たことで確信を深めるが、残念ながら日付に心当たりは無い。」

「誕生日も、出会った日も関係なさそうですね。拙者の考えすぎだったのでしょうか」

「そうですね、出会った日から1ヶ月ではなく28日目なので……『28』!？」

「ど、どうしたんですか？」

「出会った日から28日目と496日目……どちらも完全数です」

「かんぜんすう？」

「完全数は、自分の数以外の約数の和と等しくなる秩序的な数字……私に勇気を与えてくれます」

「よく分かりませんが、やっぱり法則があったんですね。それで、496の次の完全数は

「？」

「8128です」

「はっせ……いくら何でもそれは待たせすぎじゃないですか！」

本日から約20年後である。いくらリーシャが21才の時点で年齢が止まる世界観だとしても、ありえない数字だった。

「もつと手近なところに同じような数は無いんですか。いつそ今日とか！」

「今日は1050日目なので……あつ……こ、婚約数というのがあります」

「バカやる!」

「で、ですが、婚約数は2つで1組。もう片方の1925を無視するのは秩序的ではありませんよ」

「単純に、1050〜1925日目を婚約期間としたいということで、それはつまり結――」

「ストップ!」

もはやリーシャの中にも反論する気持ちは残っていないかった。完全数を意識したプレゼントなんて、偶然に起こるはずはないのだ。適当に渡されていた簪だが、実は彼なりに決意があつたに違いない。きつと肝心なところでは酷く不器用で臆病なのだろう。

「さて、そろそろ拙者はおいとまします。あとはリーシャさん達の問題ですから。ああ、



安心してください、今日のことは誰にも話しません。女同士の秘密です」

ミリンは満足気な顔で立ち上がる。これ以上いると2人の邪魔になるかもしれないのだ。

「最後に1つ聞かせてください。侍文化では、抱き枕を買ったら武器が付くんですか？」  
「は？」

#### エピソード4

「結婚式には呼んでくだされー！」

そう言いつつ、裁きの門の方へ歩いていくミリンを見送った後、リーシャは1人考える。もし今日中に簪を贈られたなら、覚悟を決めて向き合わなければならぬ。彼の気持ちと、それから自分の気持ちに。いつまでも見て見ぬ振りをするなんて、そんな不誠実なことではできない。それでも、今の適度な関係が終わってしまうのは明白で……。

「少しだけ、寂しいのかもしれませんが」

だから今から街に行こう。おそらく彼は、武器屋や商店を回っては軽く迷惑をかけているに違いない。そして、それを止められるのは自分しかないのだから。

「ふふっ」

自然と笑みがこぼれる。今日は刺激的な休日になりそうだ。

遠くの方で、ソシエーと嘆く声がした。その日、3度目の偶然に対してリーシャは……。

エピソード

1週間後。

「なあ、今日も隊長が無視されてるぜ」

「リーシャ様の表情から『空回っていた自分がかく恥ずかしい』と推察できなくもないが」

「深読みしすぎだつて。どうせ隊長が怒らせただけだろ？」

「だな。そして隊長を無視しながらも、滞りなく部隊を運用できているリーシャ様は流石だ」

## 第10話 俺の転生ハーレム計画はどこか間違っている

エピソード1

騎空艇ピースメーカー、隊長の私室にて。

「隊長ちゃん、隊長ちゃん！ お姉さんが起こしにきたよ！」

枕元でナルメアお姉ちゃんの声がする。

「……あと1時間」

「もう、お寝坊さんなんだから。お姉さんがお手伝いしてあげよっか？」

「……」

俺は返事代わりに、声の方へ手を伸ばす。すると、その手を柔らかい手が握って、そのまま引つ張られる。同時に背中の下に差し込まれた腕が、俺の上半身を優しく持ち上げる。ベッドの横側に座る体勢になった俺は、ようやく目を開けた。目の前にいるナルメアお姉ちゃんはマジ天使だった。

「おはよー」

「おはよう、隊長ちゃん！」

今日も最高の目覚めだ。

俺のベッドで眠ったままのアンチラを軽く撫でた後、俺達は食堂に向かった。なお、アンチラの主な仕事は俺の抱き枕なので、起きなくても全く問題ない。

「朝食は何だろうな」

「今日の当番はヤイアちゃんだから、たぶん——」

食堂に入った俺達を元気な声が迎える。

「お兄ちゃん、おはよう！ もうすぐチャーはんでできるからね！」

「おはよう、ヤイアのチャーハンは美味しいから楽しみだな」

朝からチャーハンは少し厳しいのだが、一生懸命料理してくれているヤイアに一体誰が文句を言えようか。俺は漂ってきたチャーハンの匂いで期待感を高めていく。

「隊長殿、私の隣に座るのじゃ」

ぼーっと立ち止まっていた俺に声がかかる。十二神将の一人、大きくて可愛くて強いアニラだ。

「まだ寝ぼけ眼のようじゃのう。どれ、今日は我が『あーん』してやるとしよう。なに遠慮はいらぬ、隊長殿を助けるのも私の役目ゆえ」

「ちよっと待って！ 隊長ちゃんに『あくん』してあげるの私なんだから！」

「そなたは昨日もしておったではないか」

席に着いた俺を挟んで言い争う2人のドラフ。俺の両腕に押し付けられる柔らかい感触。間違いない、ここは天国だ。

「大丈夫だ、俺が2人分食べればいい」

だから調子に乗って、そんなことを言ってしまった。朝からチャーハン2人分か……。まあ、今日も激しく『運動』するから問題ないだろう。

「ジーン」

我関せずと向かいの席にいたジオラが、待ちきれない様子で呟いた。

朝食後、俺は今日の予定を考えることにした。というか満腹なので、しばらく動けないのだ。

「島に到着するのは明日だったな。それなら今日は……」

「隊長、あたしの修行に付きあってよ！」

いきなり話しかけてきたのはアリーザだ。足技を得意とする彼女との修行は得るもの大きい。具体的には蹴りのたびに白いパンツがチラチラと見えるのだ。さらに正面からだとも口に見えて色々やバイ。パンツでない疑惑もあるのだが、そんなことを確かめても誰も幸せになれないので、俺はパンツだと信じて見守っていきたいと思って

いる。

「隊長はん、うちの舞を見てくれへんかな……」

続いてソシエにも誘われる。エルーンらしく露出が高い彼女の演舞を見るのもいい。普段から脚とか背中とか脇腹とか完全に出ているのに、舞だと脇や内腿まで見えたりする。さらに尻尾も俺を誘惑するように揺れて色々とヤバイ。でも、そろそろ『九尾様』つて言わないスキンが欲しい。もちろん最終上限解放だったら大歓迎だ。

「けんぞくうは、ヴァンパイちゃんと遊んでくれるよねー」

ヴァンパイちゃん！ 隙あらば、かぶつと吸血して俺を眷属にしようとしてくるが、失敗したときに『お仕置き』するようになってからはWin-Winの関係になっていく。涙目で上目遣いのヴァンパイちゃんは色々とヤバイ。そして、眷属になってもいいかもしれないと思いつつある俺は手遅れな気がする。

「隊長さん、よかつたらゼエン教について学びませんか？」

ソフィアとの間にも取り決めが1つある。それは『ゼエン教の話をするときは膝枕してくれる』というものだ。スカートが極端に短いため太股が直に顔に当たって、さらには良い匂いもして色々とヤバイ。ゼエンの話なんて、ぜんぜん聞こえないほどだ。

「隊長、私の旋律を貴方の心に響かせたいわ」

つるぺた枠で採用された二才だ。ハーヴィンなので何からナニまで小さい。にも関

わらずどんなことをしても合法なので色々イヤバイ。リーシャが湧いてこないのがセーフなのは間違いないが。

「たいちよ……あそお……」

ダヌアは無防備&無知なところがいい。おままごととかお医者さんごっこかしたい。とりあえず色々イヤバイ。

「ゴはん」

食べたばかりだろ、ジオラ。

そして隣にいるナルメアやアニラ、さらにヤイアと、ようやく起きてきたアンチラまで参戦して食堂は一気に騒がしくなる。さて、どう收拾したものか……。なおモブ隊員達は離れた第2食堂にいるので問題ない。

「いい加減にしてくださいー」

そう、こんなときは頼りになる副隊長リーシャの出番だ。

「囑託とはいえ皆さんは秩序の騎空団員なのですから、もつと秩序的な言動を心がけてください。本日の予定ですが、全員の希望を考慮して私の方で調整してみました。この通りに行動すれば不公平は無いはずです」

そう言いつつリーシャは紙を掲げる。確かに移動時間やバランスや順番まで考えられているようだったが、そのハードスケジュールで俺の体力は持つのだろうか。

「待つて！ その予定表には午後しか書かれてないけど、午前中は何をするの？」  
その鋭い指摘に対してリーシャは……目を逸らした。

「えつと……ここ、今後の部隊の方針について私と打ち合わせをしたり、ですね」

誰が見ても明白な嘘だった。汗を舐める必要も無いほどだ。でも俺は舐めたい。

「わ、私だつて隊長と一緒に過ごしたいんです！ この予定でいいですよ、隊長！」

「隊長ちゃん」「隊長殿」「隊長！」「隊長はん」「けんぞくう」「隊長さん」「隊長」「たいちよ……」「お兄ちゃん」「たいちよう」「ぶ」はん」

やれやれ、ハーレム王つてのも楽じゃないな。そしてハーレム要員に囲まれた俺は――

「隊長！ 隊長！」

ドンドンと激しいノックの音に目を覚ました。部屋の外からリーシャの大声が聞こえる。

「ああ、起きた。起きたから」

返事をするのとドアは開けられ、険しい顔のリーシャと目が合った。

『古戦場では朝から活動する』と決定したのは隊長です。疲れているのかもしれないが自分で言ったことは守ってください」



「ごめんなさい、反省してます」

「隊員達は所定の配置につきました。隊長も10分以内に来てください」

「はっ」

必要な連絡だけ済ませると、リーシャはドアを閉めて去っていった。それにしても今日の夢は最高だったな。あれこそ俺の理想のハーレムというものだ。しかし現実は厳しく、いまだに俺のハーレム要員は1人もいない。

着替えを終えた俺は、ベッドで横たわる『グラシーザー抱き枕』を軽く殴ってストレスを発散させると、急いで部屋を飛び出した。

「今日も戦貨を稼ぐぞ！ 待つてろよ、二オ！」

## エピソード2

騎空艇ピースメーカー、隊員用の第2食堂にて。

「古戦場お疲れさまでした。乾杯！」

『乾杯！』

「それにしても、すっかり慣れてしまったな。星晶獣との戦闘も」

「ですね。戦力さえ十分に整っていれば、余裕を持って倒せると実感できましたから」

「交渉班が別の騎空団との協力体制を整えてくれたおかげで、戦闘班も動きやすかった

ぜ」

「いえ、実際に戦闘した皆さんの活躍あってこそですよ。こちらは最初にリーシャ様が出向いてくださったおかげで、無理なく交渉できましたし」

「いいや、こつちだつてリーシャ様の指揮が無かつたら、満足に貢献できなかったろう」  
「流石はリーシャ様ですね」

「まったくだ」

「ちなみに交代で半分以上は休憩してた俺達と違って、隊長は朝から夜まで戦っていたんだが」

「うわあ……」

「夜になって僕が弱音を吐いてしまったんですよ。『もう腕が上がりません』と」

「それで隊長の返事はこうだ。『そうか、じゃあ蹴れ』」

「うげえ……」

「改めて誓おう！ 将来、隊長が墓穴を掘ったとき、絶対に『有罪』って言ってやるんだ  
！」

『おー！』

「だいたい、あの隊長は初めからおかしかったんだ」

「部隊が自由に動けるようになって最初の命令が『カジノに行くぞ』だもんな」

「あの時は俺たちも抗議したんだが、それが間違いだった」

「ええ。『1人でも俺より稼げたら言うことを聞いてやる』なんて言葉に踊らされて」

「そうさ、すっかり心を折られちゃった。なんであんな作業的にギャンブルできるんだ

！」

「その後は『アナトを試す』とか言って星晶獣ウオフマナフに挑んだんだっただか」

「あの時ばかりは隊長を見直したな。『ただのウオフマナフに負けるかよ！』って」

「しかし戦闘直後に再挑戦したときは正気を疑いました」

「『とりあえず銃か石を落とすまで続けるから』って何だよ！ 結局その銃を撃つてると

ころだつて一度も見てねえよ！」

「だが、今になって思う。それも終わりがあつただけマシだった、と」

「エンジェル・ヘイロー……」

「あれって『まだまだ先は長いな』って言つてたらしいけど本当？」

「うむ」

『……』

「俺としては朱雀との戦闘が嫌だったな」

「そうですか？ 定期的に拠点で補給できましたし、比較的楽だったと思うのですが」

「いや、それがさ、朱雀に大技を使われるたびに隊長が『朱雀死ぬなの』って言つてたん

だぜ」

「それはキツイ……」

「そ、そういえば少し前まで帝国兵を倒して回ってましたよね」

「ああ、目撃情報があればどこにでも行って、駐屯地に突っこんだりもしていたな」

「あれは秩序の維持に大きく貢献できていた気がします。現地政権との折衝が少し大変でしたが」

「でも、しきりに隊長が呟いていた『シヨテル……シヨテル……』って何だったんだろう」

「さあな。気にしても仕方ないだろ」

「ところで今週も『グリフォン狩り』をやるんだろうか」

「たぶんやるだろ。部隊の設立から、ずーっとだし」

「最初のうちは俺達のための訓練かとも思ったんだけどな」

「違いましたね。僕たちがグリフォンを誘導して隊長が倒す、ただその繰り返しです」

「一応は魔物退治だし、人々のためになっっているのは間違いないが、そろそろ絶滅しそうだ」

「どうせグリフォンに弁当を奪われたとかその程度の理由だろ」

「こうして、上司の愚痴などによって初期隊員10人と新隊員10人は親睦を深めていった。」

「皆、明日からも頑張ろう。すべては——」

『リーシャ様と秩序のために！』

団の精鋭から選ばれた新隊員達だが、当然10人ともリーシャ非公式ファンクラブの会員である。

### エピソード3

いつものように、俺はよろず屋に来ていた。エインガナ島にある店で、事前連絡などしていないにも関わらず、当然のように応対するのは店の主であるシエロカルテ殿だ。

「ティアマトのアニマと、嵐竜の琥珀眼と、えつと……とりあえず先月と同じものを貰おうかな」

「はいはい、そう言われると思って準備しておきました」

俺は、天星器の覚醒に必要なトレジャーを集めるために「武勲の輝き」を使用することにした。そもそも、原作が始まらないとティアマト等とは戦闘できず、普通にアニマを入手することができないのだ。原作主人公に先を越されないために、今のうちから地道に交換していくしかない。

だが、そんなティアマトのアニマを、シエロカルテ殿は一体どこから……。

「なにか気になることでもありましたか？」

「ひいっ！ ひ、品質に問題は無いみたいだ。うん」

「それは良かったです。そうそう、お探しの武器が見つかりましたよ」

「おお、さすがはシエロカルテ殿だ」

俺は、天石器の覚醒に必要な「シャドウワンド」の入手も、シエロカルテ殿に依頼していた。この杖が入手できる「霧に包まれた島」にも、原作が進まないと入れないのだ。しかし、かつて出入りできていた頃に持ち出されたものがあるかと思っただが、どうやら予想は正しかったようだ。

「しかしですね、なかなか珍しい武器だけにお値段の方が」

「いくらなんだ？」

「3万ルピですね」

たかがレア武器に3万ルピも……！　だがこれも二オのため。二オを抱っこするためなら！

「……領収書をくれるか？」

でも、とりあえず経費で落とせないかりーシャに頼んでみよう。ともあれ、これで必要な武器は全部揃ったな。天石器の覚醒まで、あと一息だ。

「それとですね、『例のもの』も集めておきましたので」

「ああ、ありがとう。これさえあれば……」

俺は買い物を終えると店を出た。よし、武勲のために明日もグリフォン討伐するぞ！

#### エピソード4

よろず屋からの帰り道。ふと街から出て平原を歩いていた俺は、空間の歪みを見つけた。

「これは、星晶獣の仕業か！」

とりあえず、こう言っておけば大丈夫だろう。不思議な現象が発生したら、大抵は星晶獣が原因なのである。そして最終的には物理で殴って解決するのだ。

「とはいえ周囲に星晶獣らしき姿は無いし、どうしたものか……」

歪みは、だんだんと大きくなっていき、どこかの部屋らしき光景が映し出される。不鮮明ではあるが、多くの鏡が並んでいるその部屋はテレビ局にある楽屋のようだ。その部屋のドアが開き、1人の少女が入ってきた。

『プロデューサーさん、テレビ出演ですよ、テレビ出演！』

間違いない、コラボーイベントだ！ この後はアイドルがグラブルの世界にやってき

て、なぜかアイドルなのに戦う力を持ってて、協力して原因を探って、解決して元の世界に帰る流れになるはずだ。それを、どうにか妨害すれば、元の世界に戻れずに定住してくれるだろう。うまくやれば俺と同居する流れにもできる！ ハーレム王への道はこんなところにもあつたんだ！

『喉が渴いたわ。オレンジジュースを買ってきなさい』

うん、2人目もいいチョイスだ。やつぱりハーレムにはツンデレキャラもないとな。おつ、よく見えないけど部屋の外にもう1人いるようだ。ここまでキュート(普)とパッション(貧)だから、3人目はバランス的にクール(巨)だな。お姉さん来い！お姉さん来い！

『歌以外の仕事なんて——』

くっ！

気を取り直していこう。空間の歪みは人が通れるぐらいになっている。アイドルたちの姿もはつきり見えるようになってきた。

「さあ、楽しいコラボの始まりだ！」

その時、俺を探していたであろうリーシャが、限界を超えた速度でやってきた。

「秩序の騎空団の権限において秩序を執行します。秩序閃!!」



リーシヤの剣から放たれた光は、空間の歪みを跡形も無く消し去った。

「……………え？」

「秩序の乱れを感じたので、この辺りを秩序的にしました。いったい何があつたんですか？」

「なんてことをしたんだ、リーシヤ！ もう少して帰る場所の無くなった少女達と、ドキドキ同居生活が始まるかもしれないなかつたのに！」

「……………詳しく説明してください。いいですね」

こうして俺はリーシヤに怒られる羽目になったのだ。おのれ星晶獣。

# 第11話 隊長がリーシヤ陵辱ものの絵物語隠し持ってた

エピソード1

俺の部屋で絵物語を見つけたリーシヤが、かつてないほど怖い顔をしている。

「誤解だから！ 誤解だから！」

このままではリーシヤに殺されてしまう。俺はぶるぶると震えながらも言い訳を試みた。

「早とちりはやめてくれ。誤解なんだ」

「そうなんですか……？」

「ああ」

「では、この絵物語を一体どうして持っていたんでしょうか」

「それは……あつ、ガ、ガンダルヴァの奴が勝手に置いていった。もちろん俺は要らないって言ったんだけど。それで、仕方ないからすぐに捨てよう——」

リーシヤは無言で腰の剣に手をかけた。

「ごめんなさい、俺が買いました」

「そうですか」

まさか自室で戦闘するなんて思っていなかったもので、武器は10本とも外れている。それでも緊急事態に備えて、数秒もあれば最低限の武器を装備できる状態になってはいるのだが……今のリーシャを相手にそんな猶予は無い。

「隊長がこんなものを……」

リーシャは絵物語を見つめる。表紙には、虚ろな目をしたリーシャ(若干バスト増量)が描かれており、『リーシャ陵辱く屈辱に塗れた秩序く』のタイトルもある。他人の空似と言つて誤魔化すのは無理だろう。必死で言い訳を考える俺だったが、一方でリーシャは表紙をめくつて内容の確認を始めた。

「こんな大勢で……酷い……」

読み進めるリーシャの顔が赤くなつていく。純粋な彼女には刺激が強すぎるのだろう。

「……いきなり引き裂くなんて! そんなつ、生で……。ぬ、抜く……? 白い……中につ! 嫌……べたべたして……。ああ、かけられてる……」

小声でブツブツと呟くりーシャが心配になつたので、呼びかけてみる。

「リーシャ、あの……」

「どうしてこんなものを読んだりするんですか!」

「いや、その、リーシャに怒られた時とかに、ストレスを解消しようとするね……」  
「……そうでしたか」

リーシャは後ろを向くと、感情を押し殺したような平坦な声で答えた。そのままドアの方へ歩いていくと、内側から鍵をかけた。ガチャンという音が妙に大きく響く。

「リーシャ？」

「隊長は動かないでください」

リーシャは俺の方を見ないまま、明かりを消して窓を完全に閉めた。部屋は暗闇に包まれ、何も見えなくなる。いったい何がしたいのだろう。……はっ、ま、まさか『こんな絵物語ではなく、私の身体でストレス解消してください』みたいな展開が！ いや、リーシャに限ってそれは無いだろう。でも相当ショックみたいだったし、勢いでそういうことをしても不思議ではないな。

「私は毎朝この制服を身に着けるたびに、『秩序の騎空団の一員として相応しい言動をしよう』と思ってきました。ですが今だけは……」

相変わらず声からは何の感情も読み取れない。そして衣擦れの音と、床にトサツと何かが落ちる音がした。なるほど、秩序の騎空団員としては怒ったりもしたけど、個人としては俺と関係性を深めたかったと、そういうことなんだなリーシャ！

「今だけは、秩序の騎空団員ではない『ただのリーシャ』として……」

「ああ、この胸に飛び込んで——」

「貴方を殴るっ！」

ドゴー!

リーシャの渾身の右ストレートが、無防備な俺の胸にクリティカルヒットした。死ぬほど痛い。ちよつと待ってくれ、話が違うじゃないか。理不尽な暴力ヒロインは総じて不人気なんだぞー!

「他人の本の帯を引きちぎるな！」

ゴガッ! 部屋の壁でバウンドした俺をアッパーで拾う。

「しゃぶしゃぶのお肉をもつとお湯にくぐらせるオー！」

ベキッ! 左フック。左に倒れそうになる。

「焼き鳥を串から抜く時は先に一言断れええ！」

ドガッ! すかさず右フック。元に戻る。

「タバコの白い煙を食事中に吐くなああ!!」

ガスッ! ボディに1発。

「油でべたついた手で本に触るなあああ!!」

ドスッ! 続けてボディに1発。たまらず膝をつく。

「からあげに、レモンを、勝手にかけるなあああ!!」

ズドンッ！ 限界を超えた威力の拳を顔面に受けて、俺は崩れ落ちた。

「はあ……はあ……お互いに今日のごことは忘れましょう」

怒りが静まったのか落ちて着いた様子のリーシャに対して、俺は痛みのもせいで返事をすることすらできなかった。大ダメージに薄れゆく意識。だが、反対に目は暗闇に慣れてきたようだ。最後の力でリーシャの方に目を向けると、まだ制服を着てはおらず下着姿がはつきりと見えた。

白!!

ああ、俺はこの光景を一生忘れないだろう……。

数十分後、開いたままのドアを不審に思った団員によって、傷だらけで倒れている隊長と床に散らばった大量の紙切れが発見された。

秩序執行巡空独立強襲隊↓隊長入院につき、退院まで活動停止。

同隊長↓アビリティ3を習得。

エピソード2

『リーシャ陵辱く屈辱に塗れた秩序く』より抜粋。

「コミユニケーションを円滑にするため、ホームパーティーに隊員達を招くリーシャ。だが、それは彼らの巧妙な罠だった。

「前からこの本に興味あつたんだよ。読ませてもらいますね、副隊長。でも帯が邪魔だな」

「ああつ、乱暴に破られて……」

「へへつ、待ちきれねえぜ。もう食つてやる！」

「まだ部分的に生なのに……」

「おおつと、この焼き鳥を小分けにしとくぜ」

「耐えなきや。今は雰囲気が悪くしないように……」

「ふう、ちよつと一服しようか」

「秩序は決して負けない……」

「おい、読み終わったなら本を回せ。次は俺の番だ」

「そんな汚れた手で触らないで……」

「遅れて悪かったな。お前らの好きなからあげを持ってきたぞ。レモン汁プシャアアア」

「さつすが、隊長様は話がわかるッ！」

「こんな奴らに……悔しい……」

そして、後片付けを手伝うことなく、彼らは帰っていった。

### エピソード3

さて、ジークフリートさんの話だ。彼の2アビは、防御力の低下と引きかえに攻撃力を大きく上げるものだった。しかし、成長してLv100にすることで欠点を克服。攻撃力と防御力を上げる、隙の無い強アビリティになった。その時のエピソードなのが、彼は剣で刺されて致命傷を受けているのだ。つまり俺の場合も『ダメージと弱体を1回無効』なんて超防御的アビリティを習得するなら、同様に死にかけるしかない。

「——つてことだったんだらうか」

「想像に任せるびよん」

「何にしても怪我の功名といったところだな」

リーシャの下着姿（白）も見ることができたし、トータルでプラスと言つてもいいだろう。あとは退院するだけだ。

「それで、どうして今まで出てこなかったんだ？」

目の前の巨大兎に質問する。おかげで何人かの団員に、召喚石に話しかける変な奴だと思われたじゃないか。



「ようこそ……ラビットルームへびよん……。ここは……夢と現実……精神と物質の狭間——」

「無視かよ。というか、どうせまた現実なんだから。病室のままだし」

「話を進めるびよん。ここでは現実でできないゲーム操作などを行うことができるびよん」

「まあいいさ。……恐れながらカグヤ様に謁見する許可をいただけませんか」

「まだ上半身を動かせる状態ではないのだが、可能な限り頭を下げてお願いした。だが、白兎からの返事は無い。不思議に思つて頭を上げると、びよんぴよんと近づいてくる小さな黒兎がいた。黒兎は側まで来ると、俺に向かって告げる。」

「調子に乗るなウサ、病人！」

「……」

「これは一体どういうことかと白兎の方を見ると、奴は得意げな顔で答えた。」

「前に『ロリに言わせろ』と言つたびよん。ブラックラビットは真正正銘の子兎びよん」

「………ちなみに、そのうち獣度が下がったりはするのか？」

「ありえないびよん」

「消えろ。2度と俺に姿を見せるな」

俺がブラックラビットにそう言うと、彼女はびよんぴよんと窓から出て行つた。冷た

いようだが、こればかりは仕方ないのだ。ブラックラビットを入手しただけで晒し者になり荒らされる、この世界が悪い。

「それで、2つ目はどうするびよん？」

「キャラの上限解放がしたい」

答えると、前回と同じように『キャラ上限解放画面』が現れた。選択可能キャラは自分とリーシャで、それぞれ『Lv50 ★☆☆☆☆』『Lv42 ★★★★★』という状態だ。自分の上限解放回数は前の時と同じなのだが、リーシャが既に3回とも解放されているのはどういふことだろう。デフォルトで解放済なのか、俺の気付いてない解放手段があったのか……。まあいい、とりあえずは実行しよう。

「自分を選択。上限解放する」

手が上がらないので音声入力を試してみたところ、無事に実行された。各属性のジーンと星晶塊が1つずつ消費されて『Lv50 ★☆☆☆☆』となる。

「続けて解放。上限解放する」

必要トレジャーはティアマト、コロツサス、リヴァイアサン、ユグドラシル、シユヴァリエ、セレストのマグナアニマが3つずつだったが、カジノで交換しておいたので問題ない。『Lv50 ★★★★★☆』となり立ち絵も変化した……。のだが。

「なんで四天刃なんだよ」

解放後の俺は四天刃を装備していた。いや、確かに九界琴を4つ入手した後、全属性の四天刃を製作してメイン武器として使っているから納得はできるのだ。それでも、天星器は最終解放後の十天衆が持つ武器だという印象が強い。

「まあ、騎空士の基本装備だから仕方ないか……。続けて解放。上限解放する」

各属性の真なるアニマが1つずつ消費されて『Lv50 ★★★★★☆』となった。これで俺の地力も大きく伸びるはずだ。使ったアニマは武勲交換で補充しておこう。そして、念のため更に上限解放しようとしたが、当然ながら条件を満たしていなかった。ひとまずはLv80を目指して頑張ろう。

「最後の1つはどうするびょん？」

今回も3つまでかよ。それなら色々と検討する必要がある。ここでしかできないことは幾つかあるのだ。その中で優先度の高いものはどれか、早めにやっておきたいものは無いかを考えた。考えたのだが結論は最初に思いついたのから変わらなかった。

「リーシャの『スキン・POSE切り替え』を！」

確かに回収したはずの『下着立ち絵』は残念ながら無かった。

「ぐぬぬぬぬ」

とりあえず、へそと脇を存分に眺めておいた。

数時間後。

「先生、ボク手術を受けるよ。だから早く退院させてほしいんだ！ 隣の部屋から不気

味な——」

彼の手術は無事に成功した。めでたしめでたし。

エピソード4

退院して怪我も完治した俺は、必要なトレジャーを入手するためルーマシー群島にいた。

「隊長、本当に一人で大丈夫なんですか？」

「ああ、リーシャ。心配してくれるのは嬉しいけど、俺なら問題ない。それに星晶獣に関する機密事項もあるからな」

「いえそうではなく、隊長がよからぬことをしないかどうか……」

「ぎゃふん。相変わらず信用は無かった。『アイドルとのドキドキ同居計画』が先月に失敗したばかりなので無理もない。」

「何もしないさ。この森で無茶なことはできないからな」

リーシャと隊員達に見送られて、俺は一人で森に入った。

現在の俺の装備は次の通りだ。

メイン武器：四天刃・焰

サブ武器：朱雀光剣×2、イフリートハルベルト、その他SR武器×6

召喚石：イフリート（メイン）、適当なSSR召喚石×4

それと、両手で運んでいる大きな木箱だ。中身が割れないように注意しながら5分ほど歩いて、少し広い場所を見つけた。ここなら森の外に声が届くことは無いだろう。俺は目当ての人物に呼びかけた。

「おーい、ロゼッタさーん！」

返事は無い。しかし、聞こえていないはずがないのもう一度。

「とても美人なロゼッタさーん！」

木々がざわめいた。もう一押しかもしれない。

「えーと……。妖艶に咲き誇る薔薇の如き美貌のロゼッタさーん！」

これでも駄目なら危険を承知で歌おうと思っていたのだが、その心配はいらなかつたようだ。突風に薔薇の花弁が舞う。薔薇は俺の前方に集まり、美しい女性の姿となつた。

「ふふっ、私に何か御用かしら？」

外見は普通の人間にしか見えないのだが、彼女こそ星晶獣ローズクイーンだ。上機嫌のようなので、この調子で話を進めていきたい。

「まずは急に呼び出したことを謝罪させてほしい」

抱えていた木箱を横に置いて頭を下げる。そして謝罪と自己紹介を済ませてから本題に入った。

「貴女の持っている『ミスラのアニメ』を5つ分けてほしいんだ」

「へえ……、どうやら色々と知っているみたいね。でもお生憎様、初対面の相手に簡単にさせるものではないわ」

ミスラのアニメは、ガロンゾ島で入手できるトレジャーだ。しかし、俺はガロンゾ島に行くことができない。例えばだが『もつと秩序的な言動を心がけると約束してください』『はい、約束します』などという会話が発生してしまったら、ハーレム王になるという俺の夢が叶わなくなってしまう。だから、どんな手段を使つてでも、ここでロゼッタから入手しておきたいのだ。

「もちろん、ちゃんとした見返りは用意する。決して損はさせないつもりだ」

「無理よ。どうしても欲しいと言うなら力づくで奪うことね。安心してちょうだい、手加減はしてあげるから」

彼女を中心に薔薇の花弁が渦巻く。俺は急いで木箱を開けると中身を取り出した。

「優しく蹂躪してあげ——」

「これは新発売された化粧品だ！」

ロゼッタの動きが止まった。渦巻いていた花弁が雲散霧消した。

「詳しく」

「芸術の島『ペルフェット』の職人が作った口紅らしい。この鮮やかな赤が蠱惑的だ」

とシエロカルテ殿が言っていた。俺は次々とシエロカルテ殿の集めてくれた化粧品を見せていく。乳液、ファンデーション、フェイスパウダーなどなど。なぜか乳酸菌飲料が混じっていたけど気にしない。

「そして、これがアウギユステで一番売れている日焼け止めだ」

これはロゼッタ自身が言っていた彼女の弱点だ。だからこそ効果は抜群に決まっている。

「これらは、お近づきのしるしとして持ってきてきたものだ。どうか受け取ってほしい。もつとも、その美貌には必要ないのかもしれないが、その場合は知り合いに配ってもらっても構わない」

俺は、それなりの重量の大きな木箱を差し出した。ロゼッタは早足で近づいてくると、ひよいと受け取り森の中へ入っていく。

「少し待っていないさい」と言い残して。

数十分後、少し疲れた顔のロゼッタから『ミスラのアニマ』を5つ受け取った。

「ありがとう、ロゼッタさん。もし気に入った商品があったら、この島の駐在員に手紙を渡してもらえれば持ってくるよ」

「ええ、そうさせてもらうわね。それと私のことは呼び捨てで構わないわ。同い年ぐらいだし」

「……………ああ。そう、するよ、ロゼッタ」

危なかった。うっかり『は？ とうとうポケたか？』とでも言ったら死んでいたところだ。

こうして設備拡充のための素材は無事に揃った。天星器の覚醒は近い。



# 第12話 俺の船団長補佐はこんなに可愛いモニカ14才

エピソード1

某空域にて。

「お呼びですか、団長」

「ああ、近いうちに君にはファータ・グランデ空域へ行ってもらおう」

「ファータ・グランデといえば第四騎空艇団……ガンダルヴァ船団長ですね」

「その通りだ。彼は3年前に『5〜6年は大人しくしている』と言ったが、それを鵜呑みにするわけにもいかないだろう。船団長補佐として近くで監視し、有事の際は対処してほしいのだ。場合によっては、君の判断で斬っても構わない」

「そのような大役、私に務まるかどうか……」

「君の実力であれば大丈夫だ。上手く団員を使ってくれ」

「確かに、秩序の騎空団に彼の味方をするような者はいないはずだが……。このなりでは侮られることもあるでしょう。万全を期すためにも、そうだな……。私は24才ということにしてもらえますか」

「うん？」

こうして、碧の騎士に連れられ、年齢詐称した天才少女がファータ・グランデにやってきた。

その後、碧の騎士の所用により解散し、少女は一足先にアマルティア島に降り立つのだが……。

第四庁舎騎空艇発着所にて。

「貴公がガンダルヴァ船団長か。今後はよろしく頼む」

「……なるほどな、あの野郎が考えそうなことだ。とはいえ、オレ様もずいぶん軽く見られたもんだな。てめえなんぞに抑えられると思われちまうなんてよ」

「ほう、それでは少し見せていただこうか、貴公の実力の程を」

「そうこなくつちやな、話が早くて……っ!! いや、今日のところは止めておいてやる」

「アイツが先に相手をしてほしいみてえだからな。優しいオレ様としては譲ってやる  
さ」

## エピソード2

俺は歓喜した。必ず、かの金髪巨乳のモニカを迎えなければならぬと決意した。俺には秩序がわからぬ。俺は、部隊の隊長である。武器を振り、兎と遊んで暮して来た。けれども美少女に対しては、人一倍に敏感であった。さつき俺は第四庁舎を出発し、ディケオスイニ通りを通って、ここ発着所にやって来た。俺には姉も、妹も無い。恋人も無い。だからモニカを攻略するのだ。

「モニイイ!!」

「ひっ! な、なんだお前は」

間違いなくモニカだった。転生してから3年、俺はようやく普通の美少女に出会えたのだ! えっ、リーシャ? 普通の美少女は秩序閃とかない。

「モニイモニモニモニイモニ!」

「何を言っている? まさかとは思いますが、私をからかっているのか?」

そういえば挨拶とかしてなかったな。ここは『初めまして』の抱擁を試みるべきだろう。そう、これは挨拶なのだ。疚しい気持ちなんて、ほんの10割しかない。

「モニイモニモニイモニ!」

「どういうつもりだ。おい船団長、この状況を説明しろ」

普通に避けられた。意外と恥ずかしがり屋らしい、可愛い。そして、さつきまでいた

ような気もするガンダルヴァは、空気を読んで先に帰ったようだ。それはさておき、手の甲にキスなら大丈夫だろうか。モニカは手も可愛いなあ。

「モニモニイモニモニイ！」

「悪ふざけもそこまでにしておけ。怪我をすることになるぞ」

モニカは俺の手を避けると、腰の剣を抜いた。なるほど、どうやら俺の本気が伝わっていなかったようだ。彼女にとっては初対面だから無理もないだろう。だが俺は、何年も前から本妻にする（そしてリーシャは愛人）って決めてたんだよ！

「モニイモニイモニモニイモニイ！」

「警告はした。悪く思うな」

目にもとまらぬ斬撃が俺を襲う。だが、四天刃で受けたりはしないし、回避すらもしない。これで俺の気持ちもモニカに届くなら……。

「モニモニイ！」

「馬鹿な、直撃したはずだ！」

確かにモニカの剣は俺に命中したのだが、アビリティでダメージ無効にしたので何ともない。はたして分かってくれただろうか。

「モニイモニイモニモニイモニイ！」

「く、来るなあ！」

涙目で俺を見るモニカ。剣を持つ手も震えているようだ。どうやら少し怖がらせてしまったらしい。俺がモニカに危害を加えることなど決して無いのだが。ともかく、さつきから言葉が通じていないようなので、俺は無害アピールのために武装解除することにした。そして10本の武器を外したただけでは安心できないだろうと上着なども脱いでいく。

「モニモニモニモニモニモニ！」

「だ、誰か、助け——」

突然、後方から攻撃を受けた俺は、あっさりと制圧された。

「モニモニモニモニモニモニ！」

「隊長、大人しくしてください」

リーシャが怖かったので言うとおりにした。やはり愛人では不満なのだろう。

その後、数時間に及ぶ説教の末、俺は正気に戻った。

エピソード3

数日後。

「モニカ船団長補佐、頼まれた資料を持ってきました」

「ああ、そこに置いてくれ。色々頼んでしまつて悪かつたな、リーシャ」

「いえ、これぐらいのことでしたらお安い御用です」

「それにしても、第四騎空艇団の書類はよくまとまつていて見やすいな。この団員は優秀な者が多いようだ。あの船団長の下で働いていると、成長せざるをえなかつたのかもしれないが」

「確かに、上が不真面目だと補うために鍛えられますね、色々な面で」

「それには面白い部隊があるようだ。秩序執行巡空独立強襲隊と言つたか……壊獣事件や、古戦場での活躍による騎空団のイメージ向上、各地の強力な魔物退治に、最近ではエルステ帝国の不当な支配に採算度外視で立ち向かつたそうじゃないか」

「ええ、まあ……」

「リーシャ副隊長の話にも興味はあるが、やはり隊長にも会つておきたいものだ。船団長への対策として、連絡を密にする必要もあるだろう」

「いえ、その……」

「どうした？ スケジュール調整が難しいようなら、こちらから会いに行くでしょう。なにしろ、ここでは私の方が新参なのだからな」

「実は——」

「こ、今後は可能な限り副隊長から報告書を提出するように。それで問題ないな!」

「了解しました、船団長補佐」

「それにしても、あの隊長はどうにかならないのか?」

「そもそも部隊設立の目的が『隊長の後始末』ですし、こんな一時しのぎ程度しか……」

#### エピソード4

夕方、疲れた顔で執務室から出たモニカは、廊下に落ちている飴玉に気づいた。

「これは……落とし物か?」

そして数歩先にマカロンが落ちているのも見つける。

「どうやら、この団にも慌て者がいたようだ」

飴玉とマカロンを回収したモニカだが、さらにチョコレートを見ると呆れた顔になった。

「仕方ないな、私が届けてやるとしよう」

モニカは落ちているお菓子を次々と拾いながら廊下を進んでいき、狭くて人通りの無い通路に入った。その様子を物陰から確認した俺は、彼女の後を追うのだった。当然ながら、お菓子を配置したのは俺だ。

「ようやく2人きりになれたな、モニカ」

「ふっ、まんまと誘い出されてしまったというわけか」

まるで強者のような台詞だが、両手でお菓子を抱えていると可愛いとしか思えない。あるいはお菓子になって抱えられたい。

「モニカ、俺と結婚しよう！」

「なっ、ば、馬鹿なことを言うな！」

「一目惚れなんだ。結婚が難しいなら、まずは俺とデートしてほしい」

「駄目だ駄目だ。だいたい私はお前のような男が嫌いなんだ」

なるほど、これは攻略しがいいのあることだ。序盤は頻繁にお菓子をプレゼントして好感度を稼ぐのが無難か？ だがせっかくの状況だ。一気に好転させられるなら狙ってみたい。

「会うのはまだ2回目じゃないか。もっとお互いを理解してからでない」と

「その必要があるとは思えないな」

1歩近づく。モニカは1歩下がる。

「俺はもつと知りたい、モニカのこと」

「立場をわきまえろ。気安く私の名前を呼ぶんじゃない」

1歩近づく。モニカは1歩下がる。



「じゃあ、モニモニで」

「止めろ！」

1歩近づくと、モニカは1歩下が……れない。もう壁際だ。

「だったら——」

「警告する。それ以上は近づくな。貴様もただでは済まんぞ」

モニカはそう言うと、抱えたお菓子を直して左手を空けた。それによつて彼女の大きな胸が形を変える。やっぱりお菓子になって押し付けられたい。いや、押し付けられるだけなら、すぐにでもできるじゃないか。俺はふらふらと誘われるように近づき——

「貴様の愚かさなら十分に理解できた」

——モニカは左胸の紐を強く引いた。

ピーー！　　ピーー！　　ピーー！　　ピーー！　　ピーー！　　ピーー！　　ピーー！  
ピーー！

警報音が鳴り響く。まさか、防犯ブザー！

「くっ、このままではリーシャが……」

慌ててこの場から離れようとするが、狭くて行き止まりの通路に逃げ場なんて無かつた。

「事案ですか？」

「おお、来てくれたか、リーシャ。『こんな一時しのぎ』でも十分に役立ったよ」

「それは良かったです。さあ、隊長？」

「俺は決して諦めないからな！ モニカーー!!」

そして、俺は久しぶりに独房送りとなった。

ちなみに3年後のモニカ。

「私は27才だ。お嬢さんというような歳ではない」

「結婚か……昔はそれなりに憧れもしたが、今は落ち着いてしまっているな」

「回避力の鍛錬法？ 私の場合は自然に身に付いたとでもいうか……これ以上は聞かないでくれ」

## 第13話 そして彼は運命を変え、ゆえに報いを受ける

エピソード1

秩序の騎空団第四庁舎の地下には独房があり、通常の収容棟には入れられないような重犯罪者が生活している。しかし、さらにその下には特別隔離房があり、虫一匹通さないほど厳重な警戒がなされていることを世間の人々は知らないし、俺も実際に入るまでは知らなかった。

「ハイ、ラビット。カモン！」

モニカ・ハイ状態の俺が陽気に呼びかけると、壁をすり抜けるように巨大兎がやってきた。

「ようこそ……ラビットルームへびよん……」

「あ、メッセージはスキップで」

というか、そつちが来たのに『ようこそ』はどうなんだ。ともかく、前回と違って俺の体は問題なく動く。だから最初にやるべきことは決まっていた。俺は巨大兎に最敬礼して頼みこむ。

「トレハン教の神にして、心優しき美姫たるカグヤ様に謁見いたしたく存じます」

「調子に乗るなびよん、囚人！」

「だからロリに言わせろって。……ただし、この場合のロリとは、空の民の過半数が可愛いと思うような人型の少女のことだ」

今回も会えなかったか。ロゼッタは褒めたら即座に来てくれたんだが、どうやらカグヤ様は憤み深いらしい。いや、ロゼッタさんが憤み深くないと思っただけではないので、す決して。

「2つ目はどうするびよん？」

「次はプレゼントの受け取りだ。プレゼントリストを出してくれ」

俺が転生してから3年以上になる。グラブルのログインボーナスは些細なものだが、それが3年分ともなると相当の量になっているはずだ。全部ガチャに使えば『天井』だって届く……と思っていたのだが。

「何も無い……だと？」

プレゼントリストは空っぽだった。特定のカテゴリのみ表示される設定になっていないかを確認してみたが、全プレゼント表示状態で何も無かった。残念だが原作主人公でない俺に、ログインボーナスは無かったようだ。そういえばトカゲが持つてくるような演出だったか……。

「初回クリア報酬も無いのか。残念だ」

プレゼントを全部受け取ったらガチャを天井まで回して、仲間をたくさん加入させるつもりだったんだが。ガチャは次回以降にした方がいいか？ いや、俺には原作主人公補正が無いと判明したばかりだ。フェスがあるかどうかも分からないし、早めに仕様を確認しておきたい。それに、もうガチャを引きたくて引きたくて待ちきれないんだ。

「ガチャを引かせてくれ！」

目の前にレジエンドガチャが現れた。出現装備を調べると、ちゃんと最新のキャラまで出るようだ。俺にはシエロカルテ殿の依頼で入手した宝晶石が約10000あるので、10連ガチャなら3回まで引ける。

「とりあえず仕様確認しないといけないから……」

俺は10連ガチャを引いた。画面に広がる虹色の光——SSR確定演出だ！

「よし！ 来い！ 女の子来いっ！」

SSRキャラの半分以上は女の子なんだ。ここまで来て男なんて見たくないぞ。そう思いながらタップして画面を進めていく。はたしてSSRの正体は……！

『フラムⅡグラス（召喚石）』

うーん、このハズレ石。最終上限解放まですれば少しは使えたりもする可能性がある

のだが、今のところは女の子が描かれた石でしかない。火エレメントが必要になるまでは倉庫送りだ。

「でも流れは来てる。まだ引けるはずっ」

俺は10連ガチャを引いた。再び画面に広がる虹色の光——SSR確定演出だ！

「ほら引けた！ これぐらい余裕なんだよー」

さつきはハズレだったし、次は良いSSRが来るだろう。そう信じてタップしていくと、出たのは女の子。白い髪に褐色の肌、そう彼女は世界の均衡を守護する星晶獣、その名は……！

「ゾーイ来た！ これで——」

『ジ・オーダー・グランデ（召喚石）』

「そっちかよ!!」

さつきのハズレ石と比べると十分に強いのだが、それでも今となっては基本的に採用されない加護だ。なにより専用の編成を要求されるのが痛い。俺の武器はほとんどが通常攻刃枠だからな。

「まだ流れは残ってる。それに、ここまできて止められるか！」

俺は10連ガチャを引いた。またしても画面に広がる虹色の光——SSR確定演出だ!

「そろそろキャラ来るよな。頼んだぞ、おい」

ハズレ↓普通とくれば、次は当たりに違いない。ここで女の子が来れば救われるんだ。どうか俺に出会いを……!

『緋舞扇（武器）』

SSRの扇……。

ソシエ……?」

「ソシエ!ソシエ!ソシエ!ソシエええううわあああああああああああああああああああああああああああ!!!あああああん!!!ああああああ……ああ……あっあっ——!あああああああ!!!」

(中略)

俺の思いよソシエへ届け!!王家の末裔ソシエへ届け!」

数時間後。

「看守、司法取引を要求する。ファミリーの構成員、アジト、符丁、それに取り引内容をオレが知る限り話そう。だから……せめて上の独房にオレを移してくれ!」

なお、特別隔離房滞在中にヴァルフリート団長が到着して、また別の空域に行ったらしい。

## エピソード2

独房から出た俺は、単独でシエロカルテ殿に仲介された依頼をこなしていた。なぜなら、

『ガチャにより、本来は交わるはずの無かった運命が変わったびよん。遠からず出会えるびよん』

とホワイトトラビットに言われたからだ。そんなわけで、午前に2件、午後に1件の依頼を片付けた俺は、森の中を歩いて次の場所にやってきた。

「ソシエは妾にしようか。別宅に住ませて、俺が来るのを待ち続けるような……」

おっと魔物だ。ソシエの将来は後でじっくりと検討しよう。俺は武器を構えて魔物に駆け寄る。だが、魔物は突然に崩れ落ち、その向こうには扇を持ったエルーンの少女が立っていた。長い銀髪と、限られた者だけが持つ大きな尻尾、そしてその高貴な雰囲気、間違いなくソシエ（生娘）だ。

「あのっ……」

とりあえず求婚しようとして、思いとどまる。少し前にモニカで失敗したばかりなの



だ。ここは慎重に、秩序の騎空団への勧誘だけを考えよう。隊長権限を使つて隊員にさえしてしまえば、時間はいくらでもあるのだから。

「……………えと……………なにかな……………」

「ああ、今の魔物は俺が討伐依頼を受けていたんだ。そっちは？」

「……………違つて……………その……………あの……………」

「大丈夫だから、落ち着くんだけ。あー、青い果実とか食べるか？」

とりあえず、さつき拾つたばかりの新鮮なやつを勧めてみた。

ソシエは、王家の末裔としての使命を果たすため、九尾とか神器とか演舞とか幼馴染とか関係者とか探しているキャラだ。しかも、探し物が多すぎるにも関わらず、人見知りで話すのが苦手だというハードモード。さらには騙されやすいという致命的な弱点もある。やはり、この俺が護つてやらないと。そう決意を固めたところで、食べ終わつたソシエが話しかけてきた。

「えつと……………ありがとね、果物」

「ああ、たくさんあるから気にしなくていい」

「その……………さつきの魔物だけど、私が探しているお方だと思つて来てみたら違つて、それで倒したんだ」

「そうだったのか。俺は討伐依頼で倒しにきたけど……何もしてないのに報酬を貰うわけにはいかないからな。よかつたら一緒に達成報告に来てくれないか？」

「……うん、いいよ」

よし、自然に誘えたぞ。これから街に戻るまでが勝負だな。それにしても、緊張のためか標準語で話すソシエもいいものだ。

こうして森の中を歩きはじめた俺達は、軽く自己紹介などをすませた。続けて実例を交えつつの誠実さアピールだ。手始めに、インペリアルシヨテルのため倒しまくったエルステ帝国兵の話をしてみる。

「だからさ、俺は秩序の騎空団の一員として、困ってる人を放っておけないんだ」

「そうなんだ……。もしかしたら君になら話しても……。でも……」

「ソシエ、俺を信じてくれ」

振り返って、彼女をじつと見つめる。そういえば『俺を信じるとか言うやつは、間違いないく信用できない』って秩序教本に書かれていたような……。まあいい。

「実はね——」

彼女は語る、九尾のことを。そして、幼馴染の少女——ユエル——のことを。

「——ユエルちゃん……。どこ行かはったんやろ」

「ななな、なんと、そんな重大な使命を果たそうだななんてー!」

「だいたい知ってたけど。ともかく俺が狙っていた流れだ。」

「ソシエ、秩序の騎空団に入らないか?　俺に君の使命を手伝わせてほしい!」

「えっ……」

「秩序の騎空団には大きな資料庫がある。過去に『意思を持った炎』が目撃された情報があるかもしれない。それに、俺の部隊は各島を飛び回ってる。その友達にも会えるんじゃないかな」

「ほ、ほんまにええのん……?」

「ああ、もちろんだ。俺と一緒に来てくれ」

そして徐々に使命のことなんて忘れさせて、俺だけのものにしてやるよ、ソシエ。

「じゃあ……よろしゅうお頼申します……」

ソシエが秩序執行巡空独立強襲隊に加入しました!

### エピソード3

引き続き、街に向かって森を歩く俺とソシエ。だが、2人きりのこのチャンスに何もしなくていいのだろうか。いや、イベントは積極的に起こしていくべきだ、ハーレム王

をを目指すなら！

「痛っ！ 足の付け根を虫に刺されて腫れてしまった！ ううっ……！」

少し不自然な演技だったか？ だがソシエなら、チョロいソシエならきつと。

「ええっ、大丈夫なん？」

「ああ。でも悪いけど、腫れた場所を優しくさすつてくれないか？ この薬が効いて、腫れが引くまでの5分、いや10分でいいから」

「それぐらいやったら、ええけど」

完璧だ。ソシエなら絶対に騙されてくれると信じてた。俺は市販のポーシオンを飲むと、地面に座って木に背を預ける。今日は休日でリーシャが俺を探す理由はない。ソシエは嫌がってないから秩序も乱れてない。当然ながら防犯ブザーを鳴らす様子も無い。このまま最後までいけると確信した俺は、ソシエの手を握って『腫れた場所』に近づけていき――

「ソシエから離れんかい！ この変態!!」

――謎の乱入者に邪魔された。

乱入者ユエルは、ソシエと同じく王家の末裔であり、狐火を使った多彩な攻撃が得意だ。というか、まさに今その狐火攻撃を受けていた。

「ええい、ちよこまかと避けんな！」

「ま、待って。ユエルちゃん、これは違うんよ」

「そうだ、ソシエ。頼むから誤解だつて言つてやつてくれ。」

「うちはな、腫れたところをさすつてあげようと」

「それを変態の所業言うねん！」

「それだけやのうて……あつ、うちに入れてくれるつて」

「入れ……っ！ アンタだけは殺す!!」

狐火の火力が上がった。口下手にも程があるだろ、ソシエ。どうして『ソシエに、騎空団に入れてあげると言つた』ことを正しく伝えられないんだ！　こんな誤解で……いや、そういったことを全く考えていなかったと言えば嘘になるので、誤解とも言い切れない気もするが。ともかく俺からも説得するしかないようだ。

「待ってくれ、俺は秩序の騎空団員で……」

「嘘吐くなや！ アンタみたいな奴が秩序の騎空団なわけないやろ！」

説得は失敗に終わった。仕方ない、力づくで話を聞いてもらうしかないな。冷静になれば、少しは話も通じるだろう。

「秩序の騎空団として、この身に降りかかる火の粉は払わせてもらう」

俺は四天刃・雪をユエルに向けた。

数分後、俺は想定外の事態に頭を悩ませていた。ユエルが強すぎるのである。

「そーやー！」

まずは防御面だが、俺がユエルに怪我をさせたらソシエの好感度が下がってしまうだろう。不幸な勘違いから始まった戦闘だが、だからといって幼馴染が傷つけられたら少しは俺を恨むはずだ。最悪の場合、『せっかく再会できたし、このまま2人で旅しよか』となる。そうなったら、いくら俺でも立ち直れないかもしれない。

「覚悟しいやー！」

次に攻撃面だが、俺は今までユエルのことを過小評価していた。しかし実際に対峙して、その圧倒的な破壊力から目を背けられなくなっていた。彼女は露出度が非常に高いのだ。具体的には、前に見たリーシャの下着姿以上である。流石は運営に規制されたほどのファッション。ポロリを期待して俺の動きが不自然になってしまうのも仕方ないことだ。

「融月緋刃！」

狐火と双剣については全く脅威を感じない。神器で覚醒していないので仕方ないだろう。とまあそんなわけで、倒すだけなら30秒、生死不問なら10秒で終わるのである。戦闘がこんなに長引いているのだ。せめて、ある程度の隙さえあればどうにかなるの

に。そう思いつつ俺は戦場を見渡して、少し考えた末に……。

「ああ、もう鬱陶しいわ。ええ加減に——」

「あーっ、ソシエ！　なんてはしたない格好を！」

「なんやて！　……あつ！」

気づいた時にはもう遅い。俺は一気に距離を詰めて、ユエルの心臓の辺りに四天刃の先端を当てた。少しでも動かすと服が破れてトップレスになってしまう状態だ。俺としては、そっちの方がいいんだが。

「降参してくれないか。少し話を聞いてくれるだけでいい」

「くっ、好きにしたらええ」

残念ながら、ユエルは双剣を手放して両手を上げた。

説明後。

「……つまり、こういうことやな。ソシエは王家の末裔として色々と探しとって、それにつけこんだアンタは『秩序の騎空団の船団長直属部隊の隊長』を騙ってソシエを拐かそうとした！」

「騙ってはないが、そんなところだ」

「ユエルちゃん、無闇に疑うたらあかんと思うんよ。隊長はん、ええ人みたいやし」

「ソシエは警戒しなすぎや。……そうや！　今から3人で秩序の騎空団に行ったらええわ。もし嘘やったら、そのまま誘拐未遂で捕まえてもらえるやろ。それで、万が一本当やったらウチもアンタの下で働いたるわ。どうや、大人しく白状すんなら今のうちやで」

ユエルは自信満々に言い放った。なるほど、ここでユエル加入か……アリだな。この圧倒的な破壊力を知ったからには、このまま別れるのも惜しい。

「庁舎ならこつちだ、案内しよう。討伐報酬は後回しになるけど、それでいいか？」

「ええよ、隊長はんのおかげで早速ユエルちゃんとも会えたし」

「え？　え？」

なお、俺の言葉が本当だったという驚愕で、さすつてもらおうとしたのは有耶無耶になつた。

ユエルも秩序執行巡空独立強襲隊に加入しました！

#### エピソード4

1カ月後、俺は原作知識を利用して大金持ちになるために、ある小さな島に来ていた。ここでは第2回プラチナム・スカイ・カップが開催されるのだ。



具体的には、走艇と呼ばれる専用の騎空艇を使ったレースなのだが、原作ではミュオンが連覇している。つまり、今回の1位も彼であり、1点賭けするだけで大儲けが約束されている。むしろ、軍資金の調達の方が大変だったぐらいだ。部隊の運用のための資金を限界まで引つ張り、可能な限りの給料を前借りして、そのためにリーシャには保証人になつてもらつて、天星器覚醒のための設備拡充資金も温存して、それで合わせて一千万ルピ。これを今回のレースに全額投入してやるのだ、フハハハハ！

あまりの高額に倍率が下がるかもしれないが、確実に利益は出るので問題ない。念のために、俺がレース関係者でないことをリーシャに確認してもらつた。これで準備は万全だ！

「隊長、このレースに巨大な陰謀があるというのは本当ですか？」

「ああ、リーシャ。謎の研究所が動いているという情報があつてな。もつとも今回は何も起きないかもしれないんだが……」

実際のところ、研究所が仕掛けてくるのは数年後のことだ。だが、『今回のレースに全額賭けるから』なんて絶対に言えないので、警戒のためという名目でやってきたのである。ちなみに、囑託団員となつたソシエは本部の資料室で九尾の調査中であり、ユエルは適当に探検でもしているのだろう。そんな経緯で、一千万ルピの入つたカバンを手に2人で見回りをしていると、目の端に見慣れた『それ』が映つた。

「リーシャ、ここで待機。できるだけ誰も近づけないでほしい」  
「了解」

出店で賑わう大通りから少し離れたところに、その男は座っていた。男の前には簡素な敷物、そしてその上には禍々しい雰囲気の槍が1つだけ置かれていた。毎日のように目になっているから間違いない。これは本物のグララーシーザーだ。

「……いくらだ？」

「一千万」

男は簡潔に答えた。それなら買える、いや買えてしまうのだ。

「高いな。もう少し安くならないのか？ あるいは支払いが明日でもいいなら……」

「今、この値で買えない者に、これは使いこなせん」

悔しいが男の言うとおりだ。グララーシーザーが一千万ルピなんて破格の値段であり、閻属性武器が揃ってない騎空士なら迷う余地は無いのだから。俺はカバンを男に渡して、グララーシーザーを受け取った。念のために、即座に装備してそれが本物だと実感する。

「間違いないようだ。いい取引だった」

「……」

男は無言で去っていった。

「隊長、いったい何が……あつ、また新しい武器ですか？　無駄遣いは程々にしてくださいね」

「……ああ」

「実は、明日のレースが少し楽しみなんです。もちろん警戒を怠るつもりはありませんが……」

楽しそうなりーシャ（保証人）の顔を、俺はまともに見ることができなかつた。

来月からタダ働きか……。

# 第14話 つまり、あのロボミイメントは何だったのか

## エピソード1

グラシーザー。闇属性の槍であり、騎空士にとって必須とも言える武器だ。まず、ステータスの高さからして一般的な武器を大きく上回っており、装備するだけで攻撃力が大幅に上がる。しかも、強化を繰り返すことで闇の力が高まり、攻撃力が更に上がる。これだけでも全空で上位の武器と言ってもいいのだが、加えて復讐者の怨嗟により、使い手が傷つくほど攻撃力が上がる効果まである。強敵を前に負傷は避けられないだろうが、それによって力を得るこの槍があれば多少の不利を覆せるのだ。そんなグラシーザー代を必要経費として認めてくださいお願いします。

「却下だ」

せっかく書いた書類は、あつさりとゴミ箱に投げ捨てられた。

「そこを何とか頼むよ、モニカ。いや、モニカ様。モニモニ大提督！」

「貴様、やはり私のことを馬鹿にしているだろう！」

「まさか！ 1日でも早く結婚したいぐらい好きなのに」

「ええい、経費も結婚も駄目だ。分かったら早く出ていけ。私だって暇ではないんだぞ」

モニカは俺を追い払うように手を振ると、別の書類を確認しはじめた。

「……ドーナツ」

俺の言葉に、彼女の動きが止まる。

「差し入れのドーナツ、あんなに美味しそうに食べてくれたのに」

「それはっ！」

「だから、それに免じて必要経費をだな……」

「ほう、それはつまり、あのドーナツが『賄賂』だったと言いたいわけか？」

雲行きが怪しくなってきた。このままだとリーシャが来そうだし、速やかに撤退しないといと。

「つ、次はリングドーナツじゃなくて、エンゲージリングを贈ってやるからなー！」

「さっさと帰れ！」

モニカ攻略は順調だ。連日のお菓子で好感度は上がっている、いずれデレるだろう。

そして隊長室に逃げ帰った俺は、巨大な金属の箱と対面した。まるで中に人が入っているような形状の箱を、俺は迷わず開ける。

「これで女の子が出てこないのなら、ハーレム王なんて目指せるものか！」

箱の中にいた者を見て、俺は2年前のことを思い出した。何もできない無力な自分に絶望した、あの日のことを……。

## エピソード2

2年前。壊獣事件終息後のバルツ公国、樹上にて。

「よし、ここからなら公爵邸がよく見えるぞ。アリーザはいないな……庭で修行でもしてそうなんだが。しばらく待っても出てこなかったら裏門の方に回りこんでみようか、それとも……」

などと覗いたりしていると、下の方から聞き慣れた声がした。チート聴覚でないと聞き取れなかったであろう、その内容はというと。

「秩序の騎空団です。不審者がいるとの通報でしたが」

「ええ、あの木の上に怪しい男がいるんです。最近色々物騒だし不安で不安で……」「ああっ！　そ、そうですね。あとはこちらで対処するので、気をつけてお帰りください」

リーシャが不機嫌そうな顔でこちらを見ていた。……よし逃げよう。だが、この距離では降下地点に先回りされてしまうのは必至。ならば、当初の目的達成も兼ねて、あの塀の向こう側に下りれば……！

「待ってろよ、アリーザ！ うおおおおお!!」

俺は跳んだ。そして無様に落ちてリーシャに捕まった。

「違うんだ。この公爵令嬢が狙われているんだ」

「ここにいる不審者に、ですね。壊獣事件が終わったばかりだというのに、余計な問題を起こさないでください」

ここでアヴィザの企みを話すのは簡単だ。だが、その場合は彼が失脚してしまうため、俺が颯爽とアリーザを助け出すことができなくなってしまう。せめて一目だけでもロリなアリーザが見たかったんだが、リーシャからは逃げられそうにない。俺にもっと力があれば……。

「あの時は俺も未熟だった。あれでリーシャが来ないはずはないのにな」

当時のことを思い出しつつ、俺は箱の中にいた『彼女』から手紙を受け取る。そこには『量産化できそうだから試験運用よろ！ byシロウ』的なことが書かれていた。

「つまり、お前は——」

「ロボミレプリカ。その先行量産型です、マスター」

メカメカしい外見に、バイザーで覆われた顔。確かに見覚えのある量産型ロボミだった。話していた記憶は無いのだが、少なくともこの個体には会話機能があるようだ。

でも、そんなのいいから美少女顔にしろよ。そこは手を抜いたら駄目だろ。

量産型ロボミが秩序執行巡空独立強襲隊に加入しました！

### エピソード3

騎空団連合ラファール。様々な依頼を騎空士に紹介してくれる組織であり、そこに集まった騎空士はクエストに挑むため『共闘』する。

「ラファール……聞いたこともないな。これもゲーム中には無かった設定か」

新たな仲間が加入した俺達は、戦力向上、連携強化、情報収集、そしてルピ獲得のため、共闘クエストに挑むことにした。リーシャと2人だけでは非効率なので来る気は無かったのだが、今は5人いるため無駄が少ないのだ。それに、せめて設備拡充用の20万ルピだけでも、急いで稼がなくてはならない。

「とはいえ最初は低難易度からだ。改めて各自にできることを確認しながらいこう」  
「それはええけど、共闘せえへんの？」

「ああ、共闘しなくても共闘クエストはできるからな」

「……？ あかん、ウチにはついてかれへんわ」

「こういう時の隊長は自己完結しているので、スルーして大丈夫です」



「なるほどなあ」

そんな感じで、難易度ノーマルから攻略していった。ちなみに今回からは、メイン召喚石として『ジ・オーダー・グランデ』を装備している。リーシャが風、ソシエが水、ユエルが火、量産型ロボミが光なので、どの4人でも必ず属性が3種類以上となるのだ。おかげで全員の攻撃力が大きく上がり、数日でノーマルを制覇できた。

騎空艇ピースメーカー、隊長室にて。

「さて、ミーティングを始めようか。まずはリーシャ副隊長」

「はい。高難易度のクエストが発行されたので、引き受けてきました。また、次からは他の騎空団との共闘を行うとのことだったので、3つの団との交渉も済ませてあります。隊員達の調査では、いずれの団も実力は確かなようです」

さすがに難易度ハードからは、単独では厳しいだろうと共闘することにしたのだ。それにしても相変わらず交渉の手際がいい。秩序の騎空団のネームバリューもあるのだろうが、俺では同じようにできるかどうか……。募集したのに誰も来てくれないとか寂しすぎるからな。

「次に、ソシエ副隊長とユエル副隊長補佐。情報収集の調子はどうだ？」

「ううん、誰に聞いても『意思を持った炎』のことは心当たり無いって」

「実際に話したんはウチやけどな」

「実力が認められれば、情報も集まりやすくなるはずだ。今後も聞き込みは続けている」

ソシエは副隊長に任命した。それだけの戦力はあるし、隊員としての雑用なんてさせるわけにはいかないからな。ユエルはその補佐だ。逆の方がいいような気もするが、そこは好みの問題というところで……。

「最後に量産型ロボミ隊長補佐。俺達の強さはどうだ？」

「はい、マスター。全員が順調に伸びています。3日前と比較した成長率は、隊長が――」

そして、量産型ロボミには俺の補佐をさせている。機械だからか客観的な分析が得意で、俺以外の攻撃力も大まかに測定できるようなのだ。他にも色々和多機能で、ただでさえ少ない俺の仕事が更に減った。さておき、俺にとつては順調にレベルアップしていること以外は重要ではないので、詳細を聞き流しつつモニカに思いを馳せる。

「あー、モニモニのモニモニをモニモニってモニモニしたいなー」

「……？」

量産型ロボミの言葉が止まる。もしかして口に出てた、とか？

「今のは放っておくとエスカレートして奇行に繋がります。正座して反省してください」

い、隊長」

「……はい」

「な、なるほどなあ」

エピソード4

共闘クエスト、平原の魔物追撃作戦が始まった。

「よし、打ち合わせ通りに行くぞ。前衛は俺とユエル、後衛はリーシャとソシエ、バックアップは量産型ロボミだ！」

風属性の敵に対しては、火属性フォーメーションで挑む。主にダメージを与えるのは俺とユエルで、後衛の2人は援護役だ。そして、他の騎空団と協力して敵を弱らせ、一気に全員の奥義を叩きこむ！

「四天洛往斬！」

「これがウチの全力や！ 融月緋刃！」

「九尾様に捧げる舞が一つ、白之舞・天華！」

「負けるわけにはいかないの！ サンライズ・ブレード！」

FULL CHAIN

「いくぜ！ プロミネンスフレア！」

こうして最初のクエストは無事に達成できたのだが……。

休憩中。

「これより、さっきの戦闘の反省会を行う」

「えっと、隊長。それは今すぐに行うべきものなのでしょうか」

「もちろんだ、これ以上この問題を放置することはできない」

「そやかて、ウチらにそこまでの問題なんて無かったやろ。なあ？」

「うん、うちもそう思うんやけど」

どうやら3人とも気づいていないようだ。だが、こういう場合は答えをすぐに教えず、部下の考える力を鍛えるんだったか？

「量産型ロボミ、戦闘終盤あたりの映像を出せるか？」

「はい、マスター」

量産型ロボミの、映像記録機能とプロジェクター機能により、さっきのフルチェインの光景が映し出される。

『四天洛往斬！　これがウチの全力や！　融月緋刃！　九尾様に捧げる舞が一つ、白之舞・天華！　負けるわけにはいかないの！　サンライズ・ブレード！　いくぜ！　プロミネンスフレア！』

「……もう分かったと思うが、連携攻撃のプロミネンスフレアを俺しか言っていないんだ」  
「んん？」

「当然ながら、この場合は4人で声を揃えることが重要だ。もちろん、いきなり合わせるのは難しいかもしれない。だけど、言おうとすらしなのは、やっぱり間違っていると思う」

「いや、そんなん別にどうでもええやろ」

「そつか、うちに必要な連携強化つてそれやったんや」

納得したように頷くソシエ。その一方で、どうやらユエルには理解できないようだ。

「あかん、ソシエがまた騙されてもうた。頼むで副隊長、真面目にやれ言うたってや」

「……声を揃える。実に秩序的でいい考えです。まさか隊長に気づかされるなんて、私の秩序もまだまだみたいですわね」

「いや、今まで奥義のタイミングを合わせてこなかったから仕方ないさ」

リーシャからは強い賛同が得られた。当然だろう、これは某国の騎士団でも普通に行われていることだからな。

「……なんでやー！」

次の戦闘でも終盤にチャンスがあつた。全員の奥義が発動して、その後。

FULL CHAIN

「いくぜ！」

「プロミネンスフレア！」

「あつ、プロミネンスフレア！」

「……プロミネンスフレア！」

「プロミネンスフレア！」

「もっと呼吸を合わせるんだ。次の戦闘でも狙っていこう」

その次の戦闘でも同様に。

FULL CHAIN

「いくぜ！」

「プロミネンスフレア！」

「プロミネンスウフレア！」

「ツプロミネンスフレア！」

「プロミネンスフレア！」

「まだ合っていない。こんなんじや美城プロダクションにも勝てやしないぞ」

クエストは順調に攻略されていく。

FULL CHAIN

「いくぜ！」

「プロミネンスフレア！」

「プロミネンスフレア！」

「プロミネンスフレア！」

「プロミネンスフレア！」

「だいぶ良くなってきた。連携強化されてきたよ！」

そして何度も練習を重ねていき、最後の戦いでも。

FULL CHAIN

「いくぜ！」

『プロミネンスフレア！』

「そう、そうだよ！ 今の感じを忘れるな」

かくして平原の魔物追撃作戦は無事に終わった。

「実に有意義な戦術でした。今度はモニカさんも誘いたいですね」

リーシャはすっかりご満悦だ。俺としてもモニカとのチェインバーストは大歓迎である。

「これが連携攻撃なんやなあ。大切な人達と一緒に戦う力……」

ソシエは感動しているようだ。今度は俺の部屋で2人の連携強化をしよう。

「完璧に揃うと気持ちええもんやなあ」

なんだかんだで、ユエルも気に入ってくれたようだ。

「次はフォーメーションを変えてやってみよう。大丈夫、俺達ならできるさー!」

俺の言葉に全員が力強く頷いた。

そして、火湧く地底の索敵任務。敵が火属性なので、リーシャがバックアップに回る。さらに、チェインバーストの合図を前衛のソシエに任せることにした。

「四天洛往斬!」

「九尾様に捧げる舞が一つ、白之舞・天華!」

「これがウチの全力や! 融月緋刃!」

「エネルギーチャージ完了。ハイパーメガトンキック、発動します」

FULL CHAIN

「いくよ」『アブソリュート・ゼロ!』



なんと、まさかの一発成功である。流星は量産型ロボミ、すごい精密性だ。

というわけで難易度ハードも問題なくクリアして、パンデモニウムの調査許可が出た。とはいえ戦力的にはまだ不十分な面もある。しばらくはハードを周回するのがいいだろう。

その後、ある日の深夜。

「シエロカルテ殿、このトレジャー40個を売却したい。その20万ルピで設備拡充を頼む！」

ありがとう共闘、そして……名前を忘れた騎空団連合。いよいよニオのお迎えだ。

## 第15話 俺はヒビイロカネを捧げて二才を召喚するぜ

エピソード1

シエロカルテ殿から準備完了との連絡を受けた俺は、自室にリーシャを呼び出した。

「失礼します、隊長。私に手伝ってほしいことって……これは！」

「ああ、少し散らかっているだけだ。とりあえずこれを持っててくれないか」

俺は『九界琴・風』を手渡した。なにせ大事な天星器だ。これを守るのはリーシャしかない。つまるところ、彼女を呼んだのは荷物持ちをさせるためだった。

「それじゃあ順番に確認していいようか。まずは、柔らかい羽が300個」

俺の言葉に、室内にいた量産型ロボミが反応する。

「確認しました」

柔らかい羽300個が、量産型ロボミの輸送用バックパックに収納される。

「次に、風伯の羽が300個、原初の砂が100個、清らかな水が100個、固い土が100個、渦琥珀が100個、鷹の羽が100個、紅黄石が100個、虚ろなる魄が100個、ラクリモサが100個、予見の双葉が80個、オルデイネシュタインが80個、古代布が100個」

手元のメモを見ながら指示を出していく。この辺は、古戦場の戦貨で入手したトレジャーだ。輸送用バックパックに入りきらなくなったのか、途中から小型のコンテナに収納されている。リーシャは唾然としている。

「ティアマトのアニメマが100個、嵐竜の琥珀眼が80個、プロミネンスリアクターが20個、海神の扇尾が20個、創樹の花蕾が20個、プライマルビットが20個、黒霧の結晶が20個、真なる風のアニマが12個、真なる火のアニマが3個、真なる水のアニマが3個、真なる土のアニマが3個、真なる光のアニマが3個、真なる闇のアニマが3個、風の宝珠が950個、烈空の宝珠が100個、緑の書が250個、疾風の巻が150個、ウインド・ジーンが950個、風竜鱗が80個、星晶の欠片が250個、虹星晶が450個、覇者の証が30個、碧空の結晶が70個」

「すべて確認しました、マスター」

これらは、エンジェル・ヘイローや武勲の輝きの交換などで入手したトレジャーだ。さすがに量が多く、小型コンテナ2つが埋まってしまった。リーシャは呆然としている。

「次は宝晶石か。ちようど場所ができたな……そらあつ！」

俺はベッドをひっくり返した。その裏側には宝晶石が貼り付けられている。貴重なものなので、保管場所には注意しなくてはならないのだ。そのうちの2000個を量産

型ロボミに渡すと、それらは腹部の貴重品収納スペースに入った。

「最後はいよいよヒイロカネだ。確かこの辺だったか……」

ベッドのあつた場所の床板をベリベリと剥がすと、そこには紛れもなくヒイロカネが鎮座していた。これは四象イベントで入手して、すぐここに隠したものだ。俺は慎重に取り出すと、しつかり両手で握りしめる。

「見ての通り俺も手一杯だから、その九界琴を持って一緒に来てほしい」

リーシャがいれば強奪されることは無いだろう。防犯能力の高さは俺がよく知っている。

「……」

リーシャは愕然としていた。

## エピソード2

天星器とは、数百年前に伝説の名工が作った十種類の武器である。古戦場に埋まっていたそれらを、磨いて属性の力を宿して強度を高めて純度を高めて濃縮することで、ようやく覚醒するのだ。

「そうして覚醒したのが、その『九界琴・疾天』だ」

「なるほど、確かに強大な力を感じます。あれだけのアイテムを必要としたのも納得で

す」

よろず屋からの帰り道、手にした九界琴を見てリーシヤは感動しているようだった。だが実際のところ、覚醒したからといって大幅に強くなるわけではない。自分で装備することだけを考えるなら、ヒヒイロカネを使つてまで覚醒させなくても十分だ。

それでも、わざわざ覚醒させた理由は――

「ねえ、あなたの旋律を私に聴かせて」

――目の前に現れた彼女をハーレム要員にするためではない。

二オ、彼女は九界琴を覚醒させると確実に仲間になる女の子だ。落ち着いた言動で、大人っぽい雰囲気なのだが、ハーヴィンだから当然のように幼女性型である。合法ロリ万歳！ 普通の女の子とはできないようなプレイも楽しめそうで、今夜が待ちきれない。ともあれ、この戦闘に勝利しなくては。

「隊長、あの人はいったい……?」

「九界琴を覚醒させた俺達の実力を確かめにきた、つてところだな。心配しなくても傷つけあうことにはならないさ。ただ、決して油断はするなよ。あの力は団長にも匹敵するほどだ」

「父さんと……いえ、誰が相手でも全力を尽くすだけです」



たしか最初にデバフを入れて、その後で二オの演奏を聴いて……まさか魅了されていたのか？

「ちやうど終わったところですよ。隊長は大丈夫ですか？」

「あ、ああ。恐るべき精神攻撃だったが、その分そっちへの圧力は少なかったはずだ」

「はあ」

まさか俺が片手間に魅了されたとも思っているのだろうか。いくら二オが超ロリ可愛いからといって、そんなことはないに決まっている。多分。

「戦いの時でさえ変わらないのね……あなたの旋律は」

二オがふわふわと近づきながら話しかけてきた。

「あなたの感情が奏でる旋律は、いつもまっすぐ。その揺れない想いは、戦っている時もずっと聴こえていたわ」

「二オ……」

そうか、俺の本心を知りたくて魅了したんだな。大丈夫、二オへの愛は永遠だ。

「その綺麗な音、もっと聴いていたいわ。だから……」

「ああ、一緒に行こう！ いいよな、リーシャ」

「ええ、共に秩序を目指しましょう」

「嬉しい……」

ついに、俺にも両想いの相手ができただが、深い部分で通じ合えたのだから関係ない。それに、これから物理的な繋がりで愛を深めていけばいいのだから。

「さあ、二才」

俺は両腕を広げて、二才を抱きとめる体勢になった。二才は迷わずその胸に飛び込む。

「えっ、私ですか？」

「もちろんよ……私には貴女しかないもの……」

二才を抱っこすることになったのは、リーシャだった。

「ちよっ、話が違——」

「ねえ、貴女の部屋に行ってもいい？　ここは嫌な音が聴こえるの」

「え、ええ。……そういうわけなのでお先に失礼します、隊長。私の方から囑託団員の説明などしておきますね」

「そうじゃな——」

ポロンと弾かれた琴の一音で、俺の声はかき消された。そのまま去っていく2人。

「九界琴は弾ける？　貴女の演奏も聴いてみたいわ」

「いえ、私にはちよっと……」



「大丈夫……その想いをこめれば、九界琴は応えてくれるから。だから……いつか一緒に演奏してくれる？」

俺にはそれをただ見送ることしかできなかつたわけで。

数時間後。

「夜になりました、マスター」

「……あつ、ああ、シヨックで思考停止していたか……そうだな……帰るか」

二オが秩序執行巡空独立強襲隊に加入しました！

エピソード3

「ハーレム王に俺はなる！」

俺は改めて決意した。なぜならあれだけ苦労して仲間にした二オが、すっかりリーシャに懐いてしまい心が折れそうだったからだ。だがこれは逆に考えると、リーシャを攻略すれば二オも付いてくるということ、まだ最悪の状況ではない。そこで、まずは現在の状況を整理することにした。

まずは「本妻」のモニカだが、原作通りにリーシャをとて信頼しているようだ。お

菓子のおかげで俺への好感度も上がっているはずだが、まだ警戒されていると見ていいだろう。防犯ブザーを手放そうとしないし。

次に「愛人」のリーシャは、それなりの好感度があるはずだ。単独攻略なら、そこまで難しくもないだろう。

続いて「膝の上」のニオは、リーシャから離れたがらない様子だ。俺を隊長だと認識しているかどうかすら怪しい。いつたい俺の何が悪かったというのだろう。

そして「妾」のソシエは、第一印象からかチョロいからか、好感度は高めだと思う。ただ、彼女にはユエルがいるので、どうにかそれ以上の存在にならなくてはならない。最後に「ペット」のユエルは、ソシエへの愛ゆえに俺を嫌っているようだ。

ここまでの情報を相関図にすると、以下のようになる。

モニカ↓リーシャ↑ニオ

俺

ソシエ↑↓ユエル

これを見ると、なんとなくハーレム作品っぽく見えなくもない感じだ。むしろプロローグの時点では、大抵の作品がこんなものだろう。

さて、それを踏まえた上で、それぞれの攻略について考えてみたい。

モニカ：リーシャを召喚されるうちは現状維持。

リーシャ：最初に攻略すると浮気できないので後回し。

二オ：リーシャ攻略後に攻略可能となる。

ソシエ：ユエルに警戒されていると厳しい。

ユエル：ただ好感度が低いだけで、むしろ仲良くなるとソシエの嫉妬も煽れる。

結論としては『ユエルときどきソシエ、忘れずにモニカ』といったところか。

そんなわけで、ユエルとのデートのために、頼れる隊員たちに色々聞いてみることにした。

「休憩中に悪いな。ちょっと聞きたいんだが、女の子を誘えるようなカフェを知らないか？」

「いくつか心当たりはありますが……隊長、いったい『誰と』行くつもりですか？」

気のせいか彼らの表情が硬い。もしかして接待か何かと勘違いしているのだろうか。

「ああ、親睦を深めようと思ってな。副隊長の——」

隊室から一切の音が消えた。なぜか全員がこちらに注意を向けているようだ。

「——ソシエや、その補佐のユエルと、だ」

「なるほど！　そうでしたか！」「それなら俺たちに任せてください！」「全力でお手伝いしますよ！」「カフェ以外にも色々と紹介できます！」「ソシエ副隊長たちの好みはご存知ですか？」

「たしか油揚げと魚が好物だったような……」

それを聞いて隊員たちは口々に意見を出し合った。「それなら大通りのレストランが」「いや商業区にも」「発着場だと新鮮だ」「混雑よくない」「専門店はどうか」などなど20人全員が議論に参加していた。……何故？

そして信じられないことに、数分後には完璧なデートプランと各店の無料招待券が用意された。

「えっ、これ本当に貰っていいのか？」

「はい、いつもお世話になってる隊長への感謝の気持ちです！　どうか受け取ってください」

「ありがとう。しっかりと親睦を深めてくるよ」

上司想いの隊員たちに感謝しつつ、俺は隊室を後にした。

「他の女性と恋仲になれば、いくら隊長でもリーシャ様に手を出そうとは思わないだろ

う」

「ああ、リーシャ様のためを思えばあれぐらい安いものだ」

#### エピソード4

アビリティについて考えてみよう。リーシャは隊員を指揮することで「味方攻撃アツプ」を習得した。俺は死にかけることで「ダメージ無効」を習得した。ならば、ユエルが「回復&弱体解除」を習得するには……。

「ソシエを酔わせて『出血』させればへぶっ！」

いきなり後頭部をぶん殴られたので振り返ると、怒った様子のユエルがいた。待ち合わせ時間を少し過ぎているというのに逆ギレとは、秩序的では無いですよ。

「アンタは……こんな往来で何を言うてんねん！」

「い、いや、違うぞ。俺は『ソシエの陸之舞で弱らせて敵を失速させる戦術パターン』を考察してただけだ。『ソシエが弱らせて失速させれば』って言ったんだ」

「はあ？」

そこに、ソシエが小走りで行ってくる。

「ユエルちゃん、先に行かんといてって。あつ、隊長はん、遅れてもうて堪忍な。ユエルちゃんが寄り道しとって……」

「そんなん言うとする場合やない！ 隊長がソシエに酷いことするって！」

「誰より優しい隊長はんが、そないなわけあらへんやろ」

「こんな場合は言った言っていないの水掛け論をしても仕方ない。攻めるべきはソシエだ。」

「すまない、また俺が誤解させるようなことを言ってしまったせいで……。でも、そんな勘違いをするほどユエルが友達想いだって知ってるから、気にしなくて大丈夫だ」

「もう、ユエルちゃんつたらー！」

「このように、口下手アピールしつつ、ユエルを持ち上げる感じに誤魔化すと大抵は上手いのである。安定のチョロさだ。」

「今日こそアンタの化けの皮をはがしたるからな！ 行こ、ソシエ」

そんな感じでユエルに睨まれつつも、街の案内という名目のデートが始まった。

「この魚！ 焼き具合と塩加減が絶妙すぎて最高やな！ 大将、もう一人前追加や！」

「ユエルちゃん、食べすぎとちやう？」

「これやったらいくらでも食べられるで」

「ウチ、サーカスって初めて見たわ。すごかったな、こうバーツとドーンて」



北は既に確定しているのだ！

「そうか、残念だ。せっかく『色違い』を準備したのに、ユエルには迷惑だったか……」  
「ユエルちゃん、うちとお揃いにしいひん？」

「うっ……ま、まあそこまで言うんやったら貰ったるわ。感謝しいや！」

悔しそうに俺から髪飾りを受け取ったユエルは、さっそくソシエと着け合ったりしている。相変わらずの仲良しっぷりだ。だが、それを利用すれば2人とも攻略できることを、俺は今日のデートで確信した。この後は俺の部屋に連れ込んで、もっと親密に……。

「よお、ずいぶんと楽しそうじゃねえか。オレ様とも遊んでくれよ」

「ガンダルヴァアー!!」

結局、出血（普通の意味で）したのは俺だったというオチだ。



## 第16話 深遠なるパンデモニウムの檻に封じこめられて

エピソード1

彼女は突然に現れた。夕暮れ時の俺の部屋、武勲交換に悩んでいた俺の目の前に、その女性は前触れもなく出現したのだ。

「どうして……?」

ガチャを引いたわけでもなく、それらしい武器を入手したわけでもないのに、まさか彼女の方から来てくれるなんて。もしかして俺の名声が広まった結果なのか? ともあれ、この機会を逃すわけにはいかない。見た目よりも年上で、頭には2本の角、大胆に肩を露出していて、ふとももが眩しい彼女は――

「私はオリヴィエという、見ての通り星晶獣だ。君達の仲間になりたいと思っている」  
――マジ天使（本物の墮天司）なのだから。

とりあえず話をしようと着席を勧めて、一応は紅茶（安物しかなかった）を出しておいた。今の彼女には無意味だと思うが、これも形式というものだ。ただ、珈琲は地雷か

もしれないので止めておくのがいいだろう。

「どこから話したのか……。私は最近になつて永き眠りより目覚めたのだが、ヒトの世界が興味深くて各地を渡り歩いていったんだ」

天司長とかの情報収集のためですね、分かります。

「そんな中で君達の姿を見た。星晶獣を恐れず正面から戦い、見事に勝利していたな。そしてあの何だったか……。騎空団連合からも認められて、パンデモニウムの調査を任せられるほどだとか」

パンデモニウムには同朋達がいるんだつたな。あわよくば封印をどうにかしたいわけだ。

「その一方で、先日はルーマシーの黒月森で星晶獣と交流していたようだ。彼女と話してみて、君が星晶獣に対して無条件で攻撃しないことも分かった」

先日……。銀天とハンドクリームを交換した時か。ロゼッタ、グッジョブ！

「元々、目的もなく過ごしていた身だ。同じ空に生きる者として、共に戦うことで私も全空の秩序を守りたいと思っている」

ふむ、よくできた作り話だ。さて、秩序の騎空団員としては、天司長の打倒や墮天司達の解放を目論む彼女の加入を認めていいものか……。

「そういうことなら大歓迎だ。一緒に秩序を守ろう」

もちろん認めるに決まっている。理由なんて『オリヴィエのふとももが眩しいから』だけで十分だ。そもそも、こんなミニスカなのに秩序の騎空団員でない方がおかしい。あのモニカやリーシャにも負けなくらい短いのだから。それに、籠絡してハーレム要員にすれば、役目とかどうでもよくなるはずだしな。まずは俺のアイスクャンディをたっぷりと味わうがいい。

「これからよろしく頼むぞ、ヒトの子よ。いや、隊長殿と呼ぶべきか」

「ああ、こちらこそよろしく。宵闇の力を存分に振るってほしい」

敵に特殊技を使わせない『宵闇の恐怖』は、今後の戦いで非常に役立つはずだ。

オリヴィエが秩序執行巡空独立強襲隊に――

「今……『宵闇』と、言ったな？」

「あつ」

ちょうど太陽が沈んだ。ここからは彼女の時間だ。

エピソード2

すっかり臨戦態勢になってしまった、墮天司オリヴィエ。翼を広げた彼女はあまりに

も綺麗で、命の危機に瀕していることすら忘れてしまうほどだった。というか、いつそ忘れたかった。

「話してもらおう、なぜ私が宵闇を司ると知っていたのかを」

「いや、そんな雰囲気が出てい——」

俺の言葉が終わる前に、投擲された剣が頬をかすめて背後の壁に刺さった。くつ、やはりソシエほどチョロクはないようだ。

「分かった、正直に話そう。俺が知っている情報を」

適当に時間を稼ぎながら打開策を考えることにする。ハンサムの俺は突如反撃のアイデアがひらめくはずだからだ。前提として、武器は装備していないし今から装備できるとは思えない。

そうだな……床の穴を利用するのはどうだろう。ベッドの下の穴を面倒で塞いでなかったのが役立つという展開だ。だが、今からベッドをひっくり返すより武器を装備する方が早いだろう。

それなら、目の前の紅茶を剣にぶっかけたらどうなるか。熱膨張について適当に語れば生き残れるかも……いや、ありえない。

「まず君の正体は……墮天司オリヴィエだな。パンデモニウムに封印されているはずの」

考えつつ時間稼ぎを続ける。自分だけでは何もできないかもしれないが、仲間がきて助けてくれるかもしれないのだ。そうだ、リーシャを呼ぼう。からあげにレモン汁プシヤアアア!

来ない。まったく、来てほしい時に限って来ないのだから困ったものだ。秩序仕事しろ。ニオや量産型ロボミなら超感覚で気づいてくれないかと呼びかけてみたが、状況は変わらない。

こうなったら貴方だけが頼りです、ホワイトトラビットさん。適当にびよんびよんしてオリヴィエの隙を作ってくれないでしょうか。……そんな俺の願いも虚しく、兎野郎の反応も無かった。

「俺がそれを知っている理由は——」

ここに至っては、現実是非情であると認めなくてはならない。だから、始めようか……命がけの攻略を。

「同朋だからだ」

「……なに？」

「だから、俺も実は墮天司なんだよ」

「ヒトの子が、気安く墮天司を騙るなどっ!」

激昂したオリヴィエに左肩を浅く斬られる。わりと痛い、我慢できないほどではな

い。

「確かに、この器はヒトの子と同じものだ。諜報活動のため、そのように造ったのだから。おかげで派手に行動しても、天司共は俺の正体に気づけない」

「だが、私以外の同朋が活動しているという話は聞いていない!」

「当然だな、そのように命じたのだから。どこから情報が漏れるか分からないし、俺のことを知る者は最小限に留めてある。無論、誰に訊ねても『そのような者は知らない』と答えるはずだ」

「それでは本当に同朋であるという確証が……」

よし、適当にでっち上げれば殺されずにすみそうだ。思い出せ、墮天司関係の設定を!

「あれは……2000年ほど前のことだったか。天司サンダルフォンと共に星の民に反旗を翻し、天司長ルシフェルと戦ったよな。俺もアザゼル達と多くの敵を打倒したものだ。だが、あの憎き四大天司のラファエルに敗れ、パンデモニウム——あの輪廻の星晶獣に封じられてしまった」

「確かに。ただのヒトの子が、そこまでの事情に通じているはずもないな。ラファエルへの恨みも本物のように思える。だが、まだ天司であるという可能性も捨てきれない……違うか?」

「君が望むなら、天司長の肖像でも踏みつけてみせよう。そもそも奴らには、そのような奸計を弄することなどできまい。虚言、欺瞞は我ら墮天司の領分なのだから」

「……その言葉。もしかして貴方は、いえ貴方様の正体は——」

「おっと、それ以上は言わないでくれ。名前を出すことで奴らの探知に反応する危険性がある」

つい調子に乗って、演技が過剰になっちゃったかもしれない。誰だよ『貴方様』つて。そんなペテン師みたいな奴がいるのかよ。とりあえず適当に捏造したけど矛盾は無いように一安心だ。あとはこの流れで、墮天司としても部下にしたい。

「失礼しました。それと先程までの態度も謝罪します。処罰はどのようになっても」

「いや、それだけ君が慎重だったということだ。その判断力は、今後も調査をしていく上で重要になってくるだろう。処罰どころか褒賞を与えてもいいほどだ。それから、話の方も今までと同じでいい。ここでの俺はヒトの子に過ぎないのだから」

「では、そうさせてもらう。それで、その、隊長殿がここにいるなら、私は別の場所を調査した方がいいだろうか」

「うーん……一理あるが今回は共同でいこう。君が星晶獣としての存在感を示すほど、俺が影で動きやすくなるからな。それに、君ほどの戦力が側にいると心強い」

「それは光栄だが、つまりそこまでの重要な調査対象がいるのだな」

ゆっくりと頷き、肩の傷を治療しながら考えをまとめる。オリヴィエにとって重要なのは、パンデモニウムの封印、天司長の情報、それに戦力の増強といったところか。それだったら……。

「以前、星晶獣の力で空間に歪みが生まれて、異世界と繋がったことがあった。だが、その空間の歪みはすぐに消されてしまったんだ。俺の部隊にいるリーシャの一撃によつて」

「星晶獣を上回る空間干渉能力……ならばパンデモニウムの封印も！」

「その可能性は高い。現在、その力の分析や強化を進めているところだ。同時に秩序の騎空団における俺の地位を向上させて、団長としての命令で団員達を奴らにぶつけることも考えている」

「なるほど、この規模の組織であれば、捨て駒として多少は役立つだろうな。そういうことなら、この墮天司オリヴィエの力を存分に役立ててほしい。全身全霊をもって隊長殿に仕えよう」

どうにかなった！　ありがとう原作知識。おかげでオリヴィエを攻略できそうです。

オリヴィエが秩序執行巡空独立強襲隊に加入しました！



## エピソード3

さて、せっかく俺の部屋でオリヴィエと2人きりというシチュエーションなのだ。少しぐらいは手を出さないと勿体ない。

「他の情報も共有しておこうか。必要であればオリヴィエの方で報告しておいてほしい。俺は迂闊に同朋と接触するわけにはいかないからな」

「しかし、それでは私が隊長殿の功績を奪うということに……」

「すべては大願のためだ。功績など、俺にとつては些細な問題でしかない」

「確かに。それならば、私が責任を持って報告しよう」

墮天司に褒められるよりも、オリヴィエの好感度が大事なのは言うまでもない。

「まずは1000年前に作られた魔獣、九尾のことだ。その強大な力には利用価値がある。そのため、俺の部隊にいる関係者のソシエ、ユエルとは信頼関係を構築中だ」

「ふむ」

「次に数万年前の失われた技術の産物であるロボミ。量産化に成功すれば、その力は一軍にも匹敵するだろう。現在は、ある研究所でその解析を進めさせているところだ」

「なるほど」

「最後に全空一の楽器の使い手である二才。精神操作系の能力者だ。リーシャを使えば間接的に指示を出せるため手元に置いている」

「なんと」

だいぶ適当な説明になってしまったが、十分に有能アピールはできただろう。

「君も普段から彼女達と交流を深めて、色々と情報を聞き出してほしい。もつとも初めから本題に入ると警戒されるだろう。まずは、好きな食べ物や、最近の嬉しかったこと程度でいい」

「了解した。それにしても、たったの数年間でそれだけの成果を出すとは流石だな」

うん、俺も気づいたらこんな状況になって驚いてる。もつと普通の女の子とか来てくれていいんだよ、ジオラとか。とりあえず、そろそろ本題に入らせてもらおう。

「(ガチャ) 運に恵まれたただけだ。ところで、その肉体を少し見せてもらってもいいだろうか」

「ああ、別に構わないが……」

「これは非常に重要なことなんだ」

「解った、隊長殿の好きにしてくれ」

そう言うとおリヴィエは歩いてきて、俺の前で立ち止まる。よし、不自然でない程度に好きにしちゃうぞー。

まずは腕を触る。軽く押ししたりして『このようになってるのか』などと呟きながらだ。この細腕に殺されかけたりもしたのだが、今となってはどうでもいい。

次に露出している肩を触る。とても滑らかで、一日中でも撫でていたくなるほどだ。だが、あまり時間をかけると不自然になってしまう。指の先で軽く押してみると『んっ』という声漏れて、理性が崩壊しそうだった。

そしていよいよ胸だ。服の上から、掌全体を彼女のふくらみに接触させる。ついに、俺は女の子の胸を手中に収めることができたんだ！ だが、これだけで済ませる理由は無い。俺は手に力を込めて、そのおっぱいを揉もうと――

「隊長、隣の部屋から『急に壁から剣が生えてきた』と苦情が……出て……い……い……」

ノックもせずに部屋のドアを開けたのは、やはりリーシャだった。秩序は仕事した。遅えよ！

「ああ、これは隊長殿に肉体を調べてもらっているだけだ。何も問題ない」  
オリヴィエ、その言い訳は駄目だ……。

その後のことは、詳しく語る必要もないだろう。剣に続いて、俺も壁に刺さったというだけの話だ。結論：武勲交換はHPが増えるシユバ剣にしよう。

「隊長殿、あの件があつてリーシャ副隊長とは親しくなれた。これが狙いだつたのだな」

「あ、ああ、完全に想定通りの結果だ。ところで、あの時の続きをしたいんだが」  
『『そういつたことは、もっと親しくなってからだ』と答えればいいのだろう、解つて  
いるや』

「……そうだな」

#### エピソード4

古戦場。かつての霸空戦争における激戦地で、周期的に星晶獣が目覚めるイベントだ。

「それでは、今回の古戦場についての編成を、隊長から説明してもらいます」

騎空艇ピースメーカーの会議室、進行役を務めるのは副隊長のリーシャだ。諸事情で俺から最も離れた位置に立っている。

「今回も例によつて、肉を集めるシフトA、肉を使うシフトBの2シフト制でいく。シフトAは、俺、ソシエ、ユエル、量産型ロボミがバトルメンバーだ。他の3人は自由行動とする」

古戦場では、弱い魔物を倒し、その肉で星晶獣を引き寄せて戦闘することになる。つまり肉集めとは単純作業であり、今回は星晶獣戦の主戦力となる3人を温存することにしたのだ。

「シフトBは、前衛が俺とリーシャ、後衛がニオとオリヴィエ、バックアップが量産型ロボミ、戦闘後に笑顔でタオルを渡すのがソシエだ。ユエルは情報収集の機会を活かしてほしー」

今回の星晶獣は土属性なので、俺もアナトを装備して風属性編成で挑む。闇属性のオリヴィエだけは恩恵を受けられないが、地力が高いので心配いらなだろう。昨日までエンジェル・ヘイローを嬉々として周回し、経験を積んでいたのだから。俺の視線に力強く頷くオリヴィエ。

「ちよつと待ちいや！　なんでソシエがそんな役を！」

「いや、ソシエ一人で情報収集するのは、まだ少し難しいと思つて」

「ちやうわ！　タオルぐらい自分で出せばええやろ！」

「……想像してほしい。もしソシエに笑顔でタオルを渡されたら、どう感じるのか」

「そんなん……何十回でも余裕で戦えるわ！」

「ユエルちゃん、うちな頑張つてタオル渡すから」

「ソシエー」

また、部屋の反対側でも。

「ニオ、(皆さんの) サポートはお願いしますね」

「(貴女のサポートは) 任せて、リーシャ」

そんな感じで、事前準備は万全だ。

数日後、俺達は順調に星晶獣テイラノスを倒していた。戦闘の流れとしてはこんな感じだ。

「我が剣に勝利を！」（エアリーフェザーが発動！）

「大丈夫だよ。私に合わせて弾いてみて」（クオリアが発動！）

まずはリーシャとニオによるステータスアップだ。攻撃力、防御力、そして連続攻撃率を上昇させて、こちらに有利な状況にする。続いて俺が敵のステータスをダウンさせると、交戦開始だ。

「覚悟はよろしいですか？」（ソニックブレードが発動！）

「うるさいのは嫌い」（ニンアナンナが発動！）

リーシャが遠隔攻撃を放つてから、ニオが昏睡させる。昏睡中は防御力が更に低下して、行動不能になるのだが……。

「眠らないの？」

「問題ない。オリヴィエ！」

「恐れ怯えよ。平伏すがいい！」（シルバレーイクが発動！）

たまには昏睡しないこともある。だが、そんな時のためのオリヴィエだ。『宵闇の恐

怖』で動きを鈍らせて……。

「くっ、昼間は日差しが……」

「こうなったら真つ向勝負だ！ 大技には気をつける！」

まだ慌てる時間じゃない。そもそも、地属性の敵に闇属性の『宵闇の恐怖』は相性が良くないのだから。ただ、こちらにはスロウもある。全部が通つたら、特殊技の前に二才の昏睡が再使用可能になるんだ！

「思惑通りにはいかせん！」（モーター・シンが発動！）

「いいぞ、敵は怯んだ！ 次は俺が……あつ」

「ギャオオオオオオオ!!」（テイラノスのブレッツチャブローが発動！）

あろうことか俺が2回目のスロウを外してしまい、予定よりも早く『ダメージ無効』を使わされてしまった。

「救援！ 救援依頼を！」

慌ててポーションを飲んで戦線を立てなおす俺達。残念だが今回は外部と協力して討伐することにしよう。速さ大事。

そんなレアケースにも、めげずに走り続けるのだ。古戦場からは逃げられないのだから。

## 第17話 だから俺はハーレムができない(略してDO)

エピソード1

秩序の騎空団第四庁舎、秩序執行巡空独立強襲隊の隊長室にて。

「——であるからして、ここに反省の意を表すものとする。つと」

始末書を書き終えて一息つく。それにしても、この1年で色々とあったな。モニカが来て、ソシエを引いて、ユエルに襲われて、ニオに魅了されて、オリヴィエを言いくるめて……。今後もこの調子で可愛い女の子を加入させたいものだ。まだ美少女ドラフトとは出会えてないし。

「体型としてはモニカが近いんだけど……あー、挟まれないな」

「マスター、分析が完了しました」

側にいた量産型ロボミに話しかけられる。彼女は多機能なので、色々と任せているのだ。

「おお、ついにできたのか！ モニカの声紋分析が！」

「はい。これにより、どのような言葉でも再現可能です」

要するに、モニカのボーカロイド化に成功したということだ。必要な音声サンプルを



得るためにモニカを追い回したり、その結果リーシャに追い回されたりしたのだが、必要経費としては安いものだ。さっそく言ってほしい台詞を、近くの紙（始末書だったもの）に書く。

「これを頼む」

「了解しました、マスター」

紙を受け取った量産型ロボミの口から、モニカの声で『あの台詞』が飛び出した。

「魔法提督ラブリー☆モニカ！ 秩序に代わって指揮を執る！」

「おお、間違はなくモニカだ。素晴らしい！」

その時、隊長室のドアが勢いよく開いた。その向こうに立っていたのは本物のモニカだ。彼女の可愛い顔は羞恥で赤く染まっている。

「き、ききき、貴様っ！ 今のは一体どういうことだ！」

「いやその、違って……」

「どうして私の過去を知っている！ まさか貴様もあの空域の出身なのか！」

ん？ 私の過去って？ もしかして、この世界のモニカも魔法少女してたのだろうか。私の過去って？

「もしこのことが団員に知られれば、今まで積み上げてきた私の威厳は地に落ちるだろう。他の者には黙っていてもらえないか」

あつ、これつて脅迫できそうなやつだ。

「頼む……私にできることなら何でもするから」

「何でも！」

今、モニカが『何でもする』つて言った！ 俺の脳内で、瞬時に様々な欲望が駆け巡る。

「ただし『この場で済むこと』に限らせてもらうぞ。それ以上を要求するならば、私としても穏便な解決を諦めることになる」

「分かったよ。それで、このことは誰にも言わないと誓う。モニカへの愛にかけて」

「またつ、貴様はそういう！ いや、いいだろう。あれだけ愛を口にするような奴だからな」

さて、何を要求しようか。例えば、結婚などは今後にも影響するから駄目だろう。それに婚姻届を書かせたとしても、後で離婚されればそれまでなのだから。次に、キスなんかも駄目だ。実際のところ可能ではあるだろうが、こんな状況でキスしても許されるのは少女漫画の世界だけだ。それに、モニカとは恋人になつてからロマンチックなキスがしたい。そもそも、攻略後に頼めば普通に色々とさせてくれるのだから、ノーマルなことを言つても意味がない。

つまり、恋人にも普通はしないようなマニアックなことを要求するのが正解だ。俺は

身構えた様子のモニカを、じつくりと上から下まで眺める……つもりだったが大きな胸から目が離せない。

「ううっ」

両腕で自身の身体を抱きしめ、涙目で睨みつけてくるモニカ。

「私には……任務があるんだ……どんなことだろうと……」

そんな彼女を眺めること数分。考えた末にようやく結論が出た。

「決まったよ、モニカ。今からここで……魔法少女に変身してほしい」

「いいだろう。その程度なら……えっ?」

よし、『いいだろう』って言った!

エピソード2

「だから、魔法提督ラブリー☆モニカに変身するところを見せてほしいんだ。やっぱり変身シーンは男のロマンだし」

ぼかんとした顔のモニカだったが、俺の言葉にだんだんと焦りを見せる。

「駄目だ駄目だ。そんな恥ずかしいこと、できるはずがないだろう!」

「『この場で済むこと』なら『何でもする』って言ったのに?」

「それは……その……」

一向に変身しようとしなないモニカに対して、俺は最後の手段を使おうと彼女の前行く。そして両膝をつき、額を床に擦りつけた。生まれて初めての土下座だ。

「お願いします。変身するところが見たいんです。どうか俺に御慈悲を！」

「分かった、分かったからそれを止める」

どうやら俺の誠意が伝わったらしい。顔をモニカの方に向けると、すごく嫌そうな表情だった。

「一回だけだからな。いくぞ」

そう言った次の瞬間、モニカの全身が光に包まれた。そして、着ていた服が粒子となって消え、ボディラインがはつきりと分かる状態になる。その後、光が衣装の形になって次々と着用されていくと、数秒後にはラブリー☆モニカになっていた。

「おおおおお！」

「これで満足したな。約束は守るんだぞ！」

相変わらず嫌そうな表情のモニカ。だが、魔法提督の格好はよく似合っていて、まだまだ現役でいけそうだった。ただ、胸のあたりが窮屈そうだが……これはこれでいいものだ。

「待ってくれ、まだ完全には終わってない」

「なんだと?」

「ちゃんと名乗りを上げないと、変身したとは言えないだろ」

「そんな理屈が……」

「魔法提督ラブリー☆モニカに変身したら、魔法提督ラブリー☆モニカって名乗らないと、魔法提督ラブリー☆モニカの存在感を示せないし、それで魔法提督ラブリー☆モニカが——」

「やる！ やればいいんだろう！ 本当にいけ好かない奴だな」

「もちろん笑顔でお願います。あの頃を思い出して」

「ええい、こうなつたらとことんやってやる！」

モニカは深呼吸すると、とびっきりの笑顔になった。

「ラブリー！ キュアリー！ ブレイブリー！ マジカルレベル・インフィニット！」

バタンツ！

「魔法提督ラブリー☆モニカ！ 秩序に代わって指揮を——」

「隊長！ 緊急事態です！」

「執……る……」

その時リーシャが見たのは、尊敬するモニカの魔法少女姿と、土下座したままの俺だった。

「えっ！ あの……その……お、お邪魔しました！」

あまりの状況に、秩序とか言えず立ち去るリーシャ。

「終わった……何もかも……」

愛も希望も失った顔で呆然としているモニカ。

『映像、音声は記録できたか？』

『はい』

ハンドサインで成果を確認する俺と量産型ロボミ。個人で楽しむ分には何も問題ないのだ。後でスロー再生しよう。

エピソード3

数十秒後、隊長室に戻ってきたリーシャから、大規模な魔物の群れの襲来を告げられる。

「クルヴィ山脈で大量発生した魔物が、一齐にここ第四庁舎に向かっているようです。群れの中には上位個体もいて、現在の本部戦力だけでは対処できそうにありません」

「それは一大事じゃないか。私は船団長のところへ行く。貴公らの戦力には期待しているぞ」

既に変身解除していたモニカは、いつも通りの毅然とした様子で去っていった。

「隊長、私達も早く行動を……!」

「その前に状況確認だ。本部戦力だけで厳しいなら、他の騎空団にも依頼を出すのか？」  
「はい、おそらく周辺の島からも騎空士を集めることになるでしょう」

魔物の群れ、予告イベント、集結する騎空団……どうやら『ディフェンドオーダー』が始まってしまったようだ。蘇る忌まわしい記憶の数々。あんな戦闘は2度としたくない。

「それだと人数が多すぎて、間違いなく混乱が発生するな。戦闘に参加できない者もある」

「たしかに、その危険性は十分に考えられます」

「だから、リーシャは指揮系統の構築に取りかかってくれ。隊員達も好きに使って構わない。上層部と協力して、戦いやすい状況を作ってほしい」

「了解しました、隊長」

リーシャに任せておけば、多くの騎空団が秩序的に動けるはずだ。俺の方も、ボス戦に向けて消耗品の準備をしておこう。

そして、全ての準備は順調に進み、まもなく戦闘が開始する頃。

「それにしても、どうして急にディフェンドオーダーが始まったんだ？」

1人で暇だった俺は今回の原因について考えていた。こんな死にコンテンツをやる

意味なんて無いはずなのに、まるで某プロデューサーの気まぐれのような……はっ、まさか！

「ラファエル……！」

「隊長殿、やはりこれは天司の仕業なのだな」

「うえっ！ あっ、あー、その可能性が高い。おそらくオリヴィエの意図を探るためだろう」

「なるほど、私が必死で隊長殿を守ったりすれば正体が推測できてしまう、ということか」

「その通りだ。情報を得るためなら、ヒトの子の犠牲など気にせず魔物をけしかけるさ」  
急に現れたオリヴィエに、どうにか話を合わせる。実際のところ天司達は無関係だろう。もつとディフェンドオーダーである必然性が感じられるのは……ディフェンドオーダー、大勢の参加者、大勢のマルチバトル、大勢のデイル、ブラックラビット！  
まさか、あの時の黒兎が！！

（彼女なら、運勢操作で魔物を大量発生させることも可能ぴょん）

頭の中で兎野郎の声が響く。……別に原因とかどうでもいいよな。大事なのは未来だ。



## エピソード4

リーシャの全体指揮によって、次々と倒されていく魔物の群れ。そして俺達は、ボスに向かって走っていた。

「第2防衛線も突破された。あれ以上は放っておけない！」

「はい、マスター。対象の足止めに専念して、味方の参戦を待つのが効果的な戦術です」

「隊長はんの大切な場所のため、うちも頑張るから！」

「ソシエだけに戦わせたりせえへんからな！」

「隊長殿、右前方に魔物の群れがいるぞ」

「すぐに眠らせるわ……私だってリーシャに頼まれたから……」

量産型ロボミ、ソシエ、ユエル、オリヴィエ、ニオと共に群れを突破していく。だが、そんな俺達の前に、ボスの支援部隊が立ちはだかった。ヘルハウンド、火属性の速攻部隊だ。

「こいつには装備変更しないと……」

「ここはうちに任せて。隊長はん達は先に！」

「心配せんでも、すぐに倒して追いついたるわ！」

「頼む、危なくなったら撤退していいからな」

ソシエとユエルが離脱する。だが、少し進むと再びボスの支援部隊が出た。グラウンド

シザース、水属性の防御部隊だ。

「ここは私が残ろう。この状況なら存分に力が振るえるからな」

「ああ、助かる。量産型ロボミもサポートに残ってほしい」

「了解しました、マスター」

オリヴィエと量産型ロボミが離脱する。しかし目標の間近で、またしてもボスの支援部隊に阻まれる。ワイバーン、風属性の攻撃部隊だ。

「よお、オレ様も混ぜろよ」

「ガンダルヴァー！」

「ここは——」

「お前に任せて俺達は先に行かせてもらう。勘違いはしない、俺を殺すのはお前だからな！」

「あつ、オイ！」

急に現れたガンダルヴァーに敵を押し付けて、先を急ぐ俺と二才。いよいよボス戦だ。

ボスは土属性のトロールだ。鈍重な動きではあるが、一步步確実に近づいてくる。俺達は第3防衛線から少し前に出たところで待ち構える。あと数分でボスとの戦闘が始まるだろう。

「こうして2人きりになるのは——」

「やめて」

ニオは相変わらずだった。ひよつとすると、迫りくるトロールよりも手強いかもしれない。そんなことを考えていると、目の前に2人の少女が降ってきた。

「2人だけで足止めなんて、隊長の無茶にニオを巻きこまないでください」

「加勢に来た。今の私は少々気が立っているのだな」

「リーシャ！ モニカ！」

どうやら騎空艇から飛び降りてきたようだ。だが、2人ともここに来て全体指揮は大丈夫なのだろうか。……もつとも船団長からして最前線で大暴れしているのだが。

「あらゆる事態を想定した指示は、既に出し終えています。それに、戦いやすい状況を作ることが私の役割ですから」

「ああ……そうだったな。リーシャがいれば心強いよ」

「ところで、貴公は少人数での戦闘指揮に優れていると聞く。ならば、今だけは私も貴公の指揮下に入るとしよう。せいぜい上手く扱ってみせろ」

「ふっ、俺に任せておけ」

こうして、俺、モニカ、リーシャ、ニオの臨時パーティ（風属性）が結成された。もしかして、デیفフエンドオーダーって楽しいのかもしれない。

モニカが秩序執行巡空独立強襲隊に一時加入しました！

ボスが来るまで残り2分。俺はリーシャを近くに呼んだ。

「どうしたんですか、隊長」

「その……今のうちに渡したいものがあつてさ」

「えっと、それは今でないと駄目なのでしょうか」

「ああ、相手はかなりの強敵だからな。悔いの残らないようにしておきたいんだ」  
俺はポケットから指輪を取り出す。

「隊長、それって……」

「その通りだ。さあ、手を出してほしい」

「ええっ！ でも、私なんか……」

「リーシャが一番なんだ。だから！」

「……はい」

おずおずと出された左手を握ると、俺は人差し指に『覇業の指輪』をつけた。

Over the Limit!

攻撃力+1800、HP+900、弱体耐性+10%

「うーん、平均的というか、ぱつとしないというか、期待外れというか……」

「平均的……ぱつとしない……期待外れ……」

「とりあえず、もう1つ使ってみるか」

「えっ、いったい何を……？」

ポケットから2つ目の『覇業の指輪』を出して、リーシャの中指につけた。

Over the Limit!

攻撃力+2100、HP+1050、回避率+8

「あつ、回避！ どうせ付くならモニカの方が良かったな」

「モニカさんの方が良かった……？」

「まあいいや。こつちで上書きするぞ」

パキンと音を立てて、1つ目の指輪は砕け散った。

「あつ、ああつ……」

「これ以上は使っても数値が良くなるとは限らないし、一通り終わった後で試してみよう」

さて、次は二オに『至極の指輪』をつけてもらおう。あれは確か胸ポケットに……。

「あああああああああああああああああ!!!」

急に叫びだしたリーシャにぶん殴られて、俺は意識を失った。やっぱり理不尽な暴力ヒロインは駄目だと思う。

俺が目を覚ましたのは自室だった。

「やはり、ヒトの子の肉体というのは脆いものだな。それにしても隊長殿の策謀は素晴らしい」

混乱する俺に、オリヴィエが経緯を説明してくれた。どうやら、怒りのパワーでリミテッド覚醒したリーシャがブレイブコマンドを駆使してトロールを倒してしまっただけらしい。

「リーシャ副隊長が持つ無効化能力の強化、天司の目を欺くため戦闘からの自然な離脱。それを同時に達成してしまうなんて、隊長殿の頭脳は一体どうなっているのだ？」

「お、おう。別に大したことはないさ」

その頃、トロールと戦った場所にて。

「ぐすつ、隊長なんて……隊長なんてっ！」

「私も手伝うわ……『指輪の欠片』を探すの……」

「二才……」

## 第18話 俺とリーシャとモニカと船団長をめぐる戦い

## エピソード1

第四騎空艇団に所属する騎空士は、約半数がリーシャ非公式ファンクラブの会員だった。彼らはリーシャと共に秩序を守ることを喜びとし、日々の任務に励んでいた。しかし、モニカ船団長補佐の来空によって状況に変化が訪れる。リーシャとは違った魅力を持つ彼女に惹かれる団員も多く、モニカ非公式ファンクラブの結成は必然であった。

団員達はリーシャ派、モニカ派、中立派の3つに分裂し、勢力を拡大すべく互いに布教活動をしていた。そんな中、最も関心を集めていたのは『次の船団長について』だ。

だが、その時の俺はそんな情勢など知らず、気楽な日々を過ごしていた。

ルーマシー群島では――

「それでいきなり殴ってきてさ、普段から秩序秩序と言うわりに理不尽なんだよな」

「……呆れた。いいわ、今日は特別にお姉さんが恋愛指南をしてあげる」

「ええっ！ ロゼッタだって、別に恋愛経験とか無いだろ」

「は？」

「若いから！ そんなに若いから、つい外見だけで判断してしまっただ！ いやー、お姉さんの恋愛指南とかドキドキだなー」

数時間後、どうにか『ローズクリスタル』を取引できた。

よろず屋では――

「そうだな……今回はレヴィアンゲイズ・マグナを2つ頼む。それからローズクリスタルソードも交換したい」

「なるほど、そろそろ決戦というわけですね」

「ああ、シエロカルテ殿には、すっかりお見通しだな。今度こそ俺が引導を渡してやるよ」

「そうですか。今後が変わらず『お引き立て』をお願いしますね」  
水属性の装備を充実させることができた。

騎空艇でも――

「碧光の星晶炉を購入したいんだが」

「駄目です。隊長のせいで、部隊の資金は枯渇しているんですよ。そもそも今の『秩序の星晶炉』で十分ですよね」



「その……俺に『秩序的攻撃力アップ』は……」

「隊長、もしかして……」

「あつ、そんなことより次の休日にデートしようぜ。近所に美味しいラーメン屋ができたんだ」

「お断りします」

リーシャは冷たかった。リミテッドになって、調子に乗っているのかもしれない。

こうして日々は過ぎていき……。

エピソード2

その日は、朝から雲一つない快晴だった。リーシャなら秩序日和とか言いそうだ。

「5年か……ずいぶんと待たせやがって。さあ、あの日の続きといこうじゃねえか、小僧！」

「あれだけ襲っておいて、その台詞はおかしいだろ」

かつて戦った森の広場で、ガンダルヴァと最後の戦いが始まろうとしていた。

「オレ様が勝ったら、お前の命を貰う。精々あがいてみせるよ」

「好きにしろ。代わりに、俺が勝ったら船団長の椅子を貰おうか」

「いいぜ。それじゃあ——」

その言葉が終わる前に、俺は両手で持ったローズクリスタルソードで攻撃をしかける。奇襲は戦術の基本だ。だが、俺の初撃はあっさりと左手の鞘で受け止められてしまった。

「なんだ？ 待ちきれないのはお互い様ってか？」

「勘違いするな、別にそんなんじゃないし！」

そう、ただ先手を取って有利になりたかっただけなのだ。理想の展開は、抜刀する前に削り倒すことである。俺はひたすらに攻撃を重ねていく。ローズクリスタルソードは星晶獣ローズクイーン由来の武器であり、普通の武器と比べて頑丈にできている。それを両手持ちで振るえば、流石のガンダルヴァも防戦一方にならざるをえない。

「くくく……ずいぶんと強くなったもんだ」

「ああ、おかげさまでな！」

毎月のように火属性の敵が出る突発クエストがあれば、誰だって水属性を強化するさ。

「だがな、この程度が通用するなんて思うなよ」

ガンダルヴァは、俺の攻撃に合わせて剣を横から殴りつけた。そしてバランスを崩した俺が体勢を立てなおす間に、その刀を鞘から抜き放つ。

「……そ、そうだな。準備運動はこれぐらいにしておこうか」

「オレ様もようやく体が温まってきたところだ。ここからが本番ってわけだな」

まだ想定外の範囲だ。俺はローズクリスタルソードを右手に持ったまま、四天刃・雪を左手に装備した。ガンダルヴァの刀に対する新戦法……二刀流である。

「やっぱり、騎空士は四天刃じゃないとな」

「くはっ。そうだ、お前の本気を見せてみる」

力強く振るわれた刀を、俺はローズクリスタルソードで受け流し、すかさず四天刃で攻撃する。当然だ、メイン武器は四天刃の方なのだから。そもそも、ローズクリスタルソードは『火属性ダメージ軽減』のスキルを持つ防衛的な武器なのだ。だから、サブ武器として刀攻撃への対処だけに使うのが効率的だと言える。

だが、それでも状況は五分五分だ。軽減しきれないダメージが、じわじわと俺のHPを削る。このままだと、決め手となるのは奥義の使用タイミングだろう。ガンダルヴァも同じことを考えていたのか、今度は先手を取ってきた。

ブルブレイズバッター！

5年前に見た必殺の横一闪が、現在は数段上の威力で迫ってくる。それを俺は——  
(また助けられたな、リーシャ)

——アビリティで『ダメージ無効』にすると、カウンターで奥義を叩き込んだ。

## 四天洛往斬！

「ぐあつ……」

そして、大ダメージで怯んだ隙に連続攻撃で追い討ちをかける。たまらず刀を落とし、片膝をつくガンダルヴァ。

「はあはあ……俺の、勝ちだ……」

次の船団長は、この俺だ！

## エピソード3

「ははははははっ！ 楽しくなってきた！」

あれだけのダメージを受けたにも関わらず、ゆっくりとガンダルヴァは立ち上がった。その手に刀は握られていない。待て待て、完全に俺が勝つ流れだったろうが！

「一体どういうつもりだ」

「てめえには見せてやるよ、このオレの本気ってやつを！」

そう言つて、ガンダルヴァは徒手空拳の構えをとる。つまり今までは本気でなかったということなのだろう。さすがにこれは想定外だ。だが、ダメージが残っている今を逃せば、もう倒す機会はないかもしれない。いよいよ、俺も覚悟を決める必要があるそうだ。

「奇遇だな。俺も真の本気でいかせてもらおう」

「くくつ、そいつは楽しみだ」

とりあえずローズクリスタルソードを背負う。さて、どうやったら真の本気が出せるのだろう。……考えても分からなかったので、四天刃を右手に持った普段の戦法でいくことにする。

「うおおおオオオ！」

「オラアアアア！」

そして、互いの全力を込めた攻撃が激突する――

「団内の私闘は禁止ですよ……？」

——その直前に、俺の四天刃は『彼女』の左手で鮮やかに捌かれ、ガンダルヴァの拳は『彼女』の右手の剣で完全に受け止められた。

『どういふことだ、今日に限ってリーシャが来るなんて』

ガンダルヴァに視線で問いかける。

『今日の戦いが楽しみだったんで、いつもの偽装工作を忘れちゃった』

視線で返事がきた。……そうか、だったら仕方ないな。俺は早々に諦めることにし

た。

「だが、ちようどいい。お前ら2人まとめて相手してやるぜ」

「つまり、私闘を止めるつもりはない、と……？」

あつ、馬鹿！ 今の——秩序状態のリーシャに敵うわけないだろ！ 俺だつて何度やつても勝てる未来が見えないんだぞ！ そんな俺の心の声が届くことはなく、ガンダルフアは数秒で地面に倒れ伏した。

「見事だ……もうまともに動ける気もしねえ……。ここまでやれりやあ、オレにももう悔いはねえ……。最強は……リーシャ、お前にしばらく預けてやる」

ガンダルフアは身体を引きずるようにして、クルヴィ山脈の方に歩いていった。おい、勝手に終わらせるなよ。俺が船団長になれないだろうが！ と思ったが、リーシャが怖かったので何も言わなかった。

1カ月後、船団長補佐の執務室にて。

「失礼します。お呼びでしょうか、モニカ船団長補佐」

「よく来てくれた。次の船団長をどうするか、リーシャの意見も聞きたくてな」

ちなみにガンダルフアはクルヴィ山脈で修行中だが、失踪した扱いになっている。

「私の意見……ですか？」

「単刀直入に言おう。第四騎空艇団の船団長になる気は無いか？」

「えっ、私なんか、そんな……」

「そうは言うがな、あの魔物の群れの襲来で指揮能力の高さは見せてもらった。それに、あの船団長を真つ向から倒したのだろう？ 経験不足を不安視する声もあるが、そこは

私が船団長補佐としてサポートしよう」

「……もしそのお話を受けたとして、部隊は、いえ隊長はどうなるのでしょうか」

「あつ！ そうだな……彼はガンダルヴァ船団長の抑止力として入団したと聞いています。船団長が不在となった現状では、素行不良を理由に退団させても問題あるまい」

「しかし、その場合は前貸しした給料の回収が不可能になってしまいます」

「そうか……ならば、いつそ私がリーシャに代わって副隊長に……いや、それだけは無いな。仕方ない、私が船団長になるでしょう」

こうして、第四騎空艇団の船団長に関する問題は決着した。

#### エピソード4

モニカが船団長になった。あんなにお菓子を食べて、ちよつと変身しただけなのに、船団長になれるなんて不条理な世界である。

「やはり何らかの修正力が働いた可能性が高いな」

でも、ガンダルヴァに襲われなくなったのは良かった。どうせなら現船団長のモニカに襲われたところだが。

「いや……逆に考えるんだ。『モニカを襲えばいいさ』と考えるんだ」  
「隊長」

「ち、ちち違うんだ。俺もガンダルヴァの『強さを求める姿勢』を見習おうと、無理にでも訓練に付き合っつてほしくて……」

「強さを……しかし、秩序と引き換えに得た力なんて間違っています」

よし、事案回避できた。まったく、モニカを襲うのも一苦労だな。

「その通りだ……俺が悪かったよ」

「分かってもらえて良かったです。モニカ船団長には、私の方から頼んでみますから」

「えっ、何を？」

「もちろん剣の訓練の話です。隊長は秩序的に強くなりたいたいですよね？」

いや、グラブル的な強さだけで十分だと思っただが。それでもモニカと過ごせる時間ができるのは大歓迎だ。

「ああ、よろしく頼む」

「……それに、私もお二人との訓練によって力を高めたいと思っています」

その必要は無いと思います、リーシャさん。どうにも俺の被害が増える気しかない



ので。でもハーレム王を目指す者としては、この結果は上々だ。

「よし、俺はやるぞー!!」

「それでは作業に戻ってください」

「はい」

俺は罰当番の甲板掃除を再開した。監督のリーシャは読みかけの本に目を落とした。

数分後、量産型ロボミが滑るような移動で俺のそばにやってきた。

「緊急事態です、マスター。バルツ公国で壊獣が大量発生しました」

ああ、ロボミ外伝が始まったか。参加する意味もあんまり無いけど、量産型ロボミの姉妹のために、それと甲板掃除を続けたくないの、迷わず参加を決意する。敵は覇壊神ダイモンとその配下の四天王だ。

「リーシャ」

「はい、隊長。フレイメル島に針路を変更し、全隊員を招集します」

「それと『壊獣事件』の資料があれば持ってきてくれ」

「了解しました」

リーシャは去っていった。俺は浮ついた気持ちを切りかえる。適当に攻略できる相手ではないだろうし、これまで通り1人だけに専念していたら別方向から横槍が入るか

もしれないのだ。だが、これは決して諦めていい問題ではない。俺は強く決意した。

今度こそ、アリーザを加入させてみせる！

俺はようやくのぼりはじめたばかりだからな。このはてしなく遠い秩序坂をよ……。

第2部完！

## Extra 2 秩序学園の日々

エピソード1

俺の名前は『長主 公人（ながす きみと）』、両親が海外赴任で広い家に一人暮らしの、どこにでもいる普通の高校3年生だ。最近はや友達に勧められたスマホゲームにハマっている。

「よお、長主。今日こそ帝国高校の奴らを潰しに行こうぜ」

こいつは『龍場 頑太（るば がんた）』、無駄に図体のデカイ悪友だ。中学の頃、いきなり殴ってきたのを返り討ちにしてから絡まれるようになった。三度の飯より喧嘩が好きで、よく俺も巻き込まれて酷い目に遭う。あと、老け顔だ。

「うるせー、1人で行って勝手にくたばれ。俺には大事な予定があるんだ」

「またナンパだろ？ どうせ成功しねえんだからよ、こっちに付きあえて」

「いいや、今日こそ上手いくね。なぜなら俺にはこの『モテモテネットワークス』があるからだ」

「あ？」

特別な男にしか購入できないという、数量限定の『モテモテネットワークス』（税抜9万円）

さえあれば、今日から俺もハーレム王だ。効果には個人差があるということだったが、彼女の1人や2人ぐらいは簡単にできるだろう。

「ちよつとその男子2人！ 自習中ですよ、静かにしてください！」

口うるさく注意したのは『碧野 理紗（あおの りさ）』、同じクラスの風紀委員だ。やれ校則だやれ秩序だと毎日のように絡んでくる面倒な女子だ。だが、いくら学園長の娘だからって調子に乗っていると、俺としても本気で対応せざるをえない。

「うっ、うーん、急に腹が痛くなつたから保健室に行くぜ」

「えっ！」

「おい、長主！ あー、オレも頭が悪くなつちまつたんで、保健室に行かねえとな」

「2人とも、そんな仮病で——」

騒ぎ立てる理紗を無視して、俺達は屋上に向かった。これが俺の日常だ。

## エピソード2

トイレに寄つた龍場を置いて屋上に到着した俺に、背後から声がかかった。

「煩わしい太陽ね」

とつさに振り向くと、給水タンクの上に女生徒が1人立っていた。長い金髪に短いスカート的美少女だ。それより、この子も俺と同じ蘭子Pなんだろうか。

神崎蘭子。俺がハマっているスマホゲーム「アイドルマスターシンデレラガールズ」の登場人物だ。タイトル通りアイドルをプロデュースするゲームなので、例えば蘭子推しのプレイヤーであれば「蘭子P」と呼ばれる。

ともかく、同じ蘭子Pなら蘭子の魅力を語り合って仲を深めていきたい。最終的にはコスプレとかしてくれたら嬉しい。だから、さっきの『挨拶』に対しては、こう返そう。

「闇に飲まれよ!」

それを聞いた彼女は、驚いたような顔を見ると給水タンクから飛び降りてきた。なお、スカートは鉄壁だった。

「まさか……我が同朋なのか……?」

「ふっ、その通りだ」

問題なく『俺も蘭子Pだ』ということは伝わったようで、彼女は嬉しそうな顔をしている。

「長年にわたって探し続けていた同朋と巡り会えるとは、これも『あの方々』のお導きか……」

「うんうん。分かるぞ、その気持ち」

俺もアニメイトの前でナンパした時に『蘭子いいよね!』『えっ、誰?』って会話をし

て、蘭子の知名度の低さにショックを受けたものだ。

「そういえば自己紹介をしていなかったな。私は宵闇を司る墮天司オリヴィエだ。ヒトの子としての名は『天多 織絵（あまた おりえ）』という」

「うえつ、あつ、えつと、その……」

「一体どうしたのだ、同朋よ」

まさかこの織絵ちゃん……蘭子と同じ中二病か！ だが可愛いからアリだ！

だが、この時の俺は知らなかった。まさか彼女が『本物』だったなんて。

エピソード3

色々あつて放課後になった。

「モニモニ結婚しよう」

「『先生』を付けろと、いつも言っているだろう！」

「モニカちゃん先生、愛してる！」

「ああ、もう鬱陶しい！」

いつものように『風白 最仁加（14才、飛び級）』先生に求婚したり。

「それでな、中等部の男の子が入ってくれるみたいで、ようやく九尾同好会を設立できるんよ」

「それはよかった。またあの演舞を見たいと思ってたんだ」

「うち、先輩にやったら——」

「そしえに近づくなつて言うとするやろ！」

いつものように『一条 そしえ』とのイベントを妨害されたり。

「やはり感情制御装置が未完成な現状では……」

「なあ、シロウ。そんなことよりキャストオフ機能を付けようぜ」

「……ところで俺も本編に登場したいんだが」

「あー、あー、聞こえないー」

いつものように地質調査部で『ROBOMI』の開発を応援したり。

そんな俺を呼び出す放送があった。

『3年生の長主君。碧野ヴァルフリート学園長が呼びです。至急、学園長室に来てください』

「名前そのままなのかよ！」

つい、メタなツツコミを入れてしまったが、とりあえず学園長室に行くことにした。

学園長室にて。

「最近、理紗——娘の口から君の名前が出るようになったので、話を聞きたいのだよ」

「はあ」

「娘のことは、どう思っているのだね」

口うるさい面倒な奴だ、と正直に答えるのは流石に駄目だろう。

「その、けっこう可愛いなと——」

「君のような奴に娘は渡さん！ どうしてもと言うなら、この私を倒してからだ！」

ヴァルフリートは勢いよく立ち上がると、腰の剣に手をかけた。どう答えてもアウトだったようだ。というか剣とか持つていいのかよ。秩序どころ行った。

「待て待て、学園長として生徒に怪我させていいと思ってるのか！」

「今の私は学園長である前に一人の父親だ」

完全に手遅れだった。というか、このイベントこそ本編でやれよ。碧の騎士は何やってんだ。



そんなわけで、俺は命からがら学園長室から逃げ出したのだ。

#### エピソード4

なんだかんだで理紗が機械怪獣『リーシャ・エクス・マキナ』になって暴れだした。

「この学園には何かあると思っていたが、まさかあの装置だったとは」

「どういうことだ、織……オリヴィエ」

「かつて星の民が作った『秩序を極限まで高める装置』だ。あの少女の並外れた秩序に呼応したのだろう。装置に取り込まれ『リーシャ・エクス・マキナ』となった彼女は、高まった秩序を放射して、対象を秩序的歯車にするようだ。このままでは世界中が機械になってしまう」

「なんてこった」

リーシャの秩序で世界がヤバい。いくら俺でも歯車には萌えられないし、全力で止めるしかないだろう。

「他の同朋を待っていては手遅れになる。無謀であっても私達だけで対処せねばなるまい」

「生徒達にも協力させるのはどうだ？ 誰だって歯車になりたくないはずだ」

「いや、現在の『リーシャ・エクス・マキナ』に近づけるのは、相当な無秩序者だけだ。

耐性の低い者は触れただけで歯車となり、彼女と同化してしまうだろう」

つまり戦力の高い無秩序者がいれば……。

「ずいぶんと面白そうなことになってるじゃねえか！」

「龍場！」

「よく分からねえが、アレをぶつ壊せばいいんだろ？ なかなか楽しめそうだ」

「やれやれ。たった3人で、あんなのと戦うことになるなんてな」

俺達は『リーシャ・エクス・マキナ』のいる校庭に向かった。

第9音楽室の前で小柄な少女に出会う。

「貴方たちなら理紗を元に戻せるかもしれない」

「君は『第9音楽室の主』で音楽特待生の鳩！」

「あれの胸部から理紗の旋律が聞こえるわ。理紗は音楽室に籠ってばかりの私に、色々なことを教えてくれた。お願い、どうか理紗を助けて」

「ああ、この俺に任せておけ。その代わり今度デートしよ——」

「ほら早く行くぞ、長主」

学園長室の前で髭面の通り魔に出会う。

「理紗、いつたい私の何が悪かったのだ……」

「こいつは無視して先を急ごう」

「待ちたまえ。君は、あんな姿になった理紗と向き合おうというのだな」

「いや、そんな精神論とかじゃなくて——」

「君になら理紗を任せられるかもしれない。この剣を持っていけ、きつと役立つはずだ」

そんなイベントを挟みつつ校庭に到着した。

「秩ー序ー!!」

リーシヤの咆哮が轟き、空気が震える。無作為に放射された秩序の光が、校舎や花壇を歯車に変える。

「狙いは胸部の理紗本体だ。正面から行くぞ!」

「分かりやすく助かるぜ、うおおおお!!」

「今の彼女の演算能力を考慮すると、小手先の戦術など逆効果ということだな。なるほど理に適っている」

相変わらずオリヴィエの言うことはよく分からない。そして、そんな彼女は前触れなく黒い翼を広げ、両手に闇を集める。ふむ、最近の『中二病アイテム』にはそういうのもあるのか。俺の家には『違法改造のスタンガン』ぐらいしかないので、少し興味深い。

その一方で、龍場は数メートルも跳躍して、リーシャに拳を連打していた。放射される秩序も残像によって無力化できているようだ。この『喧嘩』で一週間ほど満足してくれればいいんだが。

俺もどうにかリーシャの足元までやってきたのだが、見上げても謎の光でスカートの中は覗けなかった。機械怪獣のパンツを見ても嬉しくないとはいえ、この過剰な秩序は駄目だろう。

「宵闇よ！」

オリヴィエの闇がリーシャの頭部に纏わりつき視界を奪う。そして俺と龍場の猛攻で、たまらず彼女は膝をついた。

「行け、長主！ 惚れた女を奪い返すんだろ！」

「そんなんじゃない！ どんな勘違いだよ！ ああもう!!」

リーシャの右腕を抱え込んだ龍場に後押しされて、俺は彼女の胸に剣を突き立てた。

そして『リーシャ・エクス・マキナ』の胸部で、俺と理紗は対峙する。

「秩序……?」

「こんなことは止めるんだ。みんな心配してる」

「秩序」

「だいたい、秩序って皆が快適に生きるためのものだろ。今のお前は本末転倒って言うか」

「秩序！」

「悪かったよ、もう授業中は騒がないって」

「……秩序」

理紗の背後で、謎の装置が爆発した。

翌日。

「長主君！　こんなものを学校に持ってきて、どういうつもりですか!!」

「別にいいだろ、早く返せよ俺の本！」

「すっかり元気になった理紗の手には『金髪ロリ巨乳先生と秘密の放課後レッスン』があった。」

## Extra3 ちつじよるっ！

## ・第3話NG

リーシャは真つ赤な顔のまま去っていかうとするが、出口のところで振り返る。

「同僚としてだけなら貴方のことは認めていますからっ。……ええと、助けに来てくれて、ありがとうございます」

そう言つて歩きはじめた彼女に、俺は重要な質問を投げかけた。

「パンツ売つて——」

るところ知らない？ あと給料の前借りつてできるかな？ と言いたかつたのだが、不意に傷口が痛くなつたので腹を押さえる。しかし、この程度で止めるわけにはいかない。今の俺は替えのパンツすら持つていないのだから。

「パンツ——」

「一瞬でも貴方のことを認めた私が馬鹿でした。失礼します！」

リーシャは軽蔑した目で俺を見ると、早足に去つていった。そして、俺はセクハラにより不合格を言い渡され、とぼとぼと第四庁舎を後にする。

これは、後のマフィアキングと、第四騎空艇団船団長の、因縁が生まれた日の話。(続かない)

・第6話を振り返って

「隊長って、地の文ではハーレムハーレム言ってますけど、ヴェローナのジュリエットさんには何もありませんでしたよね」

「ああ、ジュリエットにはロミオがいるからな」

「ええっ、もつと低俗な理由だと思っていました」

「ひどい言い草だな」

ジュリエットは、幼少期にロミオに会って恋をしたのだから、よほどのことがないとハーレム要員にはならないだろう。仮にロミオを排除したら、俺の命が危ない気もするし。

「あれ? だったら、アリーザさんも駄目なんじゃ?」

「そんなことはない。第3部でも彼女には可能な限りアタックするつもりだ」

「でも、アリーザさんにはスタンさんが——」

「問題ない」

場合によっては排除すればいいだろう。どうせスタンだし。

・ 8—2の裏側

「総員抜刀！」

リーシャが高らかに号令をかける。

「アーサー抜刀」「ビザン抜刀」「カイン抜刀」「デリフオード抜刀」「エレン抜刀」「フユ

リアス抜刀」「ガウエイン抜刀」「ヘルナル抜刀」「イアゴ抜刀」「ジン抜刀」

隊員達が抜刀を済ませると、リーシャも腰の剣に手をかける。

「リーシャ抜刀」

「——それで最後に俺が抜刀して、部隊の威圧感で執行対象を怯ませるのはどうだろう？」

「なかなか秩序的ですが、カタリナ中尉に頼んでください（中の人ネタ）」

それは残念。なお隊員達は仮名だ。

・ 9—3の後で

「お前、隊長に『タコ』って言ったの悪口だろ」

「やはり気づいていたか。ちょうど渡せるタコがあったから、つい」



「気持ち分かるけど、ほどほどにな。もしリーシャ様が知ったら心を痛めることだろう」

「ああ、リーシャ様を煩わせることだけはしないさ」

「それを聞いて安心したよ」

・13—1で雑談

「結局、SRリーシャが上限解放されてたのって何だったんだ?」

「上限解放とは、限界を超えることだと言えるぴよん。つまり本編中に『限界を超えた』と描写されるたびに、ノーコストで上限解放を1回していたぴよん」

「なるほど。それがリミテッド化の伏線ってことか」

「でも、仲間が多くなると全員に限界を超えさせるのも大変ぴよん? それで、この設定を明かすタイミングが無くなってしまったから、ここに書いておくぴよん」

「それって、俺がまた投獄……」

「そんなことより、秋アニメに続いて冬アニメでも『語尾が「ぴよん」のマスコットキャラ』が登場した件について話すぴよん。どっちもソシャゲアニメだし、流れがきてるぴよん?」

「知るかよ、そんなマイナーアニメ。今期はマナリアフレンズだろ」

・第17話で何があつたか

「ああああああああああああああああ!!!」

激昂するリーシャ。同情の余地なく戦闘不能<sup>!</sup>になつてしまつた隊長。だが、そんなことはお構いなしにトロールは近づいてくる。

「落ち着け、リーシャ。いや、当然の反応だとは思うが、今は冷静になるんだ」

「はっ……すみません、モニカ船団長補佐。こんな時に貴重な戦力を減らしてしまつて……」

「その話は後だ。とりあえず引いて、態勢を立て直すぞ」

「しかし、それでは被害が拡大してしまいます。私が責任を取つて、ここで……!」  
そこに1人の少女が現れた。

「(ぎゅるー)」

「ミリンさん、どうしてこんなところに」

「友人の危難に参上するのは、侍として当然のことです。今こそ共に戦いましょう!」

「ありがとうございます……」

「(小声で) 代わりにその指輪のこと、後で聞かせてくださいね」

「……」

ミリンは地雷を踏んだ。こうして、SRリーシャは『リミテッドリーシャ』に覚醒したのだ。

・第18話でガンダルヴァを見送りつつ

「ガンダルヴァってさ……刀を使ってたよな」

「そうですが、一体どうしたんですか？」

「それで、本気を出したら格闘で戦ってた」

「はい」

「刀と格闘が得意って、つまりジョブとしては忍者——」

「いえ、待ってください。それは原作主人公に限った話だと思います」

「でも分身の術（幻影）を使ってたぜ」

「……忍者ですね」

・第19話の少し前に

四象イベントで久遠の指輪を3つ入手したぞ！

「まず1つ目はアニラ（未加入）に渡そう。LBは強くないけど、攻撃力や上限は上がるからな」

参考までに俺なりのLBを書いておく。

攻撃力★×3、防御力★★★×3、HP★★★×2、風属性軽減★★×2、クリティカル★★★×1、DA★★★×1、サポートアビリティ★★★×1

「次に2つ目は水着グレア（未加入）に渡すだろ。グレアも大きいからな」

テレビアニメ「マナリアフレنز」は好評放送中だ！ 先日の水着回も最高だった。

「さて、3つ目をどうするか。ヴァジラ（未加入）はそんなに大きくないし……」

「ここは秩序的に考えるべきですね」

「秩序的？」

「はい、まずアニラさんは火属性のドラフです。そしてグレア（水着）さんは水属性の種族不明です。ここで属性を偏らせてしまうと、苦手属性に対応しづらくなります。また、ドラフばかりに渡すのも、他種族が不公平感を抱くため秩序的ではありません。だから、そうですね……例えば風属性のヒューマンに渡すと秩序的バランスが維持できると思います」

「なるほど、一理あるな」

「で、ですよね！ それで、ちようどここに限定キャラの私が——」

「ちよつとモニカに求婚してくる！」

「あっ……」

結局、指輪は受け取ってもらえなかった。やっぱりナルメアお姉ちゃん（未加入）に渡そう。

## 第19話 蒼の少女編

エピソードー

牢の中にいる。

「どうしてこうなった!」

「ようこそ……ラビットルームへびよん……」

マイペースな兎野郎を放置して、俺は今回の原因を考察してみた。たしか、ポート・ブリーズの星晶獣ティアマトが魔晶で暴走したという報告があったんだ……。それを聞いて、いよいよ原作が始まったかとドキドキしたものだ。しかし、それから数分もしないうちに俺は投獄された。今回に限っては何もしていないのに! そして、数日の取調べで『星晶獣暴走の共犯容疑』が勾留の理由であると聞かされたのだ。

「俺は無実なのに何故だ! 秩序の馬鹿! 無能! でもモニカは可愛い!」

「たぶん6年前の発言が原因びよん」

「6年前って……?」

「最初に投獄された時のことびよん。」

『ポート・ブリーズの星晶獣ティアマトを魔晶で暴走させたくてさ!』

実現したからには、関与を疑われても仕方ないぴよん」

「だって、それは……原作知識だから……」

くそっ！ 不吉な未来を口にするると迫害されるつてのは本当だったか。アルルメイヤもこんな気持ちでいたんだな。やはり一般人の民度は低い。そしてサブル島は沈め（サラ加入後に）。

さて、颯爽とサラを救いハーレム要員にするシミュレートを終えて、俺は兎と話すことにした。

「ここならカグヤ様に降臨いただいても大丈夫ではないでしょうか。どうか一目だけでも……」

なお、俺がいるのは普通の独房ではなく、貴族や王族などを収監するための高級隔離房である。最下層に存在するこの部屋は、暗殺などを防ぐため嚴重に警備されており、家具も上質なものが一通り揃っている。さらには壁も厚く、防音性に優れているようだ。単なる容疑者でしかない以上、俺への配慮があつたということだろう。

「調子に乗るなよ、囚人」

「調子に乗らないで、囚人」

いきなり左右から聞き覚えのある少女の声がした。慌てて両側に目を向けると、左で

は赤いロリが俺を睨んでいて、右では青いロリが俺を蔑んでいた。頭に2本の角、長く尖った耳、そして背中の羽、見るからに空の民ではない彼女たちは――

「星晶獣フラムⅡグラス……一体どうして?」

「倉庫で暇そうにしてたから声をかけたぴよん。これで満足ぴよん?」

「ありがとう……本当にありがとう……」

特に、元ネタに合わせて分裂状態になっているのは嬉しい。そもそもグラブルには女の子の双子が減多にいないので、ハーレム志向の俺としては不満だったのだ。そんなわけで、フラムとグラスを同時攻略すべく手招きしてみた。

「グラスをいじめるなら、燃やしてやる」

「フラムに何かしたら、凍らせるから」

「熱っ! 冷たっ!」

慌てて部屋の奥まで退避した。まったく、星晶獣はすぐに実力行使に出るんだから困る。とりあえず、先に各種の処理を終わらせてしまおう。

「おい、ラビット。キャラの上限解放だ」

いつも通り、目の前に『キャラ上限解放画面』が現れた。そこには前回から増えた部隊のメンバーが並んでいる。ソシエ、ユエル、量産型ロボミ、ニオ、オリヴィエ、モニ



カ、そしてリミテッドリーシャ……つてモニカがいる！

「どういふことだ……？」

「ああ、彼女はデイフェンドオーダーの時に一時加入して、それから抜けてないだけぴよん」

「なるほど。別行動だけど、システム的には仲間ってことか。よくある話だ」

某騎士団の団長副団長とか、シヨチトル島の巫女（ディアンサ以外）とか、妄想キャラとかも、そんな感じだしな。とりあえず目の前の画面を操作して、全員を最大まで上限解放した。事前に武勲でアニメを交換していたから、スムーズに済んだ。

「あとはレベルを上げるだけだな。ここから出たらヘイローを周回しよう。二オのために依代を作る必要もあるし」

最終上限解放イベントの『抱っこ』だけは、リーシャに譲らないからな！

「キャラのLB……じゃなくて、えつと能力強化がしたい」

そう言う『キャラのリスト』が現れた。最初に自分を選択してLBを確認する。まずはタイプ枠の攻撃力、防御力、弱体耐性、対OD攻撃、OD抑制。次に種族枠の攻撃力、防御力、HP、DA、クリティカル。そして最後に個人枠だ。これが性能に大きく影響する……。

「TA！ クリテイカル！ 奥義ゲージ！ 弱体成功！ よし、勝った！」

本当に良かった。ありがとう、転生チート。ちよつと冤罪で投獄されてるけど、それぐらい些細な問題だよな。あつ、そういうえばサポアビも確認しておかないと。

「えつと、通常攻撃時に確率でトレハン効果……………うおおお！」

トレハン！ トレハンじゃないか！ ようやく俺もトレハンできるんだな！ ありがとうございます、カグヤ様。今後は毎日、感謝のトレハンに励みます。そんなわけで、LBの最終形は次の通りだ。

防御力★×2、HP★×1、クリテイカル★★★×2、TA★★★×1、奥義ゲージ上昇★×1、弱体成功★★★×1、サポートアビリティ★★★×1

といつても全部に振れるほどのLBはないので、防御力などは後回しだ。そして、自分以外の8人のLBも一般的なところ（クリテイカルやDATAなどに消費していく。

「よし、これで一通り終わったな」

「3つ目はどうするびよん？」

「ん？ カグヤ様への取次ぎ要請と、上限解放、LBで3つじゃないのか？」

「カグヤ様に会いたい、なんて妄言を諫める程度ならノーカウントびよん」

「だったら……………そう、前回の1つ目は何だったんだ？」

『ロリに言わせろ』って言われたから、ラビットルームの模様替えを実行したぴよん」  
どうやら、その結果が今回のフラムとグラスらしい。色々と文句を言おうと思ったが、彼女達の前では止めておくことにする。ちなみに立っているのに飽きたのか、フラムは暖炉で薪を燃やして遊んでいて、グラスは飲み水を凍らせて遊んでいる。俺も一緒に遊びたい。

「それなら、推しキャラの選択だ」

推しキャラに設定することで、ステータスが少しだけ上昇する仕様である。ただ、これに関してはデータよりも愛を優先していいだろう。

「モニカを推しキャラに設定する！ コメントは……『本妻』つと、これでいいな」

さて、フラムとグラスに話しかけることにする。要望を出すだけならノーカウントって言うってたからな！

「カグヤ様に——」

「しつこいぞー！」

「二度で分らない?」

両者の反応は相変わらずだった。まったく、俺には小さな女の子達に罵倒されて喜ぶ趣味なんて無いのだが、それはそれとして会話を続けていこう。

「うへへ、だったら『オールド・エツケザックス』を下さい」

「厚かましいぞ、囚人」

「慎みなさい、囚人」

「くうー、それなら『エツケザックス』でもいいです」

「お前にはこれで十分だ、囚人」

「いい加減にして、囚人」

フラムに薪を投げつけられた。確かにエツケザックスに見えないこともないが……右手に持っても攻撃力は上がらないので武器ではないようだ。

「ありがとう！ 君達からのプレゼント、大事にするよ。おまけにヒヒイロカネも下さい」

「気持ち悪い」

「気持ち悪い」

「おっふ、これはこれで……」

その後も俺は様々な要求を続け、フラムとグラスの罵倒は数時間に及んだ。

「おい、オルキスのことを聞きたいと言っていたな。少しだけなら話そう……だから、これ以上は騒がないでくれ……」

隣の隔離房からアポロちゃんの声がした。多少の防音性など俺達レベルには無意味なのだ。

## エピソード2

黒騎士アポロニア、原作では主人公と敵対したり協力したりして、最終的にガチャで仲間になるキャラだ。データ上はそれほど強くないアポロちゃんだが、実は歴史あるエルステ王家のオルクス王女と幼馴染なのだ。つまりこれは、数少ない『王女』の話が聞ける貴重な機会である。

「オルクスと私の関係を知っているとは、もしや王国の関係者か」

「いいや、ただの事情通だ。もつとも……知りすぎた所為で、こんなところにいるわけだが」

「それで精神があんな……。いいだろう、それで何から話せばいい？」

「ずいぶんと協力的だな。さつきはどれだけ話しかけても無視されたのに。もしかしてアポロちゃんは意外と寂しがりなんだろうか。」

「そうだな、オルクス王女の微笑ましいエピソードとか、護ろうと決意したきつかけとか、世間知らずな一面とか、そういつたものを聞かせてほしい」

「どうしてそんなことを……まあいい。そうだな、一時期だがオルクスはゴーレム職人

になりたいと言っていた」

「おおー！」

「知っているだろうが、エルステ王国はゴーレムの作成技術が高い。それで『私の作ったゴーレムでみんなを護るの!』と——」

アポロちゃんの色々と話してくれた。喋っているうちにテンションが上がったのか、話題は尽きなかった。

「つまみ食いが見つかった時も、宮廷料理人に叱られていたな」

「ふむふむ」

「初めのうちは私を犯人にしようとするらしていたのだが、最終的には素直に謝っていたぞ。ただ、口元が汚れていて一目瞭然だったぞ」

「どうだ、オルキスのことが少しは分かったか？」

「ああ、とても良かった」

「ならば、その……私の協力者に——」

「次は俺の番だな。聞かせてやろう、珠玉のリーシャエピソードを！」

「とっておきだ。『オルキスを膝枕した時の話』をしてやる」

「いいぜ。その後は『自分の絵物語を見つけたリーシャの話』だ」

「退くつもりは無いらしいな」

「そつちこそ」

対抗心からか、俺は当初の目的を見失っていた。だが、最終的にオルキス王女の話が十分に聞けたので良しとしておく。いつか落ち着いたら、メフオラシュに行こう。

「私は……オルキスを取り戻せるだろうか……」

「できるに決まってるだろ」

「!!」

「そんなことより、そのうち会いに行くから俺をオルキス王女に紹介してくれよ」

「調子に乗るな。……だが感謝する」

そして、俺が昼寝をしている間に、アポロちゃんは脱獄したようだ。

数日後、船団長にしか開錠できない入り口の扉が開くと、そこには案の定モニカがいた。

「出る」

「モニイイ!!」

再会の抱擁を試みたが、意外とスムーズに避けられてしまう。

「ひっ……き、貴様の容疑は晴れた。明日からしつかり働いてもらおうぞ」

「よかった、やっと俺の誠意が伝わったんだな」

「そうではない。帝国の研究所をいくら調査しても、関与の証拠が見つからなかっただけだ。貴様の部下達が、寝る間も惜しんで必死に搜索していたぞ。『早く真実を明らかにするんだ!』と」

あいつら、俺のためにそんなに頑張って……。

「いや……だが、あの帝国がそこまでの調査を許可したのか?」

「ああ、言っただけじゃなかったか。エルステ帝国は、もう存在しない」

「……………えっ?」

どうやら俺の知らない間に『蒼の少女編』は終了していたらしい。

### エピソード3

モニカの話によると、原作主人公は既にナル・グランデ空域に行ってしまったらしい。ずいぶんとストーリー進行に熱心なことだ。そして、リーシャも原作通りに同行して空気を扱っているのだろう。



「つまり、これからはモニカやニオに手を出し放題ってことだ」

今までは、散々リーシャに妨害されてきたからな。攻略難易度が下がっているうちに、2人ともハーレム要員にしてしまおう。まずはモニカを……お菓子で釣って、後は強引に……。

「隊長殿、お勤めご苦労様です」

「……その用法は少し違うな」

長い長い階段を上って地上に出たところで、オリヴィエが出迎えてくれた。久しぶりに俺と会えたからか、とても嬉しそうにしている。第四庁舎の外に向かいつつ、彼女から話を聞いてみることにした。

「何か変わったことはあったか？」

「隊長殿も知つての通りだが……あっ！ すまない、『隊長殿』は普通のヒトの子だったな」

この言い方だと、墮天司勢力に何らかの動きがあったのだろうか。

「今回は許そう。だが今後は気をつけるように」

「はい。それでは簡単だが『報告』させてもらう。最近発生した島々の崩落事件の首謀者は墮天司サンダルフォンであり、それを解決したのが特異点。そして、その現場に天司長が顕現した」

「えっ！ ちよつ、え、天司長、はあ？」

つまり、原作主人公は『どうして空は蒼いのか』もクリアしたのか。ちなみにレイリー散乱による現象らしいが……駄目だ、まだ少し混乱している。

「なるほど。初めて聞いたとするなら、その反応が自然か。隊長殿の挙動は参考になる」

「お、おう」

「隊長殿が部隊を『敢えて』活動停止にしたのは何か理由があるはずだと、私は空域中を調査していたんだ。おかげで天司長の顕現を目撃し、様々な情報を得ることができた。これも隊長殿の計算通りなのだろう」

「と、当然だ。この俺はなにからなにまで計算づくだぜ」

そんな心休まらない会話をしつつ、俺達は建物の外に出た。久しぶりの解放感だ。屋外というだけでなく、ここにはもう厄介なリーシャがいないのだから！ もう俺を止められる者はいない！ グツバイ、リーシャ！ サンキュー、リーシャ！

「リーシャ、フォーエバー……!!」

「な、なつ、なにをっ」

おかしい。幻聴が聞こえる。声の方に目を向けると、リーシャが普通に立っていた。幻影なら空に浮かんでいるべきだと思うんだが。

「……リーシャ?」

「し、しし失礼します!」

リーシャは真つ赤な顔で走り去った。おそろく本物だ。

「隊長殿の籠絡術、しかと拝見させてもらったぞ」

いいから、リーシャがいる理由を教えてください。

数日前、黒騎士脱獄後。彼女達の前にモニカが立つ。(リーシャは黒騎士との舌戦で戦闘不能)

「黒騎士は渡さない。エルステ帝国にも殺させない。生きて裁きを受けてもらう」

「ふん……」

「よお、ずいぶんと騒がしいじゃねえか。こんなんじや、オチオチ修行もできねえな」

「ガンダルヴァ! 貴公、どういうつもりだ?」

「決まってるだろ。前船団長として秩序のために、脱獄した奴らを止めに来たんだよ」

「……………いいだろう、だが私の邪魔はするなよ」

「ふん……話はまとまったか。団長……こいつらが最後の関門だ。オルキスのため全力で行くぞ」

戦闘終了後、ガンダルヴァは一行の力を認め、共に帝国に抗う旅をすることにしたの

だ。

エピソード4

「ふざっけんなよ、ガンダルヴァー！ あのクソ野郎！ なんでお前が仲間になってんだよ！」

原作改変にも程があるだろうが。だいたい、ドラフで火属性で格闘ってラインハルザと全く同じじやねえか。しかも、ラインハルザとガンダゴウザとガンダルヴァーが並ぶと、もう誰が誰だか分かんねえぞ。

「くたばれ！ 雑魚が！ カスが！」

そんなわけで俺は、森の魔物に苛立ちをぶつけていた。この怒りは当分収まりそうにない。

「とくとくとくと〜」

「ヤイア!!!」

俺に天使が舞い降りた（天司ではない）。さっきまでの俺は何をしていたのだろう。怒りからは何も生まれもないというのに。大事なものは……笑顔だ。

「あれ？ お兄ちゃん、どうしてヤイアの名前を知ってるの？」

「あつ！ えーと、そう、こむらがえりが教えてくれたんだ」

ヤイア、6才。ドラフの女の子である。料理が得意で、こむらがえりという名前のぬいぐるみを大事にしている。そして……ぱっと見て分かるほど胸があるのだ。ドラフって素晴らしい。

「すごい！ お兄ちゃんは、こむらがえりの言ってることが分かるんだね！」

「ああ、お兄ちゃんは物知りだからな」

物知りな俺がベッドの上で色々と教えてあげよう、グへへ。

「だったら、びょうきをなおす」「はっぱ」のことも知ってる？」

「いやー、それはちよつと知らないかな。でも、お兄ちゃんは色々な島で星晶獣を倒したりしてるから、一緒に来たら見つかるかもしれないよ」

「ほんと？ ヤイアもお兄ちゃんといっしょに行つていいの？」

ヤイアは父親の病気を治すため、薬草を探している。それさえ知っていれば、こんなにも加入は容易いのだ！ さあ、そろそろいつもの加入メッセージを頼むぞ。

「……事案ですか？」

「うわあつ、リーシャ！」

「あのね、ヤイアはお兄ちゃんについていくの」

「待つてくれ、これには事情があるんだ。まずは話を聞いてほしい」

そして、俺とヤイアは説明した。ヤイアの父親の病気を治すためには、薬草が必要で

あること。決して事案ではないこと。ヤイアは料理が得意であること。そして事案ではないこと。ヤイアには部隊の食事を作ってもらおうと考えていること。だから間違いない事案ではなかったこと。

「ヤイア、おしごとがんばる！」

「……そうだったのですね。しかし、それだったらもつといい案があります。ヤイアさんには第四騎空艇団本部の団員食堂で働いてもらい、お父様には隣接する医療施設で療養していただきます。葉草は私達だけでも探せますよね。そうすれば親子で離れ離れになることもありません」

「それはそうだが、ヤイアは土属性の戦力としても……」

「隊長、こんな小さい子を星晶獣と戦わせるつもりですか！」

そこにツツコミ入れちやうのかよ。ヤイアのチャーハンは、敵に罪悪感を抱かせてダメージを与えるほどなんだぞ！ と言いたかったが止めておく。アツプデートで変更されたし。なお、ヤイアは話に飽きたのか、こむらがえりと遊びはじめた。可愛い。お持ち帰りしたい。

「いや、でも……」

「どうして部隊への加入にこだわるんですか？」

「それはもちろん、あの犯罪的な体躯に犯罪的なアレコレを……はっ！」

「……」

リーシャの顔から表情が消えた。とりあえず逃げよう。

「うわなにをするやめろ待て痛い痛い痛い！」

「あつ、おはなし終わった？ ヤイアもいっしょにあそぶー！」

こうしてヤイアは団員食堂で働きはじめ、団員達から可愛がられるようになり、俺と2人きりになるのが難しくなった。だが俺は諦めていない。合法になるまで何年でも待ってやる！ ヤイア！

## 第20話 マナリア魔法学院

エピソードー

夢の中にいる。

「オオオオオオ!!!」

目の前には、闇の炎の子が羽ばたいていた。どうせ夢なら女の子に来てほしいのにお呼びじゃないぜ、バハムート。

「オオオオオオ?」

バハムートは戸惑っている様子だ。すぐに消えないってことは……まさか『特別な夢』なのか? バハムートが出てくるのは『竜の試練』だから、時系列としては間違っていないが。

「いいだろう、お前の試練を受けてやる! さっそくだが、俺の仲間を呼んでくれ」

「……オオオオオオ」

了承されたようだ。そんなわけで、モニカ、ニオ、リーシャ(リミテッド)がやってくる。

「みんな、相手は強敵だ。気を抜かずに全力でいくぞ!」



「えっ、ここは……？ いったいどういうことですか、隊長」

「この力、まさか星晶獣か？ 事情は後ほど説明してもらおうぞ」

「……早く帰りたい」

そんな感じで戦闘開始だ。さっさと終わらせて4人で夢デートしよう。

「オオオオオオ!!」

最初にバハムートの咆哮によってアピリティを封印される。信仰が強ければ効果を受けて済むのだが、今の俺では対抗できない。続けて鉤爪での直接攻撃が襲ってくる。防御の上からでも大幅にHPを削られて、わりと痛い。しかし、これは俺達の力を見る試練であり、決して戦闘不能にはされないのだ。攻撃重視でガンガン殴っていこう。

「リーシャ、号令を頼む。タイミングを合わせて一斉攻撃だ」

「了解。白翼の守護神よ、我らに力を」

リーシャのブレイブコマンドもあって、戦闘は比較的あっさり終わった。

「オオオオオオ!!」

「ああ、こんなところに迷い込んでいたか……。特異点を待たせている。こちらだ……」

突然、謎の声が聞こえたかと思うと、バハムートの姿は徐々に薄れていった。まあ、そんなことはどうでもいい。俺の夢に美少女が3人もいる状況で、思い通りに……脱がせ

……奉仕を……。

目が覚めた。枕元に「バハムートの鉤爪」があつたが、気にせず二度寝した。今なら夢の続きが見られるかもしれないのだ。

一方その頃。

「♪ あれ？ どうしたんですか、ニオ。気分が優れないみたいですが」

「……大丈夫。少し嫌な夢を見ただけよ」

エピソード2

バハムートの鉤爪は、よろず屋でバハムートダガー・ノヴムと交換した。そのバハムートダガーを強化するために、そしてキャラのレベルアップのために、今はハイローを周回している。

「おつ、白竜鱗だ、ラッキー！ このまま続けて挑戦するぞ」

「ええつ、まつ、待つてください、隊長！」

「どうしたんだ、リーシャ。もしかして、モニカも呼びたいのか？」

「違います！ 皆さん単調な戦闘で精神的に疲れているようですし、少し休憩にしま

しよう」

「そうなのか……それなら仕方ないな。各自、30分ほど休んでくれ」

俺は量産型ロボミから全員のレベルアップ報告（推測）を聞きながら、男性隊員達が拾い集めたドロップアイテムを見ていく。朽ち果てた竖琴があったので、上限解放してエンジェル武器で強化する。必要なのは16個だが、これで何個目になっただろうか。「隊長、差し支えなければ、この戦いの意義を教えてください。目標が明確だとモチベーションが上がるかもしれません」

リーシャの言葉に、俺は朽ち琴にエンジェルハープを押し付けていた手を止める。

「なるほどな。戦っていると、たまにデイモンシオン・ヘイローが出現するだろ？ その中には真の姿が九界琴である個体がいるから、それが落とす竖琴の銀片を40個は集めたんだ。でも銀の依代の竖琴を落とす場合もあるし、あと200回ぐらいやれば終わりは見えると思う」

「にひやくかい、ですか」

「彼の旋律は本気よ、リーシャ」

「銀の依代の竖琴ができたら、その最終上限解放のために各種エレメント300個が必要で、それから黄金の依代の竖琴にするために、6属性の依代と覚醒した九界琴と属性変更した九界琴10個と銀天の輝き10個とダマスカス骸晶10個と究竟の証5個と

吟遊詩人の証30個とヒビイロカネが必要で、そこに宿った純然たる魂が我らを九界の繁栄へと導くだろう」

「……」

「……頭、大丈夫？」

それは運営に言ってくれ。そういう仕様なんだから。

その後、流石の俺もヒーローに飽きたのでポート・ブリーズにやってきた。暴走状態でないとはいえ、不安定なティアマトの力を削るためだ。本当はマグナアニマとSR方陣武器のためだが、敢えて教える必要もないだろう。

「ユエルちゃん、いけるよー！」

「これがウチの全力や！ 融月緋刃！」

そして、この程度ならホワイトラビットを装備していても倒せるほどだ。俺としては通常攻撃でトレハンしたいし、もう少し長引いても大丈夫なんだが……。

「ソシエ、どやった？」

「うん、ユエルちゃんだった」

まあいいか、ユエルちゃんだったみたいだし。思考放棄した俺はユエルをねぎらう。

「ナイスだ、ユエル！」

「こんくらい、ウチに任せ……あつ、別にアンタに褒められても嬉しないわ」

そして相変わらずのノリツツコミだ。そんな感じで何度か戦闘を終えたころ、街からリーシャが戻ってきた。

「話を通してきました。定期的にティアマトの力を削ってくれて感謝する、とのことで  
す」

「これぐらいは当然のことだ。いつもの通り、謝礼は部隊の活動資金に回してくれ。俺の取り分はドロップアイテムの現物支給ってことで」

「了解しました。ところで目的の武器は拾えたんですか？」

「そうだな、ティア銃は攻撃力が高いから一時的な装備として強化していくつもりだ。スキル強化も無駄になりにくいしな。ティア斧は、得意武器補正を考えるとティア剣に負けるから強化素材に使うと思う。風属性は剣得意が多いから、ここは妥協しない。ただ、明日以降のドロップの偏りによっては再考の余地もあるか……」

「やっぱり、それが理由でしたか」

「……………はっ！ も、もちろん俺が最優先するのは秩序の維持であって、方陣武器はその副産物に過ぎない。秩序の騎空団の一員として当然のことだ」

リーシャは明らかに信じていない様子だ。とりあえず謝っておくか……？

「はあ……。結果的に、秩序に貢献できているので良しとしておきましょう」

「分かってくれたか。じゃあ次はバルツに行こう。コロツサスはSSRの攻刃が杖だけだから、SR武器を多めに作っ——」

「隊長！」

「ごめんなさい、真面目にやります」

結局、バルツに到着するまで説教された。

### エピソード3

さて、忘れてはならないのが、俺は冤罪で長期勾留されていたということだ。もちろん、秩序の騎空団としては「必要な措置だった」として、何の賠償もなく済ませることはできる。だが、この俺の重要性を考慮したのか、1回だけ便宜を図ってくれるという話になった。

そんなわけで、俺は留学生としてマナリア魔法学院に一人やってきた。

「前から魔法を勉強したいと思ってたんだ。時間停止、透明化、集団催眠、感覚倍増、分身などを使えるようになりたい」

などと面接では優等生っぽくアピールしたが、もちろん本命はアン王女とグレア姫で

ある。まずは孤立気味のグレアに優しく声をかけて、一緒に授業を受けたり食事したりすれば、3日ぐらいで攻略できるだろう。その後はアンに紹介してもらって、俺の実力をアピールすれば「強い男性って素敵！」となるはずだ。そうなったらグレアの尻尾の付け根を確認したり、コスプレしたり、海に行ったり、学園祭をしたり、お泊り会をしたりして……最終的にはハーレム王になれる！

「測定の結果、魔法の素質がほとんど無いと判明しました」

「……は？」

「予定されている短期留学では効果が見込めません。今からでも中止した方が——」

「いや、それでも俺はここで学びたいんだ。たとえ魔法が使えなくても構わない」

「そうですか。秩序の騎空団にはお世話になってますから、こちらとしては歓迎しますよ」

考えようによっては、授業を聞く必要が無くなってラッキーなのかもしれない。せつかくだし、攻略人数を増やすのもいいだろう。例えば生徒会のメンバーとか……。

「それじゃあ、ミラちゃん先生が教室まで案内するわね☆」

「あつ、はい」

きつい。ミラちゃん先生は無いな。

そして、廊下の角でアンとぶつかったりすることもなく、教室の前に到着した。この学院の設計は大丈夫なのか？　せめて、屋上や急な階段があるといいんだが。

「私が呼ぶまで、ここで待っててねー☆　おっはー☆」

ミラちゃん先生は教室に入っていた。しばらくして中からザワザワと声が聞こえてくる。みんな留学生の話に興味津々といったところか。その期待を裏切らないようにしないと、などと考えていると呼ばれたので、教室のドアを開ける。

「どうも、秩序の方から来た者です」

『……………』

あつ、これはまた滑ったやつだ。まあいい、気を取り直そう。アンとグレアはどこだ？

!?

なんか不良っぽい生徒が多いような。いや、気のせいだ。どうせアンは寝坊とかで、グレアは隅の目立たないところにいるはず。

!?



見覚えのある金髪リーゼントがいた。暴走族の総長、ツバサだ。そして、これだけ生徒が荒れてるってことは、原作主人公が『孤独の童姫』もクリアしたのだろう。アンとグレアも隣の空域に行つてしまった可能性が高い。

「あの、俺やつぱり留学中止に——」

「えっと、まだ次の先生が決まってるから、みんなは自習しててねえ☆」

ミラちゃん先生は去つていった。慌てて俺もその後を追おうとするが……。

「オイ、新入り。俺達をシカトしてんじゃねえよオ!!」

「テメエ、どこ島出身だ?」

「パン買ってこいよ、コラー!」

これはあれだな。転校生が休み時間に囲まれるイベント的なやつ。どうせなら女生徒に囲まれたかったんだが。例えば向こうに座ってる女の子とか……。

「あつ、コイツいまアキナちゃんに色目使いやがった!」

「何イ!」

!?

俺を囲む人数が倍になった。仕方ないので実力行使、いや秩序執行してしまおう。

「なんかもう面倒だし、まとめてかかって来いよ。『秩序』の時間だオラァ！」

俺は釘バット（武器種は剣）を構えた。

エピソード4

3日後。

「おはようございます！ 秩序の兄貴ー！」

「秩序の兄貴イ！ 昨日の集会の話、聞いて下さいよオ！」

「お前ら場所を空けろ！ 秩序の兄貴、紅茶買ってきました！」

「おつ、悪いな」

不本意ながら、俺はクラスに馴染んでいた。彼らは単純なので、ただ強いというだけで尊敬される。そして、拳を交えたからには俺も仲間というわけだ。そんなわけで、紅茶代を渡した俺は彼らの話を適当に聞き流している。こいつら実は全員美少女だったりしないかな……無いか。

「よオ、秩序」

「おう、ツバサ。今日は早いな」

「そつちこそ」

登校してきたツバサと挨拶を交わす。先日の乱闘の後で『面白エ、今度タイマンで勝負すんぞ』とか言われて、ライバル認定されてしまったようなのだ。これじゃあマナリアフレンズではなく、『魔成亞訃煉頭』になってしまう。この状況から早く抜け出したいし、よくある学院陥落イベントでも発生しないかな。いや、むしろ俺がこっそり結界を壊せば……。

「——秩序の兄貴なら余裕っスよね？」

「ん？ お、おう、もちろんだ」

話を聞いていなかったたので適当に返事をする。どうせ話の中身なんて無いのだから。

「スゲエ！ じゃあ、秩序の兄貴用に、とっておきの単車を用意してやつぜエ！」

「……？ 単車？」

「ケツタギアのことっスよ！ 今夜の集会で秩序の兄貴が乗るヤツっス！」

「秩序の兄貴のドラテク、勉強させてもらいます！」

「いや、その……」

このままだと『とっておきの単車』とやらで集会に参加させられてしまいそうだ。そんな男だらけのイベントに興味はないし、適当に理由をでっち上げて断ろう。

「ハッ、止めときな。いくら腕が立つからって、その秩序野郎は新入りだべ？ 俺らのス

ピードに付いてこれねーだろ」

「……あまり俺を侮るなよ。これでも仮面ライダーは欠かさず見ていたんだ」「そうだそうだ!」「今夜が楽しみっス!」「でも仮面ライダーって何だ?」

はっ! つい安い挑発に乗せられてしまった。単車だけに。

ケツタギアとは単なる電動自転車のことであり、「単車で集会」というのも集団サイクリングでしかない。そして、自転車なら前世で乗り慣れていたため、チート身体能力で力押しできるのだ。そんなわけで、俺は問題なく彼らに追走して溜まり場までやってきた。すると、後から別の集団がやってきて、俺達を囲むように走りはじめた。その集団から1人の男が出てくる。

!?

「今宵……貴様らを奈落の底に叩き落とし、夜想曲を奏でよう……ヒヤハハハハーツ!」「なんだ、テメエは?」

彼はイベントのボスだ。事故で人を死なせた加害者の息子ということで、迫害されて不良になったんだっただか……まあ、俺には関係ない話だ。今もツバサを煽っているの  
で、順当に喧嘩が始まるだろう。ガンガン倒してイベント報酬を貰うとしようか、えー

と……。

「さア、Show Timeの始まりといこうか……」

そうだ、シヨウって名前だった。すつきりしたから心置きなく倒すぞ。俺は四天刃を持ちシヨウに近づいていく。

「ん〜？ 最初に沈むのは貴様かア〜？」

「四天刃キック!!」

「ぐがあっ!」

「出た!」「秩序の兄貴の死纏神キックだ!」「まさに、死を纏う神のごとき一撃だぜエ!」シヨウを蹴り倒すと、背後から頓珍漢な解説が聞こえた。俺は無視してドロップアイテムを探すが……無い! 一体どういうつもりだ、シヨウ!! 俺が睨みつけるとシヨウは起き上がり、単車に飛び乗ってペダルを回しはじめる。

「まだだア! デーモンリアクターアア! フルスロットルウウウツ!!」

彼の単車に搭載された違法な動力装置「デーモンリアクター」が暴走する。それらはもはや単なる電動自転車ではなく、モンスターマシンだった。

「デーモンリアクター……だと!」

ツバサはショックを受けているようだが、俺は気にせず戦闘を開始する。この形態なら間違いなくドロップアイテムに期待できるのだから。

「ヒヤハハハアアーツ!! 死ねええええツ!」  
「来いよ、何度でも倒してやる。『秩序』を『執行』つちまうぜ!」

こうして俺は、イベント報酬の金属バット（EX攻刃だ!）、ダマスカス骸晶などを入手した。

翌日、タンDEM騎空便商会にて。

「すみません、秩序の者ですが……」

「ひい!」

隊長からの情報で強制捜査が行われ、商会のボス（シヨウの父親）は裁きを受けた。

## 第21話 蒼紅之華

エピソード1

悲しみの中にいる。

「ああ……プリンセスとコネクトしたかった……」

マナリアでの留学から復帰した俺は、続けて土有利古戦場を戦い終え、今は宿の一室で報告書を読んでいる。これは各所の駐在員から定期的に送られてくる情報であり、俺にも当然ながら閲覧する権限があるのだ。

「アリーザを助けたかった……」

報告書には、アリーザ誘拐事件の顛末が書かれていた。例によって原作主人公が鮮やかに解決してしまつたらしい。

「ジェシカ、セレファイラ、ファイナ、アステール、スーテラ、サラ、リリイ、ヴェトル、ヴァンピイちゃん、クムユ、サーヤ……」

さらに、その事件でジェシカと協力していたこと、フィデイ島で星晶獣ミドガルズオルムが封じられたこと、メネア皇国で星晶獣ヘカトンケイルが封じられたこと、シジュールマ島で星晶獣マルドゥークが封じられたこと、ポート・ブリーズで懇親会があったこ

と、サブル島の巫女が救われたこと、クリスタリアたち3種族が和解したこと、夢占い師と接触していたこと、ヴァンパイアと接触していたこと、合金工房が軌道に乗ったこと、ジュエルリゾート奪還事件が解決されたこと等々、多くの出来事が書かれていた。どうやら、女の子と出会えそうなイベントは、ほとんど原作主人公にクリアされてしまったらしい。

「俺の仲間（予定）が……俺のハーレムが……」

そんなわけで、肉体的にも精神的にも消耗が酷いのだ。今から原作主人公に会いにいった文句の一つも言っちゃりたいが、リスクを考えると止めた方がいいだろう。なにしろ『原作主人公』なのだから、俺みたいにチート性能でも不思議ではない。最悪の場合、意味不明な理論展開の後に『DANZAI』されてしまうし、できれば一生会いたくないほどだ。それに、もし外見が美少女であっても、どうせ中身は40代の男だしな。

「あー、もうなにもしたくないー」

いつそ秩序の騎空団も退団して、新天地で一からやり直そうか……。そんなことを考えていると部屋のドアがノックされた。

「はーいーいーいー」

「隊長はん……？ その、えつと……うちの買い物に付きあってくれへん？ あつ、でも古戦場で疲れてるんやったら——」



「すぐに行く!!」

俺は起き上がると、顔を洗い、身支度を整え、武器を10個装備してからドアを開いた(所要時間約10秒)。そう、まだ俺にはソシエ(生娘)がいるんだ。新天地なんてありえない。

俺が留学している間、ソシエはユエルと二人旅をしていたらしい。森や山を探検したり、九尾の力を狙う悪党と戦ったりしたそうだ。……俺もそっちに参加したかった。

「でもな、その時にユエルちゃんと喧嘩してもうて……最近ちよつと気まずいんよ」  
「なるほど。それで古戦場でも微妙な雰囲気だったのか」

「うん……だから仲直りのために贈り物をしよう思て」

「それはいい考えだ。きつと上手くいくさ」

理想的な展開は、贈り物が原因でソシエがユエルに見捨てられて、俺が彼女を優しく慰めつつ頂いてしまうというものだ。何かユエルにだけ通じる嫌がらせアイテムは無いものか。うーむ……。

「隊長はんは、貰って嬉しい物ってある？」

「それはもちろん、ソシエの着けてた『し……っ!』」

おっと危ない。つい本音を口に出してしまうところだった。いくらソシエでも『下着

が欲しい』と言われたら好感度は下がるだろう。どうにか今の言葉を誤魔化さないと……。

「……服かな。私服」

「うちの古着つてこと？ 確かにこの辺では珍しいかもしれないけど……隊長はん、フアツションに興味あつたん？」

「ああ、実はそうなんだ」

だからミラちゃん先生の店で体操服も買ったし、ソシエに着せたいと思っている。まあ、今日のところは好感度稼ぎに専念するのがベストだろう。体育倉庫でのプレイは攻略後に……。

「うーん、でもユエルちゃんは古着ぐらいで喜ぶか分からへんしなあ」

「ユエルだつて喜ぶさ。間違いない」

「そうなんやらか……。せやったら、他にも何か用意しよ？ 1つより2つの方が嬉しい思うし」

「そうだな、俺もそう思うよ」

実際、ユエルだったら何でも喜ぶだろうけど。そんなわけで、俺らの買い物デートは続く。

その後、ソシエが見つけた飾り紐を購入したら、ぼったくられてしまった俺達。

古戦場の疲れからか、不幸にも用心棒と憲兵に取り囲まれてしまう。

ソシエをかばい逃がすことには成功したが、すべての責任を負った俺に対し、探査工船の主、船長サンザが言い渡した保釈の条件とは……。

## エピソード2

そもそも、どうして古戦場の直後なのにノース・ヴァストに来ていたのか。それは、温泉で疲れを癒したいという意見が出たからだ。まったく、混浴に釣られた過去の俺はどうしようもないな。

そんなわけで、カイオライベントが始まった。厳しい漁業生活の日々である。俺は疲労により本調子でなく、武装解除されているため船長のサンザに従うしかない。

「オラツ！ ボサつとすんじゃねえ！ 網の準備をしな!!」

「はいはい」

といっても網がどこにあるのかは分からない。仕方ないので船倉を探索することにしよう。3時間ぐらい探せば、きつと網も見つかるはずだ。むしろ俺の武器さえ取り戻せば下克上も……。

「ランちゃん、ごめん……ちよつと気持ち悪くて……」

「なっ……大丈夫か？ 顔が真っ青だぞ!？」

見覚えのある『傭兵』がいたが、俺は無視して船倉に向かった。そして1時間ほど眠った。

さて、この探査工船では独自の通貨『ビタ』が使われており、食事や休憩のためにはビタを消費する必要がある。俺としては一日下船券を購入してそのまま逃げ出したいところだが、日々の労働で稼げるビタには限りがある。そこで、仲間達と協力してギャンブルで大きく稼ぐことにした。

「俺達のビタ、お前に託したぞ」

「俺もランちゃん判断を信じるぜ!」

「早くアウギユステに帰りたい……」

俺の計画に賛同した3人から91000ビタずつ受け取る。この273000ビタをギャンブルで増やすのが計画の第一段階だ。カジノ経験が豊富な俺にとっては余裕だが、漁師たちのイカサマには注意する必要がある。

「とりあえずは様子見で20000ビタを賭けよう」

「おお、碧の魚に一点賭けたあ中々の勝負師だねえ」

「まあな。少しずつ稼ぐのも面倒だし、一気に儲けさせてもらうぜ」

だが、結果は俺の負け。20000ピタは奪われてしまった。なるほど、やはり何かイカサマがあるようだ。ならば、俺が気づいたことを知られて対処される前に勝負を決める必要がある。

「どうした？ ひよつとして怖気づいちまったかあ？」

「いや……次の賭けだが、俺は白の魚に25万ピタを賭ける！」

ざわ… ざわ…

ざわ… ざわ…

「25万だってえ！」「いいぞ兄ちゃん！」「よし俺も……」

これに勝てば一日下船券が購入できる。それで、どうにか秩序の騎空団に接触して、権力で助けてもらうんだ……！ さあ、白の魚よ来い！

数分後、俺は『戦利品』を持って仲間たちのところに戻った。

「すまない……手は尽くしたんだが……」

結果は圧敗だった。よく考えてみれば、奴らのイカサマへの対抗手段を準備していなかったのが原因かもしれない。この程度のこと気づけなかったのも、古戦場の疲れによるものだろう。

「いいさ……君はよくやってくれた……」

「そうそう、あんまり落ち込むなって」

「もつと俺が力になれれば……」

「ありがとう。少しだけ残ったビタで食べ物を買ったから、みんなで食べようぜ」

俺は手に持った焼き鳥(3000ビタ)の皿を置くと、一つ一つ串から外していく。これです——

「焼き鳥を串から抜く時は先に一言断るべきです、隊長」

「はい、リーシャさん。もう二度としません」

リーシャの召喚は無事に成功したようだ。空には騎空艇『ピースメーカー』の姿もある。秩序の乱れを感じて来てくれると信じていたよ、リーシャ。これが賭けに負けた場合の『プランB』だ。

「おい、誰だか知らねえが、この船で勝手なことされちゃ困るんだよ」

「サンザ……!」

「あなたが船長ですね。そもそも彼がここにいるのは違法な処遇の結果で——」

「うるせエ! 違法だろうが関係ねえ! この船じゃ俺が秩序なんだよ!」

あつ、リーシャの前でそれは禁句……。

「そんなものは秩序ではありません。訂正してください」

「はあ？ バカかテメエは？ 力こそが秩たらば?！」

リーシャの拳がサンザをふっとばす。うん、あれは痛いんだ。

「訂正しろオオオオオ!!！」

「――」

そして、容赦なくリーシャの追撃が襲いかかる。あの勢いだと5時間コースは確実だな。やってきた用心棒達も、リーシャの劍幕にすっかり戦意喪失しているようだ。

「……助かった、のか？」

「そうだな。少なくとも正当な権利が保障されるのは間違いない。リーシャが治まったから騎空艇で陸地まで送っていこう」

「やったなランちゃん！」

ここいつらに関しては何れで問題ないだろう。さて、まだ俺にはやるべきことがある。

「……あの、隊長はん無事やった？」

「ああ、ソシエが皆に知らせてくれたおかげで、酷い目に遭わずに済んだよ」

「よかったあ」

ソシエと、それからユエルもやってきた。

「どうせなら、魚のエサにでもなればよかったんや」

「ユエルちゃん！ そんなこと言うたらあかんよ」

どうやら、ちゃんと仲直りできたようだ。ユエルの髪には、あの時の飾り紐がある。

「……でも、ぼったくりからソシエを助けてくれたことは……その、か、感謝——」

「それより、2人とも焼きガニは好きか？」

「焼きガニ？」

「せつかくこんなところまで来たんだ。ここでしか食べられないマツヴァガニを捕獲しようじゃないか。ちようどカニカゴもあることだしな」

俺は量産型ロボミから光属性の武器やグランデ召喚石を受け取って、背中や腰に装備していく。しばらく休んでいたおかげで、体の調子も万全だ。

「……まあええわ。ウチの狐火で、こんがり焼いたるからな」

「ふふつ、頼りにしてるよ」

「よし、目標は100体討伐だ！」

『えっ』

俺はカニカゴを海に投げこんだ。サンザを海水責めしているリーシャから、目を逸らしつつ。

### エピソード3

1カ月後、ソシエは俺のベッドの上にあった。



「う……んっ……隊長はん、もうちよい優しゅう……」

「ごめん、痛かったか？」

「ううん、大丈夫やから……続けて……」

「分かった、じゃあゆつくり動かすぞ」

「あつ……そんな風にされたら……ふうっ……」

「ソシエ、綺麗だ……」

「隊長はん、うちな——」

しかし、突然部屋のドアが外から破壊された。その向こうに立っていたのは、案の定ユエルだ。

「ウチのソシエに何しとんねん！ 部屋の外まで声が聞こえとつたで！ どうせマツサージやってオチやろうけどな!!」

「ユエルちゃん……?」

だが、ベッドの上の俺たちを見たユエルの動きが止まる。先ほどまでの『行為』がマツサージではないと、容易に推察できたからだろう。

「待ってくれ、ユエル。これは——」

「2人とも、そこに正座や!!」

そのあまりの迫力に、俺たちは従うしかなかった。

「……それで、いつからなん？」

「ええと、ノース・ヴァストから帰ってきた直後ぐらいだったような」

「へえ、そんな前からウチに隠れて2人でなあ……」

「ユエルちゃん、悪いのはうちなんよ。隊長はんは何も——」

「いや、俺が強引に迫ったからだ。全責任は俺にある」

「隊長はん……」

「ソシエ……」

見つめあう2人。これは好感度大幅アップだな、間違いない。

「ええ加減にせえ！ なあソシエ、嫁入り前なんやから慎まなあかんやろ？」

「うん……」

「大丈夫だ。いざとなったら俺が責任を取る」

「隊長はん……」

「ソシエ……」

見つめあう2人。そもそも、ユエルは慎めとか言える格好じゃないだろうに。

「あー、もう！ アンタは燃やすっ！」

「ユエルちゃん、落ち着いて……」

しかし、ユエルは聞く耳を持たず狐火で攻撃してきた。だが、火の勢いは急激に弱まっていき、俺に当たる前に消えてしまう。

「あれ!? お、おかしいな……? えいっ! えいっ!」

「ユエルちゃん……?」

「き、今日は少し調子が悪いみたいや。けどな、ソシエの『尻尾をブラッシング』してええんは、ウチだけなんやからな!」

「分かったから機嫌直そ? な?」

どうやらソシエの尻尾に触れるのは今日が最後まで。もつとも、正式に交際すれば尻尾以外の場所も好きなだけ弄れるようになるだろうが……。結局、ユエルはさらに二言三言ばかり文句を言うと、ソシエの手を引いて部屋から出ていった。

「今日は久しぶりに一緒に寝よか」

「もう、ユエルちゃんったら」

このあと滅茶苦茶お泊り会した(らしい)。

やれやれ、狐火で燃やされそうになった時は焦ったけど、無事に終わって良かった良かった。かっつた。

「隊長、この時間は『隊長・副隊長ミーティング(艇長は除く)』だと聞いていたのです

が」

「ほらそれはまずソシエとの信頼関係のためにスキンシップをはか痛い！ 痛い！」

「なるほど、では私とのスキンシップも必要ですね？」

これは関節技って言うんじゃないや……ちよつ、親指折れる、止める！ 止めてください！

#### エピソード4

狐火が使えなくなってしまうたユエルだが、ある集落の祠に眠っていた神器『緋双剣』を継承したことで力を取り戻す。

(いや、確かにそうなんやけど、もうちよい描写があつても——)

その後、ヒーローやマルチバトル、それから古戦場などの経験値でLv100になったユエルは、狐火の力を抑えきれず暴走してしまう。

「うう……あつい……」

「すごい熱……。ユエルちゃん、しつかりして！」

ソシエは心配そうにしているが、どうせ適当に乗り越えられるだろう。モブだったらともかく、ユエルは重要キャラなのだから。でも、一生懸命なソシエの手前、声だけはかけておく。

「自分を取り戻すんだ、ユエル」

「ユエルさん、負けないで！」

「心を鎮める旋律を……」

「ユエルちゃん！ ユエルちゃん!!」

あー、早く終わらないかな。アサルトタイムまでには次の島に行きたいのに。今日の予定を頭の中で修正していると、目の端でゆらゆらと動くものがある。……ソシエの尻尾だ！ 不安な気持ちを表すように、ゆっくりと左右に揺れている。

「あつい……ああ……」

あの日からユエルに気を遣って、全然触らせてくれなかつたな。でも、今なら少しぐらい大丈夫か……？ 俺はソシエの尻尾に、そろそろ手を伸ばしていき——

「ひゃんっ！」

うっかり力加減を間違えて、強く掴んでしまった。

「……隊長？」

皆の目が冷たい。待ってくれ、その冷たさはユエルに向ければいいと思う。そもそも今のは誘惑してきたソシエの尻尾が悪いのであって、俺は何も悪くない。

「さっさと……ソシエから、離れんかい！ このド変態!!」

いきなり狐火が飛んできたので、慌てて避ける。どうやら、ユエルはすっかり元気に

なったみたいで、神器から現れた『九尾の力の断片』を瞬殺していた。

「ユエルちゃん……!」

「ソシエは、ウチが守る!!」

「そう、その気持ちこそが重要だったんだ。だからこそ俺は敢えて——」

「やかましいわ!」

この劣勢な雰囲気ですて迎撃するのは得策ではない。俺は早々に撤退を決めた。

その後。

「あの時、隊長はんのこと少しだけ疑うてもうた……。謝ったら許してくれるやろうか」

「心配ない。隊長殿は遠大な智謀だけでなく、寛大な心も持っているのだから」

「……うん、そうやな」

彼女たちの過大評価はとどまるところを知らない。

## 第21.5話 フラグメント

・来訪者たち

船団長の執務室にて、モニカとリーシャは思わぬ人物と対峙していた。

「では、用件を聞こうか……黒騎士」

「そう警戒するな。今さら秩序の騎空団と敵対しようとは思っていない」

黒騎士アポロニア、かつて隔離房に捕らわれていた女性だ。

「言っておくが、私としては脱獄の件を許していないからな」

「ふん……勝手にしろ。そんなことより、ある囚人との面会を要求する」

「面会……ですか？」

「そうだ。私の隣の房に男がいただろう？ あの時、少しばかり世話になったからな」

それを聞いて、モニカとリーシャは視線を交わす。

（あの時、隣の房にいたのって隊長ですよ。何か失礼なことでも言ったのでしょうか）

（ああ……こうしてわざわざ『世話になった』と『お礼参り』に来るほどだ）

（ど、どうしましょう。もし隊長と会って戦うことにでもなったら……）

（ううっ、やはり早めに追い出すべきだったか。だが、この場はどうか切り抜けるしか

ない！)

モニカは不思議そうな顔で黒騎士を見る。

「何のことだか分からないな。あの時、両隣とも『囚人』はいなかったはずだ。なあ、リーシャ」

「はい、間違いありません。(隊長は被疑者だったので嘘ではありません)」

「そんなはずっ……！ いや……そうか、記録上は存在しない囚人というわけだ。あれだけの事情通であれば無理もないか……」

「さあ、どうだろうか？」

「ふん……それならば仕方ない。邪魔をしたな」

黒騎士は去っていった。

数十分後、モニカとリーシャは入団希望者の面接を行っていた。

「俺達、秩序の兄貴に憧れて追いかけて来たっス！」

「秩序の兄貴と同じ部隊を希望するぜ！」

「兄貴の秩序道、俺達が切り開く！」

「……は？」

「ええと、その『秩序の兄貴』というのは、どなたのことでしょう」



彼ら——マナリア魔法学院を卒業見込みの入団希望者——から出た名前を聞いて、モニカは頭を抱えた。

「いったいどうしたのか……なあ、リーシャ」

「ありえないありえない隊長が秩序なんて絶対にありえない私は認めないあんな無秩序者がどうして許せない秩序の秩序が秩序で秩序に秩序と秩序秩序秩序秩序……」

そこには虚ろな目でブツブツ眩くりーシャがいた。

「えー、あー、貴君らの今後の活躍をお祈りする」

船団長の一日は長い。がんばれモニカ。(主人公に) 負けるなモニカ。

・ヤイアに出番を削られたリーシャ隊の雑談(第3部開始前)

秩序執行巡空独立強襲隊、隊室にて。

「あー、あの隊長、早くボロ出さなかなー」

「だよなー」

おなじみの会話である。

「そういえば誰か、隊長が槍や斧を使ってるのを見たことあるか？」

「いや」「私も見ていないです」「いっつも短剣だよな」

「それどころか、遠くの魔物に対しても銃を使わず突撃するほどだ」

「……だったら、どうして常にあれだけの武器を持っているんだ？」

「言われてみれば」「今まで気にしたこととも無かった」「最初っから『あれ』だったしな」

「まさか、あれが隊長なりのファッション……!」

『!!』

「いや……前に聞いたことがあるんだが、ザンクティンゼルという島にあらゆる戦闘スタイルを使いこなす老婆が住んでいるらしい。もしかしたら、隊長も本気を出せば全武器を駆使して……」

「だけど、さすがに剣ばかり10本も使わんだろ。確か、一時期そんな感じだったはずだ」

「それもそうか。やっぱり頭がおかしいだけだな」

そこに1人の隊員が駆けこんできた。

「おい、大変だ!」

「どうした、まさか隊長が何かやったか?」

「いや、さつきそこで不審者がいたんだ! それも隊長に匹敵するほどの!」

「嘘だろ……」「まさか、そんな奴がっ」「くっ、こっちは隊長だけで手一杯なのに!」

「残念だが本当だ。非常にうさんくさい、にやけ顔の男だった。それで、よりにもよって隊長のことを色々と質問されたな。『秩序の騎空団には凄腕の短剣使いがいるみたいだけど、どんな人なのかな』って。一応、こっちも不審尋問してはみたんだが、特に問題は見つけられなかった」

「類は友を呼ぶってやつでしようか。今後は、より一層の警戒が必要になりそうですね」「そういえば、最後に『んー、次は星屑の街にでも行ってみようかな』とか言っていたぞ」「星屑の街といえば、多くの子供達が住んでいるが……まさか、人攫いっ!!」「はっ、そう考えると、あのにやけ面も辻褄が合う!」

「こうしちゃいられない!」「早急な対応を!」「俺は隊長の動向を見張るぜっ!」「こうして、なんだかんだで星屑の街の治安は少しだけ良くなった。

・ジモトがアマルティア

少し未来の話。

「シユバ剣が落ちない!!!」

俺は連日のシユバマグ戦の成果に絶望していた。どれだけ倒してもシユバ剣がドロップしないのである。あまりに落ちないのでホワイトラビットを装備して挑んだら全滅したほどだ。

「やはり物欲センサーの仕業か！　せめて期待値通りならっ！　この偏りこそ無秩序だ  
！」

「何が無秩序なんですか？」

「ほわあつ、リーシャ！」

突然に現れるのは止めてくれ。また心臓が止まるかと思つたじゃないか（転生者  
ジョーク）。

「良かったら話してください。秩序に関することなら力になれるかもしれません」

「実は——」

俺は、藁にもすがる思いで彼女に事情を話した。

「……分かりました、何とかしてみましよう」

「えっ、シユバ剣の在庫があるのか！」

「いえ、そうではありませんが……隊長はそこに立つて動かないでください」

「あ、ああ」

俺はリーシャの言葉に従った。そして、彼女は少し離れた場所で謎のポーズをとりは  
じめた。

「裁きの門！　秩序！　マナー！　わらびもち！」

「リーシャ……？」

「秩序！ 合法！ 秩序！」

謎のポーズで秩序的単語を連呼するリーシャ。一体、何を!?

「あれはチツジョセントレーションによって、チツジョーラを高めているんだ」

「モニカ！ その……秩序何とかって？」

「歯車！ ルール！ 立方体！」

「チツジョーラ。簡単に説明すると、秩序的オーラのことだ」

「なるほど、完全に理解した」

少なくとも、このエピソードが『ちつじよるつ！』だってことはな。

「正六面体！ 秩序！ 歯車！」

「そろそろのようだ。出るぞ、リーシャの技が」

「正八面体!!」

「えっ、技ってそれ大丈夫なやつな——」

「『秩序執行拳』奥義……『有意水準』!!」

リーシャを中心に広がっていく光に包まれる。これは秩序の光か……!

「ふっ、相変わらずのチツジョーラだな」

「いえ……父のチツジョデntyティに比べたら、私なんてまだまだです」

「……それで、結局のところ何がどうなったんだ？」

「おそらく隊長の運から極端な偏りが消せたと思います」

「そ、そうなのか」

つまりシユバ剣が普通に落ちるようになったってことか。よし、ザンクティンゼルに行くぞ！

（念のために伝えておくびよん。本来なら今日はシユバ剣が2本は拾えるはずだった  
びよん）

うん？

（さっきの技で、超幸運状態が解除されたびよん。今はせいぜいドロップ率1%びよん）

は？ はあああああああああ！

「……秩序なんて、秩序なんてっ!!」

・ニオ 捕獲 作戦（コラボ）

俺は木の上で『彼女』の動向を観察していた。

「隊長殿、こんなところで何をしているんだ？」

「ああ、オリヴィエか。ここまで楽に来られるなんて、やっぱり飛行能力は羨ましいな」  
「……あまりにも自然な演技で、本当はヒトの子なのではないかと思っただぞ。諜報任務のため、私も見習いたいものだ」

「そ、そそそういえば何をしているのかという話だったな。俺が見ていたのは二オだ」  
俺が指差した先で、二オは一人歩いている。

「なるほど。彼女と親密になるため、密かに情報収集をしているということか」

「違うな。間違っているぞ、オリヴィエ。今から行われるのは二オの捕獲作戦だ」

「捕獲作戦……？」

「ああ、彼女の行き先を見るんだ。ピザが置いてあるだろう？ 二オがそれを食べると、カゴが倒れて出られなくなる仕掛けになっている。昔からの罠にアレンジを加えたんだ」

対象が二オなら、近くでひもを引っ張る罠は気づかれてしまうからな。そんなわけで、こうして俺の旋律が聞かれない距離から見ているのだ。ちなみに、捕獲装置は量産型ロボミが一晩で作ってくれた。

「……………どうやら私には作戦の全貌が見えていないようだ。ところで『ぴぎ』とは一体？」

「あまり知られてはいない料理だが、実は二オの好物なんだ」

「そうだったのか。なかなか興味深い食べ物だな」

「なんなら今度またリーシャに作ってもらおう。チーズの風味が美味しいんだ」

「では……まさか、あのピザもリーシャ副隊長が……？」

「ああ、文句を言いながらも、なんだかんだで作ってくれたよ」

「……なんという非情。やはり隊長殿には、ヒトの子など利用するだけの存在だと——」

「おっ！ ニオがピザに気づいたぞ！」

ニオはピザを一瞥すると、そのまま歩き去った。

翌日、俺とオリヴィエは、同じ場所でニオを見ていた。

「今日こそニオを捕獲してみせる！」

「そのために用意したのが、まさか『あれ』とは……」

そう、グラシーザー抱き枕カバーだ。ニオが中に入ると拘束される仕掛けになっている。もちろん、それも量産型ロボミが一晩で作ってくれた。

「何もかもこのためだったんだ。昨日の失敗も、あの日の買い物も」

「しかし、その……大丈夫なのだろうか？ 拘束するというのは秩序的に……」

「ああ。ニオ（20）はハーヴィン、ハーヴィンは合法、故にニオ（20）は合法という

三段論法さ」



「……………やはり私には作戦の全貌が見えていないようだ」

「条件は全てクリアされた。ニオを拘束したら持ち帰って、じっくりねっとり仲を深めていこう。そして冷たく『童貞坊や』と詰つてもらうんだ！」

「……………隊長殿？」

「おっ！ ニオが抱き枕カバーに気づいたぞ！」

ニオはグラシーザー抱き枕カバーを一瞥すると、そのまま歩き去った。

「……………失敗したようだ」

「ば、馬鹿な……………戦略が戦術に潰されるとは……………」

「隊長殿、その……………少し疲れているのではないか？ その肉体がヒトの子と同じなら、十

分な休息が必要だろう。私で良ければ……………慰めることぐらいは……………」

「えっ」

「こ、こういうことは初めてだから、上手くできるかどうかは分からないんだが……………」

「あ、ああ。ぜひ頼むよ」

その後、木から降りた俺は、その場で気持ちよくしてもらった。普通に頭を撫でられて。

エンディングテーマ『モザイクカケラ』

## 第22話 ベネーラビーチ

エピソードー

嵐の中にいる。

「わーれーわーれーはー、ちーっーじょーじーんーだー」

久しぶりに言ってみたくなったのだが、トルネードディザスターの風では特に意味がなかった。ダメージ無効にしたからか？ まあいい、そろそろ風が弱まってきたな。

「一気に攻めるぞ、ユエル！」

「分かるとるわ！ 行っけえ、狐火！」

「ユエルちゃん、火きれいやねえ」

放たれた狐火が、巨大な星晶獣——ティアマト・マグナを紅蓮の炎で包む。今のうちに攻撃すれば、追加ダメージが発生するはずだ。俺は2度3度と四天刃で攻撃を重ねる。

「はっ！ どうやー！」

ユエルも両手の緋双剣で果敢に斬りつけている。最終解放された彼女は大幅にパワーアップしたようで、俺も油断すると勝てないぐらいだ。もつとも、今は普通に心強

いのだが……。

「マスター、そろそろ大技がきます。防御行動を推奨します」

「頼む、ソシエ！」

量産型ロボミの警告を受けて、ソシエに指示を出す。

「うん、陸之舞！」

「雲龍！」

ソシエの舞によって、1ターンだが味方全員へのダメージが半減する。俺のアビリティと違って多段攻撃に有効なので、使い分けるのが重要だ。そう、ユエルへのプレゼントに『おさがり』を選んでいたソシエは、衣装箱の奥にあった儀式用の服を着たことで火属性になれたのだ！

「おかげで、ティアマグの確定流しも楽になったな……。よし、あと一息だ！ 全力でいくぞー！」

しばらくして、ティアマグはブレイク状態になった。そして、ユエルの回復力が倍になっていたこともあり、誰も戦闘不能にならずに勝利できた。

「ソシエのおかげやな」

「ううん、ユエルちゃんのおかげ」

まあ、俺のデバフが一番有効だったけどな。それはともかく……。

「じゃあ10分休憩したら再挑戦だ」

「ええー」

急がないと、アサルトタイムが終わるだろ！

## エピソード2

秩序の騎空団では、アウギユステで水上訓練を行うのが毎年の恒例となっている。そして、可能な限り同行してモニカの水着姿を目に焼き付けたいと思っていたのだが、3年前は投獄、2年前はデイフエンドオーダー、去年は古戦場の影響で同行できなかったのだ。そんなわけで、長年の欲望をぶつけるために、俺は砂浜で水着モニカが来るのを待っていた。なお、訓練は明日からで、今日は自由行動となっている。

「お、お待たせしました」

水着の美少女が近づいてきたと思ったら、話しかけられた。ひよつとして逆ナンつてやつか？ いや……このモブ美少女の声、普段から聞いているような……！

「リーシャ？」

「はい、隊長。どうかしましたか？」

「い、いや、一瞬誰だか分からなくて。その、あまりにも可愛かったから」

本当は、いつもの秩序帽（仮称）をかぶってないからだ。でも、可愛いってのは本心

なので許してほしい。

「ええっ!? 本当ですか!？」

「もちろんだ、よく似合ってるよ」

リーシャの水着は原作通り、白とピンクの水玉模様のビキニだ。普段は制服に隠れた部分も露出していて、瑞々しい肢体が目眩しい。さらに、その下半身は想像以上に肉付きがよく、水着のサイズが小さいのではとも思ったが、この程度のことにはシエロカルテ殿が気づかないわけもないし、収まりきらないほどの大きな尻を堪能してもいいということなのだろう。というわけで俺は彼女の後ろに回りこんだ。なるほど、この尻でリーシャは低重心となり、攻撃力が上がっているわけだ。それに、水着リーシャが魅了させるのも納得しかない。まったく、俺の秩序を乱す悪い尻め!

「あ、あまりジロジロと見ないでください」

「それより、そこにうつぶせで寝そべてみてくれないか?」

「その、隊長……あつ、ビーチパラソルを借りてきますね!」

リーシャは走り去った。走っていく尻の躍動感……ふーむ、なるほど……。

次にやってきたのはソシエだった。いや、女神と呼ぶべきか。

「ソシエ……とても綺麗だ……」

「お、おおきにな」

ソシエの水着も原作通り、白のビキニだ。控えめな彼女らしくパレオを着用しているのだが、薄くて透けているため逆効果である。前の休日にユエルと2人で選んだと聞いていたが、流石はユエルだと脱帽せずにはいられない。ソシエの純粹さを損なうことなく、ここまで魅力的に仕上げてくるなんて！ だが、この純粹な白いキャンパスを見ると、自分の色に染めたくなる欲求も当然のことである……。

「ちよつと2人だけで向こうの岩場の影に——」

「ソシエに何するつもりや！ この変態!!」

突如として出現したユエルが、俺とソシエの間に割りこむ。一体どこから現れた……いや、思い返してみれば最初からソシエと2人で来ていた気もする。まあ、ソシエしか見えてなかったのは仕方ないだろう。ユエルの水着姿は普段とあまり露出が変わらないし。

「何って、『一夏のアバンチュール』とか『少女から大人へ』とか、みんな普通にやることだが」

「そのアバンチュールっていうの、楽しそうやなあ」

「アカン！ 絶対にアカン！ ほら、たこ焼き買いにいくで」

ソシエは連れ去られてしまった。ユエルは後で濡れ透け状態にしてやる。

水鉄砲を買いに行こうとしたところで、モニカがやってきた。

「そんな……どうして……」

「貴様、これは一体なんのつもりだ！」

どういふわけか水着姿になっていないモニカは、手に持った水着を差し出してきた。それは間違いなく、俺が彼女に贈った水着だった。贈ったといつても、モニカの注文を取り消して、代わりにこっそり置いておいたので、俺からだとは気付かれないはずなのだ……。

「そのスクール水着の、どこが駄目だっていうんだよ！」

「全部だ！」

「そんな！ モニカといえどスク水だから、わざわざ（ミラちゃん先生に）作ってもらった特注品なのに！ 胸に『もにか』って名札も付いているんだぞ！ それなのに一体どうして……はっ！」

「まさか、胸のサイズがきつかったとか……？ それでも大きめになっているはずなんだが」

「ふざけるな!!」

モニカは砂浜に水着を叩きつけた。その動きに合わせて揺れる大きな胸。ぜひとも

水着姿で揺らしてほしいものだ、などと考えている間にモニカは去っていった。

とうとうオリヴィエの降臨だ。といっても普通に歩いてきただけなのだが。

「美しい……」

「隊長殿、どうかしたか？」

オリヴィエの水着も原作通り、黒と白のビキニだ。普段は相対的に露出が低めの彼女だが、今はその均整の取れた肉体を惜しげもなく晒している。さらに、いつも防具に押さえつけられている胸部を寄せて上げることにより、たわわな2つの果実が強調されて、俺のフォールン・ソードに渾身だった。

「そうだ、サンオイルをぬろう」

「待つてほしい。私は宵闇を司る星晶獣だ。太陽光なんかには決して屈したりしない」

きつとした顔で反論するオリヴィエ。さて、どうにか説得しないとな。

「……いや、これも空の民への理解を深めるために重要なことだ」

「なるほど、そういうものか。だが、男女の過度な接触は避けた方がいいのではないか？」

「それは……あつ、これは医療行為のようなものだからな。心配しなくても大丈夫さ」

「そうか、では頼むでしょう」



そう言うとき、オリヴィエは寝そべった。そして髪を横にどかして、背中があらわになる。

「少しぬりにくいから、水着の紐をほどいてくれないか？」

「わかった。……これでいいだろうか」

「ああ、じゃあ始めるぞ。ただ、ひよつとしたら手が滑ってしまうかもしれないが……」

予防線を張りつつ、オイルまみれの手で彼女の背中を撫でる。

「あ……す、少し驚いただけだ」

オリヴィエが何か言っているが、俺の耳にはほとんど入ってこなかった。両手で柔らかな感触を味わいながら、この時間がずっと続けばいいと思つて……いや、違う。俺の楽園はもつと先にあるのだ。俺は手を下半身の方に伸ばしていき……。

「おっと、手が滑っ——」

「隊長、猥褻行為ですか？」

俺の喉元に、パラソルの先端が突きつけられた。おかしい、気温が急に下がった気がする。どうしてだろう、体中の震えが止まらない。

「ちがっ……待っ……リーシャ……」

「先程の顔は、どう見ても性犯罪者でした。有罪です」

おい、リーシャ。そのパラソルを何に使うつもりだ。それは地面に立てるものであつ

て、決して人を攻撃する道具ではない。それに、落ちがワンパターンなのは良くないと思——

「ぐわあああ！ 俺のアイスクャンディがああああああああ!!」  
リーシャには勝てなかったよ。

戦闘不能状態で倒れている俺のところ、薄着のニオがやってきた。彼女は持つていた鞭のようなもので俺を叩くと、それを捨ててリーシャのところに行ってしまった。

「これは、ニオのマイクロビキニー」

そう、俺がプレゼントしたものだ。ニオは合法だから問題ないと思ったんだが、どうやら趣味に合わなかったようだ。それにしても、あの蔑んだ目と俺への攻撃……ニオはSだな！

### エピソード3

翌日、俺は1人で浜辺を歩いていた。

「まったく、昨日は酷い目に遭った。みんな海だからって浮かれすぎだろう。俺は隊長だぞ」

まあいいか、早く集合場所に行こう。なお、俺の部隊は水上訓練に同行しているが、参

加はしない。モニカの水着姿を観賞するのが目的であつて、訓練しながらでは疎かになるからだ。

「あーっ、ちようどええところに来たわ」

「ユエルか。悪いが少し急いでいるんだ。デートならまた今度にしてくれ」

「ちやうわ！ このおっちゃんが困つとるみたいでな」

男に興味はない。他をあたつてくれ……カ、カツタクリさん！

「おらがカツウオヌスを（中略）じゃがなあ……」

だいたい分かつた。要するにカツオイイベントが開始したということか。だが、俺にはモニカの水着を見るといふ大事なイベントがあるのだ。

「すまないが——」

「ユエルちゃん、カツウオヌス釣りできそうな人おつた？」

「——船は借りられるか？ 俺が最高のモドリカツウオヌスを釣つてみせよう」

モニカの水着は明日でも見られるしな。そんなわけで、俺達3人はカツウオヌスに挑み、無事に勝利した。そして、せっかくなので1日かけて周回した。カツウオヌス召喚石が拾えなかつたのは納得できないが、まあいいだろう。

ちなみにその頃、リーシャはシエロカルテ殿の店で接客に励み、大人気だつたそうだ。

翌日、俺は無人島にいた。カツウオヌスを釣った帰りに、なんだかんだで遭難したのだ。

「まったく、昨日は酷い目に遭った。まさか船が転覆するなんて」

まあいいか、船は修理できたみたいだしな。今から帰還すれば、今日のうちにモニカの水着観賞はできるだろう。

「隊長はん、ユエルちゃんが探検中にスイカ畑を見つけたって……」

「なんだって……その中に巨大スイカはあったのか？」

「うん、ユエルちゃんよりも大きいのがあったみたいで。うち、3人で食べよう思て」

だいたい分かった。要するにスイカイベントが開始したということか。だが、下手に刺激しない限りは襲ってこないはず——

「うわっ、なんやこのスイカ！ 変形しよった!!」

——ユエルの叫び声を聞く限り、手遅れのようにだ。仕方ないか、モニカの水着は明日でも見られるしな。そんなわけで、俺達3人は巨大スイカに挑み、無事に勝利した。そして、せつなくなので1日かけて周回した。

ちなみにその頃、リーシャはモニカとバレーの大会に出て、息の合った連携で優勝したそうだ。

翌日、帰還した俺はモニカを目指してこつそり移動していた。

「まったく、昨日は酷い目に遭った。もうしばらくスイカは食べたくないな」

まあいいか、今日は慎重にいこう。

「隊長、オダヅモツキーの残党がいたので壊滅させたのですが、彼らが漁船を壊したので  
——」

だいたい分かった。要するにンニイベントが開始したということか。だが、クイーン  
の収穫は明日でも問題ないはずだ。

「……」

「……」

抵抗しても無駄っぽかったので止めておいた。モニカの水着は明日でも見られるし  
な。そんなわけで、ニオを含めた俺達3人はンニのクイーンに挑み、無事に勝利した。  
そして、せっかくなので1日かけて周回した。

ちなみにその頃、オリヴィエはアイスキャンデー等を食べ歩きしていたそうだ。

翌日、俺は焦る気持ちを抑えながら、目立たないように歩いていた。

「まったく、昨日は酷い目に遭った。リーシャの横暴にも困ったものだ」

まあいいか、ンニは美味しかったしな。だが、今日こそモニカを……！

「やあやあ、こんにちは。私は観光協会のトニイと申します」

だいたい分かった。要するにナギイベントが開始したということか。だが、こんなマフィアの相手をしている暇はない。

「俺の前から消えろ。今なら見逃してやる」

「いや、これは観光地誘致の一環でカバツ！」

とりあえずぶん殴った。そんなわけで、俺達秩序執行巡空独立強襲隊はマフィアとの全面戦争に突入したが問題なく勝利し、ついでにデンキンナギにも無事に勝利した。そして、せっかくなので1日かけて周回した。

ちなみにその頃、水上訓練を終えたモニカ達は、アマルティアに帰っていったそうだ。

翌日。

「来年こそモニカの水着を……」

しかし、俺は知らなかった。翌年の水上訓練では、サメや天司や墮天司に翻弄されることを。

エピソード4

秩序の騎空団第四庁舎、秩序執行巡空独立強襲隊の隊長室にて。

「失礼します。お呼びでしょうか、隊長」

「ああ、リーシャ。早速だが、この衣装を着て殴ってくれないか」

「……私は書類整理に戻ります。隊長も真面目に仕事をしてください」

「待ってくれ。ちゃんと説明するから、せめて話だけでも！」

慌ててリーシャを呼び止めると、俺は計画の概要を伝えた。

最近、ソシエは着替えたことで火属性に、ユエルは水着で風属性になった。火ソシエはダメージカット&かばうで防御役として他属性でも活躍できるし、水着ユエルはメンバーを風属性で揃えられるようになってパーティの火力を上げやすい。つまり、キャラの属性が変化することで、編成の幅を広げられるのだ。それに、特定の属性以外に耐性を持った敵と戦う可能性もある。

オリヴィエは闇属性以外が難しそうだし、量産型ロボミは服を着ていないし、ニオには無視された。だから、リーシャには衣装チェンジで別属性になってほしい。そして、属性確認のため訓練用的に殴ってほしいということだ。

「なるほど、そういうことなら分かりました」

「じゃあ……！」

「いえ、主張は理解しましたが、着替えるだけで属性が変わるとするのは信じられませんか」

それな。水着になるだけで属性変更って設定的にどうなんだ。

「な、何事もチャレンジ精神が大事ってことで……。まずはこの『星晶獣アテナのコスプレ』から試してみよう。もしかしたら火属性になれるかもしれない。声も似てるし。あつ、サイズは大丈夫だと思うけど、胸のところが余るようならパッドがあるからこれで調節——」

「仕事に！ 戻ります!!」

「どうしたんだ、リーシャ待ってくれ！ アテナのコスプレが嫌ならミニスカサンタもあるから！ ミニスカメイドや魔法少女（モニカと同じ方向性）もある！ せめて1回だけでも！ 次からは制服スキンを使って、今の外見で運用するから！」

リーシャは止まらなかつた。せっかくミラちゃん先生に頼んで色々と用意したのに……。

ちなみに衣装の代金は、貰った秩序號（ケツタギア）を売って工面した。



## 第23話 九尾

エピソード1

遺跡の中にいる。

「よし、この辺で創樹の花蕾を使うぞ」

ある程度のマグナ武器は拾えたとし、次はそれらの最終上限解放だ。というわけで、黄星の輝きを入手するため、俺達はルーマシー群島に来ていた。ここでユグマグH1に勝利すれば確実にドロップするし、運がよければ土のクリスタルも……！

「はい、隊長。総員配置につきました」

バトルメンバーは俺、リーシャ（リミテッド）、ニオ（十天衆）、ユエル（水着）の風パーティーだ。ユグマグは何故か火属性の特殊技を使ってくるので、ユエルの土攻撃ダメージでは微妙に残念なのが仕方ない。モニカには忙しいとかで断られたしな。

まあいい、ゆぐゆぐと昏睡プレイの始まりだ！

戦闘開始から数ターン経過したが、思ったより順調に進んでいる。ニオが防御アップでダメージを軽減して、俺が大ダメージを無効にしたら、ユエルが全体回復しつつ、リー

シヤが弱った味方を単体回復するという隙の無い陣形だ。しかも、相手は昏睡や魅了で行動不能になるターンが多く、アビリティ再使用までの時間も稼ぎやすい。

「使用条件がHPの特殊行動も無かったはずだし、チャージターンにさえ注意していれば何とかなりそうだ。ニオ、そろそろ昏す——」

「うるさいのは嫌い」（ニンアナナが発動！）

最後まで言わなくても伝わるなんて、ニオとの絆は順調に深まっているな。……よし、寝た！

「チャンスだ。起こさないように注意しつつ攻撃していくぞ！ ユエル、狐火は使うなよ」

「分かるとるわ！」

俺は奥義を使おうと四天刃を振り上げ……：……：……：そういえば、ミストが切れるころか。途中で防御力が戻ったら嫌だし、かけなおしておこう。そんなわけで、2アビを使って攻防ダウンさせた。

「決めます！」（サンライズソードが発動！）

「あつ！ 駄目だ、リーシヤー！」

リーシヤのサポアビ攻撃によって、ユグマグは昏睡状態から復帰した。

サンライズソード……：……：味方がアビリティを「4の倍数」回目に使ったとき自動発動す

るリーシャの新技である。本人と同様に融通がきかないため、今回のような悲劇が生まれてしまう。

目を覚ましたユグマグは両手を地面に向けた。すると大地が割れていき……。

「――！」

「まずい、ネザーマントルだ。このままだと防げな――」

結局、エリクシールを使用した。

エピソード2

ある日、騎空艇『ピースメーカー』の甲板で、ソシエとユエルが舞の練習をしていた。ユエルが着ているのは、ソシエのおさがりで儀式用の服（露出が低い）である。つまり、九尾イベントの開始が近いということだ。

「ツ!」「この感じ……」

踊るのを止めて頭を押さえる2人。おそらく、謎の少年がアキノという島に向かったと幻視したのだろう。ようやくこの時が来たのだ。

「アキノ！ アキノちゆう島や!!」

「よし、分かった。さっそくアキノに向かおう。リーシャ、針路を北西に変更してくれ」

「了解しました、隊長」

リーシャは隊員達に指示を出しはじめた。俺も水属性の装備に変更しておこう。今回の九尾は火属性だからな。

「バトルメンバーはソシエとユエルが確定として、4人目をどうするか……」

「隊長、少しよろしいですか？」

「ん？ どうしたんだ、リーシャ」

「……どうして、アキノの島が北西の方角にあると知っていたんですか？ それほど大きな島ではないのに、隊長が知っているのは不自然です」

くっ、やっちまった！ だが俺の本当の狙いを悟られるわけにはっ……！！

「た、たまたまだ。俺だって地理を勉強することぐらい、ある」

「……そうですか。ところで、今回は私も隊長に同行させてもらいますが、構いませんよね？」

駄目だ、火属性は風属性の弱点なんだから……と言うわけにはいかないの、俺はしぶしぶ同行を認めたのだった。

アキノの島にある村に到着した俺達は、近くの森に存在する『殺生石』が放つ瘴気によって、島の大半が危険な状態になっていることを知る。住民への被害は隊員に対応さ

せることにして、謎の少年——玖之王家の末裔であるコウから詳しい話を聞いた。

九尾とは悪しき災厄であり、今は殺生石となつてゐるが蘇らせてはならないこと。世界の支配を企てた玖之王家の情報操作によつて、他の王家は『復活させるべき存在』だと騙されていたこと。ソシエが壺之王家、ユエルが参之王家の末裔だということ。等々。

まあ、だいたい知つてたけど。とりあえず「ナンダッテー！」とか言つておいた。

その夜、コウと九尾（思念）の会話を盗み聞きするソシエの様子を、俺は観察していった。

「コウ、壺之王のせいで苦しんだ貴様が、その末裔を護るために死ぬというのか」

「ええ。僕が貴方の依り代となつて自害すれば、貴方を殺すことができる。覚悟は決めました」

そんな感じのことを長々と話している。まったく、ひどい三文芝居だ。やつぱり事前に練習とかしたのだろうか。『九尾、その台詞はもつと嫌味っぽく言えませんか？』『う、うむ』みたいな。さておき、話を聞いていたソシエの顔色が変わる。

「そ、そんな……！　う、うちの先祖のせいで、コウ君が死ぬなんて……」

案の定、騙されたようだ。ソシエはチョロかわいいな！

「うちがやるべきや。それがうちの、壱之王の、本当の使命のはずや……!」  
ソシエが決意を固めた様子で森に入っていくのを、俺は見送った。

「……ソシエ」

「どうして彼女を止めなかったんですか、隊長!」

急に現れたリーシャに驚く。実は、挙動不審だった俺のことを、ずっと監視していたそう。つまり、さっきまではコウ&九尾↑ソシエ↑俺↑リーシャという複雑な構図だったのか。

「……それは、ソシエが自分で選んで決めたことだからだ」

「それでもっ……」

「彼女はコウを犠牲にするのではなく、命がけで護ろうとしている。誰かを護りたいと思うのは、俺達と同じだろう? それを邪魔することなんて、俺にはできない」

「ですが、ソシエさんの命が……」

「ああ、だから俺達で護るんだ。ソシエの命も、その純粋な気持ちも!」

「そうですね……それが秩序の騎空団の使命です」

よし、誤魔化せた! 俺の三文芝居もなかなかのものだな。あとはソシエと合流するだけだ。

「俺はポーシヨンを用意するから、リーシャはユエルを呼んできてくれ。みんなで追

かけるぞ」

「了解しました、隊長」

いよいよ俺の計画も最終段階だ。もうすぐソシエに……。

エピソード3

ソシエを追って森に入った俺達4人が見たのは、業火に包まれて九尾の姿となった彼女だった。九尾（真の名は九姐）はソシエの口から衝撃の事実を告げる。

「やはり良い肉体だな。コウも素晴らしかったが、生娘は格別だな」

生娘。

生娘！ きむすめ！ キムスメ！ K I M U S U M E !

ソシエは、生娘!!

ソシエに感謝したい。今までの19年間、処女を守り続けてきたことを。

ユエルにも感謝したい。ソシエが旅立つ理由になったことを。

コウにも感謝したい。九尾の依り代をソシエに押しつけたことを。

九尾にも感謝したい。その生娘へのこだわりを。

千年前の魔術師にも感謝したい。九尾を作り上げたことを。

壱之王にも感謝したい。美しい末裔を遺してくれたことを。

玖之王家と捌之王家にも感謝したい。ちまちま情報操作してくれたことを。

他の王家の皆さんにも感謝したい。あつさり情報操作に引つかかったことを。

リーシャにも感謝したい。空気を読まずに秩序閃しなかったことを。

そして、この世界に感謝したい。俺とソシエを出会わせてくれたことを。

おかげで、美少女ソシエの口から『生娘』だと聞くことができた。あまりの感動に体が震えはじめたのが分かる。ああ、この感謝を是非とも伝えたい。そのための言葉を俺は知っているんだ。

「ありがとう。本当にありがとう」

今度は俺のベッドの上で、ソシエの言葉で言つてほしいものだ……とか妄想していた俺が我に返ると、全員で後方に退却していた。どうやら、虚ろな目で震えていたため恐慌状態であると勘違いされて、ここまでリーシャに引きずられてきたらしい。

「隊長もビビつてまうような相手や。ウチが『それ』着るしかないやん！」

ユエルはコウから新たな神器『緋艶布』を受け取ると、その身に纏った。緋艶布の力でソシエの身体から九尾を追い出して倒すという、原作通りの作戦だ。最初のうちはユエルが火に包まれたりして死になつていたが、緋双剣の時と同じような展開なので省略する。



こうして、水属性SSRとしてバージョンアップしたユエルと共に、俺達は九尾を倒した。倒して倒して倒して倒して倒し続けた。九尾に感謝しているのは本のだが、それはそれとしてダマスカス骸晶は欲しい。

「ユエルちゃん、そろそろ色の名前がついた舞で……」

「オラアツ!! さっさと出てこんかい、九尾! そこにおけるのは分かつとるんやで!!」

珍しく周回に乗り気なユエルは、殺生石をガンガン蹴っている。いいぞ、もつとやれ!

周回を終わらせて九尾を消滅させた後は、村に戻って反省会だ。

「なんで1人で相談もしないで、危険なマネしたんや? ソシエおらんくなったら……ウチきつと死んでまうよ」

「ご、ごめん……なさい……」

「次! コウツ! なんちゆうかなあ。ぎょうさんあんねん、説教したいこと」

「はい……本当にごめんなさい」

「そのごめんなさい、絶対に忘れたらアカンで。はあ、2人ともつと命大切にしいや……」

ユエルが2人に説教をしている。この隊では、説教といえぱリーシャなので珍しい光景だ。そもそも、ユエルだって死にかけていたので説教できる立場ではないのだが。

「1つ忘れとったわ！ 大事なコト！」

「大事なコト？」

「おしりペンペン!!」

「えっ!？」

「ほ、本当にやるんですか!? 冗談じゃないんですか!？」

「ほんまにやるで♪ 覚悟しいや〜?」

「よし、俺も手伝おう！ ユエルにばかり罰を執行させるのは秩序的に何かアレだし。ここは役割分担といこうじゃないか。隊長として当然の務めだから遠慮しなくて大丈夫だ。だとすると体格を考えて俺がソシエを、ユエルがコウを担当するってことで問題ないな。さあ、ソシエ、こっちに來るんだ。俺としても心苦しいんだが、心を鬼にしてペンペンさせてもらう。あと、ユエルの緋艶布マジでエロい——」

「うっさいわ!!」

ユエルの鋭いツツコミが炸裂した。くっ、ソシエだけなら押し切れたのに！

その夜、九尾対策と称してソシエを生娘でない状態にするべく夜這いを決行したとこ

ろ、待ち伏せていたユエルに撃退された。

「俺はただ、ソシエが依り代にされないようにっ！　ちよっ、神器の同時使用はズルいっ！　ごご、ごめんなさい！　ごめんなさいいーっ！」

こうして俺は営倉にぶち込まれたのだった。

『ごめんなさいとありがとう』——完。

#### エピソード4

騎空艇ピースメーカー、営倉にて。

「ようこそ……ラビットルームへびよん……」

いつものように兎野郎が現れたが……営倉なので狭い。もう少しどうにかならないのかと思っただが、回数制限があるので我慢することにした。そんな俺の嫌そうな顔を気にすることなく、白兎はどこからともなく取り出した杖を床に置く。

「それは……銀箱お守り！」

「トレハンを100回成功させたことで、カグヤ様から『トレハン教徒』と認められたびよん」

「ああ、ありがとうございます。いつも見ていてくださったのですね。これを励みに今

後も精進いたします。どうか、これからお導きください。……とカグヤ様に伝えてほしい」

「調子に乗るなよ、囚人」

「調子に乗らないで、囚人」

フラムとグラスの出現で、営倉がますます狭くなる。というか、どうして兎を挟んで反対側にいるんだ。挟むなら2人で俺を挟んでくれ……いや、その話は後だ。今はまだ白兎に用がある。

「フレンド申請——の前にサポーター召喚石を設定したい」

ユエルに負けて思い知ったのだ。今の俺では戦闘力が圧倒的に足りない、と。だから今回は3つとも戦力向上に関連するものにした。

手始めにサポーター召喚石の利用だ。グラブルは他プレイヤーの召喚石から加護を得られるが、この世界に来てから戦闘開始前にサポーター召喚石を選んだことがない。そもそも、別次元の自分と協力するようなシステムなので、今の俺に適用されるかどうかは分からないのだが……まあ、何とかなるだろう。

とりあえず、火く闇までLv100マグナを並べて、フリーには兎とグランデを置いた。というか他に選択肢は無かった。この中で一番マシなのが兎ってどうなんだ……。

「次はフレンド申請だ。……できるよな？」

「問題ないぴよん。こつそりゲームサーバーと繋げたから、好きなだけ申請するといひびよん」

よし、これなら問題ないな。とりあえず、カグヤ様やシヴァ、バハルシなどを探して全員に申請を送った。ルリアがいないのでシヴァの価値は下がるような気もしたが、人権なので押さえておきたい。これで、さすがに何人かには承認されるだろう。次の戦闘が楽しみだ。

一方、申請されたプレイヤー達の反応は……。

【何だよこいつ、まともなガチャ石は無えのかよ】

【マグナとか無いわ。せめて最終しろ】

【雑魚からの申請が鬱陶しいな。受付OFFにしておるか】

【フリーにカグヤ様がない時点でアウト】

【（無言でスルー）】

「……強く生きるぴよん」

「何の話だよ。まあいい、最後は『俺の最終上限解放』だ。イベントの発生条件を教えてください」

「お待たせしましたびよん。とうとう今月は囚人の最終上限解放が実装されるびよん」  
「運営かよ……」

「最終上限解放のためには、召喚石ホワイトラビットをトレジャーで強化して『白兔剣』を製作する必要があるびよん」

なるほど、そのパターンか。十天衆と同じ強さになるのであれば、多少の手間がかかるのは仕方ないな。

「それで、その白兔剣とかいうのを消費したら上限解放できるのか？」

「違うびよん。せっかく製作した武器なんだから、大事に使ってほしいびよん」

「……お前、良いやつだな」

「白兔剣のデータは次の通りびよん」

剣／攻撃力3000／HP300（Lv150時）

霸空戦争の頃に居たと言われる、天星器を作った伝説の名工。そのライバルによる作品の1つ、幸運を呼ぶ白き兔の剣……白兔剣。その純白の輝きは所有者を楽観させ、あらゆる状況を好転させるだろう。

・奥義

白兔飛跳閃：ダメージ（特大）／敵全体のアイテムドロップ率UP（3回）

・スキル

ホワイトトラビットの加護：アイテムドロップ率と獲得経験値が15%UP

ホワイトトラビットの幸運：必ずトレジャーハント成功

「……つまり、奥義だけでもトレハンLv9まで到達できるってことか。悪くない性能だ」

「解放までの流れは、その都度説明するびよん。まずは、この白兔剣の完成を目指すびよん」

「それで問題ない。ところで、製作に必要なトレジャーの詳細は？」

「……を100個びよん」

「えっ、何て言った？」

よく聞こえなかったな。ただ、何であつても100個なら簡単に集められそうだ。トレジャーと言うからには、ヒビイロでないことは確定だし。

「……ジンを100個びよん」

「ジンならハイローの周回で山ほど拾ったから、すぐにでも製作できるぜ」

「ニンジン……つまり、ハピネスキャロットを100個びよん」

「……」

「……」

「……お前にはがっかりだ。ニンジン100本なんて集めてられるかよ。ユエルには睡眠薬でも飲ませればいいよな。はい解散」

すっかりやる気が無くなったので、手で兎野郎を追い払う。いい加減、暑苦しいんだよ。

「待つてほしいびよん。今から解放後の性能を説明するびよん。Lv90になると、サポートアビリティが『ドロップ率10%アップ』に強化されるびよん」

「それって、不具合でドロップ率が下がってたやつだろ？」

「Lv95になると『アビリティ4:攻ダウン+防ダウン+ディスプレイ』を習得するびよん」

「それだって、ニンジン100本を集めてまで習得したいわけでもないし……」

「Lv100で出現するエピソードをクリアすると、サポートアビリティ

ハーレム王:アビリティ4使用時に対象の衣服を破壊できる。

を習得するびよん」

対象の……衣服を破壊……? ああ、それなら防御は大幅ダウンだ……つて、オイ!!

「も、もう1回、ハーレム王の効果を教えていただけるといいでしょうか」

「アビリティ4使用時に対象の衣服を破壊できる、びよん」



「その、破壊というのはどの程度の……」

「空の民だろうが星晶獣だろうが、数秒で全裸にできるぴよん。鎧でも装甲でも問題ないぴよん。『破壊しない』のも『靴下以外』でも自由自在ぴよん」

「よっしやああああああああああ!! ハーレム王につ! 俺は、なるっ!!!!!!

……さつきは悪かったな。ここから出たら、すぐにでも白兔剣の製作に取りかかる」

数年前、俺は兔からホーリー・ジーンを10個入手したことがあるのだ。その10倍でしかないと思えば耐え……耐えられる。ただ、今のうちにしっかりと休んでおくとう。

「最後に解放後のイラストを見せるぴよん」

イラストの俺は、白兔剣と思われる剣を構えていた。そして、その背後には巨大な白兔。

「なんでだよ! いや、別に悪いとかじゃなくて、もつと強そうな背景でもいいと思うんだ。例えば、オリバーとかダマスカスナイフとか、いつそ金箱8つを菱形に配置しても

……」

「それは、囚人が年中発情——」

「あつ、やっぱり言わなくていい」  
まあいいさ、ハーゼちゃんとお揃いだし。

## 第24話 最終上限解放

エピソード1

極限の中にいる。

「兎、倒す、ニンジン、落とす」

アマルティアの森、探す。奥の方、探す。探す、探す、探す。……出た！ 兎！！

「倒すっ！」

斬った！ 倒した！ ニンジン……無い……。がっかり。

「あつ、隊長。その様子だと、まだ続けていたんですね。どうして森の魔物を倒しているのかわかりませんが、そろそろ休憩してはいかがでしょうか。皆さんも心配していませんし……」

白い、人間。兎、違う。倒す、しない。

「兎、倒す」

「待ってください、隊長。ひよつとして、また魔物が大量発生するのでしょうか。隊長はそれを少しでも遅らせようと……」

探す、探す、探す、探す。……兎！ 見つけた！

「落とせっ！」

斬った！ 倒した！ 落ち……ない。つらい。

「あの、私はもう庁舎に戻りますね」

探す、探す、探す、探す。……歩く、できない。薬、飲む。

ゴクゴク（APを回復）

あれ？ もしかして半分ぐらい意識飛んでたか？ さすがに二徹は辛いな。古戦場中でも7時間は休めていたのに。とりあえずはチートボディに感謝しつつ、探索探索つと。もう少し上の方にも行ってみるかな……おっ、ホワイトラビット！

「リミサポ仕事しろ！」

ホワイトラビットを倒した。エンジンは……落ちた！

「加護のおかげびよん」

ベルトに装備された召喚石から声が出た。それは巨大兎へと姿を変えると、目の前の新鮮なニンジンをもグモグと食べはじめる。どうやら100本食べることで白兎剣に進化できるようだが……。

「それで何本目だ？」

「……81本になったぴよん。このペースだと今日のうちに終わりそうぴよん」  
そう言うと、白兎は召喚石の姿に戻った。まったく、いい御身分だ。

その後、無事に100本目を入手することができた。

「終わっ—た—！—」

その場に仰向けで倒れこむ。最後の1本がなかなか落ちなかつたので三徹も覚悟したんだが、これでようやく白兎剣を製作できる。そうすれば、俺は……。

「あの、言いづらいことがあるぴよん」

「どうした、これで次の段階に進めるよな？」

「いや、その……ハピネスキャロットが美味しかったから、あと2〜3本は食べたいなど……」

「あ？ 叩っ壊すぞ？」

軽く脅しをかけて、俺は意識を手放した。

製作完了：白兎剣

## エピソード2

目を覚ますと、少し離れたところに白い剣が落ちていた。おそらくは、あれが白兔剣だろう。拾うために近づこうとすると、剣が勝手に浮かび上がる。

「力を示すぴよん。さすれば使い手として認めるぴよん」

声は目の前の白兔剣から聞こえる。十天衆最終解放イベントでおなじみの、武器との戦闘というやつだ。解放の手順としては自然なものなので、疑問の余地はどこにも無い。

「いいだろう。俺の力、たっぷり見せてやる」

なにはともあれ、あの兔野郎を合法的に攻撃できるチャンスだ。俺は最初から全力でいこうと決意して武器を構える。

## READY

まずはミストで弱体――

「うわー！ やられたぴよんー！」

わざとらしい台詞とともに、白兔剣が地面に落ちた。

「いや、まだ何もしてないんだが……」

「無意味に長引かせても疲れるびよん。経過はともかく『白兔剣との戦闘に勝利した』から問題ないびよん」

「ええー」

「改めてよろしくびよん、相棒」

最終上限解放が可能になりました！

そして、部隊の倉庫まで移動する間、白兔剣の能力を説明された。

第1に体内収納。俺の身体に白兔剣を収納できるといふものだ。これにより、いかなる状況であっても即座に抜剣が可能となった。

「ラノベの武器でよくあるやつだな」

第2に簡易召喚。白兔剣の鏢には穴が開いており、メイン召喚石をセットすることで召喚できる（1戦闘に1回）。なお、メイン召喚石を装備していない場合はホワイトトラビット召喚だ。

「特撮の玩具っぽくなったぞ」

第3に属性変更。出現時に指定した任意の属性に変更できる。

「OK、理解した。要するに劣化ルリアか。体内収納の設定は消えつつあるけど」

「身も蓋もないことを言わないでほしいぴよん」

「それはさておき、次は俺がLv100になったらイベント発生でいいのか？」

「その通りぴよん。でもその前に言っておくことがあるぴよん」

「なんだ？ ニンジンなら我慢しろよ、まだ周回で疲れてるんだ」

倉庫に到着したので、「扉を開けようと手をかける。

「いつまで我慢するつもりぴよん？ くだらない秩序ごっこは止めるぴよん」

扉の軋む音が、耳障りだった。

「な……………にを……………」

「もう分かっているはずぴよん。このまま攻略を続けても無意味ぴよん。お菓子を渡してもモニカの好感度は上がってないぴよん。普通に二オと話すこともできないのでは何も進展しないぴよん。ユエルも先日のごとで警戒を強めたぴよん。それに、結局リーシャはハーレムなんて絶対に認めないぴよん」

「あ……………ああつ……………」

「だから、力尽くで奪えばいいぴよん。遠慮も自重もしなくていいぴよん。全員を無理やり屈服させてしまえば何も問題ないぴよん。そうやって多くの奴隷を従えた時、よう



やくハーレム王になれるぴよん」

「……そうだったのか。……いいだろう、最低最悪のハーレム王になってやる」  
全裸で傅くモニカ達の姿を想像して、俺は笑みを浮かべた。

その後、倉庫（強化・育成アイテム用）内にて。

「さつさと食えよ。それとも俺が押し込んでやろうか」

俺は巨大兎の口に、ラジエルの書をつこんでいた。

「モガモガ……これは読むものであって、食べるものではないぴよん」

「それを何とかするのがお前の仕事だ。ちゃんと俺の経験値にしろよ」

遠慮と自重を止めた俺は、ラジエルの書×15でLv100になった。

フェイトエピソードが解放されました。

エピソード3

・1戦目

俺は量産型ロボミを従えて、船団長の執務室にやってきた。

「モニカ、俺の女になれ」

「……貴公は疲れているようだ。長時間、周辺の森で魔物退治をしていたと報告を受けているぞ。話は今度聞いてやるから、今日はゆっくり休むといい」

書類から顔を上げることもなく返事をするモニカ。そっちがその気なら仕方ない。俺は四天刃を構えてモニカに向けた。当然ながら、白兔剣は攻撃力が低いので体内に収納してある。

「いいから言うことを聞けよ。怪我したくはないだろう?」

「本気……のようだな。いいだろう、反逆者には罰をくれてやる」

モニカは剣を抜きつつ、執務机を跳び越えた。防犯ブザーに手を伸ばすような隙があれば即座に攻撃してやるつもりだったが、そんな甘い状況ではないと把握できているようだ。それにしても、今の『揺れ』は凄かった。後でたっぷり上下運動させたい。

「二度と俺に逆らえないよう、その身体に教え込んでやる」

「ふん……訓練の時の私と同じだと思ふなよ」

モニカが紫電を帯びていく。そんなわけで戦闘開始だ。

数ターン後。

「この短期間でLv100になつていたのは想定外だったか? そもそも俺は火属性だから有利だったんだよ。ちょっと前に、EX攻刃の『武王の鉄剣』(武器種は刀)も拾え

たしな」

「後は頼んだ……りー……」

モニカは倒れた。

「よし、モニカを地下牢に運ぶんだ」

「了解しました、マスター」

量産型ロボミに命令した俺は、改めて床に倒れているモニカを眺める。

「……」

指で少し突っついてみた。……最高だった。

## ・2戦目

気絶したモニカを運ぶ量産型ロボミを従えて建物から出ると、ソシエと遭遇した。

「水属性の武器を出してくれ。それと、モニカを運んだら戻ってこい」

量産型ロボミに渡された武器を装備しつつ、火属性武器を外していく。もちろん白兎

剣は体内に収納したままだ。

「あの……隊長はん……？」

「ああ、モニカは急な病気で船団長を引退したんだ。だから……今から俺が船団長だ」

「ええっ……モニカはん、大丈夫やろか……」

「はははっ、相変わらずソシエはチョロいな」

「もう！ 冗談にしても、そういうんは……。……？」

ソシエは一步下がった。どうやら少し警戒しているようで、扇に手をかけている。

「今からお前を力尽くで俺の奴隷にしてやるよ。嘘だと思うか？」

「隊長はん、どないしてもうたん……」

ソシエは戸惑っていたが、俺は構わず攻撃をしかけた。

数ターン後。

「楽勝だったな。そもそもソシエは単独戦闘に向いてないんだよ」

「ユエルちゃん……。助け……」

ソシエは倒れた。

「……」

少しめくってみた。……。最高だった。

### ・3 戦目

戻ってきた量産型ロボミに、ソシエを地下牢に運ぶよう命じた。その時、ユエルが襲来した。

「ソシエに何しとんねん、この変態！」

「何もしてないさ、まだ。もつとも、後でじっくりねつとり味わうつもりだが」

「そんなことつ…………!!」

「ああ、でも、もしもユエルが代わりに奴隷になるというなら、ソシエには何もしないと約束しよう。…………どうする？」

もちろん嘘だ。ソシエが泣き叫ぶところを特等席で見せてやる。へへつ。

「…………決まつとる。アンタを殺してソシエを助けるんや！」

一応、ソシエは人質になっているんだが…………まあいい、倒すだけだ。

数ターン後。

「はあはあ…………いつまでも、狐に狩られる兔だと、思うなよ…………ぜえぜえ…………」

「ソシエ…………ごめ…………」

余裕の勝利だった。白兎剣は装備していないので、上手いこと言えてないようにも思えるがハーレム王は気にしない。

「…………」

少し触つてみた。…………最高だった。

## ・4戦目

ユエルはソシエと一緒に袋詰めするよう命令していると、ニオがやって来るのが見えた。俺は慌てて火属性装備に変更する。

「酷い旋律。これ以上、聴いていたくないけど……リーシャが来る前に調律しないと……」

諸事情で少しだけ疲れていた俺は、手っ取り早くニオの心を折ることにした。

「この武器をエレメント化してくれ」

「了解しました、マスター」

「ああ……それはリーシャと想い出の……」

このために準備しておいた九界琴・疾天を、量産型ロボミの腹部に入れてスイッチを押す。

「ニオ、想い出なら今から俺と作ろう」

「やめて……今度一緒に演奏するって、約束したのに……」

エレメント化が完了して、九番天星の欠片×50などを入手した。さあ、指先が震えている状態で調律できるものならやってみる。

数ターン後。

「昏睡にだけ注意すれば、どうとでもなるな。最終済みなら少しは苦戦したかもしれないが」

「リーシャ……逃げ……」

ニオは倒れた。

「……」

少し撫でてみた。……最高だった。

・5戦目

「適当に9人と戦えばいいんだったな？」

「その通りびよん。9連戦に勝利すればエピソードクリアびよん」

「じゃあ、これで折り返しだ」

黒い翼を飛ばたかせ、墮天司オリヴィエが降臨した。俺は量産型ロボミに光属性装備を準備させて、ニオを地下牢に運ばせる。

「隊長殿、ついに決起するのだな。秩序の騎空団を手中に収め、パンデモニウムを打ち破り、同朋達と共に天司を滅ぼすために！」

「そ、そこまでは……いや、それもいいのか。エウロペもブローディアも俺の獲物だ」

「おお……！」

「でも、その前にお前を徹底的に墮としてやるよ」

「それは一体どういう……」

まずは、初めて会った時の借りを返さないとな。

数ターン後。

「これがシユバ劍編成だ。ファータ・グランデ最強の力、思い知ったか」

「あの方々に……お詫び……」

オリヴィエは倒れた。

「……」

少し覗いてみた。……最高だった。

#### ・6戦目

あと4人。1人はリーシャだとしても、残り3人をどうするか。秩序の騎空団員3つて探したら見つかるだろうか……。

「水属性武器を装備して少し待つぴよん」

仕方ないので言われた通りにした。あと、オリヴィエも地下牢に運ばせる。

「グラス……どこ……?」



まさかの星晶獣フラムⅡグラスだった。しかも片方だけだから、あまり強くないはずだ。

「安心しろ、グラスと一緒に可愛がってやる」

「お前……燃えろっ！」

ところでオールド・エツケザックスくれない？

数ターン後。フラムは倒れた。

#### ・7戦目

とりあえず土属性武器を装備して待機する。フラムは地下牢送りだ。

「フラム……行かないで……」

ほどなくしてグラスもやってきた。

「心配しなくても、すぐにお前も地下牢に送ってやるよ」

「……凍れ」

今から双子とのプレイが楽しみだ。

数ターン後。グラスも倒れた。

## ・ 8 戦目

グラスを地下牢まで運んだ量産型ロボミが戻ってきた。

「……それで、あとどれぐらい待てばいいんだ？」

「調整に時間がかかるぴよん。もう少し待ってほしいぴよん」

そんな会話をして数分後、目の前に謎のゲートが出現した。そして、その向こうから歩いてくる1人の少女。数年前に出会って、二度と再開することはないだろうと思っていたのだが……。

「リナリア……？」

「あーっ、お兄さんだ！ あたしのこと覚えててくれたんだね。嬉しいなっ！」

「お、おう。でも、どうして……」

「えーとね、お兄さんがぜんぜん公演に来てくれなくて、シヨロトル様に文句言ったら会わせてくれることになったの。すごいでしょ！」

「あ、ああ」

（星晶獣シヨロトルは因果に干渉する力を持つぴよん。白兎剣の運勢操作の力と合わせること、2年後の世界からリナリアを連れてきたぴよん）

ちよっと何を言ってるのか分からない。でもまあ、リナリアを倒せばいいってことな

ら話は簡単だ。俺はハンドサインで、量産型ロボミに光属性武器を準備させた。

「ねえ、あたしってかあくいいよね」

「可愛いよ。俺だけの巫女として、ずっと地下牢で飼いたいぐらいに」

「えっ……お兄さんが求めてるのって、そういう……」

リナリアが困惑している間に、装備変更を済ませた。お前にもシユバ剣の力を見せてやる。

数ターン後。

「原因はいくつかある。病みじゃなくて闇属性のはずだったリナリアが、シヨロトルリップーを装備することで風属性になっていていること。2年後を基準にすると、インフレの影響でシユバ剣Lv150がさほど強くないこと。リナリアのアビリティ『五色閃華』のダメージがやたら大きいこと。あとは……ぐはっ」

「あーあ、お兄さんと話したら、もっとかあくいいあたしになれると思っただのにな」

俺は倒れた。リナリアは2年後に帰っていった。

「……どうするんだよ、おい」

「最終的に『リナリアが撤退したことで戦闘に勝利した』から問題ないぴよん。それに死

亡フラグも無事に折れたびよん」

「意味不明なこと言ってるじゃねえ！」

気分は最悪だった。

・9 戦目

いよいよ最終戦だ。リーシャ対策に火属性の武器を装備していると、背後に気配を感じた。

「ぼー……」

「……ジオラ？」

（なぜかリナリアと一緒に2年後の世界から来てしまったびよん）

まあ、そういうこともあるよな、ジオラなら。

「……」

「おい、何か言——」

「あ、お兄さん。この前はピクルスありがとうね」

「お、おう」

ピクルス？ 何のことだか分からないが好都合だ。このまま倒せば問題ない。

「じゃあ私も帰るね」

「ああ……ま、待ってくれ」

「どうしたの？」

「……俺のために1曲、歌ってくれないか」

「いいよ」

ジオラは笑顔で頷くと踊りはじめた。俺も両手に持った四天刃を振りながら、タイミングを合わせてコールを入れる。

「ウオオーツ！ ハイ！ ウオオーツ！ ハイ！」

「♪」

ああ、この歌を聴くのも数年ぶりだ……。

3分後。

「ジオラ様ー！ 愛してるー！」

「……お腹すいた」

歌い終えたジオラは、鳥っぽいポーズで2年後に帰っていった。

「結局のところ『ジオラが撤退したことで戦鬪に勝利した』から問題ないぴよん」  
勝利って何だ？

## エピソード4

そんなわけで9連戦に勝利したのだが……。

「9連戦の後は最後のフェイトエピソードぴよん」

「まだあるのか……もしかして原作主人公と戦わされるとか?」

「その必要は無いぴよん。最後はリーシャに勝利したら、サポートアビリティを習得するぴよん」

よかった。理不尽なDANZAI展開は無かったんだ。と、一安心したところで気づく。いつの間にか100人以上の秩序の騎空団員に囲まれている! 彼らを指揮しているのはリーシャだ。

「隊長、貴方は完全に包囲されています。武器を全部捨てて、大人しく投降してください」

「うるせえ、そんな奴らをいくら並べても俺には勝てないだろうが!」

「ええ、彼らの役割は足止めでしかありません。貴方の悪行は私が止めます」

「やれるものならやってみろ!」

俺が答えると、リーシャは1人で歩いてきた。自分から来てくれるなんて好都合だ。勝った後は団員達の前で剥いてやる。ひひっ。

「無駄な抵抗は止めてください。今なら、まだ罪が軽くなります」

「ここまできて今さら止められるかよ。最後のターゲットはお前だ、リーシャ」

「はあ……それでは、秩序の騎空団の権限において秩序を執行します」

「何が秩序だ偉そうに。からあげにレモン汁ぶっかけてやる！」

「こうして最後の戦いが始まった。そして普通に俺が負けた。」

いや、ぜんぜん負けてないし。運悪く連続攻撃やクリティカルが出なかつただけだし。

「ま、待ってくれ。ちよつとタンマタンマ！」

「……どうしたんですか？」

「どうも調子が悪かったみたいだ。もう一度やり直しを要求する」

「えっ……」

リーシャが面食らっている隙に、ポジションでHPを回復させる。そして武器や召喚石をチェックして、四天刃を何回か素振りする。うん、どこにも問題は無い。さつきは少し油断したが、今度は最初から全力でいこう。

「待たせたな、リーシャ。次は俺の本気を見せてやる」

「こうして最後の戦い（2回目）が始まった。そして、またしても普通に俺が負けた。」

これは戦術を見直す必要があるな。アビリティや奥義のタイミングを見極めないと、勝てるものも勝てなくなってしまう。相手の特殊技が痛いから、対応して……。

「あの、投降する気になりましたか……？」

「ちよつと戦術パターンを変えて試してみたい。強くなつたな、リーシャ」

「ええ、まあ……」

こうして最後の戦い（3回目〜6回目）にも負けた。

装備を見直すことにする。白兔剣の攻撃力は低いが、簡易召喚を使うことで召喚効果が得られるのだ。最後の戦いで役立つ、つてのは物語的にも妥当だろう。そんなわけで四天刃の代わりに白兔剣を装備してイフリートをセットする。

「これが俺の完全状態だ！」

「その剣は……」

「すぐに分かるさ、この白兔剣の恐ろしさが」

こうして最後の戦い（7回目）にも負けた。

コロマグをセットしても（8回目）、グランデをセットしても（9回目）負けた。



どうしよう……そうだ、ポーナスを火属性装備に集中させれば……！俺は量産型口ボミの手を借りて、ほとんどの装備に+99を付けた。そんな最後の戦い（10回目）にも負けた。

やつぱり3ターン目に奥義を使って、主導権を握る必要があるのかもしれない。そんなわけで、都合よく連続攻撃が続くまでやり直すことにした。

「オクトー最終もこんな感じだったな……」

そんな最後の戦い（11〜30回目）にも負けた。

こうなったら仕方ない。リナリアと同じように『勝利した扱い』にしてもらおう。

（リーシャが負けを認める、後方に下がる、のどちらかで勝利したことにできるびよん）

「だそうだ。形だけでいいから負けてくれないか？」

「いえ、秩序は反逆者に決して屈しません。それよりも、今その剣と話して……」

「なんでだよ！」

勢い任せで挑んだ最後の戦い（31回目）にも負けた。

最後の手段を使う時がきたようだ。そう、エリクシールを使って勝つまでコンティ

ニュー戦術である。これで理論上はどんな敵にも勝てる！

「これだけは使いたくなかったが……悪いな、リーシャ」

俺は瓶を口に運んだ。

「ズルですか!？」

次の瞬間、エリクシールは粉々に砕け散った。その戦い（32回目）でも普通に負けた。

まさか……どうやっても、勝て……ない……？

（ここまでリーシャが強いとは思ってなかったぴよん）

「そんな……。そうだ、オリヴィエはどこにいる！ 画面外から援護してくれ！」

「彼女は地下牢で気絶しています、マスター」

「……だったらフレンド石だ。シヴァさえ選択できれば、火力が大幅アップする！」

（申請は誰にも承認されなかったぴよん）

ううつ、俺のハーレム王が……こんな……最後の最後で……。

「うわあああああああああああああああ!!!!」

俺はエピソードクリアに失敗した。秩序の騎空団には平和が戻った。

数分後、俺はリーシャによって拘束されていた。

「……それで、どうして貴方はこんなことをしたんですか？」

「それは……あつ！ これで！ 実戦形式の！ 抜き打ち演習を！ 終了とする

!!」

包囲している団員達にも聞こえるように、俺は全力で叫んだ。

「……抜き打ち演習？」

「そう！ そうだったんだよりーシャ。船団長が不在という状況にも関わらず、しっかりと団員達をまとめて包囲網を作って、犯人役の俺を見事に倒してみせた！ 素晴らしい

！ 感動した！」

「そんな言い訳が本気で通ると思っているんですか？」

「もちろんだ。その証拠に、俺は戦闘不能にした彼女達に指一本しか触れてない」

「つまり、指で触ったんですね」

「それは……まあ、その、物の弾みで……」

「有罪です」

案の定、秩序的な断罪展開が待っていた。

## 第25話 胎動する世界

エピソードー

首から『反省中』のプレートをかけている。

「反省してます。もう2度としません」

「いい心がけです。それでは、秩序の騎空団が受けた損害に対する罰を伝えますね」

「……はい、リーシャさん」

「隊長は『抜き打ち演習』であつたと主張しましたが、船団長への事前報告をせずにそれを行う権限はありません。また、多くの団員が事態への対処や事後処理にあつたため、第四騎空艇団の機能が一時的に麻痺しました。さらに——」

話が長い。いいから結論だけ教えてくれないかな。

「——ということで、ガンダルヴァ前船団長の前例も考慮した結果、1年間の給与70%カットおよび1ヶ月間の部隊活動停止となりました。なお、個人で依頼を受けるのも禁止です」

「えっ、70%も!?!」

そんなフアランクスみたいな大幅カットなんて……だいたい、ルピ投げは無属性だか

らカットできないんだぞ。それに、個人依頼も駄目ってことは生活費が……。

「ええ、妥当なところでしょう。もし民間人にも被害が出ていたら、懲役刑になっていました」

「いや……でも……」

「それに、直接の被害を受けた女性達からの訴えがあれば、さらに罰は重くなります。これは『団への損害』に対する処分ではないので」

「ええつ、そんなのがあるのか？ 普通に殴って倒しただけなんだが……」

「真面目につ、反省してくださいっ!! いきなり攻撃されて、どれだけ彼女達が傷ついたと思っっているんですか!」

攻撃されて傷つく? そんな馬鹿な。十天衆の最終上限解放イベントで、何人かは本気で戦ってただろうが。それでも奴らは特に気にせず……ああ、そういえばゾーンが言ってたな。『十天衆は化け物だ』って。つまり、普通の女の子は傷つくのか……そうか……。

「あつ! じゃあ、二才は!」

十天衆の二才なら、まるで気にしていないに違いない。なにせ、初対面でいきなり攻撃してくるぐらいの戦闘脳なのだ。

「二才は……今でも寝込んでいます。このままでは、辞めるしかないと悩んで……」

リーシャの声が震えている。そこまで強く攻撃したつもりは無いんだが……かなり深刻な事態らしい。俺が責任を取って結婚するから大丈夫だと言いたいけど、殴られそうなので止めておいた。でも、このまま二オが再起不能になったら、俺も再起不能にされてしまう（社会的に）。どうにか治療の方法を……。

「どうやら耳鳴りが酷いらしく——」

『耳鳴り』だと！ それなら何とかなる！ ここに偶然『黄金の依代の豎琴』があるんだ！」

二オが耳鳴りで不調になるのは、彼女自身の最終上限解放エピソードだ。だから、イベントを進めていけば問題なく回復するだろう。それどころか、結果的に九界琴の力でパワーアップできるのだから、俺を訴えることもないはずだ。

俺は、依代を二オの枕元に置くようリーシャに頼んで、残った女の子との示談交渉に向かった。

ソシエとユエルの場合。

「それ以上、ソシエに近づくなや！ ふーっ！（威嚇）」

「うちかて九尾のせいで隊長はんに酷いことしたし、お互い様ってことで許してあげよ？」

「ソシエがそう言うんやったら……。でも、次にやったら空の底に叩き落としたるからな」

交渉成功！

オリヴィエの場合。

「私なりに分析したが、今回の件は『非常時における団員達の行動』を確認するため、だな？」

「……えつ。……ああ、俺が見たところ指揮系統に数ヶ所の致命的な隙があった」

「決起の際は、私とその隙を突こう。そのために隊長殿は私をも攻撃した、というわけだ」

交渉成功！

フラムIIグラスの場合。

「隊長室を明け渡したら、どうにか許してくれたぴよん」

「おい、勝手に交渉するなんて——」

「出ていけ、囚人」

「出ていって、囚人」

交渉成功！

最後はモニカだが、どうせお菓子を渡せば許してくれるだろう。ということであり、シヤから借金して最高級の菓子折りを購入し、モニカにプレゼントした。

「ふむ……ありがたく頂くとしよう」

平静を装っているが、その視線はチラチラと菓子折りの方に向いている。これなら大丈夫だ。

「それで、その……先日のことは穩便に……」

「ああ、あの時は不覚を取ってしまったな。それにしても貴公、短期間でずいぶんと強くなったものだ。やはり極限状態での魔物退治で剣技を鍛えたのか？」

「えっ、あー」

普段の様子と変わらないように見えるが、これはまさか……。

「私も前々からじつくり鍛錬したいと思っていたのだが、船団長の業務が多忙でな。だというのに最近も愚かな部下に余計な仕事を増やされて……。まあいい、今後もその力だけは当てにさせてもらおうぞ」

「お、おう」

間違いない、モニカも十天衆やガンダルヴァの同類だ。これなら好感度も低下してな



いだろう。俺は安心して執務室を出ようとしたが、モニカに呼び止められる。

「リーシャには礼を言っておけ。貴公への処分が軽くなるよう団員達に頭を下げていたぞ。『隊長の様子がおかしいことに気付いていたのに、未然に防げなかつた自分にも責任がある』と」

「そんな……リーシャ！」

そんなことぐらいで、俺のハーレム王を邪魔した恨みが消えると思うなよ、リーシャ！

## エピソード2

数日後、俺達は羅生門研究艇が滞在している島に来ていた。部隊の騎空艇『ピースメーカー』のオーバーホールや改造を依頼するらしい。騎空艇に関する仕事はリーシャに押しつけていたので、俺が活動停止状態でも問題なく作業を進められるようだ。

「なのに、どうして俺も一緒に行かなきゃいけないんだ」

「隊長を一人にすると危険だからに決まっています！ あんな事件を起こしたばかりですし」

そんなわけで連れてこられた俺は、仕事も無いので暇を持て余していた。量産型ロボミもメンテナンスや蓄積データの提出を行っているので、隠し撮りした動画を楽しむこ

ともできない。

「よし、その辺で可愛い女の子でも口説きにいこう！」

案外、こんな島にこそナルメアお姉ちゃんがいるかもしれないからな。

数分後。

「なんだ、お前か」

「おいおい……久しぶりだったのに、ずいぶんと酷い言い草だな」

街中で出会ったのは、羅生門研究艇に所属する技師のシロウだった。機械部品をいくつか持っているのが買い物の帰りなのだろう。

「まあ気にするな。それより騎空艇の整備は順調なのか？」

「ああ、特に大きな問題も見当たらなかったし、予定通りさ。色々改造もしたいから、作業が終わるまで十数日ってところだ」

「改造か……できればもつと速度が出るようにしてほしいな」

そもそも、島から島への移動に時間がかかりすぎなんだ。ゲームみたいに1クリックで移動できれば楽なのに。ああ、でも別空域に行くのは面倒だったけど。

「なるほど、秩序の騎空団として緊急時には現場に急行できた方がいいってことか。他にも要望があるなら聞かせてくれ」

「えーと、それじゃあ瘴流域を越えられるようにしてほしい。あと人型への変形機能も欲しいな。その時はメインパイロットが俺で、サブパイロットが量産型ロボミ（美少女型）の複座式で頼む。必殺技の高威力攻撃も必須だろ。それから、モニカの騎空艇『グランツヴァイス』との合体機能も欠かせないし……」

「いや、ま、待ってくれ。『ピースメーカー』は、そんなに多く追加できる余地が無いんだ」

「はあー」

「こいつ使えねえな。そんなだから改造されて壊獣になるんだよ。いいからモニカと合体……」

「隊長、無断外出ですか？」

「うわつ、リーシャ！ ち、違うんだ、探したけど居なかったから、それで——」

「いいから部屋に戻りますよ。それではシロウさん、私達は失礼します」

「あ、ああ、俺も整備に戻るよ」

くつ、そんな生暖かい目で俺を見るな！ あと、量産型ロボミの外見もどうかしとけよ！

後日、無事にピースメーカーの改造が終わった。古代技術や斥力フィールドの応用で

色々と強化されたらしい。あと『秩序バースト』という加速装置も搭載されたとか。活動停止中の俺は報告書を読ませてもらえなかったが、艇長のリーシャが把握しているなら問題ないだろう。

「ところで隊長、艇の名前はとうしますか？ 改良型にはⅡ、式式、ゴッド等を付けるのが一般的だと聞いたのですが……」

「そうだな……じゃあ『ピースメーカーHL』にしよう！」

特に問題も無く、俺の提案は受け入れられた。

騎空艇が『ピースメーカーHL (Harem Lord)』になりました！

### エピソード3

ついにこの日がやってきた。そう、俺が自由に活動できる日だ。活動停止中に、天司長が死んでサンダルフォンが力を継承したり、ニオが最終上限解放してリーシャに抱っこされたりしたようだが、そんなことはどうでもいい。いや、後者はどうでもよくないし、抱かせないならヒビイ口返せと言いたいぐらいだが……。

「とにかく、今日からマグナ討伐を再開する！ AT良し！ 装備良し！ 針路、ザンク——」

「隊長！ 星晶獣らしき未知の生物を見たとの報告がありました！」

駆け込んできたモブ隊員に命令を邪魔された。まあ、仕方ないので話ぐらいは聞いてやる。

「それで、そいつの特徴は？」

「えー、なんでも『火属性の巨大な人型、頭部に2本の角、言葉が聞き取りづらかった』と」

「ゼノ・イフリートだ！ 大至急、その目撃現場に行くぞ！」

「隊長、その『ゼノ・イフリート』というのは危険な星晶獣なんですか？」

隣で聞いていたリーシャの質問に、俺は即答する。

「ああ、相当ヤバい奴だ。急がないと手遅れになるかもしれない」

「了解しました。騎空艇の方は任せてください」

よし、俺はソシエとユエルに準備させよう。相手はあのゼノ・イフリートだからな。

戦闘終了後。

「くっ、斧は無しか。みんな、まだ戦えるな？ もう一度挑戦だ！」

「どうせ、そんなことだろうと思っていました。ですが、あんなに急ぐ必要は——」

「EX攻刃の特だぞ！ それに最終上限解放もあるんだ！ ここで本気を出さずにど

うする！」

「いえ、本気を出すのは秩序のためで……」

最低限1本完成。できれば2本欲しい。

数時間後。

「真アニメが落ちない！ 畜生、もう一度挑戦だ！」

「隊長、これが読めますか？」

「うん？ えーと『40101』だな」

「はい、意識は正常のようですね」

画像認証？ 運営気取りかよ！

さらに数時間後。

「おい、兎野郎。本当にドロップ率アップしてるんだろうな！ 不具合だったら折るぞ、オラー！」

「……なあ、副隊長。アイツ、剣に話しかけるとんやけど大丈夫なん？」

「あの程度ならよくあることです。適切な休憩も挟んでいるので、止める必要は無いでしょう」

「ええ……」

ユエル、ゼノイフから逃げるな！ リーシャ、弾幕薄いぞ！

こうして、最終日にゼノイフ斧が完成した。

「あの……隊長は何のために武器を求めますか？」

「もちろん強くなるためだ。そうすれば、さらに強い武器が入手しやすくなるからな」  
「……」

武器集めに終わりなんか無い。いや、騎空士に『終わり』は許されていないのだ。

#### エピソード4

ゼノイフリート撃滅戦を終わらせた俺達は、アマルティア島に帰還した。火属性の戦力も大幅に上がったことだし、そろそろグリム琴でも取りに行くか。いや、先にアルバハでオメガ武器製作つてのも悪くないな……ん？

「なんか静かだな。発着所に秩序の騎空団員がいなし、本部にでも集まってるのか？」  
「いえ、帝国の基地から接取を行うため、人員を軒並み向こうに回しているはずです」

すかさず俺の疑問に答えるリーシャ。どうやらガロンゾ島付近にあった帝国軍の秘密基地の調査を進めているらしい。

「まあ、そんなの俺には関係ないけどな」

「隊長！ 同じ組織に所属する者として『関係ない』で済むことではありません。普段から全体の動きに目を向けて、横の連携を意識することで秩序的な——」

あーあ、また始まったよ。そんなわけで説教を聞き流しつつ第四庁舎に向かっていると、大きな荷物を抱えた団員達が歩いているのを見つけた。おそらくは、あれが帝国基地からの接收品なのだろう。……あれ？ そういえば帝国軍の秘密基地って何かイベント——

「時は……満ちた」

団員達が抱える荷物から声が聞こえたと思ったら、次の瞬間その内側から飛び出してきた巨大な腕が俺の頭を掴む。

「隊長っ!!」

「こいつは星晶獣、ワールドだ!」

くっ、いきなり襲ってくるのかガンダルヴァかよ！ 俺は四天刃を抜くと、目の前の巨大な手に突き立てた。だが、頭を掴む力は全く弱まらない。ひよつとして本気でヤバい状況……!?



「新たな世界を創造するため……お前の記憶を見せてもらう」

俺の記憶？ その意味を深く考える間もなく、頭の中を覗かれているような感覚があった。昨日までのゼノ・イフリート周回、先月のホワイトトラビット周回、古戦場での周回、イベントの周回、ヘイロー周回、シユバマグ周回、古戦場周回、マグナ周回、古戦場周回、九尾、アウギユステでのイベント、マナリア学院、壊獣、ガンダルヴァ、古戦場、共闘クエスト、デイフエンドオーダー、古戦場……そう、俺は何度も何度も戦い続けてきた……。

「まさか、俺の記憶から学習を！」

俺の推測を肯定するかのように、前世の記憶までも呼び起こされる。古戦場、日課、デイルー、ヒヒイロ掘り、古戦場、アーカルム、CPKクエスト、古戦場、シナリオイベント、コラボ、古戦場、MVP争い、青箱、t w i t t e r 救援、古戦場、極みスキン、パレット生成、撃滅戦、フィンプル、老婆、古戦場、旧アーカルム、デイフエンドオーダー、ミニゲーム、謎ブル、オイラ、古戦場、スラ爆、ヘイロー、四象、ジヨブマスターピース、古代布、古戦場、マニアック、積荷、討滅戦、古戦場。もう忘れていた戦闘ばかりだが、確かに俺が経験したことだ。もし、ワールドが俺の記憶から学習できるとしたら……ぐっ、頭が割れそうだし！

「隊長を助けます！ 撃ち方、始め！」

リーシャの指揮によって、隊員達の銃撃が俺を掴む手に命中する。力が弱まったのを感じたので強引に抜け出したが、まだ頭の中がズキズキと痛む。

「データは十分に揃った。今こそ悲願成就の時。新世界秩序を以って、神の打倒を果たさん」

腕だけだったワールドの全身が顕現していく。同時に周囲の空間が歪みはじめ、軋むような音も聞こえる。よし、とりあえず殴り倒そう！ 戦力は揃ってるし何とかなるだろう。

「大丈夫ですか、隊長！」

「ああ、リーシャ。聞いてのとおり、あいつの目的は『今の世界を終わらせて新世界を創ること』だ。被害が広がる前に、ここで倒すぞ」

「了解しました」

リーシャと最終二オがいるので風属性編成を使う。4人目は水着ユエル、ティア銃を並べた背水マグナ装備だ。昏睡が通れば楽勝だとは思うけど……。

READY

「白翼の守護神よ、我らに力を」

いつも通り、リーシャの号令から始まった戦闘だが……普通に苦戦していた。

「四天洛往斬！ どうだ、これでっ！」

「分析完了。ダメージは推定1%未満です」

量産型ロボミの声に心が折れかける。もしかして、これって負けイベントか？（このでの敗北が理由で、俺がまた最終上限解放できるとか……）

（違うぴよん。ワールドを止められなかったら、この世界ごと消えてしまうぴよん）

は？ 冗談じゃないぞ、こんなところで！ ハーレム王になるって俺の夢はどうなる！

「みんな！ オリヴィエの速度なら、もう本部に着いたはずだ。モニカ達が救援に来るまで、どうにか持ちこたえるぞ！」

ソロでは無理でも、マルチバトルなら負担が軽減される。数さえ揃えば……。

「もう手遅れだ。オレの進化は止まらない。お前の記憶は役に立ったが、もう用済みだ。世界創造の邪魔をするなら……異界へと還してやろう」

ワールドが俺に手を向けると、光る帯のようなものが俺の全身を包む。

「隊ちよ——」

最後に聞こえたのは、リーシャの悲鳴だった。

目の前にはグラブルをプレイ中のパソコン。床にはカップ麺や半額弁当の容器。ベッドの上にはナルメアお姉ちゃんの抱き枕。全体的に埃っぽい部屋。

「ああ、そうだ。俺はフェスで天井まで引いて……SSRが9つしか出なかったんだ」  
ふざけんなよFKHR！ 消費者庁に通報するからな！

## 現実

レジェンドフェスとは、ガチャを引いた時のSSR出現率が倍になる期間である。具体的には300回でSSRが18ぐらい出るはずなのだ。

「なのに、たったの9つって……こんな……」

加入したのも、アギエルバとか微妙な奴らだし。せめてリミ武器とかドスとか引きたかったな。オイゲンかカインを引いて、残った方を天井交換してマツチヨに移行するつもりだったのに。まあユグマグの方が可愛いからマグナのままでもいいけど。

そうすると、問題は天井で誰を加入させるか……。リミキャラで加入してないのが、えっと、ラカム、オイゲン、リーシャ、カイン、フォリア、ラインハルザだから……。実質5択だな。

「武器の強さを考えると、順当にラインハルザだけど。でもなあ、火属性ドラフか……。うーん、何となく気が進まないな。武器のオマケだし、普通に加入していいはずだけど。」

——よお、オレ様を楽しませてくれよ。

うるさい死ね！

「……………あれ？　今、何を考えてたっけ」

とりあえずラインハルザは保留として、他の選択肢も考慮してみよう。土属性の場合、カインを加入させておいて次の天井でオイゲンを交換することになるか。ただ、次にレジェフェスで引くのがいつになるか……。基本的にはグラフィエスで引きたいしな。

フォリアは杖パーティに入る性能だったか？　wikiで性能確認つと……。うん、こ

れならリリイでいいな。まあ、武器は悪くないから候補には入るか。そういえば、こいつエルンだからカトルやドラランクの代わり……。可愛さでは余裕で勝ってるから、たまにマイページに飾るぐらいいはしてあげよう。でも、耳が出てないのは少し減点かな。

——隊長はん、うちの耳やったら触ってもええよ。

ソシエ、好きだ！

「……………ん？　次はリーシャの確認だ」

たしか自動でダメアビを使うようになったんだっか……。うーん、上限アップは役立つけど、そこまで強くもないな。二オ4アビとの相性はいいとして、勝手に昏睡を解除されるのは困る。朝だって、もっと優しく起こしてほしいのに。

——早く起きてください、隊長。いいですか、秩序とは規則正しい生活から云々。

分かった。分かったから！

「……………えっ？」

急に胸のあたりに鈍い痛みがきた。おかしい……さつきから何度か意識がぼーっとしたし、調子が悪いのか？ やっぱり最近の食生活に問題があったのかもしれない。天井交換は後回しにして、何か買いにコンビニに行こう。

(財布を忘れてるぴよん)

ああ、そうだった。こつちの金を持たないと。それはそうと、やっぱり今回はラインハルザだよな。でもなあ、火属性ドラフは……。

その頃、アマルティア島では。

「なぜ無意味な抵抗を続ける。お前たちでは、オレを止めることなど不可能だということに」

「それでも！ 全空の秩序を守るため、ここで退くわけにはいきません！」

「秩序か……だが、オレの目的も新たな世界——新たな秩序の創造だ」

「新たな、秩序……！」

「そのためにオレは創造神になる。お前がオレに協力すると言うなら、契約者として新世界へ連れていこう。そして、共に新たな秩序を創るのだ」

「私が、秩序を創る……？」

リーシャの心に迷いが生まれた。

コンビニからダッシュで帰宅した俺は、白兔剣を全力で殴りつけた。

「言えよ！俺が注目されてたのは、こんな格好だからだつて！すつかり馴染んで気づかなかつたけど、グラブルファクションで外出は駄目だろ！エルーンじゃなくて良かったよ！財布より先にそつち言えよ！むしろ転生してたこと思い出させろよ！さつぱり忘れてたわ！こういう時はお前が必死に呼び戻すべきだろ！しれつとハーゲンダッツをリクエストしてんじゃねえ！そんな金あつたら課金に回すわ！あと、殴った手が痛いんだよ！折れるよ！」

「忘れてたのは、転移による一時的な記憶の混乱びよん。人間の脳にはよくあることびよん」

そんなことより、早く戻らないとワールドが創造神で世界を……。

「戻る必要……あるのか？」

「どうせワールドに負けて、空の世界と一緒に消えるびよん。無事に逃げられて良かったびよん」

「だよな」

せつかくだから、こつちの世界でチートを使ってハーレム王になろう。剣技は衰えてないみたいだし、剣術競技のトッププレイヤーになって大儲け。そして多くの女弟子を



ハーレム要員に！

「案外、収入は少ないらしいぴよん。それに、教えるのが下手だから無理があるぴよん」  
「え、マジ？」

じゃあ、裏社会で力だけで成り上がるパターンだ。悪党から奪った金で少女達を買う。完璧。

「政治力が無いから集中攻撃されて終了ぴよん。近代兵器や暗殺はどうしようもないぴよん」

「……確かに」

だったら『手から剣が出る系YouTube』として広告収入で……。

「よくできた合成映像だと思われるだけぴよん」

「けっ、役立たずが」

この世界に夢が無いことは分かった。ただ、向こうの世界には先が無い。さて、どうするか……とりあえずは日課を済ませよう。

共闘でルームを作成して、プロバハとアルバハを倒したがヒヒイロは拾えなかった。アーカーシヤとグランデの連戦でもヒヒイロは拾えなかった。

雫を使って六竜を倒す。残った時間でアーカルムを進める。

プレゼントリストから期限が近いものを受け取る。新着情報を1つ1つ確認&処理

する。

t w i t t e r 救援の I D からマルチバトルに参戦して青箱ラインまで殴る、殴る、殴る……。

そして結論は出た。ここまで左手に白兔剣を装備してプレイしていたのだが、ドロップアイテムは普段とあまり変わらなかった。きつと俺自身のスキルやサポアビは、ゲームに影響しないのだ。まったく、使いづらいチートだな……。

やっぱり俺が気分良く『俺 T U E E』でできるのは、グラブルの世界だけってことか。ただ、戻ったところでワールドに勝てるとは限らない。命を懸けてまで俺が戦う必要があるのか？ あんなゲームの世界のために。

「……………」

急に胸のあたりが痛くなった。さっきも感じたこの痛み……前にリーシャに殴られて痣になったところだったな。少しは手加減しろってのに。

ああ、そうだ。あの世界はゲームなんかじゃやない。ゲーム的な要素は多かつたけど、そこで過ごした6年は間違いなく俺にとつての現実だった。俺は覚えてる、モニカの柔らかなさも、ソシエのモフモフも、オリヴィエの滑らかなさも、ニオのぶにぶにも、ユエルのギリギリっぷりも。リーシャは……思い出したくないことも多いけど。

「そういえば、本を破られたこともあったな……」

今更ながら怒りが湧いてきたので、久しぶりにリーシャがメインの薄い本を読むことにした。

数分後。

「……よし、戻ってワールドを倒して世界を救おう！」

よく考えたらリーシャもかなり可愛いし、こつちが主導権を握れば大丈夫だ。それに、この世界でどれだけ頑張っても、モニカや獣耳娘や合法ロリには会えないからな。世界を救った英雄になれば、彼女達の方から近づいてくるだろう。そして……ハーレム王に、俺はなる！

そんなわけで、気になっていた各種のデータをwikiで確認していく。重要なのは女の子の「好きなもの」と「苦手なもの」だ。こればかりは量産型ロボミが分析できないしな。それから、風呂場に外付けHDを置いて、時間が経つと水没するように細工した。これでもう思い残すことは無い。

最後に、床に放置していた白兔剣を軽く殴ってから体内に収納する。準備完了だ。  
(ところで、どうやって戻るつもりぴよん?)

「ん? お前が何とかできるんじゃないのか? ほら、ジオラを呼んだ時みたいに」  
(それは……その、星晶獣の力を借りないと無理ぴよん)

「……」

よし、決めた。いつか海の底に沈めてやる。それはそうと、どうやって戻れば……そうだ！ 俺はグラブルの天井交換のページを開くと、画面をスクロールしてカーソルをリーシャに合わせる。6年前は事故みたいな転生だったけど、今回は俺が自分で選ぶんだ。あの世界で俺は生きていく。

「そして——」

大きく息を吸い込んだ。

「——秩序の騎空団でグラブるんだ！」

右手の人差し指に力を入れてクリックし……ようとしたところで、  
「ふあつくしゅんっ!!」

カーソルの位置がずれて、そのまま数回クリックしてしまった。

『グランサイファアの操舵士、ラカム!』

ラカムウウウウ!!

心臓が止まった。

——転生特典ポイントを使い切っているので、現在の状態で転生を開始します。よい転生を。

目の前には巨大な門が、そして少し前方には超巨大な建物がそびえている。振り返って見渡すと多くの島々が浮かぶ遙かなる青<sup>グラブル</sup>。間違いない、ここは……。

「ここはグラブルの世界だ」

## 最終話 秩序の騎空団

エピソード

秩序の騎空団とワールドの戦闘は熾烈を極めていた。

「秩序とは！ 人々が幸せに生きるために存在するべきです！ 空の世界を終わらせてまで創った秩序なんて、私達の目指す秩序ではありません！ これが私の覚悟の形、トワイライトソード！」

リーシャの放った奥義はワールドの巨大な左腕で防がれてしまったが、少しでも動きを止めることに成功した。その隙に、船団長モニカは負傷の激しい者を下がらせ、再編した部隊を前線に投入する。

「その通りだ。よく言ったぞ、リーシャ！ この空に我らある限り、決して貴様の思い通りにはさせない！」

気合十分、秩序十分な2人とは逆に、最前線での戦闘によつて限界が近い者もいた。

「あかん、そろそろしんどなってきたわ。狐火も半分ぐらいしか出せへん……」

「ユエルちゃん、もうちよつとだけ頑張る。きつと隊長はんも来てくれる思うし」

「ええ、アイツのことやから、どうせそのまま逃げたんとちやうか」

「ううん、隊長はんはきつとうちらを助けてくれる……。なあ、リーシャはん？」

ソシエの問いに対して、リーシャは少し考えてから答えた。

「……そうですね、私も隊長を信じます。あの時みたいに来てくれるって」

「えっと、リーシャ……その……旋律が……」

「二オ、大丈夫ですか？ あっ、指から血が！」

「そうじゃない……言いづらいただけ……あの……た——」

「空も星も討ち滅ぼす！ 破壊あるのみ！」

二オの言葉を遮るように、ワールドが咆哮をあげた。その口に闇のエネルギーが集まっていく。おそらくは圧倒的な攻撃で秩序の騎空団を一気に全滅させるつもりなのだろう。そして、全方向に放たれたその攻撃を——

「ファランクス!! (ファランクスではない)」

——俺はファランクスのポーズで2アビを使って完全に無効化した。よし、決まった！ タイミングは完璧だ！ これは間違いなく好感度急上昇だな。人気投票で1位だって狙えるぞ。

「……隊長？」

「ああ、これ以上あいつの……ワールドの好きにはさせない。この世界の秩序は俺が護る！」

そして、さつき物陰で様子を伺いながら考えた台詞も言えた。さあ、これで女の子たちの反応は……リーシャは涙目で喜んでいて、モニカは安堵の表情、ソシエは嬉しそうに尻尾をブンブン振って、ユエルはツンデレっぽくフンツとして、オリヴィエは満足そうに頷き、ニオだけは何故か『……ッ!?』な顔をしていた。まあ、ニオには後で理由を聞けばいいか。

「愚かなことを……わざわざ無駄な抵抗をするために戻ってきたというのか」

「何度でも戻ってくるさ。それに、無駄だと思っっているのはワールド、お前だけだ！」

実際のところ、また送還されたとしたら戻れる可能性は高くない。だから、そのことだけは隠し通す必要があるのだ。上手く騙せるといいんだが……。

「ならば、知るがいい……。オレの力は……まさに！ 世界を支配する能力だということ……」

良かった、後は倒すだけだな！



さあ、戦闘開始だ……と、その前に。

「隊員集合！ モニカ、部隊編成のために5分だけ時間を稼いでくれ！」

「貴公というやつは……3分でやれ！ それ以上は厳しい！」

「サンキュウ、愛してるぜ」

「いいから、さっさと済ませろ!!」

モニカに怒鳴られた（可愛い）ので、量産型ロボミから受け取った武器や召喚石を素早く装備した。風属性のマグナ編成、メイン武器は四天刃・凧だ。それから指輪を……。

「隊長、全員集合しました」

「リーシャ、これをつけてくれ」

俺は、目の前の彼女に久遠の指輪を渡した。

「えっ、これって……私でいいんですか？」

「ああ」

この状況で温存してられないし、マスターリーボナスのダメージ上限アップでサンライズソードの威力が上がるのは大きいのと、LBの回数上限が無駄になりにくいのが決め手だ。反射×2さえ無ければ二オに渡すことも考えたんだが……。ともかく時間が無いので、長々と説明するのは止めておいた。

「ありがとうございます。……大事に、しますね」

そうだ、それ一つでヒビロカネと同じ消費なんだぞ。俺はリーシャに領くと、次にオリヴィエを呼んだ。

「隊長殿、今回の件は……つまり……」

「……ああ。『今』のところ全てが『順調』に進行している。このままワールドを倒すぞ」  
彼女には意味深なことを言えば、しばらくは大丈夫だ。後で辻褃を合わせるのが面倒だ。

「おお、やはりそうだったか。流星は隊長殿だ」

「オリヴィエは宵闇であいつの動きを止めてほしい。だから、弱体成功ボーナスが出るまで使ってくれ」

彼女には覇業の指輪を10個渡した。イベント報酬で数に余裕はあるから、一気に放出しても問題ない。むしろ溜め込むのは勿体ないからな。ということ、役割が明確な者には多めに渡して厳選させ、総合力重視の者には至極の指輪を渡して多方面に伸ばした。ついでに平隊員には栄冠の指輪を適当に配った。そして最後に……。

「モニカ、待たせたな」

「問題無い。だが、勝算はあるんだろうな？」

「ああ、これが最後の鍵だ」

俺は、目の前の彼女に久遠の指輪を渡した。ダメージ上限アップで反撃の威力を伸ば

すことができ、LBの回数上限が無駄になりにくいからだ。あと、結婚しよう。

「……くつ、迷っている余裕など無いか。だが変な勘違いはするなよ」

「大丈夫、モニカの気持ちは分かってるから」

言うまでもなく『か、勘違いしないでよね。これはステータスアップのためなんだから！』ってやつだ。間違いない、俺には分かる。

「ええい、仕方ない！ これも秩序のためだ！」

Over the Limit!

LB強化回数上限+10 攻撃力+10% HP+10% ダメージ上限+5%

そしてステータス画面にも指輪マークが付いたはずだ。後でちゃんと確認しよう。ということでメインメンバーは俺、モニカ、リーシャ、ニオの4人だ。バハムートダガーの対象がヒューマンだから他に選択肢は無かった。連続攻撃アップのためにニオは外せないしな。

「ワールド！ 俺の記憶で少しは強くなったみたいだが、そんなの無意味だって教えてやるよ」

「その程度の小細工ならば、オレの計画に影響はない」

READY

「……白翼の守護神よ、我らに力をっ！」

いつも通り、リーシャの号令から始まった戦闘だが……ちよつと殺気立ってる？

やっぱりワールドの計画を許せない気持ち強いのだろう。俺も確実にここで倒したいと思ってるしな。なお、戦闘は普通に優勢だ。

「どういふことだ……さつきまでのお前に、こんな力は無かった……。お前の状態はほとんど何も変わっていないはずだ……。その力は何だ！ いったい何をした！」

「何って……。ただ、向こうで新着情報を1つ処理しただけだ」

「新着情報……。？　そうか、お前！」

「ああ、フレンド申請の通知を確認して承認した。先月に『自分のアカウントにフレンド申請していた』からな」

当然ながら、前世のアカウントではフリー欄にカグヤ様を設定していた。だから、念のため大量申請のついでにID入力で申請しておいたのだ。俺自身がコピー人格で、オリジナルが健在である可能性もあつたしな。

結果的には問題なく『もう1人の俺』とフレンドになれて、両面マグナの戦闘力が遺憾なく発揮されている。フレンドが1人（しかも自分）だという事実さえ気にしなれば、何も問題はない。……。あ、複アカによるBANだけは勘弁な。

「それでも！ 超越する！ いかなる困難もオレは乗り越える！」

ワールドの攻撃によって世界がごちゃ混ぜになる。すぐに復元力で元に戻るが、巻き込まれた俺達のHPは大幅に減ってしまった。だが、背水武器が中心の風マグナに対して、中途半端な全体攻撃は悪手だ。

「一気に決めるぞ、リーシャ！」

「例え創造神が相手でも、私達は諦めたりなんて絶対にしません」（攻撃号令Lv5が発動！）

「今だ、ニオ！」

「九界は尽く隆盛し、我ら唯々その美酒を啜るが如く」（九界の繁栄が発動！）

「行くぞ、モニカ！」

「ああ……この一刀で終わりにしよう」（霸旋雷閃が発動！）

「これで、俺達の勝ちだああ!!」

HPが少ないほど攻撃力が上がる背水スキルの効果を、両面マグナの加護で大幅に上昇させ、ダメージ上限も伸ばした上で、二重三重に追撃を乗せて、確定でトリプルアタックする瞬間最大火力。プレイヤーからニオリーシャ砲とも呼ばれる俺達の猛攻を受けて、ワールドは実体を保てなくなっていく。

「理想の新世界よ……」

ワールドにトドメを刺した！

エピソード3

勝利に沸き立つ俺達。だが……。

「空の民がオレの秩序に抗うというのか」

ワールドは完全に消滅せず、不安定な状態で浮かび上がっていく。そしてそのまま北の方に移動を始めた。

「まずいぞ、ワールドは逃げるつもりだ！」

おそらく、セフィラ島で潜伏して力を取り戻し、アーカラムシリーズを率いて、再び世界を終わらせようとするのだろう。

「そんなことは絶対にさせない！ リーシャ、ピースメーカーH1の出港準備だ！」

「了解しました、隊長！」

「まだ戦える者は、俺と……」

言いつつ周囲を見回したが、立っている者はほとんどいなかった。無理もない、俺がいない間もずっと戦っていたんだ。だったら最後は俺一人でもやるしかない。ワールドだって弱ってるんだ。今日で終わらせないと……アーカラムの転世なんて面白くない作業を延々とやらされるのだから！

そして俺は騎空艇でワールドを追っている。弱点を攻撃するために、装備は光属性に変更した。

「隊長、ワールドの進路は変わりません。やはりセフィラ島を目指しているようです」「よし！ 一気に追いつくぞー！」

「はい。秩序バースト、行きますー！」

シロウの改造で搭載された加速装置『秩序バースト』によって、ワールドとの距離をぐんぐんと詰める。だが、まだ少し追いつけそうにない。

「もう一回だ。今度はワールドの少し上方に向かってくれ」

「了解しました」

リーシャに指示を出す、俺は舳先に移動して接敵に備える。少しして騎空艇は再び急加速し、ワールドが射程に入ったところで……俺は足元を強く蹴った。

「滅べ、アーカラム!!」

「隊長!？」

ワールドに向かって跳躍した俺は、両手で四天刃・真を強く握って、その巨大な頭部を攻撃しようとする。だが、ワールドも最後の力（希望的観測）で腕を振り回して妨害してきた。

「オレは……あの場所へ……あの場所へ……」

その巨大な腕を足場に軌道を修正して、俺はワールドの側頭部に四天刃を突き立てた。その姿が徐々に崩れていくのを見て、俺は――

ボギンツ!!

攻撃された、ワールドの腕だ、背後から、油断した、折れた、力が抜ける、喪失感、取り返しがつかない、心臓が苦しい、致命的。そうだ……ここは現実だから、こんなことも起こるのか。これまでの戦闘の記憶が走馬灯のように浮かぶ。……って、今はそんな場合じゃないだろ!

「来いっ! 白兔剣!!」

俺は右手を四天刃から放して、白兔剣を装備する。そして、そのまま力の限り振り下ろした!

白兔飛跳閃!

「新たな……世界を……」

その言葉を最後に、ワールドは完全に消滅した。



ワールドが消えたことにより、空中で俺を支えるものが無くなった。つまり、普通に落ちる。

「なあ、飛行能力とか……」

「無いぴよん」

「そうか」

空……一面に広がる澄んだ蒼……。いつもは気にも留めないその蒼が、今は何故かとても美しいと感じられた。はあー、この程度の犠牲で世界が救われたんだから喜ぶべきだよな。まあ、俺としては複雑な気分だけど。でも……皆が無事なら、それでいいか……。

リーシャが、低高度の小さな離島にて自作の『シユバ剣の墓』の前で泣きながら祈っていた隊長を発見したのは、ワールドが消えてから10分後のことだった。「こいつが……俺の代わりに攻撃を受けて……ううっ……」

「いいから早く帰りますよ」

#### エピソード4

その夜は、ワールドの討伐を祝して宴会が開かれた。その主役であり今回のMVPとなったのは、勿論この俺……ではなくリーシャだった。

「なんか急にいなくなつたよな」「リーシャ副隊長はずつと戦つてた」「敵前逃亡は極刑ですぞ」「最後までいいところ持つていったくせに」「てか、そもそも記憶がどうかつて一番の元凶なんじゃ……」「リーシャ様最高！」「モニカ船団長の指揮も良かった」

投票の様子はそんな感じだったらしい。当然、俺は自分に入れたが、それは無理だと怒られた。仕方がないので、旧アーカラムの転世を終わらせたジェネラルのノワール氏に投票しておいた。無効票になつたけど。

そんなわけで今は会場の隅で1人、折れたシユバ剣を偲んで飲み食いしている。

「隊長はん……ここ、ええかな」

「ああ。ちょうど暇してたところだつたんだ」

素早くユエルの位置を確認すると、遠くのテーブルで数人と騒いでいた。チャンスだ！ ユエルが気付かないうちに、ソシエを酔わせてお持ち帰りするぞ。早速、お互いのコップに酒を注ぐ。

『乾杯』

「うちな、隊長はんが消えてもうたとき、えらい不安やったんよ……。でも、今までみにいに助けに来てくれるって信じとって……。そやから、本当おおきにな」

「どういたしまして。でも、俺が戻ってこれたのもソシエが信じてくれたおかげなんだ。ソシエの信頼に応えようと思ったから、いつも以上に頑張れた。だから、これからもその純粋な気持ちで大事にしてほしい」

そして、そのまま俺に食べられてほしい。ありがとう、いただきます。俺は酒を追加した。

「隊長はん……」

「ソシエ……」

いける、いけるぞ！ ソシエと結ばれたら、それを利用してユエルとも。それからオリヴィエ、モニカ、リーシャ、ニオも最終的には俺のものに……！

「あの……隊長はんは……その……好きな人おるん……？」

「ソシエが好きだ」

「えっ!!」

「もちろんユエルも好きだし、オリヴィエも好きだし、モニカも好きだし、リーシャも好きだし、ニオも好きだし、秩序の騎空団員3（名前を覚えてくれなかった）も好きだし、

ヤイアも、ナルメアお姉ちゃんも、アニラも、アリーザも、ジオラも、グレアも、アンも好きだ。他にも……」

いや待て、ちよつと気が早かったか？ ソシエの表情は……悪くない、まだいける！

「そういう好きとは……ううん、隊長はんの博愛精神やったら納得やけど……」

「なあ、そろそろ2人で抜——」

「うちっ！ もつと頑張るから……！ そしたら……」

ソシエはそれだけ言うのと、急に立ち上がって走り去った。

「あつ、ちよつ！」

よく分からないが、独りよがりなのはどうかと思う。

ソシエに逃げられ……ではなくタイミングが悪かったので、次はモニカかオリヴィエを狙おう。

「あつ、隊長！ 隊長がいます！」

「げっ！」

リーシャが来た。しかも、けっこう酔っているようだ。面倒なことになる前に、酔い潰してしまおう。そうすれば、心置きなく本命をお持ち帰りできる！

「ねえ、隊長。どうして貴方はそんなに無秩序なんですか？」

「知らん。お前らの秩序意識が高すぎるだけで俺は普通——」

「今日だって無茶ばかりして！ 私がどれだけ心配したと思ってるんですか！」

「俺の答えは無視かよ」

駄目だこいつ……早く潰さないと……。俺はリーシャのコップに酒を注いだ。

「私だって、隊長が来てくれたのが嬉しかったんですよ！ でも……どうして、あんなに

必死だったんですか。やっぱり武器のためですか、いつもみたいに！」

「いや、違うけど」

「秩序のためでもないですよね」

「まあ、はい」

「じゃあ……わた……しの……」

「うん？」

リーシャはコップの中身を一気に飲み干した。そして真っ赤な顔で俺のことをじつと見てくる。かなり酔いが回っているようなので、そのコップに酒を追加した。

「そ、それより『あの時』の話です！ あの言葉は本気なんですか？ 今さら冗談とか言われたら怒りますよ！」

あの時って何だ？ まるで思い出せないけど、怒られるのは嫌だし肯定しておこう。

「も、もちろん本気も本気、大本気だ。俺だって冗談であんなことは言わない」

「そうですか……。あの時はつい逃げてしまいました。今からでも返事させてください」

「ああ……。いい、けど……」

リーシャが逃げた時っていつだ？ 頭の片隅に何か引つかかっている気もするが。

「その……。よ、よろしくお願いします！ 恋人として!!」

「ええっ、恋人!？」

「はい。えーと、隊長は『私と共に永遠を過ごしたい』って言ってくれましたが——」

言ってる、そんな俺は、言ってる（グラブル川柳）。

「——やはり、いきなり生涯の伴侶というのは急すぎると思うんです。ですから、まず健全な交際から始めて、お互いのことを深く知ってから次の段階に進むのが秩序的だと……」

おい兎、この野郎、どういふことか俺に説明しやがれ。

（蒼の少女編が終わって牢屋から出た後に『リーシャ、フォーエバー』って言ったぴよん）

いや、それは言ったかもしれないけど。違うだろ、ニュアンスが。

「……聞いてますか、隊長!」

「はいっ、その、えっと、やっぱり俺には……」

「大丈夫です。貴方がどんなに無秩序でも、一生をかけて矯正しますから！」

「ひいっ!!」

その言葉は、まるで死刑宣告のように俺の心を絶望させた。俺の夢が、ハーレム王が……。

「それと……これは私の気持ちです」

リーシャの両手が俺の頬を包む。そして、そのままゆっくり彼女の顔が近づいてきて、唇に柔らかな感触があった。

「今のって……」

端的に言うときスされた。人生で初めてだった。

「少し恥ずかしいですね、うふふ」

リーシャは、はにかむように笑うと、そのままテーブルに突っ伏して寝てしまった。待て待て、俺の話も聞こうぜ、おい。ここで終わると結論が出たみたいになっちゃうだろ！ くそつ、誰だよこんなに酒を飲ませたのは!!

そう思いつつ見回すと、その場にいた全員が俺達のことを見ていた。あれ、ちよつと空気が重くないか？

「リーシャ様が……リーシャ様が……」「許せねえ、絶対に許せねえよなあ!」「どうしてあんな奴なんかをつ!」「俺達のリーシャ様だったのに」「有罪、そう有罪だ!」「有罪!」

「有罪!」「有罪!」「有罪!」「有罪!」

待て、お前ら少し落ち着け。これは違う、誤解なんだよ。焦る俺の耳に、九界琴の音が届いた。来てくれたか、ニオ! こいつらを昏睡させてくれ。その間に俺は逃げるから。

「今のうちに隊長の存在を消してしまえば、きつと無かったことになるわ」

「ニオ!」

ニオの演奏によって、団員達的能力が強化される。流石に勝てる気がしなくなってきた。さらに焦る俺の側に、オリヴィエが降り立った。助かった、俺を連れて飛んでくれ。「流石は隊長殿だ。リーシャ副隊長の籠絡に成功するとは。彼女は計画に欠かせない重要人物だ。私が責任を持って送り届けよう」

「オリヴィエ!」

オリヴィエの離脱によって、リーシャを人質にしての逃亡も不可能になった。そうだ、ソシエは……いない! ユエルとモニカもいないし、量産型ロボミは対人戦闘が得意じゃない! 死ぬほど焦る俺の前に、新たな人物が現れた。

「貴様っ、よくも私の娘に……許さん!!」

「ヴァルフリート!」

何しに来たんだよ! こんな時だけ出張してくんなよ! ってか世界の危機なんだ



から、もっと早く来いよ！ そんなことを思いながら、俺は全力で逃げ出した。会場を飛び出して、そのまま大通りを駆け抜ける。背後から多数の足音や銃声なんかも聞こえてくるが、振り返らずにひたすら走り続けた。

ふと気づくと、前方にお洒落なエルーンの女性が立っている。見覚えのある彼女は――  
「ナイスハッピーエンド！」

――と言つてサムズアップすると、よろず屋に入つていった。

お前の役割それだけかよ!!

翌朝、自室で目を覚ましたリーシャは、少しして前夜のことを思い出した。

「わーっ！ わーっ！」

そして、枕に顔を埋めて足をバタバタしていたせいで……生まれはじめて遅刻し

た。

## エピローグ 未来

『かくして、全空の危機であった「胎動する世界」事件は、第四騎空艇団が一丸となつて解決へと導いた。やはり、この時も中心となつて動いたのは、彼の率いる「秩序執行巡空独立強襲隊」である。この事件から一年も経たずに団長がヴァルフリートからリーシャへと変わったが、この部隊における彼女の実績の多さが大きな理由であろう。

一方、隊長であつた彼の方かというと、リーシャ新団長の主導で新設した部隊の隊長となつた。団長直属の戦闘部隊「高度全空救援執行主力部隊」の誕生である。初期メンバーのほとんどが前の部隊からの続投であることから、部隊の錬度の高さを窺い知ることが出来る。

当然ながら「彼を新団長に」との意見もあつたと思われるが、前線で人々のために戦い続けたいという信条から敢えて彼女に譲つたのではないかと筆者は推測する。

さて、高度全空救援執行主力部隊についてだが、その華々しい活動の記録や逸話は全空中に残っており「知られざる彼の素顔に迫る」という本書の趣旨からは外れるため割愛させていただく。

彼の引退は意外なほどに早かつた。様々な戦場を縦横無尽に駆け回つた姿を知る者

からは、生涯現役で世界秩序に貢献するものだと思うれていたようだが「もう俺の戦場は無い」の言葉を残して退団したらしい。きつと「ここからはお前達が秩序を護るんだ」と続くのだろう。自身の影響力を考えて、後進育成のために表舞台から去った彼は、どこまでも秩序のことを考えていたのだ。

その後、彼はアウギユステの海辺にて妻であるリーシャと自給自足の生活を送っていたらしい。ときおり海でとった大きな獲物を、地元民や旅行者に振舞っていたという記録が残っている。また有事の際には誰よりも早く現れて、被害に遭った女子供を救出していたことは現在でも地元民の間で有名だ。

晩年は芸術方面でも注目を集め——』

「ねえ、なに読んでんの？」

本から顔を上げると、幼馴染のシャーリーがいた。

「課題図書だよ。感想文のやつ」

「ふーん。あつ、伝説の隊長様の本だ！」

「伝説って……まあ、そうだけど」

「格好いいよね、隊長様！ その本も何回か読んでけど、私のお気に入りにはシデロス島の話かな。たった一人で星晶獣と戦って、増援が来るまで民間人を守り抜いたんだよ！」

また始まった。『隊長様』の話になると、すぐこれだよ。あつ、そうだ。

「そんなに詳しいんならさ、僕の代わりに感想文書いてよ。シャーリーなら簡単だろ」  
「はあ？ そんなズル、協力するわけないでしょ。私は隊長様みたいな秩序の人になるんだから」

「ちえつ、ケチ！」

「だいたい、仮にも隊長様の子孫なんだから、もつと真面目にやりなさいよね」

「うるさいなあ、ご先祖様のことなんて僕には関係ないだろ……」

「馬鹿！ 隊長様の名前に傷がつくじゃない!!」

こうなつたシャーリーには何を言つても無駄だ。僕は諦めて感想文に取りかかることにした。

「えーと……『大勢の女の子に囲まれて羨ましいと思いました。きっと毎日がウツハウハだったのでしょうか。将来は僕も——』」

「はあ？ どこをどう読んだら、そんな感想が出てくるのよ！」

「だって、ここに……」

『簡単にはあるが、他の人物についても略歴を記しておこう。』

リーシャ。

秩序の騎空団の団長に就任。直属の部下である彼と様々な空を駆け巡つた。結婚、出産後も変わらず公私ともに支え合う関係であり、多くの者から憧れられる存在となつ

た。彼と同時期に引退した後は、夫婦で仲睦まじく暮らしていたとされる。

モ二カ。

第四騎空艇団の船団長として、長期にわたりアマルティア島の発展に貢献した。元部下であった彼からの信頼も厚く、離れた空域にいても月に1度は来訪があったようだ。生涯独身であった。彼との関係を噂されたようだが真偽は不明。

二才。

リーシャの団長就任に合わせて正式に入団。団長補佐として夫妻をサポートしつづけた。良からぬ企みをもって団長に面会した者は、一人残らず身体の不調を訴えては矯正されたらしい。リーシャとの同居は結婚後も継続され、まるで姉妹のような関係であったという。

ソシエ。

九尾との因縁が片付いた後に正式に入団。彼の部隊の副隊長として、多くの者を護り癒した。後に『秩序の舞姫』と呼ばれるようになり、結婚の申し込みがあとを絶たなかったという。寿退団した後は、伴侶と共に王家の再興に尽力したらしい。

ユエル。

九尾との因縁が片付いた後に正式に入団。副隊長ソシエの補佐として、多くの敵を斬って焼いた。後に『秩序の焔姫』と呼ばれるようになり、ソシエに近付く者を防ぎきつ

たという。寿退団した後は、伴侶と共に王家の再興に尽力したらしい。

オリヴィエ。

「胎動する世界」事件の直後に正式に入団。星晶獣にも関わらず秩序のために働く姿は、多くの者に明るい未来を予感させた。彼との間に大規模な計画があつたらしく、現在でもその調査は続行されているが手がかりは何も見つかっていない。彼の退団と同じ時期に姿を消した。

量産型ロボミ。

壊獣の完全消滅を確認した後、機能停止を願い出たが彼に止められる。その後、母性を活かして、多忙な夫妻の代わりに彼らの子供を育てるようになった。彼の死後、程なくして動かなくなった。

ガンダ——』

本を閉じる。

「こんなに女の子に囲まれてて、目移りしないわけないだろ！」

「そつ……違つ……」

シャーリーは口をパクパクさせている。僕は構わず自論を展開することにした。

「まず、このモニカって人からは普通に好かれてただろ。生涯独身つてのも、それが理由だと思ふな。次にニオつて人も、姉妹関係つてのは怪しまれないための方便で、実際は

略奪とか考えてそうだし。それからソシエとユエルって人も、相手のことを何も書いてないってことは、秘密の事情があったんだ。オリヴィエって人も、実は痴情のもつれで誰かに消された可能性が……」

「ありえないわよ！　馬鹿馬鹿馬鹿！　いくら隊長様の子孫でも許さないんだから！」

ボッコボコに殴られた。体のあちこちが痛い。すぐ暴力に訴えるのは秩序的じゃないだろ！　と言ったら追撃がありそうなので我慢した。そのまま走り去るシャーリー。

「僕だって、いつかご先祖様に負けないぐらい……あれ？　いま何か光ったような……」  
少し離れた川の底に何かあるようだ。気になったので近付いて調べてみることにした。

「……白い、剣？」

少年が去った後、風がパラパラと本のページをめくる。

『彼は多くの子供と孫に囲まれて最期の時を迎えた。幸せそうな笑顔で旅立ったと言われている』



時は戻つて。アウギユステ列島、海辺の一軒家にて。

「夢を……見ていた……俺が……隊長だった頃の……」

「お祖父ちゃん！ お祖父ちゃんが目を覚ました！」

目を開けると、可愛い10人の娘達と大勢の孫娘、あと男どもがいた。男女比率を考えると、男には退場してほしいところだが、それを口に出す気力すら今の俺には無かつた。

「そろそろ……限界みたいだ……」

「そんなんっ！ 死なないで、お父さん！」

「海が見たい……窓を……」

ただちに窓が開かれる。部屋に吹いてくる潮風が心地いい。そして、大勢の観光客！  
水着！ 水着！ 水着！ 揺れる胸！ くいこむ尻！ ビキニ！ 紐！ えっ……  
紐？！

「そうだね……お母さんも海を見るの、好きだったもんね……」

娘の言葉はよく聞こえなかつたし、気づいたら心臓が止まっていた。

???にて。

「もう！ ずいぶん待ったんですよ、貴方」

「あれっ、リーシャ？」

目の前にいるのは、若い頃の彼女だった。そして、気がつくまで俺の姿も若返っていた。「まあ、貴方の遅刻癖は知ってますけど……ずっと寂しかったんですからね」

「それはその、悪かったよ」

「冗談です。でも、もう二度と離れないでください」

そう言っつて、俺の手を取るリーシャ。体温なんて無いはずなのに、その手は暖かかった。

「ああ、約束する」

「ところで——」

リーシャは俺の耳元に口を寄せる。

「——先日、モニカさんも来たんですが『私の妊娠中に、酔った勢いで貴方と関係を持つ

てしまった』ことを謝られてですね」

「ひよっ!？」

俺は逃げ出した。しかし手を握られていて無理だった。

「それで『リーシャには俺の方から説明して謝っておく』と言われたらしいんですが……私は何も聞かされてませんよね？」

「ちや、ちやうねん」

「何が違うんですかっ！ 貴方はいつもいつもそうやってっ！ ふう……大丈夫です、落ち着きました。時間はたーっぷりありますから、いくらでも話し合いますよ」

リーシャの笑顔が、怖い。

「ちよつと俺、地獄行きみたいだからさ。残念だけどここで——」

「絶対に離しませんから。覚悟、してくださいね」

完。

# Extra 4 もう一人の主人公

## エピソード1

ワールドを倒してから数日後、俺は――

「いつ、痛いびよん。もつと、ゆっくりっ……!」

「すぐに終わらせるから黙ってる。くそっ、結構きついな」

「無理に、押し込んだから、びよん。そんな、強引に、ああああああ!!」

――白兎剣の鏢にある『召喚石セット用の穴』から、力づくでスマホを引き抜いた。これは、元の世界に戻された時に入れておいたものだ。スムーズに入らなかったから『軽く殴って』突っ込んだけど……よし、ちゃんと動いてるな! ソーラー充電器の方も問題ないみたいだ。

「つてことで、電波を中継してほしい」

「いや……普通に無理びよん。フレンドの加護は世界のシステムとして組み込まれてるけど、電波は実際に光子を異世界間で飛ばすコストが――」

「あー、分かった分かった、もういいよ。だったら、この世界の情報を同期させて、このスマホから各種操作をできるようにしてくれ」

「それなら何とかなるびよん。専用アプリをインストールしておくびよん」

そっちはそっちで話が早いな！ ともなく、これでもうラビットルームに行く必要が無くなったわけだ。星晶獣フラムとグラスも、今は元隊長室で会えるしな。

そんなわけで適当にスマホを操作していると、倉庫（現隊長室）のドアがノックされた。どうせリーシャだろうという予想を大きく裏切り、開かれたドアの向こうにいたのは、

### 青い髪の少女

だった。ああ、死んだ俺。極みスキンを取るような奴に勝てるわけないだろ！

ふー、死ぬ前に1回はモニカに挟まれたかったな……。いやいやいや、まだ俺をDAN ZAIしに来たとは限らないだろう。建物を片っ端から探索する系のゲーマーかもしれないし、心優しい田舎娘（青髪）かもしれない……。無いな。さておき、こんな時に備えて対策はいくつか考えてあるんだ。いくぞ第一の策！

「こ、こゝは秩序の騎空団だよ」

そう、NPCの振りだ。こいつがゲーム脳なら『なんだ、名無しのモブか』と思うから、この場を離脱する隙ぐらいはできるはずだ。しかし、そんな俺の期待に反して彼女は――

「あー、やっぱクソ兄貴じゃん。マジウケる」

——実の妹（前世）みたいな仕草で、けらけら笑っていた。

## エピソード2

俺を断罪してきた原作主人公が妹だった件。

そんなタイトルを空想する。いや、そんな場合じゃない。目の前にいるのは間違いない。原作主人公（極みスキン）で、何故か中身が前世の妹なのだから。普通に考えて、こいつも俺と同じように転生したのだろう。あるいは憑依か……まあ、それはどっちでもいい。というか、そもそも妹なら話を通じるはずだし、問答無用のDANZA I展開は無いただろう。ということ、まずは話してみることにした。

「お前なあ、いきなり現れるとかびつくりするだろ」

「えー、だって前は居なかったし、クソ兄貴はフラフラしてるからアポだって取りづらいし」

「あーっと、まあ、こつちも忙しいからな。お前だって知ってれば、会いに行つたんだが」  
危険が無いなら、喜んでグランサイファーに行くぞ。なんなら何泊かしたいぐらいだ。ドラフの女の子も数人はいるだろうし、ぜひお近づきになりたい。

「私は、誰かが介入してるって知ってたけどさ。なんか急にガンダルヴァが加入してく

るしー！」

「ゲホッ！ ゲホッ！ いや、あれは俺も想定外で、こつちもリーシャを連れてってほいと思つてたんだ。原作の流れを邪魔するつもりなんて無かつたんだよ」

そう、原作通りならリーシャ不在の隙に色々できたし、今だつてフリーのままであつたんだ。こいつがリーシャを引きずつても連行していれば……。

「ああ、心配しなくていいから。少なくともルリアとラカムさえいれば、大抵の戦闘は力押しで何とかなつたと思うし。あつても、ノア君が加入しなかつたら本気で怒つたかも？」

「ひっ……それは、何より、だ」

「そんなことよりさ、ガンダルヴァに聞いたんだけど、『俺の四天刃でイかせてやるぜ』ってクソ兄貴から迫つたんだって？ そこんとこ、攻めの視点から詳細プリーズ」

「お前が想像しているような意味も感情も行為も一切無かつたよー！」

「なーんだ、がっかり」

相変わらずの腐った嗜好だつた。前世でもその手の同人活動をしているような奴だつたが、1回死んだぐらいでは変わらないようだ。そして、どうやらDANZAI展開も無いようで安心した。さすがに実の兄を襲うほど好戦的ではないらしい。TS転生だつたら別の意味で襲われたかもしれないが。

「そつちこそ、アリアちゃんとの結婚はどうなってるんだよ」

「んー、真王ぶん殴るから白紙になると思う。今は学園編を楽しみたいから後回しだけど」

「学園編（笑）」

「そう！ やっぱラクザラ最高だった！ なんとというか2人きりで話してるときの空気が、お互いしか見えてないみたいなのがあって——」

「ストップ！ ストップだ！ そういう話はルナルルにでもしてくれ」

「えつと……ルナルルとは、もう……」

妹は目を伏せて静かに呟く。えつ、ここで重い話が来るのか？ せいぜいゴリラに負けたとか、絵物語に押し潰されて意識不明とかだよな。あんなギャグキャラ……いや、現実には何が起きてても不思議じゃないのか。

「その、悪かった。そつちの事情も知らないで……」

「宗派の違いっていうか……可換則が不成立っていうか……」

「……あつ」

察した。そして、俺の気遣いを返せと言いたかったが我慢した。後日、妹から届く『ルシサンは至高つてことで和解した』という手紙を破り捨てる程度には、深入りしたくなかった。



「話を戻すと、ザラストラ君の可愛さがマジでヤバくてもう死にそう——」

「それはもういい！」

「そっか、じゃあ本題に入るね」

「何でもいいから早く済ませてくれよ。こっちは（始末書を書くのに）忙しいんだ」

「あのさ、クソ兄貴がワールドを倒したせいで、カイク君に会えないんだけど？」

妹の体から青いオーラが湧き出す。そして、どこからともなく取り出した三寅斧を、片手で軽々と振りかぶった。ああ、死んだわ俺。つい前世のノリで話してたけど、原作主人公（極みスキン）を怒らせたら瞬殺されるに決まってる。トリプルアタックの1回目を2アビで無効化して、2回目を受け止めた白兔剣が砕け散って、3回目を避けることもできずに両断されるのだ。いや、そうならないためにも、どうにか妹を宥めないと……！俺だってマリア・テレサのセイギでさばかれたかった（敢えて変換しない）けど抑えたんだぞ。

「まあまあ、落ち着けて。正規の手順では無理かもしれないけど、そのうち加入の機会はあるかも（アーカルムだけに）なんちゃって」

「は？ 殺すぞ」

俺は土下座した。誠意が伝わるように、床に頭を擦りつけて謝罪する。キャルちゃんと違って、こいつは本気なのだ。何としても人生からの退団は防がなくてはならない。

かつてはモニカにも通用した、この第二の策で俺は生き延びてみせる……!

「調子に乗ってました。本当に申し訳ございません」

「う、うん、まあ」

コンコン ガチャ

「すみませんでした。許してください。何でもしま——」

「隊長、団長さんにお出しするお茶を持つ……」

その時リーシャが見たのは、尊敬する団長が斧を振りかぶる姿と、土下座したままの俺だった。

「リーシャ!? こ、これはクソ兄貴が勝手に!」

「えっ! あつ、失礼しました」

リーシャは慌てて立ち去った。そして、霧散していく妹のオーラ。

「勘違いだから! そういうんじゃないから!」

た、助かったー。

エピソード3

数分後、応接室にて。

「だいたいの状況は分かりました。『団長さんが隊長を不当に傷つけようとした』わけで

も『隊長が団長さんに妹の演技で虐めてほしいと懇願していた』わけでもなく『昔の悪ふざけの延長』だったということですね」

「そうそう！ ワールドを倒してくれたことは感謝してるし、クソ兄貴を攻撃する理由なんて無いからさ！」

「俺だって、土下座するのも虐められるのも全然楽しくないし」

結局、そういうことになった。妹も秩序の騎空団と戦う気は無いらしく、あつさり俺の話に追従した。そう、俺達は『幼い頃、一つ屋根の下で同じ釜の飯を食う関係だったが、複雑な事情で生き別れになって何年も会ってなかった血の繋がってない兄妹』なのだ。……嘘ではない。

「良かった……。あの、隊長……もし特殊な趣味があるのなら教えてくださいね。その、誰かの迷惑になるといけないので」

「大丈夫だ。俺には露出趣味も無いし、兎や槍やプリンに興奮することも無いから」

でも、女の子を土下座させるのも虐めるのも楽しそうだし、脱がせたいし、バニースーツを着せたいし、槍を挟ませたいし、プリンを乗せたい。まあ、この程度で特殊とは言えないだろうし、目の前の妹の趣味こそ俺に迷惑だったが。そんなことを考えつつ妹を見ると、俺とリーシャを交互に見比べていた。

「あつ、隊長。額が少し汚れています。すぐに拭くので動かないてくださいね」

「ああ……さっきのが原因か」

「秩序の騎空団の一員として、できるだけ身だしなみには気をつけてください。外見の乱れは秩序の乱れに繋がりますよ」

お前が言うな。毎日毎日、そんなミニスカで挑発しやがって。そんなツツコミを我慢する俺の額を、リーシャはハンカチで何度か擦った。あつ、ちよつといい匂いがする……。

「ねえ、もしかして……リーシャとクソ兄貴って、その……」

「ええと……はい、お付き合いさせてもらってます」

あつ、おい！ 勝手に答えるな。外堀を埋められたみたいで不安になるだろ。かと言つて、今から下手に否定するとリーシャが怒りそうだし。

「へえー、そつかそつかー。あのクソ兄貴がリーシャとねえ」

「……何だよ」

「別にー。まあ、リーシャってクソ兄貴のタイプだから、やっぱりって感じで」

「そうなんですか？」

「おい待て馬鹿止めろ」

「中学の時に、生徒会長やってた人が同じクラスにいたんだよね？ リーシャみたいに

真面目で活動的な優等生って子でー」

「止めつ、止めて、くれさい」

「クソ兄貴はどうにか近づこうと、遠回りして帰ったり、こっそり家まで尾行したり、同じ部に入ったりしたけど、ヘタレなので何も起きませんでした。めでたしめでたし」

「違、いや、その……」

間違いない。こいつ、俺を（精神的に）殺す気だ。だいたい、生徒会長を現行でストーキングしてるのはお前の方だろうが！　だが、それを暴露しても報復で俺の身が危ない。くそつ、少しぐらい強いからって調子に乗りやがって！

「隊長、今の話は本当ですか？」

「む、昔のことだ。あの頃は俺も若かった」

「……そうですか」

「じゃあ、次は高校の時の話だけ——」

こうなったら最後の策を使うしかない。確実に時間を稼げる『あの台詞』を言ってやるぞー！

「おっと、その話は魔物を片付けてからだ」

「なーんだ、いいところだったのに」

頭が騎空士モードに切り替わった妹は、普通に部屋から出ていった。

## EX エピソード

某女性のツイートより一部抜粋。

『クソ兄貴にアイス盗られた。いつか殺す』

『クソ兄貴にワンパン放置された。そのうち殺す』

『クソ兄貴にアニラおりゆ？ っつて煽られた。マジで殺す』

『クソ兄貴に頼んだ新刊が売り切れてた。絶対殺す』

『クソ兄貴の極み自慢がウザい。そろそろ殺す』

『クソ兄貴が死んだ。あの世で会ったら殺す』

## エピソード4

俺達は森に向かっていた。

「っつてか、せつかくだしバブさんでも倒しにくく？ トメ無し縛りで貢献度勝負とか」

馬鹿かお前。こっちはファータ・グランデ空域から出たこともないし、装備もマグナなんだぞ。お前みたいな廃人と一緒にすんな。ヴァルナ寄越せ。とか言いたかったが、どうにか堪えた。

「いや、それよりも効率勝負といこう。悪いが事後処理があつて、アマルティア島を長く離れられないからな（特にリーシャが）」

「ふーん、大きな騎空団も大変なんだ」

「リーシャも悪いな。わざわざ付いてきてもらって」

「いえ、お二人の戦い方を見て勉強させてもらいます。それに……隊長が団長さんに失礼なことをしないかも心配ですし」

何を言うか。気まぐれで俺が殺されないように見張るのがお前の役割なんだぞ。そんなことを心の中で呟きつつ、3人でクルヴィ山脈の麓の森にやってきた。

「この辺の魔物は基本的に一撃で倒せる。だから、どれだけ短時間で倒せるかがポイントだ」

「もし2秒短縮できたら、100周で200秒……3分の短縮になるもんね」

「そういうことだ」

「ひやく、しゆう？ えっ……」

「まとまった数を倒して平均時間を計算してもいいんだが、面倒だし今回は単体敵の最速タイムを比べることにしよう」

「ん、それでいいよ」

よし、狙い通りの展開に持ち込めたぞ。これで俺の威厳を取り戻して「兄より優れた妹など存在しねえ！」ってことを分からせてやる。そんな決意に応えるように、さつそ

く魔物が現れた。

「先にやるか？」

「それじゃ、遠慮なく」

妹は一伐槍を出現させると、軽く腕を振って投擲した。魔物は、猛スピードで飛来する一伐槍を避けることもできず、木っ端微塵になって死んだ。まさに秒殺だった。

「まあまあだな」

「最初だし、もうちよつと締められると思うけど」

そう答えつつも得意気な顔をしているが、実際のところ今の一撃を避けられるのは団でもモニカぐらいしかいない。それに、さっきの三寅斧を見たときも思ったが、『感覚』で武器を管理しているようだ。原作主人公と同様に、異次元空間に収納してある武器を、自由に取り出したり装備状態に変更したりできるのだろう。……俺もそのチートが欲しかった。

「次は俺の番だな。ああ、そういえばリーシャ、さつき戦い方を見るとか言ってたっけ？」

「ええ、確かに言いましたけど、それが——」

「悪いけど、それは無理な話だ」



新たな魔物が現れた。俺は『素早く近づいて右手の四天刃で斬る』というイメージを行動に移す前に『操作』を実行する。次の瞬間、魔物は両断された死体となっていた。まさに瞬殺だった。

「えっ、隊長？ いま何を……」

「嘘……クソ兄貴の動きが全然見えなかった……。魔法とか空間操作みたいな見えない攻撃とも違う。気付いたら魔物が真つ二つに……」

「とりあえず俺の勝ちってことでいいよな。『ちよつと縮める』程度では無意味だし」「分かったから、もう一回やって！ 次は絶対に見逃さないから！」

よし、これでもうリーシャに余計なことを吹き込んだりしないだろう。実戦で成功するかは心配だったけど、上手くいってよかった。せっかくだし、このまま何回か試してみるのもいいな。ちょうど次の魔物も来たことだし。俺は右手の四天刃を魔物に向けて、ポケット中の左手で『スマホを操作』した。

キング・クリムゾン！（バンド名）

攻撃する時間が消し飛び、魔物が倒されたという結果だけが残った。

「隊長……いったい何が起こっているんですか？」

「えっと、そうだな……『離れた対象に近づくための経路を自分の内部世界に納めること』で、過程を省略して攻撃を繰り返す」という騎空士の秘技だ。故郷では『離路納線』と

呼ばれていた」

「りろなぐり?」

「……つて、リロ殴りじゃん! 私にもそれぐらいできるしー!」

リーシャに正直に答えるわけにもいかないので適当なことを言ったが、妹は正確に理解したらしい。そう、俺は『この世界と同期したアプリ』のリロードボタンを押すことで、攻撃モーシジョンをスキップできるようになったのだ。もつとも、敵のモーシジョンも同様にスキップされるため、一方的に有利な戦闘ができるわけではないが……。

「それで、世界を再構成する『感覚』は掴めそうか?」

「クソ兄貴は黙ってて! リロード……リロード?」

「はいはい」

妹は『感覚』で色々と操作していた。その方が直感的に行動できて便利なのだろう。だが、それでは俺の『強さ』に決して追いつけないのだ。そして、いつか純粋な戦力でも俺が上に立つぞ!

帰途。

「あーあ、私も『その能力』欲しかったな」

「そんなに羨ましいか。そうかそうかー」

「死ぬ、クソ兄貴」

軽く蹴られそうになったので、本気で回避する。ふう、危ないところだった。

「そう言うお前だって、何か貰ってるんだらう？」

「まあね。あつ、今日の分を忘れてた」

そう言いつつ、妹は体の前で掌を上に向けた。すると、そこに見覚えのあるカードが出現する。右下に1000と書かれたそれは……。

「モバコイン？」

「そう、毎日1枚ずつ貰えるんだ」

「つてことは、30日で30枚……3ヶ月で天井……ガチャ、引き放題……」

思わずその場に膝をつく。なんだよこの格差。俺だって、もつとガチャを引きたいのに。もつと女の子を増やしたいのに。こんなの一生かかっても追いつけない……。

「隊長、大丈夫ですか？ もしかして、さっきの技の反動とか」

「……いや、ちよつとした立ち眩みだ。少し休みたいから先に行つてくれ」

「そうですか。……無理はしないでくださいね」

「あつ、もう耳飾り掘りに行く時間だ。バイバイ、クソ兄貴」

2人は去つていった。俺はスマホじゃなくてモバコインを詰め込むべきだったと後悔して、少し泣いた。

その後、裁きの門にて。

「見送りはここまででいいよ。……クソ兄貴のこと、よろしく」

「はい、任せてください。それで……その、最後に1つ聞きたいんですが、仮にグラシーザーの抱き枕を買ったとして武器が付かなかつたら、団長さんはどう——」

「は？ 何それ！ そんなふざけた商売、私が絶対に許さないから」

「……よく分かりました。実在、したんですね」

そして、彼女は自分の物語に戻っていった。そう、推しのいる王立フィロス教導学校に。

## Extra 5 それいけ! ハーゼリーラちゃん

## プロローグ

ハーゼリーラ・アロイス・ガンクス。それが、ガルゲニア皇国第六皇子として生まれた私に与えられた名前でした。しかし、叔父の卑劣な策略で国を追われ、今では孤独な放浪の日々。私は誓ったのです、いつか国に戻り叔父達に正しい裁きを与える、と。私の当面の目的は、彼らに対抗できるだけの『力』を手に入れることです。そのために……。

「秩序の騎空団。まずは彼らを掌握するところから始めましょうか」  
これは私、ハーゼリーラの復讐の物語。

## エピソード1

というわけで事前準備や情報収集を済ませた私は、第四騎空艇団の本部があるアマルティア島にやってきました。

「あら、なかなか美しい町並みですわね」

秩序的に区画整理された家々、垂直に交差する道路、そして巨大な白亜の建造物。こ

の感動を形に残そうとスケッチブックを開いたところで、頭の中に声が響きます。

(……随分と気楽なものだな。これから騎空団と戦うというのに)

「あつ！ こ、これは偽の身分である『旅の画家ハーゼ』としての偽装行動ですわ。そう、戦いは既に始まっていますの。気が散るから黙っていてもらえるかしら」

小声で文句を言つて、スケッチに戻ります。声の主は『ザ・ムーン』、私と契約している星晶獣ですわ。戦闘力はそれほど高くありませんが、幻惑能力は上手く使いこなせば強力ですよ。

しばらくして描き終えたところで、またしてもムーンの声が聞こえます。

(何だ、その混沌たる光景は……汝の復讐心を写し出——)

「黙りなさい」

私はスケッチブックをボタンと閉じました。

裏社会の伝手を使つて用意させた拠点で一息つくくと、私は今後の方針を検討します。

「第四騎空艇団には、団長の娘が所属している……つまり、その子を押さえれば発言力が高まりそうですね。そのために、まずは騎空団の状態を不安定にしてから、この私が立て直すことにしましょう。『恩人』の意思は無視できないはずよ」

「簡単に言うが、どのような手段で不安定にするというのだ?」

「これでも私は幼い頃から陰謀渦巻く王家で生きてきましたわ。どんなに隙が無いように見える集団でも、弱点の1つや2つはあるものです。何人かの情報屋から買った資料を3日かけて精査したところ(中略)つまり、この秩序執行巡空独立強襲隊——無駄に長いわね——の隊長が弱点、ということですよ」

(……)

「この男、目立った功績も無いようですし、おそらく後方支援や補給などの事務能力に長けているでしょう。部隊指揮は副隊長が、実際の戦闘は部隊員が行っていると推測できますわ。まあ、少しは戦えるかもしれませんが、私も正面から攻めるつもりはありません。智略と欺瞞の力、見せてさしあげますわ。ふふ、ふふふつ」

私は勝利を確信して暗い笑みを浮かべました。

## エピソード2

庶民的な服を着た私は「噂好きの島民ハーゼ」として、あの男の悪評を広めることにしました。たかが噂話と対処を誤れば手遅れですよ。というわけで市場の女性と世間話に興じます。

「——そうね。私も秩序の騎空団には助けられたわ。でも、知ってる? 最近あの『秩序

執行なんとか隊』の隊長が街中で暴力事件を起こしたって。それを聞いて、もう私不安で不安で……」

「ああ、知ってるよ！ 3日前のことですよ」

「……………え」

「ウチのバカ亭主もね、あの店でぼったくりに遭って通報したんだよ。でも相手が巧妙な奴らで、調査が長引いた隙に逃げられるんじゃないかって……。そこであの隊長さんが、何も知らない客として店の連中と喧嘩して全員を病院送りにしちゃったの。それから半日で取調べが終わって、無事にお金も戻ってきたから、もう隊長さん達には感謝しかないねえ」

「そ、そうだったのね」

その後も女性の話は続き、私には少しの疲労感が残りました。

少し派手な服を着た私は「事情通のハーゼ」として、引き続き悪評を広めることにしました。1回失敗したぐらいでは諦めませんわよ。というわけで酒場の店長と、ここだけの話をします。

「——そうね。秩序の騎空団のおかげで暮らしやすいわ。でも、知ってる？ 最近あの『秩序執行なんとか隊』の隊長に労働法違反の疑惑があるって。いくら優秀な人でも、そ



ういうのって……」

「ああ、知ってるよ! 先週は古戦場だったからな」

「……………は?」

「でもよ、古戦場は遊びじゃねえんだ。確かに17時間も走り続けるなんて異常だよ。カガワじゃなくても規制するべきだって思うぜ。でも、上位を目指すなら立ち止まるわけにはいかないんだ」

「そ、そういうもののなのね」

その後も、元騎空士だった店長の話は続き、翌日の私は二日酔いに襲われました。

動きやすい服を着た私は「お喋りなハーゼ」として、それでも悪評を広めることにしました。こんな偶然が何度も続くわけじゃないですわ。というわけで大衆食堂の隣席の客と雑談をします。

「——そうね。秩序の騎空団はとっても秩序よ。でも、知ってる? 最近あの『秩序執行なんとか隊』の隊長が団の資金を横領したって。私達のお金がちゃんと使われないなんて……」

「なんだってー!」

そう、その反応が欲しかったのよ。ここから少し強引にでも反対運動を起こしてみせ

るわ。

「私、考えたんだけど——」

「まったく、あの隊長さんも懲りないねー」

「……………な!?!」

「どうせまた未遂で終わったんでしょ。秩序の騎空団でそんなこと不可能に決まっているに」

「いや、でも万が一……」

「無い無い」

その後、何人かに同じ話をしてみたのですが、全員が似たような反応でした。

「どうやら一筋縄ではいかないみたいね。こうなったら少し荒っぽい手を使うわよ」

私は代理人に連絡を取ることになりました。

### エピソード3

私は代理人を通して、ならず者に秩序執行巡空独立強襲隊の隊長を襲撃させることにしました。彼が現場から離れることで、第四騎空艇団に隙ができるのです。

『あの隊長を病院送りにしたら10万ルピを払う』

と、代理人に募集させたところ、話した全員に断られたようです。確かに、秩序の騎空団を敵に回すことを考えると、報酬が安すぎたかもしれないですね。

『あの隊長を病院送りにしたら50万ルピを払う』

と、再度募集させたのですが、やはり引き受ける者はいなかったようです。さらに、代理人もこの件から手を引きたいような素振りでした。

私は、次が最後だと代理人を説得して、追加でいくつか指示を出しました。そして、黒服を着た「隠密ハーゼ」として、募集の様子を物陰から伺っています。

「依頼主はこの『仕事』に100万ルピを払うと言っている。これなら人数を集めても、取り分はそれなりにあるだろう。人気の無い場所で不意討ちすれば簡単なことだと思っただけか?」

「馬鹿野郎! そんなんでアイツに勝てるわけねえだろうが!!」

「ならば、前金として10万ルピを先に渡そう。それで武装を整えるといい」

「だ、か、ら! お前は何も分かってねえってんだ! その辺の星晶獣と戦った方がマシだぜ!」

「どうやら、予想以上にあの男は戦えるみたいですね。もつとも、ならず者の言うことですし、どこまで信用できるか分かりませんが。では、そんな彼らに策を授けるとどうなるか……。」

「だが、相手は秩序の騎空団員だ。その辺の一般人を人質に——」

「おい！ そんなこと冗談でも言うんじゃないやねえ！ オ、オレ達は何も聞いてないからな——」

「『それ』をやったイカツチの兄貴は、変わり果てた姿になっちまったんだ！」

「はあはあ……秩序のバケモノが来る……」

「ひいっ！」

ならず者たちは青ざめた顔で逃げるように去っていきました。そして代理人も、彼らの反応から何かを悟ったのか遠くの島に行ってしまった。

拠点にて。

「いったい何なのよ、あの男！ 悪評も闇討ちも失敗するなんて！」

（……少しは落ち着いたらどうだ。素が出ているぞ）

「ムーンうるさい。こうなったら最後の手段よ。私が直接あの男に仕掛けるわ」

（だが、汝の推測を遥かに超えた戦闘力を持つようだ。戦うのは危険ではないのか？）

「なに言ってるの? 誰も戦闘なんてしないわ。ただ、性犯罪者として社会的に抹殺するだけよ」

それで秩序の騎空団を手駒にして、ガルゲニア皇帝になって、叔父や裏社交界の奴ら全員を公開処刑してやるんだから!!

#### エピソード4

子供服を着た私は「幼女ハーゼ」として、路地裏で泣いてるわ。

「ふえ〜ん! お母さ〜ん! どこに行ったの〜!」

そして、無関係な通行人に「あつ、大丈夫ですわ」と返事しつつ十数分が経過した頃、その男は現れた。

「ハ——じゃなくてお嬢さん、どうしたのかな?」

「えつと……お母さんとはぐれちゃって……」

「そうなのか……? まあいいや、俺と一緒に探してあげよう」

あはははつ、狙い通りに引つかかったわね。最初からこうすれば良かったのよ。さて、この状況で悲鳴を上げてても単なる声かけ事案だし、当初の予定通りに油断させることにしましょうか。

「わ〜い! ありがとう、お兄ちゃん! 私はリーラっていうの〜!」

「お、おう」

ニヤケ面で挙動不審になる男。調査で妹がいないと分かっていたから、妹キャラにしてみたけど間違ってた。なかつたみたいね。あと、こいつにハーゼって呼ばれるのは何か嫌だった。

そして2人でクレープを食べた。

「リーラはお腹いっぱい、もう入らないよ」  
「フヒヒ」

なぜか画材屋にも行った。

「あつ、この絵筆……」

「欲しいのか？ ああ、趣味ね。それじゃあお兄ちゃんが買ってあげるよ」

秩序スポットとやらにも連れていかれた。

「意味わかんないよ」

「うんうん、そうだよな」

そして日が沈む頃、宿泊・休憩施設の前で。

「ねえ、お兄ちゃん。リーラ疲れちゃった……」

「そ、それじゃあ、ここで少し休んでいこうか。グへへへへ」

計画通り。あれから何回か体を接触させたことで、すっかり『その気』になったみたいね。でもお生憎様。部屋で2人きりになったら、幻惑して判断力を奪ってから大声で助けを呼んでやるわ。それから、秩序の騎空団には『無理やり連れ込まれて迫られた』って訴えるんだから!

それから部屋に入って、私はすぐに――

「猶予なんて与えないわよ!」(ボアズが発動)

――ザ・ムーンの力で月影の幻惑状態にした。そのはずだったのに。

「悪いな。俺もアビリティを使ったから弱体は無効にできるんだ」

「甘いわ」

すかさず、低身長ならではの一撃を、目の前にある急所に放つ。これが王家の護身術よ。

「悪いが、それも無効だ。さて、よっぽどハードなプレイをお望みらしいな」

「誰か! 助――」

慌てて叫ぼうとしたけど、手で口を押さえられて呻き声しか出せない。トーラの書は拠点に置いてきたし、気付いたら両手も拘束されて何の抵抗もできなくなってしまうた。

「とりあえず脱がすか」

「ムーツ！」

体を振って必死に抗うと、男の動きが止まる。

「ああ、着衣のままがいいのか。大丈夫、俺はどっちでもいけるから」

「ムムーツ！ ムムーツ！」

服の上を這いずっていた男の手が、どんどん中に入ってくる。どうしてこんなことに……秩序の騎空団なんて簡単に支配できると思っていた。ザ・ムーンの力があれば、逃げるぐらいはできると思っていた。ああ……つまりこれは私の慢心が招いたことね。愚か者には罰を。私は甘んじてこの境遇を受け入れることにしたわ。男の指は、ゆつくりと中に入ってきて――

「浮気ですか？」

すごい勢いで引き抜かれた。次の瞬間、部屋の壁に大きな穴が開く。穴の向こう側では1人の女性が剣を構えていて……あれは確か団長の娘だったわね。

「ち、ちち違うんだ、リーシャ！ ここここれはつまりその、そう、俺は誘惑されたから、



「つい」

見苦しく言い訳していた男は、謎の力で『秩序強制機』と書かれた装置に吸い込まれていった。えっと、私……助かったの？ 助かったのね。やっぱり日頃の行いがいいからかしら。

「ああ、助けてくださって感謝いたしますわ。実は、嫌がる私を無理やり連れ込んで……」

泣きながら被害を訴える私を遮って、団長の娘は宣告した。

「今から虚偽の申告をした場合、秩序の下で厳正に裁かれることとなります。いいですね？」

「ええ！……ですから私は本当に——っ！」

そんな欺瞞の言葉は、彼女の秩序的視線だけで止められてしまった。

「今なら見逃してあげます、とはつきり言った方がいいですか？ それとも、彼と共に浮気の報いを受けますか？ 私としては、それでも別に構いませんが」

ああ、何ということ！ あの男達が言つてたのは、このことだったのね。体中が恐怖で震える。一刻も早くこの場を離れなくては！ 私は脇目も振らず駆け出した。

その後。

「結局、復讐なんて虚しいだけだと思うわ。これからは画業にでも専念しようかしら」  
(……そうか)

これは私、ハーゼリーラが復讐を諦めるまでの物語。

エピソード

一週間後。

「やあ、イカツチ君！ 今日も気合を入れて街を綺麗にするぞ！」

「おはようございます、隊長さん！ 見てください、前に造った花壇で花が咲いたんですよー！」

そこには、秩序的に活動する男達の姿があった。

なお、某隊長だけはリーシャの谷間、ヘソ、ふともも等が目の毒となり、数日で元に戻った。

## Extra 6 HAPPY VALENTINE!

目の前に、2割増ぐらい可愛い顔をしたリーシャがいる。言うまでもなく今日（14日28日）はバレンタインデーであり、おそらく『彼女』となつた彼女から本命チョコが貰えるのだ。

「あの……これ、貴方のために作ったので……」

笑顔でチョコを差し出す彼女のことを一生大事にしよう……思いかけたところで、俺は正気に戻つた。危ない危ない。俺の夢はハーレム王であつて、リーシャ一人に縛られるわけにはいかないのだ。ゲーム以外でチョコを貰うのは初めてだが、それぐらいで俺を止められると思うなよ。

「お、おう……その、ありがとな」

ラッピングされた箱を受け取つて、自然に視線をそちらへ移す。決して、可愛さ2割増の笑顔に負けたわけではない。だいたい、2割増なんて最終天司武器以下の効果量のくせに。そう、心の準備さえしておけば何も問題は無いのだ。俺は再び彼女と向き合つた。

「貴方の好みに合わせたつもりなんですけど、上手くできたかどうか……」

負けた。いや負けてない。死んでないから負けてない。だが、そろそろ主導権を握る必要はあるだろう。そもそも、こつちはまだ起きたばかりなのだ。真の力を解放するのはこれから……ん？ つまりリーシャは朝一番にチヨコを渡そうと——いや、これ以上は取り返しがつかなくなる。今は効果的な返事を考えるのに専念するべきだ。ぱつと思いついた選択肢は3つ。

A：嬉しいよ、リーシャ……愛してる。

B：食べてもらいたいなら口移ししろよ。

C：リーシャの手で食べさせてほしいな。

まずAは無い。局地的には勝てるかもしれないが、最終的に未来が確定してしまいうな予感がする。あの時うっかり『リーシャ、フォーエバー』って言ってしまったから、こんな状況になっているんだ。同じ失敗は二度としない！

次にBも止めた方がいいだろう。断られて怒らせるならいい。だが、もし断られなかったら？ きつと俺はリーシャから抜け出せなくなる。故にハイリスクローリターンなのだ。

Cは問題なさそうだ。リーシャが羞恥から拒否すれば主導権を得られるし、『あーん』されて俺は大丈夫だ。むしろ膝枕とセットで頼むのもいいかもしれない。リーシャが視界の大半を占め、リーシャの『あーん』を聞きながら、リーシャの太ももを後頭部

で堪能しつつ、リーシャの匂いに包まれて、リーシャの指をチョコと一緒にくわえてしまふ(事故)。これこそが俺のバレンタインなのだ！俺はCの『リーシャの手で食べさせてほしいな』を選ぶことにした。

「リーシャが食べたい」

あつ、違った。今のやり直し。

「えっ……それは……」

「リーシャ？」

「えーと、その……そういうのはまだ早いと思うので！ し、失礼しますっ！」

リーシャは撤退した。

「フツ、また勝ってしまった……」

俺は悠然と目の前にある勝者の証を味わうことにした。

甘すぎて味なんか分からなかった。